新版 池田会長全集

第十巻

講義編

「諸法実相抄」講義 485
「生死一大事血脈抄」講義 459
「観心本尊抄」講義 441
「佐渡御書」講義 417
「如説修行抄」講義 393
「経王殿御返事」講義 333
「一生成仏抄」講義 271
「富木殿御返事」講義 185
「兄弟抄」講義 93
「曾谷殿御返事」講義 3

日々の教学
「報恩抄」――仏法の要諦は〝一人立つ〟精神 515
「法門申さるべき様の事」――脈打つ閻浮第一の大確信 532
「撰時抄」――わが振る舞いこそ信心の結晶 551
「開目抄」――輝かそう生命の富を 565
「日女御前御返事」――尊き同志を信頼しあおう 573
「種種御振舞御書」――一切を包む御本仏の大慈悲 577
「祈禱抄」――祈りは願業成就の原動力 582
「御義口伝」――人間生命の諸悪に敢然と挑戦 588

「諸法実相抄」講義

大衆のなかで展開された仏教運動

「諸法実相抄」を拝するにあたり、仏教史上の一つのエピソードを申し上げたい。それは、いまから千数百年前、全中国に仏法研学の大きな潮流を巻き起こした、亀茲国の羅什の話であります。

鳩摩羅什は、ご承知のとおり、不朽の名訳といわれる「妙法蓮華経」を訳出した訳経僧であります。が、私が羅什にうたれるゆえんは、一生をかけて中国に渡り、仏教の真髄を伝えようとした情熱であります。波乱の艱難のすえ、中国の長安へ入ったのは、五十歳を過ぎていたといわれています。そして彼のめざしつづけてきた戦いは、そのときから始まったのであります。それまで、力をためにためていたかのように、怒濤のような勢いで翻訳事業が始まりました。中国の僧侶も、羅什の長安入りを伝え聞いて、続々と彼のもとに結集し、歴史にのこる翻訳をなしていったのであります。

羅什入滅まで、八年間とも十二年間ともいわれますが、その間、三百数十巻もの経典が翻訳されて

おり、一か月二巻ないし三巻という驚異的なペースであったことが推察されます。それは、翻訳という言葉からうけるイメージとは異なった、生きいきとした仏教研学運動であったことを象徴しております。

羅什が訳したさまざまな経典の序によると、その翻訳の場には、あるときは八百人、あるときは二千人というように、数多くの俊英が集まっております。その聴衆を前に、羅什は経典を手に取り、講義形式で進めていったのであります。そして、なぜそう訳すのか、その経文の元意はどこにあるのかを話し、あるときには質疑応答のような形式をとりつつ、納得のいくまで解読していったのであります。

書斎に閉じこもり、辞書と首っ引きで、自分一人で何十年もかかって難解な訳業をするのではなく、大衆の呼吸をじかに感じながら、対話の場で仏法を展開していった羅什であったからこそ、あれほどの名訳が生まれたのではないかと思うのであります。

羅什の訳はひじょうになめらかで、かつ経典の元意をふまえた意訳に優れたものがあったというのも、このことを考えれば、なるほどと思われます。仏法は、それがいかに優れたものであっても、難解であれば、人々から離れたものになってしまう。人々と語り、生活のなかで実感するなかに、思想の光は輝いていくものであります。

もし、この羅什教団ともいうべき人々の仏典流布の活躍がなければ、後の天台、伝教の昇華へと、仏法の歴史が展開することはなかったにちがいない。それを考えると、いかにその使命が偉大であっ

たかがわかるのであります。

私はいま、この羅什の業績をうんぬんしようとするものではありません。大衆のなかに入り、大衆とともに語り合ったその姿に、仏法研学の真実の姿があると訴えたいのであります。昔の羅什は、ヨコにインドから中国へ、また、ある意味で私たちも、現代における羅什の立場にあるといえましょう。昔の羅什は、ヨコにインドから中国へと経典を翻訳しました。現代の羅什は、タテに、またヨコにと、七百年前の不滅の末法の御本仏の御金言を、現代という時代に、生きいきと蘇らせる使命を担っております。

すなわち、私どもの教学運動もまた、羅什と同じ方式にのっとり、御書を手にし、講義形式をとり、あるときは質疑応答の形式をとり、あるときは個人指導のさいに、人々の呼吸を直接実感しながら、対話の場で仏法を展開していくのであります。

仏教の創始者たる釈尊も、その生涯は庶民の哀歓のひだにふれつつ、人生の苦との対決のなかから、珠玉のごとき教えが遺されていったことを知るべきであります。

ある仏教学者によると「釈尊は仏教を説かなかった」という極端な説もあるぐらいであります。もちろん釈尊が仏教を説いたのは当然でありますが、この一見矛盾する言葉も、ある意味で含蓄に富んだ言葉であるといってよい。八万法蔵といい、五時八教ときくと、精密に体系だてた教理を思い浮かべ、釈尊もそのカリキュラムにそって、説法したかのように受け取りがちであります。しかし釈尊の説法は、貧苦にあえぐ庶民への激励であり、病に苦しむ老婆を背に負わんばかりの同苦の言葉であり、精神の悩みの深淵に沈む青年へのあたたかな激励の教えであった。差別に悩み、カースト制度に

苦しむ大衆の側に立った火のような言々句々が、その一生の教化を終えてみれば、八万法蔵として残っていたということでありましょう。それは、経文が徹底して問答形式で説かれていることに、象徴的にあらわれている。庶民との対話、行動のなかに釈尊の悟りの法門がほとばしりでていったのであり、それが経典としてまとめられていったのであります。

日蓮大聖人も、また同じ立場を貫かれております。いつも申し上げていることでもあり、また昭和五十一年十月の本部総会でも述べましたので、詳しくはお話いたしませんが、あの膨大な御書も、生涯、激動の日々のなか、民衆一人ひとりとの対話をつづけられ、朝に夕に救済の手をさしのべられた結晶であります。大聖人は、けっして書斎に閉じこもって御書をおしたためになったのではありません。戦いながら書き語り、書き語られながら戦われたのであります。

仏教ときけば、山野にこもり、静的なものと考えがちでありますが、その発生からすでに実践のなかに生き、民衆のなかで生きいきと語り継がれてきたのが、その正統な流れであることに刮目したいのであります。

信行学の要諦を教示

さて「諸法実相抄」は、日蓮大聖人みずから、この御抄の追伸のところに「ことに此の文には大事の事どもしるしてまいらせ候ぞ」、また「此の文あひかまへて秘し給へ、日蓮が已証の法門等かきつけ

て候ぞ」と明記されておりますように、比較的短い御述作ではありますが、仏法の肝要がことごとく集約してあらわされております。

執筆せられた文永十年五月といえば、法本尊開顕の書であり、受持即観心の、末法仏道修行の要諦を示された「観心本尊抄」を著された翌月であります。本尊抄が、文永十年の四月二十五日、本抄が翌五月十七日と記されております。

したがって内容も、法華経迹門、在世衆生得脱のカギとされた、方便品の「諸法実相、十如是」の文から説き起こされて、法華経哲理の真髄を示し、その当体が妙法蓮華経、即、御本尊であることを教えられております。これは、法本尊の意義を明かされたと考えられます。

ついで、この法華経の極理を明らかにし、かつ弘めるべき人こそ、地涌の菩薩の上首上行であることを示され、それを、まさに日蓮大聖人御自身が実践してきたと述べられるのであります。すなわち、一往、外用の辺からいえば、法華経弘通の上行菩薩の再誕であり、再往、内証の辺からいえば、末法救済の大法を建立する御本仏であり、久遠元初の仏であることを、暗示されているわけであります。これは、人本尊を明かされたと考えてよい。

このように、人法両面から、末法一切衆生の尊敬すべき根本を明かされたことは、人本尊開顕の書たる「開目抄」、法本尊開顕の書たる「観心本尊抄」の結論が、ともに、この一書のなかに包含されていると、私には拝せられるのであります。

しかも、後半においては、未来広宣流布のまちがいないことを予言され、末法万年にわたる仏道修

行の要諦として、信行学のあり方を教示されて結ばれている。すなわち末法の仏法の正体が、その甚深の法体、修行のすべてを網羅して、しかも簡潔にあらわされているのが本抄なのであります。

ゆえに、日蓮大聖人の原点にかえることを根本精神とするわが創価学会は、数ある御書のなかでも、とくにこの「諸法実相抄」を根幹として、自己の信心の研鑽と、あらゆる指導、活動に取り組んできたのであります。

初代会長牧口常三郎先生も、つねに本抄をとおして指導されたとうかがっております。第二代会長戸田城聖先生が、法華経は別にして、まず、私たち数人に講義された御書は「諸法実相抄」でありました。私もまた、この講義を受講した一人でありますす。

さらに、高等部に対し、また本部職員の代表に対し、私はいくたびか、この「諸法実相抄」を講義してきましたが、拝するたびに、法門の深さに驚嘆し、大聖人の烈々たる気迫に胸をうたれる思いがいたします。

創価学会創立四十六周年を記念して、再び私は、応して加筆添削をして掲載させていただくことにいたしました。

以上、前置きとして申し上げておきます。

いっさいの現象は妙法の姿

問うて云く法華経の第一方便品に云く「諸法実相乃至本末究竟等」云云、此の経文の意如何

「諸法実相」の文は、法華経迹門の肝要であり、天台仏法においては一代仏教の要とし、一念三千法門の依処としたものであります。

本抄をいただいた最蓮房日浄は、もと天台宗の学僧といわれております。おそらく天台家における肝要の法門として「諸法実相」については知っていたのでありましょう。しかし、天台の理の法門では十分に理解することができず、大聖人に、その深い元意をうかがおうとして、質問したものと思われます。

答えて云く下地獄より上仏界までの十界の依正の当体・悉く一法ものこさず妙法蓮華経のすがたなりと云ふ経文なり

難解な「諸法実相」の意義を、明快にズバリと答えられております。

〝諸法〟とは、この現実世界のなかに、さまざまな姿をとってあらわれているいっさいの現象といってよい。〝実相〟とは、文字どおり実の相であります。

「諸法実相」とは〝諸法〟がそのままで〝実相〟であるということで、したがって、大宇宙の千変万化の姿が、すべて、妙法蓮華経のあらわす姿であるということになります。

換言すれば、地獄界という世界すなわち依報も、極のすがたは妙法蓮華経である。餓鬼界の依報ならびに正報も、妙法蓮華経である。畜生界も、修羅界も、さらに菩薩、仏もみな同じである。これが「諸法実相」の意味するところなのであります。

また、諸法の実相とは、諸法のなかに実相が含まれるのでもなく、逆に実相のなかに諸法がつつまれるものでもないのです。さらには、諸法の奥底にあって、万象を統一する実体を立てるのでもないのです。

たとえば、西洋の哲学や仏法以外の宗教では、諸法の奥底に、諸法を離れて、真理や実体、本質を求めてきた。キリスト教の場合、宇宙森羅万象を統一する根源の実体を「唯一絶対神」と立て、諸法から遠く離れたかなたに、究極の真理をおいたのであります。その結果、神と人間、神と万象とのあいだに断絶が生じ、そのあいだにあって仲介する人間の権力や教会の力が大きくなり、ついに民衆を隷属させることとなったことは周知の事実であります。

これに対して、仏法の偉大性は、現実そのものに即して、真理を見いだすところにある。あくまで、現実の一個の人間や事物を徹底的に凝視して、そこに真実を発見するのであります。それゆえ、諸法実相は、森羅万象の個々の事物や人間に即して、その実相を洞察していく哲理なのであります。

諸法に即して実相、実相に即して諸法、という相即の関係にあるのが、諸法実相という哲理の不可

欠な観点であります。この関係を見誤ると、諸法実相はわかりません。

さて、大宇宙のいっさいの現象、つまり太陽や月が昇り、また地平のかなたに沈みゆくのも、大海の潮が満ち干するのも、木々が風に揺れ動くのも、その真実ありのままのすがたは、仏法の眼でみていくならば、ことごとく妙法蓮華経の所作なのであります。

この「諸法実相」の説法を爾前経と相対して申し上げれば、「諸法」という現象面だけにとらわれ、差別観に陥ったのが爾前経でありました。この諸法つまり差別相が、その究極においてそのまま共通の妙法という実相であることを明かしたのが、法華経の「諸法実相」であります。

ここに「行布を存する爾前権教」と「円融の法華経」との相違がある。このことはまた、一切衆生が差別なく成仏しうるという、仏法の平等大慧の法理に通ずるのであります。

しかし、この法華経迹門の、ただ平等普遍の実相を知っただけでは、いまだ〝理〟であります。法理を知り、これを実践化したのが、本門の〝事〟の法門なのです。

これを理解するために、一つの考え方として、ニュートンの万有引力の法則を例にとってみたい。万有引力の法則は、物理学の法則であり、そのまま結びつけて考えることはできませんが、宇宙を貫く一つの原理であることにちがいはない。ニュートンが発見するといなとにかかわらず、万有引力の法則はあり、それに従って万物は運動している。太陽や月、星の運行も、潮の干満も、リンゴが木から落ちるのも、物理学の眼でみるならば、いっさいが万有引力の法則に従っているのであります。法則を知らない人から見れば、たんにリンゴが熟れて地面に落ちたとしか見えないとしても、物理学の

眼から見るならば、その実相は、地球という物体とリンゴという物体の間に働く力関係であると映ったのでありましょう。

この法則は、それを知っている人にも、知らない人にも、平等に働いているものでありますが、すべてに働いているというだけであっては、まだ〝理〟にすぎない。万有引力の法則を知らないで、大空を飛ぼうとしても、落ちるだけであります。またそれを知ったとしても、知っただけにとどまれば、それもまだ理の段階であります。その法則を知って活用するところに、飛行機や宇宙ロケットのような価値創造が生まれてくる。これを〝事〟といってもよいでありましょう。

仏法の眼からみるならば、宇宙のいっさいの運行の、その真実の相は妙法蓮華経であります。凡夫の眼には、木々が揺れ動いているのみであっても、仏の眼には、妙法の妙なる旋律であり、太陽の輝きも、生命をはぐくむ妙法の働きの一分であります。

したがって、私ども一人ひとりの生命も、いっさい妙法によって構成され、妙法のリズムに従って活動しているといってよい。ただし、そのことのみにとどまればまだ理であり、それを知らず、妙法の法則を知らずに空を飛ぼうとして落ちる人のごとく、不幸から不幸へと、暗きから暗きへとおもむくのみでありましょう。

また、たとえ諸法実相の哲理を知ったとしても、たんなる観照の哲学に終われば、それも理の範疇にとどまる。

それを希望の方向へと向け、価値創造し、幸福へと蘇生させていく方法として、日蓮大聖人は御本

尊を顕されたのであります。すなわち、諸法は実相であるとの法理を、日蓮大聖人の魂魄をとどめて御本尊という当体のうえに具現化されたのであります。それは、もはや諸法実相という法理ではない。日蓮大聖人の御本仏の生命それ自体の諸法実相であります。御本尊を「事の一念三千」と申し上げるゆえんは、ここにあるのであります。

ゆえに、諸法実相とは、一往は、諸法は、そのまま妙法蓮華経という真実のすがたであるという観照の哲学のようでありますが、再往、文底観心のうえからいえば、御本尊こそ諸法実相という大宇宙の縮図であり、大聖人の仏法においては、諸法実相とは即御本尊の異名なのであります。

妙法の一法において依報も正報も連続

依報あるならば必ず正報住すべし、釈に云く「依報正報・常に妙経を宣ぶ」等云云

「依報あるならば必ず正報住すべし」とは、すこし疑問に思うところであります。それは、私どもは法華経の教えによって、正報が根本で、それに応じて依報があると理解しているからであります。したがって「正報住するならば依報あるべし」といわれるべきところのように思える。

この点についてかんたんに申し上げると、仏法においては、とくに爾前経では一貫して、十界は、

十種の異なる世界として説かれてまいりました。十界という言葉自体、十種の世界という意味であります。

これについては、ご承知のように、たとえば地獄界は地の下一千由旬のところにあるとされた。また、餓鬼界は地の下五百由旬、畜生界は水・陸・空といわれる。修羅は海のほとり、海の底とされ、人は大地によって住し、天は宮殿といいますが、須弥山の山腹から頂上、さらにその上方の空というふうに考えられております。

以上の六道のほか、いわゆる四聖についても、二乗は方便土、菩薩は実報土、仏は寂光土と、それぞれ、別々の世界に住すると説かれてきたのであります。

このように、種々の依報が説かれるということは、当然そこに住する衆生も、種々に異なるということです。しょせん、住する衆生すなわち正報と、それぞれの国土すなわち依報とが一体になっているのが、生命の真実のあり方であります。すなわち、法華経において初めて、依正不二の生命観としてとらえられたのであります。

「釈に云く」とあるのは、妙楽大師の法華文句記のことですが「依報正報・常に妙経を宣ぶ」とは、この十種の依報、正報の生命は、いずれも妙法蓮華経をあらわしている、ということであります。

すなわち仏法においては、依報、正報ともにその奥が妙法蓮華経の当体であるとともに、正報もまた妙法蓮華経の当体なのであります。依報も正報も連続しているのであります。妙法蓮華経の一

あえていえば、妙法の根源の一法が、一方において正報とあらわれ、それと同時に依報となってあらわれているということであります。すなわち生命という次元において、依報も正報も結合しているのであります。ゆえに、ここから正報の生命の変革が、依報の変革に通ずるという仏法の卓越した原理が生まれてくるのであります。

この依報、正報ということに関連して、理解の参考のために澤瀉久敬博士の論文を紹介しておきたい。それは環境と生物との関連についてふれたものであります。博士はこう述べておられます。

「ひとはともすれば一定不変の環境を考えそこへすべての生物は置かれていると考える。しかし人間には人間の環境があり、魚には魚の、また鳥には鳥の環境がある。そうして、人間各自にとって環境はそれぞれ異なるようにすべての生物には各自の環境がある。一言にして言えば環境は無数である。生物を離れて環境自体というようなものはどこにもない。生物が生物として次第に自己を生み出してゆくように、そうしてそれによってさまざまな生物がそれぞれ自己の形を明らかにしてくるように、環境もまた次第に生物から分離して環境となるとともに、それぞれの生物に対応するさまざまな環境として自己を示してくるのである」

博士はこのように、生物と環境とが対応していることを述べ、さらに、この対応した両者の根源をたずねれば、同じ「原始存在」という一つのものに帰着すると主張しておられます。これは生物の世界への鋭い観察から結論づけられた真理でありますが、仏法で説く依正不二の原理の一つの証言であるとも考えられるのであります。

仏は架空の抽象的存在ではない

又云く「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如十如は必ず十界十界は必ず身土」

同じく妙楽大師の金錍論の文であります。一念三千の構成について述べたものといえます。

実相は、すでに述べたように常住の本体――妙法蓮華経であり、これは一念三千の〝一念〟ということができます。「実相は必ず諸法」とは、この妙法蓮華経、常住の一念は、かならず万法としてあらわれてくるということであります。

つぎに「諸法は必ず十如十如は必ず十界十界は必ず身土」の文は、諸法、森羅万象の真実の相、すなわち実相を、十如、十界、身土に分析して述べたものであります。

まず、十如は諸法、万象の共通面をあらわしています。いかなる法といえども、かならず十如是という十の側面をもっているということであります。

十如是とは、相、性、体、力、作、因、縁、果、報、本末究竟等です。

この十如是をともなって顕現する森羅万象、諸法は、またかならず、地獄界から仏界にいたる十界の範疇におさめることができる。

これは、諸法を差別面からとらえたものであります。

たとえば、地獄界にも十如是がそなわっている。このように、十界のいかなる界であろうと、すべて十如是がそなわっているというのが、諸法に即する真実のすがた、すなわち実相なのであります。

さらに「十界は必ず身土（しんど）」――これは、十界のそれぞれの世界は、かならず、身（正報）と土（依報）のうえにあらわれるということです。つまり、依正不二の原理をあらわしております。

以上のことを具体的に申し上げれば、たとえば、私たちの生命を考えた場合、その真実の相は妙法蓮華経の当体でありますが、それは私たちの、日々生きているこの命を離れてあるものではない。朝起き、昼働き、夜眠る。その「諸法」のなかに「実相」はあるのであります。妙法は幽霊のようなものではなく、実在するものであります。「実相は必ず諸法」なのであります。

また「諸法は必ず十如」についていえば、瞬間瞬間、動いている生命には、十如是がそなわっているということであります。生命といっても、如是相のない生命はない。このなかにも「私には如是相はありません」という人はいないはずであります。かならず顔があり、形がある。また如是性もある。石のように、存在しているだけということはない。いな、石でさえも如是性はある。如是体についても同じであります。

また、如是力、作、因、縁、果、報、すべてをそなえております。だれびとにも、その人でなければもっていない「力」がある。そして、それを周囲に及ぼしていく「作用」ももっているのであります。

自己のなかにある「因」、外界との関係である「縁」、そして、それらがもたらす生命内在の「果」、外界にあらわれる「報」と、いっさいを私たちはもっております。さらに、最初の相から終わりの報にいたるまで、一貫して等しい生命活動を展開しています。これが本末究竟して等しいということであります。

したがって、実相といっても、諸法、また十如をそなえていなければ、実相ではなく虚相といわざるをえない。たとえば、爾前経で説かれている仏にしても、大日如来などは、十如是がありません。だいいち如是相がない。いまだかつて、大日如来にお目にかかった方は、だれ一人いないはずです。相、性、体をそなえていない仏に、衆生を救う力や作用もあるわけがない。これはキリスト教のゴッドやイスラム教のアラーにしても同じであります。

本来、それらは、形あるものとしてあらわれるべきではないという考え方に立っているのでありましょうが、諸法や十如のない実相はないというのが、法華経の主張であります。

釈尊にしても実在の人物であるし、日蓮大聖人は、現実社会の真っただ中で、人々の苦しみを分かちながら戦われ、御自身の悟りの境界を、全人類に本末究竟して等しく与えていこうとされた御本仏であります。

仏とは、また実相とは、けっして架空の抽象存在ではなく、諸法、十如を厳然とそなえるものであるということを強調しておきます。

「十如は必ず十界」――十如といっても、私たちの苦しみや喜びといった境涯と、けっして無縁のも

のではないということであります。かならず十界のいずれかにあらわれてくる。逆にいえば、地獄界にも仏界にも、十如はあるということであります。いままでは御本尊を知らず、苦しみの因、縁、果、報であった。そしてその人の生命も地獄の力、作であった。当然、その相、性、体は地獄でありましょう。喜びに満ちみちているのに、顔だけは恐ろしい形相で、ということもないし、悲しくてしようがないのに、顔だけは大口をあけて笑っている、などという手品みたいなことはできません。そのように本末究竟して地獄にいた人が、御本尊をたもって、幸福へ、喜びの人生へと変わっていく。

ですから、如是相も福々しくなって、如是性も優しくゆうゆうとした境涯になっていき、家庭をしっかりと支えていく如是力、如是作となり、因、縁、果、報が、幸福へ幸福へと転回していく。どうか、そういう十如是の人生になっていってください。

そして最後に「十界は必ず身土」、その十界は、わが身とわが土にかならずあらわれるということであります。地獄界の生命であれば、その身もその土も地獄界である。逆に、仏界の人の身も土も、仏界となっていく。そこに人間革命の意義がある。御本尊を持っているのに、家庭はめちゃくちゃ、隣近所のことも関係なし、というのでは「十界は必ず身土」にならない。皆さん方一人ひとりが、わが家を笑いさざめく金の城のごとくに築き、地域社会に清水のごとき潤いをもたらしていくとき、大きくは世界という土を仏国にしていくことが可能でありましょう。またそうなっていただきたい。それが「十界は必ず身土」ということであります。

さらに、日蓮大聖人の文底仏法から、この文を読むと、三大秘法の御本尊それ自体をあらわしているのであります。

諸法とは、これまで述べてきたように、十界三千の諸法です。それが大御本尊にそのまま実相として縮図されているのであります。

すなわち、十界三千の諸法が、南無妙法蓮華経の一法に具足した姿、これが御本尊の相貌であり、諸法実相なのです。具体的にいえば、中央の「南無妙法蓮華経　日蓮」が、十界三千の諸法の実相であり、南無妙法蓮華経の光明に照らされた十界の生命活動をあらわしています。

まず、左右両側の上のほうに釈迦牟尼仏と多宝如来とありますが、これは仏界をあらわし、同時に、御本仏の脇士となっております。その両わきには、上行、無辺行、浄行、安立行の四菩薩がしたためられていますが、これは菩薩界をあらわしている界、大梵天王、帝釈天王、大日天王、大月天王、第六天の魔王等は天界、転輪聖王等は人界、阿修羅王等は修羅界、竜女等は畜生界、そして鬼子母神、十羅刹女等は餓鬼界、最後に提婆達多等は地獄界です。これらの十界の諸法に「必ず十如」を具しているということはいうまでもありません。

さて、その十界が「必ず身土」とは、もったいなくも御本尊という一つの草木の掛け軸（身）になり、御本尊がましますところ、たとえば仏壇などは〝土〟にあたると考えられます。

又云く「阿鼻の依正は全く極聖の自心に処し、毘盧の身土は凡下の一念を逾えず」云云

同じく金錍論の文であります。

無間地獄といっても、その世界も衆生もまったく「極聖」――仏の自心、本然の生命のなかにある。逆に「毘盧」すなわち仏の尊極の生命もまた、身、土ともに、凡夫の一念の外にあるものではない。十界互具の原理を、地獄界と仏界を代表として示したものであります。「極聖の自心」も妙法蓮華経であり、「凡下の一念」も妙法蓮華経であるがゆえに、仏の生命に無間地獄もそなわり、凡夫の一念に仏の生命が具足する、と拝すべきでありましょう。

釈迦、多宝も妙法の力用の表現

此等の釈義分明なり誰か疑網を生ぜんや、されば法界のすがた妙法蓮華経の五字にかはる事なし、釈迦多宝の二仏と云うも妙法等の五字より用の利益を施し給ふ時・事相に二仏と顕れて宝塔の中にして・うなづき合い給ふ

以上の妙楽大師の言葉の意味するところは明確であり、疑問をさしはさむ余地はない。したがって「諸法実相」の意義は、十法界の姿が妙法蓮華経であるということを明かしたところに存するのである、とのおおせであります。

法華経は、この真理を、あるいは法説し、あるいは譬喩説し、あるいは因縁によって説いて、在世の声聞の弟子たちを得脱せしめたのち、滅後の未来のため、多宝の塔が湧現し、虚空会の壮大な儀式が展開されていきます。「釈迦多宝の二仏と云うも」うんぬんの文は、この本門の虚空会において、多宝塔中に釈迦、多宝の二仏が並座しますが、そこにあらわされたものも、しょせんは妙法蓮華経にほかならないということであります。

この御文は、ひじょうに深い含蓄のある表現になっています。一つは、釈迦、多宝の二仏といっても、妙法蓮華経の一法が衆生を利益するその働きを、具体的な仏という形によってあらわしたのであるということです。これはこのあとにでてくる「仏は用の三身にして迹仏なり」に対応するもので、経文に説かれる荘厳な仏も、結局は、大宇宙に遍満する仏界という妙法蓮華経の働きを表現したものであるということです。

したがって、仏と同じく、十界すべて、妙法蓮華経のあらわす生命の働きであるというのが、ここにおおせの元意なのであります。

もう一つは「宝塔の中にして（釈迦、多宝の二仏が）うなづき合い給ふ」とあるように、虚空会の儀式によって、釈迦、多宝の二仏が説きあらわした法とは、妙法蓮華経であるということです。釈迦が

説き、多宝が合意し証明したことを「うなづき合い給ふ」とおおせられています。

こうした宝塔の儀式がなにをあらわしたものであるかについて、戸田先生はつぎのように講義をしています。

「釈迦は宝塔の儀式を以て、己心の十界互具一念三千を表しているのである。日蓮大聖人は、同じく宝塔の儀式を借りて、寿量文底下種の法門を一幅の御本尊として建立されたのである。されば御本尊は釈迦仏の宝塔の儀式を借りてこそ居れ、大聖人己心の十界互具一念三千――本仏の御生命である。この御本尊は御本仏の永遠の生命を御図顕遊ばされたので、末法唯一無二の即身成仏の大御本尊であらせられる」と。

末法の御本仏を宣言

かくの如き等の法門・日蓮を除きては申し出す人一人もあるべからず、天台・妙楽・伝教等は心には知り給へども言に出し給ふまではなし・胸の中にしてくらし給へり、其れも道理なり、付属なきが故に・時のいまだ・いたらざる故に・仏の久遠の弟子にあらざる故に、地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩より外は、末法の始の五百年に出現して法体の妙法蓮華経の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕すべき人なし、是れ

即本門寿量品の事の一念三千の法門なるが故なり

迹門方便品の諸法実相も、本門の虚空会の儀式も妙法蓮華経をあらわしているのであるということは、いまだかつて、だれもいったことがない。日蓮大聖人が、初めて述べられるのである、ということです。

しかし、そこに法華経の元意があったがゆえに、天台、妙楽、伝教等の、法華経をほんとうに読みきった人々は、内心では知っていたことは当然です。したがって「天台・妙楽・伝教等は心には知り給へども言に出し給ふまではなし・胸の中にしてくらし給へり」といわれているのです。

では、なぜ天台、妙楽、伝教等は、心のなかでは知りながら、言葉にだしていわなかったか。言葉にだしていわなかったということは、人々に教えることをしなかったわけです。それをしなかった理由として、大聖人はここで三つあげられている。

一つは「付属なきが故」です。付嘱とは、仏から使命を託されることであります。法華経の会座において、釈尊は、法華経の肝心の法門を弘通する使命を、本化地涌の菩薩に託した。ところが天台、妙楽、伝教等は、その本地は迹化の菩薩である。ゆえに、その使命を受けていない、ということであります。

第二は「時のいまだ・いたらざる故」であります。この法華経の肝心の法門が弘通されるべき時は、薬王品にも「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して」とあるように、第五の五百

歳、末法の時代であります。

〝時〟とは、端的にいうならば、客観的条件のもっとも深い底流をなすものであります。委細に三世を知る仏にしてはじめて、この正しい時を知ることができるがゆえに、仏は明確にこの妙法を弘めるべき時を定めたといえましょう。だが、天台、妙楽、伝教等の出現した時代は、五の五百歳の区分のなかでは、第四の五百歳であった。したがって、これらの人々は、法華経の肝心たる妙法を、言葉にだし、人に教えることをしなかったのであります。

第三は「仏の久遠の弟子にあらざる故」であります。仏の久遠の弟子ということは、師弟不二の原理からいって、仏と同じ心、等しい悟りの境地にあるということであります。経文にあらわれた地涌の菩薩は、この久遠元初の仏の弟子が、妙法流布のため、その付嘱のため、垂迹して現じた姿であります。

仏の悟りの極理である妙法を説き、弘めるためには、みずからその悟りを得、仏と等しい境地にもともと住している人でなくてはならない。妙法を説き弘めることは「如来の使いとして、如来の事を行ずる」ことになるのであります。

広宣流布の付嘱は地涌の菩薩に

これに関連して一言、本化の菩薩と迹化の菩薩の関係について述べておきたい。

本化とは、いうまでもなく地涌の菩薩であります。この地涌の菩薩の住処について、法華経には「大地の下の空中」と説き、天台はそこを「法性の淵底玄宗の極地」と表現しておりますが、日蓮大聖人は、さらに明確に「南無妙法蓮華経」であると示されております。すなわち、南無妙法蓮華経をわが生命と覚知し、南無妙法蓮華経の流布を自己の使命とし、本分としているのが地涌の菩薩であります。

これに対して、迹化の菩薩とは、文殊、弥勒、薬王、普賢、観音、妙音等の諸菩薩であります。これらの菩薩たちは、社会の動向を察知する力で人々に利益をもたらし、妙なる音楽で心を喜ばし、慈愛の心をもって人々に尽くし、医学の力をもって病苦を除く等、その特性をぞんぶんに発揮して、人人のために働く菩薩たちであります。

ゆえに世間においても、真に慈悲の精神に立って、おのおのの社会的立場にあって、またその能力を発揮して人々のため、社会のために尽くす人は、迹化の菩薩の一分にあたるといってよいでありましょう。しかしながら、南無妙法蓮華経という法体を弘めることによって、人々のために尽くしている人は、世間にはどこにもおりません。

なぜかならば、この仏法の流布こそ、地涌の菩薩の本分であるからであります。釈尊が法華経において、迹化の菩薩たちが滅後の弘経を誓うその誓いを「止みね善男子」と一言のもとに止めて、わざわざ地涌の菩薩を召しいだし、付嘱をなしたわけも、この一点にあります。南無妙法蓮華経という根源の一法をもって、人々のため、社会のために尽くしていくことができるのは、本化地涌の菩薩のみ

であり、またそれこそ、末法の根本の実践なのであります。

したがって、私たちは、あくまでも南無妙法蓮華経に生きぬくことを本分とし、その流布をみずからの〝この世の使命〟と定めたうえに、社会のあらゆる分野において活躍していくならば、その活動は迹化と同じようであっても、その根本は総じての地涌の菩薩であります。

だが、反対に南無妙法蓮華経の根本を忘れてしまったならば、迹化の菩薩にとどまることすらできず、自己の才能や名声に酔い、日々の生活におぼれて、三悪道、四悪趣の境界におちていくことでありましょう。

ゆえに深く探求していけば、広宣流布に励む同志は、あるいは一学生であれ、一主婦であれ、一学者であれ、一サラリーマンであれ、みな地涌の菩薩の眷属が、それぞれの世界へと勇躍出現した姿であります。

たんに、一主婦が、一学生が、たまたまその悩みを解決するために信仰しているという自覚しかなければ、それはまだ一歩浅いところを彷徨している段階であるといわざるをえない。

われわれの奥底の一念――それは、地涌の菩薩の使命に立って、御本尊と、日蓮正宗創価学会と、広宣流布とにおくべきであると、申し上げておきたいのであります。

さて、天台、妙楽、伝教等が以上の三つの条件を欠くゆえに、法華経の肝心の法を説き弘めることができなかったのに対し、一往、地涌の菩薩としての、再往、無作三身の仏としての日蓮大聖人が、それをなすことができるというのが、つぎの文であります。

「地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩」に対応しておおせです。と同時に、この地涌の菩薩について涌出品で「我久遠より来かた是等の衆を教化す」と示されている元意に照らすならば、「仏の久遠の弟子にあらざる故」にも対応していることは明らかでありましょう。

また「末法の始の五百年に出現して」とは、「時のいまだ・いたらざる故」の文に対応していることも、いうまでもありません。日蓮大聖人のお振る舞いは、さきに示した三つの条件がすべて満たされたうえのことである、とおおせなのであります。

「本門の本尊」御図顕に出世の本懐

「法体の妙法蓮華経の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕すべき人なし」――この御文のなかに、本門の題目と本門の本尊を示されております。

「法体の妙法蓮華経を弘め給う」が、本門の題目を弘通されていることであります。

もし、大聖人が、たんに「南無妙法蓮華経」の題目流布のみをもって、本懐とされたとするならば「妙法蓮華経の五字を弘め給うのみならず、宝塔の中の二仏並座の儀式を作り顕す」とはいわれなかったでありましょう。

むしろ「宝塔の中の二仏並座の儀式」すなわち御本尊を顕されたところにこそ、日蓮大聖人の出世の御本意があったことは、この文に明確にうかがわれるのであります。

ともあれ、この題目、御本尊をあらわし弘めることは、地涌の菩薩の上首上行等にしかできないことである。そのゆえは、これが本門寿量品の事の一念三千の法門だからであるとおおせです。迹化の菩薩は迹門の法門は弘めることができる。しかし、本門寿量品の事の一念三千は、本化の菩薩でなければならないのです。

迹門の法は迹化の人、本門の法は本化の人でなくてはならないのであります。

この「地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩」とは、日蓮大聖人御自身のことであり、人本尊をあらわします。また「本門寿量品の事の一念三千」とは、法本尊のことであり、人法一箇をあらわしております。

大聖人につらなる私どももまた、もともと末法の独生まれてきたのであります。

ともかく釈尊も天台も伝教も、すべて帰着するところは妙法の大地であり、それら先人の出現はすべて日蓮大聖人の御出現の序曲であった。いにしえの先人たちが、生涯を賭けて求めぬいた一法が御本尊なのであります。

私どもは、いま大聖人の世界最高の太陽の哲理をもっている。ともあれ、光輝あるこの世の使命への自覚を新たにしたいのであります。

「神通之力」とは御本尊の働き

されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候へ、経に云く「如来秘密神通之力」是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし

妙法蓮華経すなわち南無妙法蓮華経が、仏の生命の常住不滅の体であり、釈迦、多宝の二仏といっても、この南無妙法蓮華経という体があらわす働きにほかならない、とのおおせであります。

体は〝本体〟、用は〝働き〟であります。まさしく御本尊のお姿であります。御本尊における釈迦、多宝は「南無妙法蓮華経　日蓮」と中央におしたための脇士となっており、妙法の用の仏として位置づけられております。釈迦、多宝といえども、またあらゆる十方三世の諸仏といえども、妙法の働きであります。

南無妙法蓮華経とは、日蓮大聖人の御生命そのものであり、ゆえに大聖人は、十方三世の諸仏を動かしていく当体であられる。私どもも御本尊を受持することによって、あらゆる仏、菩薩を動かしていくことができるのです。なんと私どもには、偉大な境涯の海が開けていることでありましょうか。

ほんとうの信力、行力を貫いていけば、当体義抄文段に「我等、妙法信受の力用に依って即蓮祖大聖人と顕るるなり」とあるごとく、大聖人の生命が滾々とわいてくるのであります。

また本とは「本地」で、本来の境地をいい、迹は「垂迹」で、影として映った姿をいいます。

これを、もう少しわかりやすくいうと、本迹について天台大師は、天月と池月をもって示しております。空に輝いているほんものの月が〝本〟で、池の水面に映った月影が〝迹〟であるというのであります。

考えてみると、影は、池だけに映るわけではない。海の水面にも映りますし、湯飲みの茶の面にも映ります。ガラスの面にも映ります。すなわち、十分に光を反射するなめらかな面であれば、そこにはっきりとした影を映すことができるのであります。こうした光を十分に反射する面は、現代的にいえば、スクリーンと呼ぶことができます。

したがって、法華経本門において、仏の本地を久遠実成と明かしたということは、久遠五百塵点劫当時のインド社会というスクリーンに映った影成道の仏身が本地で、それ以前の始成正覚の釈尊は、久遠元初の自受用報身如来であるということとなるのであります。さらに、地涌の菩薩が、本地のうえに映した一つの影ということになるのであります。

地涌の菩薩ばかりでなく、釈迦、多宝の二仏も、久遠元初の自受用報身即南無妙法蓮華経という本地の仏が、虚空会の儀式のうえに映し、あらわした影である、とのおおせであります。

これを、立場は違いますが私どもの生命に約していえば（約すとは、立場からという意義）、私どもは
さまざまな社会をスクリーンとして、さまざまな姿＝影を映しております。家庭というスクリーンで
は、一家の長という姿、会社というスクリーンでは、たとえば課長、学会の組織というスクリーンで
は大ブロック長、国際社会というスクリーンでは日本人という影、そして生物の世界をスクリーンと
しては、一個の人間という影を映しているといえる。
これらは〝影〟であるゆえに、スクリーンが揺れれば、影も揺れる。スクリーンはそのままでも、
やがて消える影もあります。学生という影は、卒業によって消えるのであります。
では、消えないで、永続していく本体はいかなるものか。人間の過ちの根本は、かりにあらわれて
いるにすぎない影を、みずからの不変の体であるかのごとく錯覚してしまうところにあるといっても
過言ではないでしょう。さきにあげたうち、人間であるうち、生き、
行動していくうえで忘れてはならない原点であります。
だが、それすら、より深く考えれば、生死流転する無常の存在にすぎない。ゆえに、この生老病死
という流転、変貌の人間存在をみつめ、生死を超えて常住の自己の真実の姿を見いだそうとしたの
が、仏教なのであります。そして、結論的にいえば、南無妙法蓮華経こそ、真の常住不滅の体であ
り、それが自己はもとより宇宙万物の実相であると究め尽くしたのであります。
ゆえに、妙法蓮華経こそ〝本仏〟、それに対して、釈迦、多宝の二仏は〝用の仏〟〝迹仏〟であると
おおせられるのであります。

つぎに「経に云く」と、寿量品の文をあげられております。「如来秘密」が体の三身をあらわし、「神通之力」は用の三身をあらわし、迹仏であ
る、と。

いずれについても〝三身〟ということをいわれるのは、もとより、天台の「一身即三身なるを名けて秘と為し、三身即一身なるを名けて密と為す」との釈をうけておられるからであります。

この経文を文底から読めば、如来とは南無妙法蓮華経如来のことであり、秘密とは内緒にしておくということではなく、「三大秘法抄」に説かれているごとく、寿量文底の大御本尊そのものであります。神通之力とは、この南無妙法蓮華経如来、即御本尊の働きであります。

「神通之力」を用の三身とすることについても、天台の文句につぎのようにあります。

「神通之力とは三身の用なり。神は是れ天然不動の理、即ち法性身なり。通は無塵不思議の慧、即ち報身なり。力は是れ幹用自在、即ち応身なり」――すなわち〝神〟は法身、〝通〟は報身、〝力〟は応身で、用の三身となるのであります。

「凡夫こそ本仏」と断言

凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり、然れば釈迦仏は我れ等衆生

のためには主師親の三徳を備へ給うと思ひしに、さにては候はず返って仏に三徳をかふらせ奉るは凡夫なり

凡夫があくまでも「本仏」である。これに対して、釈迦仏をはじめ、経文に説かれるあらゆる仏は、妙法蓮華経の働きとしての「迹仏」にすぎない、ということであります。法華経の道理からいえば当然のことでありますが、それをこのように明確にいいきり、凡夫こそ本仏なりと断ぜられたところに、日蓮大聖人の教えが、末法万年の未来に投じた、不滅の力用と光明があるのであります。

ここに、凡夫とおおせられたのは、別して日蓮大聖人が御本仏であられることを示されております。

「御義口伝」に「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、……仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり」（御書全集七六六㌻）とあるとおりであります。

ともに、総じて私どもは、当然、凡夫であります。その凡夫が、もっとも尊く、偉大であることを、日蓮大聖人が、みずから凡夫の姿を示してお説きくださっているのであります。

あくまでも、日蓮大聖人の仏法は、人間が中心であります。

「御義口伝」上の方便品「唯以一大事因縁の事」に、法華文句を引用して「衆生に此の機有って仏を感ず故に名けて因と為す、仏機を承けて而も応ず故に名けて縁となす」（御書全集七一六㌻）とおおせのごとく、大聖人の御出現自体、苦悩の衆生があったればこそであります。

御本尊の威光勢力、福徳も、迷える凡夫がいたればこそであります。また、その偉大な仏法を流布していくのも、社会の荒波にもまれながら戦う勇気ある人々がいるからこそできるのであります。

過去のあらゆる宗教において、究極的に尊厳であるとされたのは、神であり、超人格者としての仏でありました。人間の尊さは、この神の恩寵と、仏の慈愛につつまれているという条件のもとに、はじめて認められるものであったのです。

ゆえに、過去の宗教のほとんどは、神あるいは仏に直接仕える人々を特権的存在とし、世俗の人間、一般庶民を卑しい存在としたのであります。さらに、世俗の人々についても権力者は特別の恩寵をうけるとして、王権神授説のもとに、階級構造に宗教的権威を付し、これを固定化する結果となりました。

したがって、いずれの社会においても、民主化の過程は、即、宗教否定、宗教の無力化の過程でもあったのであります。

しかしながら、宗教の喪失、信仰の消滅がもたらしたものは、人間精神の不安定であり、人間的信頼の絆の弱体化でもあった。このため、再び宗教的信仰の復活が心ある識者によって叫ばれはじめているのが、二十世紀後半の現代の状況でもあります。

だが、過去の宗教を復興することが、問題の解決につながるものでないことは、この歴史の推移をみれば明らかであります。

人間自身を妙法の当体として、いかなる人も尊厳なる仏になることができるとする、日蓮大聖人の

仏法こそ、人類の求めはじめている問題に、真っ向から答えた大宗教なのであります。

西欧において、ある近代思想家は「神が人間をつくったのだ」と叫んだときます。いま日蓮大聖人が「釈迦仏がわれら凡夫のために主師親三徳をそなえていると思っていたらそうではない。仏に三徳をこうむらせたのは、われわれ人間なのである」と断言されているのは、さらに近代的であり、革新的思想というべきではないでしょうか。

この一事をもってしても、日蓮大聖人の仏法が、人間不平等の基盤となった過去のあらゆる宗教と一線を画する、未来永久に人類が根本としていくべき偉大な宗教であることを、強く信じきっていただきたいのであります。

迷いを悟りに転ずるのは「信」

其の故は如来と云うは天台の釈に「如来とは十方三世の諸仏・二仏・三仏・本仏・迹仏の通号なり」と判じ給へり、此の釈に本仏と云うは凡夫なり迹仏と云ふは仏なり、然れども迷悟の不同にして生仏・異なるに依って倶体・倶用の三身と云ふ事をば衆生しらざるなり

天台大師の法華文句の文をあげておられます。寿量品の「如来寿量」の〝如来〟を釈したもので、

この如来とは、十方三世の諸仏、二仏、三仏、本仏、迹仏の通号である、と。二仏とは、真仏と応仏で、真仏とは、ありのままの仏、応仏とは、衆生救済のために応現した仏ということであります。三仏とは、法身、報身、応身の仏ということです。

如来とは、仏という意味であり、哲学的にいえば「如如として来る」ということで、瞬間瞬間の生命を、如来ともいい、仏ともいうのであります。

この生きている、瞬間瞬間の生命――それは、仏像でも絵像でもない。大宇宙の生命の律動を一点に凝縮させつつ、現に発動している生命そのもの、これが如来なのであります。

南無妙法蓮華経如来とは、南無妙法蓮華経という元初の大生命を、瞬間瞬間に湧現している仏のことであります。

如来とは、一般的にいって、仏の通号であり、それは、なにも釈尊一人ではない。経文には、迦葉仏、阿閦仏等、たくさんの仏がでてきます。だが、別しては、久遠元初の自受用身如来のことをいうのであります。

さて、ここでこの釈を引かれた元意は、本仏、迹仏という点にあります。

「此の釈に本仏と云うは凡夫なり迹仏と云ふは仏なり」とおおせのように、凡夫が本仏であり、経文に説かれた仏は迹仏にすぎない、というのであります。

いま、この本仏、迹仏ということを、寿量品に即して考えれば、このように大聖人がいわれた意味は、おのずから明らかであります。

すなわち、寿量品では、釈尊が、インドに応誕してはじめて成道した、いわゆる始成正覚の仏ではなく、じつは久遠五百塵点劫の昔に成道したのであると明かします。そして、この久遠成道の仏を「本仏」とすることは、ごぞんじのとおりであります。

してみると、釈尊は、インドに応誕して、三十にして成道する以前、すなわち凡夫であったときも、仏であったことはまちがいない。むしろ、三十で成道したという仏としての姿こそ、かりに示した〝迹〟の仏といわなければならない。さらに、寿量文底の意でいえば、五百塵点劫で成道した仏というのも〝迹〟の仏であります。

「御義口伝」の「第一南無妙法蓮華経如来寿量品第十六の事」に「惣じて伏惑を以て寿量品の極とせず唯凡夫の当体本有の儘を此の品の極理と心得可きなり、無作の三身の所作は何物ぞと云う時南無妙法蓮華経なり」（御書全集七五二㌻）とありますごとく、凡夫の当体、本有のままで、南無妙法蓮華経如来であられるのが、御本仏であられます。

ゆえに「本仏と云うは凡夫なり迹仏と云ふは仏なり」とおおせなのであります。

しかしながら、同じく凡夫といっても、衆生と仏とのあいだには、厳然として相違がある。それは、悟っているのと迷っているのとの違いである。「悟るを仏、迷うを凡夫」ということであります。もうすこし厳密にいえば、悟っている凡夫が仏であり、迷っている凡夫が衆生ということになります。

日蓮大聖人は、御自身、南無妙法蓮華経の当体であられることを悟られている。私どもは迷いの凡夫であります。

この「迷い」を「悟り」へと転ずるものは何か、それは「信」の一字であります。

「倶体・倶用の三身と云ふ事をば衆生しらざるなり」とは、さきの御文に「凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり」とあったのと関連しております。

迷っている凡夫は、自身がじつは仏であると知らないために、経文等に説かれている仏がほんとうの仏だと思いこんでいる。したがって、凡夫が総じての体の三身の仏であり、「倶体・倶用の三身」であるということを知らないのであります。

この「倶体・倶用」ということでありますが、これは、体とともにかならず働きがあり、働きとともに体があるということであります。

仏法でいう「体」とは、「体」だけであるものではなく、かならず「用」をともなっているのであります。「用」を取り払って「体」だけ取り出すことはできないのであります。

たとえば、池田大作という「体」は、池田大作という所作にしかあらわれないし、またその所作は、ぜんぶ池田大作という「体」の表現なのであります。

南無妙法蓮華経という「体」は、森羅三千の「用」をともなっております。

ゆえに、私どもが、南無妙法蓮華経という大生命をば、わが胸中に顕現していくならば、いっさいを動かし、いっさいを働かせていくことができるのであります。

この倶体・倶用の「体」とは、諸法実相の「実相」ということであり、「用」とは「諸法」にあたります。

一切の衆生が妙法の当体

さてこそ諸法と十界を挙げて実相とは説かれて候へ、実相と云うは妙法蓮華経の異名なり・諸法は妙法蓮華経と云う事なり

したがって、凡夫の当体がそのまま妙法蓮華経であることを明らかにするために、諸法という言葉によって十界を示し、その諸法、すなわち十界の依正の当体が、そのまま実相であると説かれたのであるということであります。そして、実相とは妙法蓮華経の異名でありますから、諸法すなわち十界の依正の当体、ことごとく一法ものこさず妙法蓮華経のすがたなりということになるのであります。

地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相なり、餓鬼と変ぜば地獄の実のすがたには非ず、仏は仏のすがた凡夫は凡夫のすがた、万法の当体のすがたが妙法蓮華経の当体なりと云ふ事を諸法実相とは申すなり

地獄は地獄のすがたそのままが実の相、実相であります。餓鬼と変じたならば、もはや地獄の実のすがたではない。仏のすがた、凡夫は凡夫のすがた等々、万法の当体そのままのすがたが実相であり、妙法蓮華経であるということを「諸法実相」というのであります。

これは、過去の仏法観を根底から打ち破るものといわなければならない。従来、仏教の思想は、仏や菩薩、あるいは二乗のみを尊しとして、他の衆生、とくに地獄、餓鬼、畜生にいたっては、卑しむべきもの、忌むべきものとしているように理解されてきたという事実であります。

もっと現実的、社会的場面でいえば、貧窮し、みじめな生活を余儀なくされている人々を卑しみ、忌みきらう、冷酷な風潮を生みだしてきたことも否定できません。

法華経の「諸法実相」の原理は、これを真っ向から打ち砕いて、地獄、餓鬼、畜生等の衆生も、仏、菩薩も、等しく妙法の当体であり、平等に尊極の存在であると説いたのであります。

さらに、仏法の真髄は、地獄、餓鬼、畜生等の九界の生命をいかにすれば、尊極の存在とすることができるかという方途も説いているのであります。御本尊におしたための九界の衆生は、ことごとく妙法の光に照らされて、本有の尊形となっております。

この御本尊と私どもの生命が境智冥合すれば、仏界所具の地獄界、仏界所具の餓鬼界として、ゆうゆうと九界の生命を自在に操縦していくことができるのであります。

当然、悲しみも、苦しみも、欲望もある。それでありながら、それは仏界という大海の上にわき立

つ波として、最高の人間らしい生活をいろどる働きとなってくるのであります。

ゆえに「諸法実相」を事実のうえで明言できるのは、御本尊を建立された日蓮大聖人の仏法にして、はじめてできうることなのであります。

実相の究極は南無妙法蓮華経

天台云く「実相の深理本有の妙法蓮華経」と云云、此の釈の意は実相の名言は迹門に主づけ本有の妙法蓮華経と云うは本門の上の法門なり、此の釈能く能く心中に案じさせ給へ候へ

迹門方便品に「実相」の名で示されたものの本体は、本門寿量品にあらわれた妙法蓮華経にほかならないということを、天台の釈をあげて裏づけられたところであります。

「此の釈能く能く心中に案じさせ給へ候へ」とおおせのように、これは法華経の根本義にかかわる深い法門であります。というのは、天台は明確にはいっておりませんが、この釈を大聖人の観心のうえで読めば、実相の究極はなにかといえば、寿量文底の南無妙法蓮華経を示しているからであります。

一往、法華経の経文の流れをみますと、法華経は、一切衆生の成仏のカギとなる、三世諸仏の悟りの法を明かそうとしたのであります。方便品のはじめに「諸仏智慧甚深無量」とあるのがそれであ

り、方便品に示されたその法の内容が「諸法実相・十如是」だったのであります。

ゆえに、声聞の弟子のなかでも智慧第一と称せられた舎利弗は、ただこの「諸法実相」の説法で得脱し、他の中根、下根の声聞たちも、その後の譬喩説、因縁説によって、つぎつぎと得脱したわけであります。

この在世の弟子、声聞たちに対する説法のあと、法師品、宝塔品以下は、仏滅後の未来に妙法蓮華経をだれが弘めるかと釈尊が呼びかけ、それにこたえて、迹化の菩薩たちが名乗りでる、しかしこれを釈尊は断り、大地から本化の菩薩を召しいだして、この地涌の菩薩に法を付嘱する、という流れで展開されます。

したがって、法師品、宝塔品以下は、文のうえからみますと、滅後弘通の人を定めることを目的として展開されたことは明らかであります。しかしながら、ただそれだけではない。再往これをみれば、そこには、滅後弘通の法体そのものが明かされている。これが「本有の妙法蓮華経」であります。

在世の声聞の弟子たちは、過去に下種・結縁がありますから、すなわち本已有善のゆえに、法華経の会座では「諸法実相」の説法、ないし「三車火宅の譬」、あるいは三千塵点劫の結縁の説法を聞いただけで、種子を覚知することができたのであります。

これは、一つのたとえでいえば、かつて歩いたことのある道で、記憶が定かでなく、迷っている場合に似ています。大部分は思いだせるが、一つだけ曲がり角がどこだったかわからない場合、その一

か所だけ教えてもらえば、あとは迷わずに目的地へ行けるのです。舎利弗が「諸法実相」だけで得脱できたのは、これと同じようなものと考えてよいでしょう。

ところが、未来とくに末法の衆生は、過去に下種・結縁のない衆生、つまり本未有善の機でありますから、この目的地が「本有の妙法蓮華経」です。かつて歩いたことのない道は途中のことをどのように教えても、目的地を思いださせることはできません。目的地そのものを示さなければならない。この法華経の儀式のなかで、法師品以後、とくに宝塔品で多宝の塔があらわれ、そこに釈迦と多宝の二仏が並座し、さらに十方の諸仏が来至し、本化の菩薩が涌出して展開された、虚空会の儀式は、寿量品で魂を得て、そのまま「本有の妙法蓮華経」を表現していたのであります。

とはいえ、釈尊の法華経二十八品は、本門といえども、この「本有の妙法蓮華経」にいたる道を図に書いて示したようなものであります。

「本有の妙法」自体を具現化され、末代幼稚の凡夫に受持させてくださったのが、末法御本仏日蓮大聖人なのであります。

このように、同じく「諸法実相」といっても、迹門、本門、文底独一本門の立場で、読み方が異なります。

文底独一本門に約せば、御本尊そのものが諸法実相であります。さらに信心に約せば、大御本尊を受持しきったときに、妙法の生命が湧現し、幸福の諸法実相、人間革命の諸法実相として、わが人生が建設されてくるのであります。

人法一箇の大法を建立

日蓮・末法に生れて上行菩薩の弘め給うべき所の妙法を先立て粗ひろめ、つくりあらはし給うべき本門寿量品の古仏たる釈迦仏・迹門宝塔品の時・涌出し給ふ多宝仏・涌出品の時・出現し給ふ地涌の菩薩等を先作り顕はし奉る事、予が分斉にはいみじき事なり、日蓮をこそ・にくむとも内証には・いかが及ばん

末法流布の三大秘法の題目を、ほぼ弘め、同じく三大秘法の御本尊を建立したことを述べられております。

それは、法華経の文の上からいえば、本化地涌の菩薩の上首上行菩薩がなされるべきことであるが、凡夫僧である日蓮大聖人は、御自身がその上行再誕であるという表現は避けて、その先駆けとして「先立て粗ひろめ」また「先作り顕はし奉る」といわれたのであります。

この御文は、まえに、天台、妙楽、伝教等は本化地涌でなかったために、題目を流布し御本尊を顕すことができなかったと述べられた文と比べ合わせてみれば、その元意は明瞭であります。

大聖人が、いま現実に題目を流布し、御本尊を顕されているということは「先」「先立て」等と断

られているにしても、資格なくしてできることではない。したがって、大聖人は、法華経との関連でいえば、本化地涌の菩薩の上首上行の再誕であり、いま末法という時に出現して、この大法を建立されているのであります。

しかしながら、上行再誕というだけでは、日蓮大聖人の本地を明らかにしたことにはならない。いまこの文に「本門寿量品の古仏たる釈迦仏・迹門宝塔品の時・涌出し給ふ多宝仏」うんぬんとある御本尊の御図顕のもつ意味を知らなくてはなりません。

釈迦、多宝、さらに、久遠元初の無作三身如来である南無妙法蓮華経という〝仏〟の生命をあらわすためには、御自身の内に、その〝仏〟の生命がなくてはならない。事実、日蓮大聖人御自身「日蓮がたましひ(魂)をすみ(墨)にそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」(御書全集一一二四㌻)とおおせられているのであります。人法一箇の御本仏であるがゆえに、人法体一の御本尊を御図顕されたのであります。

そこに、大聖人の「内証――内なる覚り」がある。「日蓮をこそ・にくむとも内証には・いかが及ばん」とは、日本国の上下万人が、どのように大聖人を憎み、迫害を加えようとも、末法御本仏としての、この御境界は、微動だにさせられるものではないということなのであります。

されば かかる日蓮を此の嶋まで遠流しける罪・無量劫にもきへぬべしとも覚へず、譬喩品に云

く「若し其の罪を説かば劫を窮むるも尽きず」とは是なり、又日蓮を供養し又日蓮が弟子檀那となり給う事、其の功徳をば仏の智慧にても・はかり尽し給うべからず、経に云く「仏の智慧を以て籌量するも多少其の辺を得ず」と云へり

日蓮大聖人を憎み、迫害する罪の大きさと、大聖人を供養し、その弟子檀那となる者の功徳の大きさを示されているわけでありますが、このことは、とりもなおさず、久遠元初の仏であり、末法御本仏であるとの内証を示されているのであります。譬喩品の文は「斯の経を謗ぜん者、若し其の罪を説かんに、劫を窮むとも尽きじ」とある文であります。

また、功徳の依文とされているほうは、薬王品の「若し人、此の法華経を聞くことを得て、若しは自らも書き、若しは人をして書かしめん。所得の功徳、仏の智慧を以って多少を籌量すとも、其の辺を得じ」との文であります。

弘教の人は仏の使い

地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人なり、地涌の菩薩の数にもや入りなまし、若し日蓮地涌の菩薩の数に入らば豈に日蓮が弟子檀那・地涌の流類に非ずや、経に云く「能く纔かに一人の為めに

法華経の乃至一句を説かば当に知るべし是の人は則ち如来の使・如来の所遣として如来の事を行ずるなり」と、豈に別人の事を説き給うならんや

地涌の菩薩の先駆けとして出現したのは、日蓮大聖人ただ一人である。あるいは地涌の菩薩のなかに入っているかもしれない、もし大聖人が地涌の菩薩の数に入っているならば、師弟不二の原理からいって、大聖人の弟子檀那も、地涌の流類すなわち眷属でないわけがない、とおおせくださっているのであります。

地涌の菩薩とは、人からいわれて動くものではない。宇宙本然の妙法に生ききるがゆえに、大地から草木が本然的に生長していくように、みずから題目をあげ、社会のために、平和のために貢献していく生命なのであります。

そして、大聖人の弟子が地涌の菩薩であるとの証拠としてあげられているのは、法師品の文であります。

多少、前後を補って申し上げれば「若し是の善男子、善女人、我が滅度の後、能く竊かに一人の為にも、法華経の、乃至一句を説かん。当に知るべし。是の人は則ち如来の使なり。如来の所遣として如来の事を行ずるなり。何に況んや、大衆の中に於いて、広く人の為に説かんをや」との文であります。

すでに申し上げたように、法師品は、仏滅後の弘通を勧めて説かれたものであります。この文は、

まさにこれを勧めて述べた言葉なのであります。そして、この釈尊の言葉にこたえて迹化の菩薩たちが名乗りでたけれども結局、断られ、地涌の菩薩が、これにこたえる資格、力ありとして付嘱を受けたわけであります。

したがって、末法今時、この法師品の文のごとく、妙法を説き、広宣流布に戦っている人は、地涌の菩薩の眷属である、また、そうでなければならないことになります。「日蓮が弟子檀那は、そのとおり実践しているではないか」――こうおおせられているのであります。

さらに一歩掘り下げて「如来の使・如来の所遣として如来の事を行ず」ということが、すでに総じて仏と同格であり、無作三身の仏であることの証文であります。

そのことを明らかにするために、〝使い〟ということについて一言しておきたい。

一般的にいっても〝使い〟とは、使いを出した人の意思を代弁し、同じ資格において振る舞うという意義をもっております。

たとえば国と国とが平和条約を結ぶ場合、お互いに使いを出します。双方の合意によって条約文ができあがると、署名が行われる。そこに記されるのは使いの人の個人名であっても、それは一国の国民の総意を含んでいるのであります。

仏法においても、同じであります。妙法を説き弘通していく人は、仏の使いであり、仏と同じ資格において行動していることになる。ゆえに、法華経では、仏の久遠の弟子にのみ妙法弘通の使命を託したのであります。

このことは、逆にいうならば、末法今時に妙法を弘めている人、すなわち折伏している人は、仏の久遠の弟子である、ということになります。

なお「能く窃かに一人の為めに」が、こっそりと説くことをすすめたという意味ではなく、たとえそのような弘め方であっても、ということであり、望ましい、より偉大な実践の姿が、堂々と説いていくことにあることは、法師品の文から明らかであります。

〝覚悟の人〟を諸天も賛嘆

時代により、また環境によって、弘教することができない場合もあります。しかし、つねに折伏弘教の精神を忘れず、随力弘通していく人こそ、真の地涌の菩薩の流類であり、御本仏日蓮大聖人の本眷属であることを、強く確信していっていただきたいのであります。

されば余りに人の我をほむる時は如何様にもなりたき意の出来し候なり、是ほむる処の言よりをこり候ぞかし、末法に生れて法華経を弘めん行者は、三類の敵人有って流罪死罪に及ばん、然れどもたえて弘めん者をば衣を以て釈迦仏をほひ給うべきぞ、諸天は供養をいたすべきぞ・かたにかけ(肩)せなかに(背)をふべきぞ・大善根の者にてあるぞ・一切衆生のためには大導師にてあるべしと・釈迦仏多宝仏・十方の諸仏・菩薩・天神・七代・地神五代の神神・鬼子母神・十羅刹

女・四大天王・梵天・帝釈・閻魔法王・水神・風神
月等の諸尊たちにほめられ奉る間、無量の大難をも堪忍して候なり、ほめられぬれば我が身の
損ずるをも・かへりみず、そしられぬる時は又我が身のやぶるるをも・しらず、ふるまふ事は
凡夫のことはざなり

日蓮大聖人が凡夫のお立場で、流罪、死罪等の大難に遭いながら、それをものともせず今日まで弘教に励んでこられたのは、なぜであったかを述べられたところであります。

それは、ひとことでいえば、法華経で、釈迦、多宝以下、仏、菩薩、諸天らが、最大限の言葉で、末法に法華経を弘める者を賛嘆してくれているからであるというのであります。別ないい方をすれば、いっさい法華経に身を任せたということであります。

釈迦、多宝以下がほめた言葉とは「末法に生れて法華経を弘めん行者は……」から「……一切衆生のためには大導師にてあるべし」までです。カッコをつけて拝読していただければ、わかりやすいと思います。

この言葉のなかで「衣を以て釈迦仏をほひ給うべきぞ」とは、真の仏弟子としての資格を与え、さらにいえば、仏の子として大慈悲をもって包容してくださるということであります。諸天が供養し、肩にかけ、背中に負ってくれるとは、周囲の条件についてあらわれてくる変化の功徳であります。

「大善根」とは福徳を積むことであり、「一切衆生のためには大導師にてあるべし」とは、智慧が豊

かになる、社会のなかにあって、真実の民衆の指導者、智慧者になっていくであろうということであります。

これは、折伏の功徳をおおせられた御文と拝すべきであります。

このあと「釈迦仏多宝仏・十方の諸仏・菩薩・天神・七代・地神五代の神神・鬼子母神・十羅刹女・四大天王・梵天・帝釈・閻魔法王・水神・風神・山神・海神・大日如来・普賢・文殊・日月等の諸尊たち」がほめる、とあります。これについて、少々申し上げたい。

まず、一言にしていえば、妙法をたもつ人にとっては、宇宙であれ、自然であれ、人であれ、すべてその人を守り働く運行、リズムになるということであります。

「釈迦仏多宝仏・十方の諸仏」のおほめがあるとは、全宇宙の仏界、諸仏が法華経の行者を守るということであります。まことに頼もしいかぎりであります。その人の行くところ、すべて妙法のリズムにかなった人間革命の世界が開かれていくのであります。またすべての人々が、その人の仏界の生命に感応して心の底から味方となり、呼吸を合わせて、見事なハーモニーを奏でていくことができるということでもあります。

なかでも「釈迦仏」とは、自身の生命に仏智が湧現することを意味しております。また「多宝仏」とは客観世界で、その人の生活、環境に、福徳に満ちみちた実証が示されていく姿をあらわしております。「十方の諸仏」とは、周りのいっさいの人々の仏界をあらわして、その人を守るということです。

また「菩薩」とは、自然、社会を含めた慈悲の働きがあらわれて

その人自身の生命にそなわった、人々を救い楽しませてゆく菩薩界のいっさいの力があらわれること はもちろんのこと、慈悲を根底とする社会的指導者たちも、賛同をし、その人のもとに喜んで仕えて いくということであります。

「天神七代」とは、国常立尊、国狭槌尊、豊斟渟尊の独化神三代と、夫婦一組で一代である泥土煮尊・沙土煮尊、大戸之道尊・大苫辺尊、面足尊・惶根尊、伊弉諾尊・伊弉冊尊の耦生神四代です。

「地神五代」とは、天照大神、天忍穂耳尊、天津彦火瓊瓊杵尊、彦火火出見尊、鸕鷀草葺不合尊の五柱の神です。これらは人王の以前の神々とされていますが、それら天地の神々も、すべてが諸天善神として働くとのおおせです。

「天も知る、地も知る、人も知る」という、いにしえの言葉にも通ずる内容であります。

「鬼子母神・十羅刹女」は有名であり、説明の必要もないでしょうが、法華経以前は悪鬼であったものが、法華経では善鬼としてつらなっています。善の生命を食う働きが、悪の生命を食って善を助ける働きへと転じているのであります。したがって、妙法をたもった人々にとっては、不幸を滅する働きとしてあらわれてくる。

「四大天王・梵天・帝釈・閻魔法王」等はすべて、宇宙、自然、社会の秩序を守る働きに名づけられたものです。社会でいえば、いわゆる世間の指導者、ないしはその人たちのもっている力をさしています。

「水神・風神・山神・海神」等は、自然の恵み、働きです。水にも、風にもそれぞれの独自の使命と力があります。山には山の生命があり、海には海の生命があります。そして、それらもすべて、妙法の生命活動としてのあらわれであります。したがって、それらもすべて、妙法を行ずる人を守る方向へ、守る方向へと動いていく。風強く、波高き日々であっても、妙法をたもった人が厳然と守られていくことは、かずかずの体験が証明するところであります。

また「大日如来」とは、法華経に座した大日如来であり、いわば生命力の一分の表現でありましょう。「普賢」は学理、「文殊」は智慧をあらわしております。学理と智慧の光にもつつまれていくのです。「日月」は日天、月天であり、太陽の生命力、月の働きであります。日天は、万物を成長させ、人々に燃える生命力を与えます。月天は、万物の安らぎの象徴であり、人々に安定と静かな光を投げかけます。

このようにして、いっさいの生命活動、森羅万象が、妙法をたもつ人を支え、守り、包容し、また手足となって働いていくとのおおせであります。

なお「無量の大難をも堪忍して候なり」とありますが、「堪忍」とは堪え忍ぶことです。娑婆世界にあってなにかをなそうとすれば、堪え忍ばなければならない。それほどたいへんな世界でもあります。

したがって、同じく堪え忍ぶのであれば、妙法流布のための堪忍であっていただきたい。一時はそれこそたいへんな、生命がけのときもあるかもしれない。しかし、妙法の堪忍であれば、かならず諸仏、諸天の加護があらわれるのは絶対にまちがいないというのが、御本仏日蓮大聖人の悟りの御説法

なのであります。

また「ほめられぬれば我が身の損ずるをも・かへりみず、そしられぬる時は又我が身のやぶるるをも・しらず、ふるまふ事は凡夫のことはざなり」との御文は、日蓮大聖人の御一身にあてはめられて述べられておりますが、凡夫というものの人情の機微を、じつに鋭くとらえられております。

ほめられても、そしられても、わが身を傷つけ、痛めていくのは、凡夫の習いであるようであります。ほめられて一生懸命になるのは「我が身の損ずるをも・かへりみず」のほうであります。これは、骨身を惜しまない気持ちになるということです。「我が身のやぶるるをも・しらず」というほうが、愚かのゆえに、そしられてみずからを破滅にいたらしめるということであります。

これを敷衍していえば、誤解があってはなりませんが、私どもの広宣流布という戦いにあっても、人を賛嘆し、その努力、功績を心からたたえていくことが、より以上の勇気と自信をもって前進していくために、大事な点であるということもいえるでありましょう。

貫こう「日蓮が一門」の生涯

いかにも今度・信心をいたして法華経の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給うべし

この段から以下は、弟子の信仰のあり方、化儀の広宣流布への方軌と実践方法を説かれています。

まずここは「法華経の行者」「日蓮が一門」となりとおしなさい、と根本的な決意をうながされているのです。

あまりにも有名な御文であります。成仏の要諦も、日蓮正宗創価学会の根本精神も、この一文のなかにあるといっても過言ではありません。

「いかにも今度・信心をいたして」とは、なんとしても、この一生涯、信心を貫きなさいということです。この「いかにも」という表現に、大聖人は万感の思いを託されているように思います。というのは、私どもは、無始以来、生死流転の回数もまた数えきれないほどであります。元品の無明におおわれた生死の流転は、闇中の遠征のごときものであります。

いま「妙法」に巡りあい、久遠の御本仏にお会いできたということは、これまでの闇につつまれた生死流転を転換し、燦たる妙法の太陽の光明に照らされた、晴れわたった常寂光の空のもと、美しい花の咲き乱れる楽園を常楽我浄と遊戯しゆく〝本有の生死〟へと開く希有の機会なのであります。ゆえに「いかにも今度」といわれ、たとえなにがあっても、どんな事態に遭遇しても、この一生を信心しぬいていくことを強調せられているのです。どうか「いかにも今度」という一句を、深く胸におさめていただきたい。

「法華経の行者にてとをり」とは、〝法〟を中心にした立場であり、「日蓮が一門となりとをし給うべし」は、〝人〟を中心にした立場でおおせられております。別して「法華経の行者」とは、日蓮大聖

人お一人であり、大聖人の御一身のために法華経は説かれたといって過言ではないのです。そして、大聖人お一人が法華経のいっさいを身に読みきられて、正像二千年の釈尊の仏法に区切りをつけ、末法万年の闇を晴らす御本仏とあらわれられたのであります。

この御本仏日蓮大聖人の魂魄をとどめられた御本尊を受持しきることが、私どもにとって総じての「法華経の行者」としての実践を貫くことになるのです。しかし、その根底は、あくまで「日蓮が一門」という自覚でなくてはならない。そうでなければ、真実の「法華経の行者」でもない。

「日蓮が一門」の自覚に立つということは、具体的な私どもの実践に約して申し上げれば、わが同志の、広宣流布への異体同心の世界に生ききることであります。なぜかならば、日蓮正宗創価学会は、御本仏日蓮大聖人の生命である御本尊を根本にした、広布実践の団体であるからであります。日ましに種々の障魔の厳しき現象をみても、御書のとおりなのであります。ゆえに「日蓮が一門となりとをす」とは、日蓮正宗創価学会と運命をともにしていくことに通じていくのです。

しかも、この「日蓮が一門」という根本が欠けては、たとえ御本尊を護持してもなんにもならないのです。「生死一大事血脈抄」という重大な書にも「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」（御書全集一三三八㌻）とおおせのとおりであります。信心は即実践であります。ゆえに、行躰即信心とも述べられている。また、この「日蓮が一門となりとをす」の「なりとをす」ということが大事であります。じつはこれ自体が、即、成仏に通ずるからであります。

成仏というと、なにか特別な理想人格になるように思われがちですが、それは色相荘厳の釈尊の仏

法の範疇です。日蓮大聖人は、凡夫即御本仏であられるから、この仏法は偉大なのです。

そこに仏法の真実がある。ありのままの人間性のなかに、偉大な光をはなつ仏法であるがゆえに、私どももそれにつらなっていくことができるのです。私たちにとって成仏とは、この世でもっとも尊い御本尊を受持しきって人生を全うしきることが、即、仏の生命とあらわれるのです。さらにいえば、なにがあっても「日蓮が一門となりとをす」と決めきった人生そのものが、すでに仏界に住した生き方であります。

大聖人と同じ精神で折伏弘教

日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや、経に云く「我久遠より来かた是等の衆を教化す」とは是なり、末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり

「日蓮と同意」とは、大聖人と同じ心、同じ精神ということであります。「法華経の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし」たとき、その身口意の三業によってはじめて、御本仏日蓮大聖人と同意と

なることができるのであります。

これは師弟不二の原理でもあります。不二とは、而二不二の義で、一往は二である。すなわち師と弟子という立場の相違は厳然としてある。だが、再往、その奥底においては、不二、すなわちまったく同じであり、等しいということであります。

この師弟不二が、仏法の師弟観の真髄なのであります。ゆえに、日蓮大聖人のお心をわが心とし、大聖人の御精神を自己の生命をかけた使命としていく「日蓮と同意」の人こそ、真の日蓮大聖人の弟子であります。口先や形式などは、やがては大聖人のお叱りをうけることでしょう。

「上野殿御返事」には「日蓮生れし時より・いまに一日片時も・こころやすき事はなし、此の法華経の題目を弘めんと思うばかりなり」（御書全集一五五八㌻）と述べられております。「日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか」とは、この大聖人と同じく、広宣流布の使命に立ち、責任をもっていく人こそ、地涌の菩薩であるという御文であります。

そして、もし地涌の菩薩であることが決定的であるなら「釈尊久遠の弟子」であることも、また疑う余地はない。なぜかならば、法華経涌出品に、地涌の菩薩が出現したとき、驚いた弥勒菩薩の質問に答えて「我久遠より来かた是等の衆を教化す」、すなわち久遠の昔から教化してきた弟子であると述べられているからであります。

この「釈尊久遠の弟子」の「釈尊」とは、一往は法華経本門の教主釈尊でありますが、再往の辺を拝すれば、久遠元初の自受用報身如来であり、末法御本仏日蓮大聖人であります。日蓮大聖人は、久

遠よりこのかた、私たち地涌の菩薩を教化してこられたという意味です。

以上のことを結論づければ、日蓮大聖人と同意ならば、地涌の菩薩であることは決定的であり、それはそのまま日蓮大聖人の本眷属なのであります。

この御文を、現実社会において読まれた方が、初代会長牧口先生であり、二代会長戸田先生であった。戸田先生は、獄中において、みずから地涌の菩薩の眷属であり、御本仏日蓮大聖人の本眷属であるとの自覚に立たれたのです。

私たちは、この戸田先生という偉大な人格をとおして日蓮大聖人の仏法を知り、広布の道を進むことができるようになったのです。この妙法広布に生きる人がいかに尊いかは、あまりにも明瞭であります。またそうした人々に対して、いかばかりか御本仏の御称賛があることでしょうか。

さて、この「釈尊久遠の弟子」ということを生命論のうえからいえば、「釈尊」とはわが生命の内なる釈尊であり、南無妙法蓮華経如来であります。地涌の菩薩が、釈尊の久遠の弟子であるということは、上行、無辺行、浄行、安立行等の地涌の生命が、奥底の南無妙法蓮華経如来という本源に根ざした働きであることをあらわしているのであります。

「末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」

この末法の世に妙法蓮華経――三大秘法の南無妙法蓮華経を弘める人が地涌の菩薩の眷属である、

とのおおせです。したがって、いかなる立場の人であれ、どのような境遇の人であれ、みずからの使命のままに仏法弘通に挺身する人は、みな平等に最高の人生を歩んでいるのであります。仏法を〝弘める人〟こそ尊いのであります。経文には「当に起って遠く迎えて当に仏を敬うが如くすべし」とあるとおりであります。ゆえに、仏法弘通に活躍する人をへいげいしたり、非難、中傷することは、もっとも罪が重いといわなければならない。

「男女はきらふべからず」とは、いうまでもなく、男性であろうと女性であろうと、等しく地涌の菩薩であるということにおいて、まったく差別はないとのおおせであります。

男女の差別という問題は、社会的次元で、その役割と待遇の差別としてあらわれます。たしかに、男性にしかできないとまではいかなくても、男性に向いていて、女性向きでない仕事もありましょう。待遇は、その仕事に対して決定されるべきもので、男性だから、女性だからという理由で差をつけられるべきものではありませんが、それを前提としたうえでの個人差は、当然あってもやむをえないでありましょう。

しかし、もっとも根本的な問題は、人格の尊厳にかかわる次元で差別がつけられている場合に起こってくるものであります。そこに関係してくるのが、宗教のもっている男女観であります。

過去の多くの宗教は、原始的諸宗教は別にして、共通して男性中心的であったといわざるをえない。キリスト教もイスラム教も、その神は男性であると考えられる。

仏教もまた爾前経を根本とした諸宗派は、男性中心であった。これらに対し、日蓮大聖人は「男

女はきらふべからず」とおおせられ、妙法を弘める人は、すべて等しく地涌の菩薩の眷属であると断定されているのであります。

すなわち、宗教的使命と資格において、男女のあいだにまったく差別はないとされることにより、人格的価値の真実の平等観を打ち立てられているのであります。ここにも、日蓮大聖人の仏法の内包する近代性と、人間の尊厳を裏づける偉大な原理があることを、どうか深く確信していっていただきたいのであります。

「皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」とは、いかに、題目を唱えることがむずかしいか、ということであります。地涌の菩薩でなければ、題目を唱えられないのです。

まず、人身を受けるということさえまれであります。人間についての、仏法上の一つの定義は「聖道正器」ということであります。人間であればこそ、聖道（みずからの成長をめざす四聖、究極するところ仏界、すなわち成仏への道＝宗教）を歩んでいくことができるのであります。まさしく、宗教は、人間生命の核心であります。この核心を失えば、人間はつらつたる生命の光を失い、硬直化し、化石化するにちがいない。

しかし、そのなかにあって、ほんとうに偉大な宗教に遭遇することも、なかなか困難であります。私どもは、その意味で、まことに「唱へがたき題目」を唱えていることに、感謝の気持ちが込み上げてきます。

ともに「地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目」とは、たとえ、いかなることがあっても

「但南無妙法蓮華経なるべし」の御金言のままに、題目を唱えきっていくことであります。

さらに、菩薩の本領は「誓願」ということにある。そして、地涌の菩薩の誓願とは「法華弘通」にありますゆえに、われわれも地涌の菩薩の眷属である以上、心から周囲の人々を幸せにしきっていくという誓願の唱題が大切です。厳しくいえば、誓願なき唱題は、地涌の菩薩の唱題ではないのであります。

広宣流布実現への大確信

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが、二人・三人・百人と次第に唱へつたふるなり、未来も又しかるべし、是あに地涌の義に非ずや、剰へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華経と唱へん事は大地を的とするなるべし

妙法流布の原理を示され、広宣流布実現への大確信を述べられた、有名な御文です。

南無妙法蓮華経は、日蓮大聖人まずお一人が唱えはじめられ、そこから二人、三人、百人と「唱へつたふる」ようになった。未来においても、同じ原理である、とのおおせであります。

この御文は、ひじょうに深い意味がこめられております。

一つは、このまえの「皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」をうけて、総じては、題目を唱える人は、すべて地涌の菩薩であるけれども、その広まっていく原理は、まず一人が立ち上がって唱えはじめ、そこから二人、三人、百人と広がっていく。かならずそこに総、別があるということであります。

この別してのお一人が、いうまでもなく御在世においては、日蓮大聖人御自身であります。しかし、それは御在世のみならず「未来も又しかるべし」とおおせであります。

次元が異なりますが、創価学会においても、初代会長牧口先生が入信し、折伏に立ち上がられたところから二人、三人と「唱へつたえ」、約三千人にまでなった。

戦後は、第二代会長戸田先生が、東京の焼け野原に立って、折伏弘教を決意し、そこから二人、三人、百人と「唱へつたえ」て、現在の一千万人以上にまでなったのであります。

私どもは、この〝一人立つ精神〟を正しく受け継いでいくことを絶対に忘れてはならない。

ともかく、最初の一人が肝心なのです。それがいっさいの淵源となって広がっていくというのは、広布の絶対のあり方と確信していただきたい。

「新池殿御消息」にも「抑因果のことはりは華と果との如し、千里の野の枯れたる草に蛍火の如くなる火を一つ付けぬれば須臾に一草・二草・十・百・千万草につきわたりてもゆれば十町・二十町の草木・一時にやけつきぬ」（御書全集一四三五㌻）とあるとおりです。

たった一本のマッチが、大火となっていきます。その一本が問題なのです。

つぎに「唱へつたふる」ということであります。「唱へ」とは自行であり、「つたふ」とは化他であります。

「三大秘法抄」に「末法に入て今日蓮が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり」（御書全集一〇二二㌻）といわれるように、自行と化他の両方をかねそなえた実践でなければ、大聖人門下の正しいあり方とはいえないことを知っていただきたい。

また「唱へつたふる」を自行、化他に分ける意義については、「御義口伝」の「涌出品一箇の大事・第一唱導之師の事」に、つぎのようにあるのに照応しているのであります。

「御義口伝に云く涌出の一品は悉く本化の菩薩の事なり、本化の菩薩の所作としては南無妙法蓮華経なり此れを唱と云うなり導とは日本国の一切衆生を霊山浄土へ引導する事なり」（御書全集七五一㌻）

うんぬんと。

「唱へ」は唱導の〝唱〟であり、「つたふ」は〝導〟に対応します。みずから唱えるとともに、これをいっさいの人々に伝え、導いていこうとする人こそ、地涌の菩薩といえるのであります。

「未来も又しかるべし」――いつの時代にあっても、絶対に変わらない根本原理が、これなのであります。

どうか、日蓮大聖人の仏法を信じ、学会精神を継承した皆さん方も、おのおのの立場で、一人立って「唱へつたふる」真実の地涌の菩薩の眷属であっていただきたい。

〝一人立つ〟とは、自分の家庭、職場、地域等、自分自身がかかわっているいっさいの世界で、妙法

の広宣流布に全責任をもっていくことです。もっとも身近な、そして地味な活躍に真の仏法があり、広布があることを忘れないでください。御本仏日蓮大聖人の御使いとして、いまここに、自分はいるのだと自覚することです。

どのような立場であれ、一人ひとりが自分自身だけの関係をもっております。家族、職場、さまざまな友人関係等々、すべてについて、かならずその人独自の世界を形づくっている。それが、妙法のうえからみれば、自身の国土であり、自身の眷属であります。そこに、妙法流布の責任と資格とをもっているのは、その人一人だけであるということです。

ゆえに、一人立つという原理が大事なのであります。そして、おのおのの世界、国土にあって、そこから立ち上がっていくのが「地涌の義」であります。

なお、この御文は、広宣流布は、かならず民衆の大地から盛り上がって成就していくことを述べられたものです。広宣流布は、けっして権力によるものではない。「未来も又しかるべし」の強い御確信の金言を深く拝すべきであります。

「剰へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華経と唱へん事は大地を的とするなるべし」

「大地を的とする」とは、絶対に外れるわけがない、ということです。したがって、この御文は、かならず広宣流布し、日本のあらゆる人々が、日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華経を唱える時がくるとの御確信であり、予言であります。

「日本一同に」とは、あらゆる立場の、あらゆる仕事にたずさわる人々ということです。

政治家も、教育者も、あらゆる職業の人々、家庭の主婦、学生も、すべての人が妙法を信受し、仏法を研鑽して、人生に価値を創造し、社会に貢献していくようになる。この総体革命の姿を「日本一同に」といわれているのであります。

ただし「日本一同に」といわれたからといって、日本だけにかぎって他の国へは弘めないというこではありません。それは「一閻浮提に広宣流布して」と、法華経の文にも、大聖人の諸御書にも述べられていることから、明らかであります。

しかし、強い意識をもって広宣流布のために取り組んでいく対象は「日本」であるという御教示が、とくに「日本一同に」といわれるお言葉のなかに含まれているとも考えられます。その意味で、私どもとしては、日本の広布実現こそ、世界の平和と人類の幸福のために、妙法の力が利益していく源泉であると確信していくべきであります。

「法華経に身をまかせる」人生を

ともかくも法華経に名をたて身をまかせ給うべし、釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏・菩薩・虚空にして二仏うなづき合い、定めさせ給いしは別の事には非ず、唯ひとへに末法の令法久住の故なり、既に多宝仏は半座を分けて釈迦如来に奉り給いし時、妙法蓮華経の旛をさし顕し、釈

迦・多宝の二仏大将としてさだめ給いし事あに・いつはりなるべきや、併ら我等衆生を仏になさんとの御談合なり

信心の究極の姿勢は、法華経に名を立て、身をまかせることです。

「ともかくも」というお言葉に、いっさいを究められた日蓮大聖人の、無限の慈悲を感じます。この御心境は、痛いほど胸に迫ってくるのです。凡夫である私どもに対し、浅智や、邪智や愚かさのために、退転していくことを強く戒められているのです。

戸田先生が「私の悩み」と題して、つぎのように書かれたことがありました。

「この私の悩みは、信心に強く立つものが少ないことである。また、初信の者が、大御本尊のご威徳を信ぜずに、退転することである。これらの者は、なんと浅はかな者であろうか。清水のごとく、こんこんとわき出る功徳の味を、味わいきれずに、死んでしまうのである。なんと、かわいそうなことではないか。私の胸のなかは、キリで、もみこまれる思いで一杯である」（巻頭言から）と。

少々の人生の荒波に、敗北しゆくほど悲しむべきことはない。現代的にいえば、月へ行くにも軌道がある。その軌道をふみはずしたならば、永久に帰ってこられないのです。同じく、生命にも宇宙に通ずる根本軌道というものがある。それをふみはずせば、永劫に闇の流転となってしまう。〝ともかく私のいっていることを信じて、法華経に身をまかせなさい〟との御心境が、この「ともかく」の文字ではないでしょうか。

「法華経に名をたてる」とは、この妙法の広宣流布に生きることを、なによりの誇りとしていくことであります。それぞれの仕事において名を立て、信頼される人になっていくことは、もとより大事であります。だが、永遠の生命観に立った場合、もっとも根本的かつ永続的な栄誉とは、仏法の広布のために、どれだけの仕事をし、貢献したか、ということです。その栄誉のみが、時とともに永遠に輝いていくのです。

「法華経に身をまかせる」とは、わが人生の究極の依処を御本尊におくということです。それは具体的には、日々の動行、広宣流布のための活動を実践しぬいていくことです。「法華経に身をまかせ」た人生ほど強く、偉大なものはない。宇宙大の法理と力のうえに、わが人生をおいていくことになるからです。

なぜ「法華経に名をたて身をまかせ」るべきか――それを、つぎの「釈迦仏・多宝仏」以下に述べられております。

一言にしていえば、法華経の儀式と説法の目的は、末法の私どものためである、ということです。でなければ、仏法は空論になり、観念の世界の遊戯に終わってしまう。仏法究極の哲理といえども、しょせん、私ども一人ひとりのために説かれたものです。

さきにも申し上げましたが、法華経は、在世衆生の代表である声聞への授記のあと、法師品、宝塔品以下は、釈尊滅後の弘通をだれがするかを主テーマに展開されております。

すなわち、宝塔品、提婆品での釈尊の諫暁――呼びかけに応じて、勧持品、安楽行品で迹化の菩薩

たちが名乗りをあげますが、涌出品で釈尊は「止みね善男子」としりぞけ、本化地涌の菩薩を召しいだす。そして、この本化の菩薩についての弥勒たちの疑問に答えて、久遠成道の寿量の説法があり、神力品で本化への付嘱、嘱累品で総付嘱が行われるのであります。

したがって、この一往の文上の流れでみれば、法師品のあとの宝塔品で多宝の塔があらわれ、釈迦、多宝二仏並座のもとに行われた法華経の儀式は、地涌の菩薩に末法の妙法弘通の使命を託すためであったといえます。これが「唯ひとへに末法の令法久住の故なり」といわれている一往の義です。

これは、しかし、一往文上の辺であり、化儀の側面であります。再往文底からみれば、じつはこのなかに、末法の衆生を成仏せしめるべき、末法流布の法体が明かされている。すなわち、家の設計図と家そのものとの関係のごとく、この法華経の二仏が多宝塔中に並座し、虚空会において「妙法蓮華経の旛をさし顕し」「さだめ給」うた儀式が〝そのまま〟三大秘法の御本尊のお姿をあらわしているのであります。この本文では「妙法蓮華経の旛」といわれているのがそれであります。

この御本尊こそ、末法に流布される法体であり、一切衆生を末法万年尽未来際にいたるまで即身成仏させる秘法であります。「末法の令法久住」の文の元意はここにあります。ゆえに「併ら我等衆生を仏になさんとの御談合なり」とおおせられているのであります。

すなわち、この御本尊こそ、八万法蔵の仏法の結論であり、法華経という宇宙根本の法理を事実のうえに作動させた当体であり、この大仏法のコースを歩んでいくならば、成仏はまちがいないといわれているのです。

なお、御本尊の相貌に約していえば「妙法蓮華経の旛」とは、中央の「南無妙法蓮華経　日蓮」をさし、「釈迦多宝の二仏大将として」が、その左右にしたためられている仏界の代表を意味しております。

生命の姿あらわす「虚空会」

日蓮は其の座には住し候はねども経文を見候に・すこしもくもりなし、又其の座にもや・ありけん凡夫なれば過去をしらず、現在は見へて法華経の行者なり又未来は決定として当詣道場なるべし、過去をも是を以て推するに虚空会にもやありつらん、三世各別あるべからず

ここは、日蓮大聖人のお振る舞いが法華経に説かれているとおりであり、したがって、未来はまちがいなく仏であると、深い御確信を述べられたところであります。

示同凡夫のお立場ですから、あの法華経の「虚空会」の儀式に、地涌の菩薩としてつらなっていたかどうか、という過去のことはわからない。ただ、経文をみれば、そのときの様子はハッキリしているし、いまの御自身の振る舞いが「法華経の行者」として、地涌の菩薩の振る舞いであることも、だれ一人として否定できない事実の問題である。

したがって、このことから過去を推察するに「虚空会にもやありつらん」――おそらくつらなって

いたであろう、とおおせであります。

大聖人は、血脈書、あるいはそれに準ずるような御抄――たとえば「三大秘法抄」などにおいては、まちがいなく霊山において、虚空会において付嘱を受けた等といわれておりますが、一般の御書では、あくまで客観的に論じられております。

過去にどうであったか、ということは、凡夫の知ることのできない問題であって、いたずらにそういう論議をすると、かえって神秘主義におちいり、誤解させてしまう。本抄のように、経文にどうあるか、そして大聖人の現実のお振る舞いがどうであるか、その照合から過去を推測する、このいき方は、今日の科学や実証的な歴史学のとる方法と相通ずるものといえましょう。

「三世各別あるべからず」――過去と現在、現世と未来が、まったく無関係で、バラバラであるわけはない、ということです。「過去の因を知らんと欲せば、その現在の果を見よ。未来の果を知らんと欲せば、その現在の因を見よ」と、仏法は教えております。現在の、だれもが見ることのできる事実を根本にして、そこから過去を知り、未来を知っていく――これが仏法のいき方です。

その根底には、いかなる原因が、いかなる結果を生ずるかという、厳然たる法則性に対する透徹した眼がある。ゆえに、仏は三世を知っているとされるのであって、けっして神秘的な、超能力的なものではない。「仏法は道理なり」という御教示を、深く胸に刻んでいただきたいのであります。

ここで、もう一つ申し上げておきたいのは虚空会の儀式ということです。

経文のうえでは、まえにも述べたように、法華経の見宝塔品第十一から嘱累品第二十二まで、虚空

に浮かんだ多宝塔中に釈迦、多宝の二仏が並座し、大衆もみな、虚空に住在して説法が行われたことをいいます。

だが、これが三千年前のインドで、現実に起こった事実であるということは、とうてい納得できない。大勢の人々がそのままで空中に浮かぶということ自体、あまりにも非現実的であるし、多宝の塔についても、高さ五百由旬、タテ、ヨコ二百五十由旬と記されている。五百由旬とは、計算の仕方によっても違いますが、小さいほうでとっても、地球の半径の長さになる。

では、法華経に説かれていることは、空想の産物であって、ただの作り事にすぎないのかといえば、それは大きい誤りであります。これを、どのように考えるべきか、という問題であります。

端的にいえば、釈尊がみずから悟ったところのものを説くのに、虚空会の儀式という形でしか表現することができなかったがゆえに、このような超現実的ともいえる形式をとったのであります。

戸田先生が、法華経の荘厳な儀式をさして「釈尊已心の儀式である」といわれたのは、この意味であります。

虚空会の儀式が、釈尊の悟ったものをあらわしているということは、虚空会の儀式自体が仏の悟りの当体、すなわち、法体をあらわしているということであります。この仏の悟りの法体を、釈尊は虚空会の儀式としてあらわし、天台は一念三千の法理として示し、日蓮大聖人は、御本尊として、末代幼稚の凡夫が、即座に受持できるようにしてくださったのであります。

したがって、大聖人はここで釈尊の法華経について論じられているので「過去をも是を以て推する

に虚空会にもやありつらん」とおおせられておりますが、さらにわれわれの立場にあてはめて拝すれば、御本尊を受持し、日々、勤行し、唱題していることに自体、日々、虚空会につらなっていることに通ずるのであります。

さらに、生命論からいえば、わが生命そのものが虚空会であります。わが色心の作用を起こしている根源は、まさしく虚空であります。しかし、その虚空とは、たんなる〝無〟ではない。無限の創造性と力感に満ちみちた生命の場であります。

また、永遠の生命そのものが虚空会であります。霊鷲山会が、虚空会の儀式とあらわれたということは、まさしく、生命の永遠であることを説こうとしたものです。

御本仏の境界を吐露

此(か)くの如く思ひつづけて候へば流人なれども喜悦はかりなし(結)しきにも・なみだ・つら(痛)きに もなみだなり涙は善悪に通ずるものなり

法華経を身をもって読みきられた、御本仏の絶対的な境界を吐露(とろ)された御文であります。まことに日蓮大聖人の御文は、名文であります。読むたびに、私たちの胸中に、慈父の響きと、広

布の大感情が込み上げてまいります。しかも大聖人の文章は、いわゆる机上に作られた美文ではない。文は生命なり、文は境涯なり――としみじみと痛感させられるのであります。

あの流罪の地・佐渡において、地獄のどん底と思われるような御生活にあって、なお全宇宙をもつつむであろう境涯で、お手紙をおしたためになる御心境は語るすべもないほどです。

いにしえの天平時代より、江戸時代にいたる一千余年間にわたり佐渡へ流罪された人は、無数でありましょう。そのすべては、悲哀と激憤と苦痛と忍従と――さらには呻吟の声が大地に刻まれてきたといってよいでしょう。しかし、ただ一人、澄みきった秋の青空のごとく、また陽光を浴びた春の大海のごとく、淡々たる御心境で「喜悦はかりなし」と叫ばれた人がいるでありましょうか。

世にいう哲人、賢人、文人の人々も、ひとたび悲惨な生活におかれるや、天を仰いでうらみを隠し、地に伏して嘆きを深くしたのであります。だが、もっとも悲哀のなかにあっても、もっとも強く生ききったその人格は、まさしく生命の革命劇を、歴史のうえに燦たる光をもってとどめたものといえると思います。

この大聖人の御心境を深くかみしめながら、何回も何回も繰り返しながら拝読し、私たちは、大聖人の叫びを胸中に響かせていこうではありませんか。

「此くの如く思ひつづけて候へば」とは、法華経がせんずるところ、日蓮大聖人お一人のために説かれたものであったということであります。あの荘厳な虚空会の儀式、釈迦、多宝の二仏並座、十方分身の諸仏の来集等々すべて「末法の令法久住の故」であり、「我等衆生を仏になさんとの御談合」

であった。すなわち、一往は上行再誕、再往は本地久遠元初の自受用報身としての日蓮大聖人御自身のために行われた儀式であり、諸仏の来集であった。ゆえに、これほどうれしく、ありがたいことはない、とのお言葉なのです。

「なみだ」とは、崇高なる大感情の表現です。抑えても抑えられない、また外的条件がどんなであれ、それを突き破って湧きあがってくる偉大な感情の噴出を「なみだ」によってあらわされているのであります。

「流人なれども」――いま、大聖人のお立場は、流人という、まことに厳しく、つらいものである。これは、相対的次元の幸、不幸の現象です。その次元では、この世でもっとも不安定な、不幸な姿であられる。しかし、内心の胸中に確立された境界――絶対的幸福の次元では、この世でだれよりも豊かで、広大かつ不動の幸福を満喫されているのであります。

この相対的幸福と絶対的幸福という点について一言、申し上げておきたい。

それは、絶対的幸福とは、相対的幸福の延長線上にあるものではない、ということです。これを、もう少しわかりやすくいいますと、経済的に豊かになり、健康で、周りの人々からも大事にされ……等々の、いっさいの幸福の条件が満足しているのが、絶対的幸福ではないということです。

相対的には、いくら不幸であっても、絶対的幸福を確立することはありうる。逆に、相対的な幸福の条件は、どんなにととのっていても、絶対的幸福にほど遠い人も少なくありません。相対的に幸福

の条件をもっている人は、私どもの周囲をみればたくさんいるでしょう。仏法を信仰していない人で、私たちより幸せそうに見える人々がたくさんいるのはこの例です。相対的には不幸でも、絶対的幸福を確立した例が、いまここで述べられている大聖人の境界なのです。

相対的なものは、どこまでいっても相対的です。どんなに資産家であれ、有名人であれ、社会の激変によって、一夜にして貧乏のどん底に陥る場合も少なくありません。また、どんなに健康であっても、事故にあえば、一瞬にして重体となることもある。なにもなくとも、しだいに年をとってくれば、だれしも、さまざまな病気が出てくるものです。

ゆえに、相対的幸福を形成しているものは、自己と環境的条件との相関関係にすぎないのです。かんたんな例でいえば、なにかを食べたいという自己の欲望と、それに対応するご馳走が出てきたという環境的条件、このお互いの関係によって生ずるのが、相対的幸福なのです。

これに対し、絶対的幸福とは、自分が心に決めた使命感、目的観と、それを実践しているという事実とのあいだの関係で出てくるものであり、生命自体の充実感、満足感です。これは、有為転変する周りの条件に支配されるのでなく、みずからの意志で決定できるものです。したがって、絶対的となりうるのです。

さらに、これを掘り下げていえば、その自分の定めた目的観、使命感が、宇宙とともに不変常住の法に合致していることが、絶対的幸福の完璧な要件であります。

したがって、無始以来、常住不変の妙法を堅く信じ、広宣流布というみずから決めた目的観、すな

わち大願に生き、実践しぬく心にこそ、真実の絶対的幸福が築かれることを、どうか皆さんは強く確信してください。とともに、それこそ、人間としてもっとも尊い生き方であることを、最大の誇りとしていっていただきたいのであります。

彼の千人の阿羅漢・仏の事を思ひいでて涙をながし、ながしながら文殊師利菩薩は妙法蓮華経と唱へさせ給へば、千人の阿羅漢の中の阿難尊者は・泣なきながら如是我聞と答え給う、余の九百九十人は泣なくなみだを硯の水として、又如是我聞の上に妙法蓮華経とかきつけしなり、今日蓮もかくの如し、かかる身となるも妙法蓮華経の五字七字を弘むる故なり、釈迦仏・多宝仏・未来・日本国の一切衆生のために・とどめをき給ふ処の妙法蓮華経なりと、かくの如く我も聞きし故ぞかし

ここは、経典結集のありさまを述べられたところですが、「如是我聞」ということについて申し上げたい。

この言葉は、あらゆる経文の冒頭にあり、その経文の骨髄をあらわした題目を受けた言葉です。

「是くの如く我聞きき」と読みます。私は釈尊の説法をこのように聞いたという意味です。

文殊師利が妙法蓮華経と唱え、阿難が如是我聞と答え、他のすべての人が妙法蓮華経如是我聞と書

きつけたということは、そこにいたすべての人々が、
華経を如是我聞したと一致して述べたということです
この如是我聞ということは、ただたんに聞いたとい
い主張が込められています。天台大師は法華文句で「
り「仏法の教えの真髄はこうだと私は確信する。した
をもってこの経文を証明していきます」といった決意
が込められた言葉です。
日蓮大聖人も「釈迦仏・多宝仏・未来・日本国の一
経なり」と如是我聞されたとおおせられております。
法華経を証明され、末法万年の一切衆生のために、御
本尊をお遺しくださったのです。
この日蓮大聖人の仏法を、私たちのためにとどめお
信徒の立場で如是我聞されたのが、まさしく牧口初代
我聞されたがゆえに、広宣流布のために亡くなられ、
会精神の骨髄中の骨髄であることを生命に刻み、染め
さらに、釈尊なきあと、文殊師利、阿難をはじめ弟
涙をもって経文に記したということは、仏の大慈悲に
て、この弟子の大感情が、仏法を未来へ流れ通わしむ
大聖人もまた、釈尊、法華経に対する報恩感謝と、
一切衆生への大慈悲の涙をもって、末法万年弘

通の大白法を建立されたのです。「日蓮が慈悲曠大(こうだい)ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までも流布(るふ)なが(流布)るべし」（御書全集三二九ページ）とおおせられているのは、この意味であります。

私どももまた、御本仏日蓮大聖人が忍(しの)ばれた苦難に、心から報恩感謝を申し上げ、偉大な仏法に巡りあえた大歓喜をもって、仏法を語り、未来へ、全人類に流れ通わしめていこうではありませんか。

現在の大難(だいなん)を思いつづくるにもなみだ、未来の成仏を思うて喜ぶにもなみだせきあへず、鳥と虫とはなけ(鳴)どもなみだをちず、日蓮は・なかねども・なみだひまなし、此のなみだ世間の事には非ず但偏(ひとえ)に法華経の故なり、若しからば甘露(かんろ)のなみだとも云つべし、涅槃経(ねはんぎょう)には父母・兄弟・妻子・眷属(けんぞく)にはかれて(別)流すところの涙は四大海の水よりもををしといへども、仏法のためには一滴をも・こぼさずと見えたり

「現在の大難」とは、佐渡流罪です。一つにはつらい。しかし再往、この大難は法華経の行者として受けている大難である。「未来の成仏」は、現在こうして法華経の行者であることからも、絶対にまちがいはない。いずれにせよ、それを思うにつけ、涙がとめどもなく溢(あふ)れてくるとのおおせです。

涙は、奥深い心の思いをあらわすものです。この一つをとってみましても、日蓮大聖人がどれほど甚深無量(じんじんむりょう)の思いで、一瞬一瞬を過ごしておられたかが推察されるのであります。

「鳥と虫とはなけどもなみだをちず」――鳥や虫は、さまざまな音色で鳴き、その幾種類かは鳴き音で有名です。しかし、そこには鳥自身、虫自身の深い思いといったものはない。「日蓮は・なかねども・なみだひまなし」――たいへん有名な御文ですが、この一節こそ、御本仏日蓮大聖人の大慈悲をあらわしているところです。

「此のなみだ世間の事には非ず但偏(ひとえ)に法華経の故なり」と述べられていますが、日蓮大聖人の涙は、つらいとか、苦しい、悲しいといった世間のことで流す涙ではない。ただ法華経を流布して末法万年の一切衆生を救おうとして流す涙である。「若しからば甘露(かんろ)のなみだとも云つべし」――甘露とは、古代中国の伝説で、理想的な世の中で天が降らせる甘い露といわれ、そこから、あらゆる人間の苦悩をいやし、不老不死をもたらすものとされています。日蓮大聖人の流される涙が三大秘法の大御本尊として結晶し、人々の生命をうるおし、悩みを除き、不老不死の生命を与えてくださっていることは、私どもが身をもって知っている事実であります。

涅槃経(ねはんぎょう)の文は、三世の生命観のうえから、われわれが永遠の生命の流転のなかにあって、世間のことでは、いやというほど涙を流すけれども、仏法ゆえに涙を流したことは一度もないというのです。これは仏法に巡りあうことが、いかにむずかしいか、また、たまに巡りあっても、真実の大信仰心を起こす人が、いかにまれであるかを述べたものです。

日蓮大聖人の御一生は、仏法ゆえの涙の連続であられた。私どもも、仏法のために涙する尊い一生を送ろうではありませんか。

法華経の行者となるは過去の宿習

> 法華経の行者となる事は過去の宿習なり、同じ草木なれども仏とつくらるるは宿縁なるべし、
> 仏なりとも権仏となるは又宿業なるべし

いまこうして法華経の行者、実践者となったということは、今世において、たまたま法華経に巡りあったといった浅い縁ではない。過去世において法華経を行じていたがゆえに、その宿習によって、いままた法華経の行者になっているのだとおおせです。

たとえば、非情の草木であっても「仏とつくらるる」――御本尊とつくられる草木もある。牢獄の格子となる草木もある。宿縁なりと表現されたのは、草木の場合、みずから意識し、働きかけることはできません。どういう人に巡りあうかという、それ自体に宿した縁によって、なににになるか、つくられるかという、それぞれの立場をあらわしてくるのです。

すべて、過去、現在、未来にわたる因果の理法で、一つの結果には、かならずそれをもたらす原因がある。同じ仏といっても、小乗教の仏もあり、権大乗教の仏もありというように、みな使命が違う。仏としての力が違う。これもぜんぶ宿業、すなわち過去世における行為によってもたらされたも

のであるということです。

私どもは、いま、このように日蓮大聖人の本眷属として、南無妙法蓮華経の広宣流布に励んでいます。この確固たる人生にくらべ、世間の生き方は、相対的なものです。

たとえば、淡雪は、太陽の光にたちまちとけてしまう。蜃気楼もまた、すぐ消え去るでありましょう。根無し草の波のままにただよう姿も、あまりにも不安定であります。有為転変の無常の人生のなかに、埋没しゆく生き方は、なんと弱く、幻のごとく、はかないものでありましょうか。

有名の二字に酔いしれた人の、ひとたび名聞の皮がはがれたあとのみじめな姿、権力の座から一転して脱落していった人のなんと小さな、一瞬の〝修羅のおごり〟のごとき姿などを見るたびに、その根の浅さ、底の浅さがあまりにも悲しい。これらの有為転変の、無常の諸相の奥底を流れる妙法の淵源に、わが身をすえた人生こそ、もっとも光輝につつまれたものである、と確信すべきでありましょう。われは地涌の菩薩の眷属なり、との自覚に立たれた戸田先生の叫びのなかに、無量の恩師の思いが、私の胸にこだましてくるのであります。

私どももまた、こうした自身の使命に目覚めれば、無限の力がわいてくるはずです。私が頂戴した戸田先生のお歌に「古の奇しき縁や萌え出でて　咲けや雄々しく大和桜と」という一首があります。今日の創価学会を築いてきた先輩たちは、皆「古の奇しき縁」を強く自覚して戦ってこられました。

皆さんも、いまこうして、日蓮正宗創価学会の一員として活躍していることは、過去の宿習であると決めて、自己の使命を果たすため、しっかりと励んでください。そこにのみ、所願満足の人生があ

ることを確信していただきたい。

生きよう折伏弘教の尊い生涯

此文には日蓮が大事の法門ども・かきて候ぞ、よくよく見ほどかせ給へ・意得させ給うべし、一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給へ、あひかまへて・あひかまへて・信心つよく候て三仏の守護をかうむらせ給うべし、行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行学は信心よりをこるべく候、力あらば一文一句なりともかたら せ給うべし、南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経、恐恐謹言。

「日蓮が大事の法門」ということについては、講義の最初で述べたとおりです。仏法の肝要であり、末法流布の大法は何かということ、大聖人が末法の御本仏であること、さらに大聖人の弟子の信心のあり方はいかにあるべきか等、まさしく大聖人の仏法の大事が凝縮されております。ゆえに「よくよく見ほどかせ給へ・意得させ給うべし」と念をおされているのです。

「よくよく見ほどかせ給へ」とは、深く理解していきなさいということです。「意得させ給うべし」とは、生命に刻んで、この御書どおりの振る舞い、実践をしていきなさいとの御教示です。「一閻浮

提第一の御本尊」です。大聖人の仏法が一閻浮提第一であり、大御本尊がその肝要中の肝要であることは、絶対にまちがいありません。

あとはわれわれの信心です。ゆえに「あひかまへて・信心つよく候て」です。

信心は、なりゆきでいつか深まってくるものではない。「あひかまへて」とは、発心をしなさいということです。なにがあろうとも、よし、これを転機に御本尊根本で一歩前進していこう、という勇敢な信心が大切です。その信心のあるところ、釈迦、多宝、十方の諸仏の守護が、厳然と働きをあらわしてくるのです。

自身にあっては、仏界の湧現という、もっとも根底的な生命の変革がなされるというのが、釈迦仏の守護にあたります。功徳に満ちあふれた生活の実証が多宝如来の守護です。十方の諸仏の守護とは、周囲の人々が正法に目覚め、相互に尊敬しあっていく、理想的な人間共和の社会が現出するということです。

「行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず」以下は、しっかり暗記していただきたい。この御文の「行学」ということについては、さまざまな機会に申し上げてきました。そこでは、ただ一点だけ申し上げておきます。

それは「行学たへなば仏法はあるべからず」ということです。仏法は行学のなかにある。行学の実践をする人間の振る舞いのなかにあるということです。経文や書物や文字のなかにあるのではない。仏法は、御書を学び、大聖人の教えどおりに実践する一人ひとりの生命のなかにあらわれるのです。

その仏法の大運動を展開している人間と人間、信心と信心の錬磨向上のなかにこそ、現実における仏法直道の脈搏があることを知らなければなりません。

「我もいたし人をも教化候へ」――自行化他の信心です。自分だけ信心していればいいというのは、大聖人の仏法の本格派の実践者ではない。自分も実践し、人にも教え、伝えていくのです。

「行学は信心よりをこるべく候」――行学の基となるのは信心です。逆にいえば、信心はかならず行学とあらわれる。この信・行・学の三つが、大聖人の仏法の実践の永遠の規範なのであります。

「力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし」――随力演説で、自分の境遇で、自分の全力を出して折伏し、一文一句でも仏法を語っていきなさい、ということです。

〝一切衆生を救う〟との大確信

追申候、日蓮が相承の法門等・前前かき進らせ候きまいらせ候ぞ不思議なる契約なるか、六万恒沙の上首・上行等の四菩薩の変化か、さだめてゆへあらん、総じて日蓮が身に当ての法門わたしまいらせ候ぞ、日蓮もしや六万恒沙の地涌の菩薩の眷属にもやあるらん、南無妙法蓮華経と唱へて日本国の男女を・みちびかんとおもへばなり、経に云く一名上行乃至唱導之師とは説かれ候はぬか、まことに宿縁のをふところ予が弟

子となり給う、此の文あひかまへて秘し給へ、日蓮が已証の法門等かきつけて候ぞ、とどめ畢んぬ。

冒頭の部分については、講義の最初にふれておきました。最蓮房に対しては、「生死一大事血脈抄」「草木成仏口決」「祈禱抄」等、ずいぶん重要な法門をしたため、与えられております。なかでもこの「諸法実相抄」は、もっとも肝要な法門をしたためた、とおおせです。そして、こうしてみると、あなたもずいぶん不思議な人であるとおおせです。末法御本仏である日蓮大聖人の身に当たっての法門、御本仏の御境界、実践をそのまましたためた御書をいただいている。きっと、地涌の菩薩の一員として、末法広宣流布に重要な使命を担っている人であろう、ということです。

「日蓮もしや六万恒沙の地涌の菩薩の眷属にもやあるらん」とは、御謙遜のお言葉です。この背後には、外用は「一名上行乃至唱導之師」であり、本地は久遠元初の自受用身如来であり、末法の御本仏であるとの御確信が込められております。

「南無妙法蓮華経と唱へて日本国の男女を・みちびかんとおもへばなり」――日本国とおおせでありますが、意は一閻浮提であり、未来永遠の衆生です。末法において南無妙法蓮華経によって、一切衆生を救わんとされた方は、日蓮大聖人しかおられない。ゆえに、大聖人が地涌の棟梁であり、末法の御本仏であられる。

「まことに宿縁のをふところ予が弟子となり給う」――かさねて宿縁の不思議を述べて、使命の自覚

をうながされております。

最蓮房に与えられた他の御書に、つぎのような一節があります。「只今の御文に自今以後は日比の邪師を捨て偏に正師と憑むとの仰せは不審に覚へ候」（御書全集一三四二㌻）――すなわち、最蓮房が日蓮大聖人にお手紙をさしあげて「これから以後は、これまでの邪師をすてて、ただひたすら日蓮大聖人を正師とたのんで、仏道修行に励んでいきます」と誓いの言葉を述べたのです。これに対して大聖人は「不審に覚へ候」――あなたは、おかしなことをいいますね、といわれている。

なぜ、このようにいうのかということについて、続いて述べられているのですが、要約すれば「あなたとは、もともと師弟だったではないか。いま初めての契りではない。偶然の巡りあいではない」と述べられているのです。

じつは、この「不審に覚へ候」ということに、重大な仏法上の意味があります。最蓮房の表現は、表面的、常識的に考えれば、当然すぎるほど当然なのです。しかし、大聖人は三世にわたる仏法の達観のうえから、深く掘り下げられて、仏法の師弟を論じられたのです。

私どもの立場においていえば、今世においてたまたま大聖人の仏法に巡りあえたと思うべきではないのです。もともと日蓮大聖人との師弟の絆によって結ばれた私たちなのです。私たち仏法兄弟もまた久遠よりの同志であり、兄弟でありました。それが、さまざまな姿、形をとりながら、この世に再び集いきたって、日蓮大聖人の末弟として広宣流布へと使命の道を歩んでいるのです。

さらにいえば、久遠は今にあり、今は久遠でありますゆえに、現在に久遠の契りを結ぶわれら

は、永遠に仏法兄弟の道を歩んでいくことを自覚したい。さきの御文にも「三世各別あるべからず」とありましたごとく、現在の姿は久遠を映しだし、未来の私どもの姿を生命の鏡に浮かばせていることを確信します。

ゆえに、ともどもに尊敬しあい、学びあい、励ましあい、異体同心の輪を広げていこうではありませんか。

したがって、皆さん方も「まことに宿縁のをふところ」信心できたのです。それだけの力があり、それだけの責任があります。「この世で果たさん使命あり」です。

「此の文あひかまへて秘し給へ、日蓮が己証の法門等かきつけて候ぞ、とどめ畢(おわ)んぬ」――「秘し給へ」とは、一つには、当時の人々には大聖人の仏法の真髄がわからない。いたずらに不審を起こさせてはならないとの御配慮です。またしっかりと生命に刻み、とどめなさい、ということであります。

「己証の法門」――大聖人の己心に悟った法門を書きつけた重書であることを、最後に述べられて、本抄を終わられております。

（昭和五十二年一月　「聖教新聞」掲載）

「生死一大事血脈抄」講義

信心の骨髄明かす一書

本抄は、恩師戸田先生が何度も講義してくださった懐かしい御書であります。

戸田先生は「この生死一大事血脈抄を読むのは、とても面倒です。スラスラ読んでわかったとも思うが、またわからなくなってくる。境涯が深まるたびに、読み方が深まってくる」という意味のことを、何回となく語っておられた。

また戸田先生は「日蓮門下にとって信心の骨髄の御書であり、これを離れて広宣流布もなければ信心の核心、仏法の骨髄にふれることはできない」とまでいわれていました。そして、また「地涌の菩薩の実践の明鏡ともいうべき書である」とも述べられておりました。

私も、文証、理証、現証のうえから、それを確信しております。また、私自身、種々の会合で、再三再四、講義をし、思索を重ねてもまいりました。そのたびごとに一節一節の凝縮された内容に驚き

もし、感激を新たにしてまいりました。まことに不思議な一書としかいいようがありません。

今回は、「教学の年」の意義にもちなんで、本抄をめぐるこれまでの思索の集大成として発表しておきます。これもひとえに未来の広宣流布への展望のうえから、本抄によって仏法の原点を深く掘り下げ、信心の血脈という源流を確認しておきたいと願うからであります。

本抄は比較的短い御書でありますが、じつはたいへん深い内容を含んでおります。「生死一大事の血脈」という仏法の究極の課題をただちに取り上げておられるゆえであります。この課題こそ、釈尊をはじめ仏法三千年の歴史に登場した実践の人々が、叡智の限りを尽くし、情熱のすべてをそそいで考察し、体得しようと取り組んだ一点であります。

八万四千の法蔵も、また大地微塵ほどの論釈も、そのことごとくが、この「生死」という一つのモチーフをめぐって展開されたものといえます。

最蓮房は、当時の仏法哲理の最高峰に位置してきた天台の学僧であったゆえ、鋭くこの哲学的課題の原点に迫り、日蓮大聖人がこのテーマに対し、本抄は、日蓮大聖人がこのテーマに対して、末法御本仏としての観心の立場から結論を与えられ、さらに一切衆生の成仏のための実践論を明示された御書です。

「諸法実相抄」が、広く諸法と実相、十界と妙法、凡夫と仏という総体的課題を論じ「日蓮と同意」に妙法流布に立ちゆく地涌の菩薩の使命を教えられたのに対し、本抄は、正しく成仏、不成仏という仏道修行の根本目的を論じられ、その成仏への血脈がいかなる実践のなかに流れ通うかを明かされた

御書でもあります。

また「諸法実相抄」が、人本尊開顕の「観心本尊抄」と、法本尊開顕の「開目抄」の両書の内容を含んだ御著作であることは、その講義のなかでふれておきましたが、本抄は、御本仏日蓮大聖人御証得の法門自体を明かされたともいえる重書であります。まさしく〝境涯の書〟というべきでありましょうか。日蓮大聖人御内証の法門をしたためられた書であるゆえに、何回も拝読し、わが生命に刻んでいっていただきたいことを、まず最初に申し上げておきたいのであります。

本抄は、文永九年二月十一日、佐渡・塚原においてしたためられた書であります。対告衆は「諸法実相抄」と同じく、最蓮房日浄です。この人については「諸法実相抄」講義に述べたとおりですので、対告衆についての解説は略させていただきます。

もとよりこれは御消息文であり、題号の「生死一大事血脈抄」は後世に付されたものでありますが、冒頭から「夫れ生死一大事血脈とは……」と説き起こされておりますゆえに、まず、この「生死一大事血脈」ということから述べていきたいと思います。

「生死」とは、生まれては死に、死んではまた生まれてくる、すなわち生死を繰り返すこの生命をいいます。

「一大事」とは、もっとも根本の肝要という意味であります。「一」とは、たくさんあるなかの一つということではなく、これ一つ以外にないという意味の〝一〟であります。その唯一無二の根本の大事ということが「一大事」なのです。

したがって「生死一大事」とは、生命における最重要の大事ということであり、生命の極底の法をさすのであります。

「血脈」とは、師匠から弟子へ法が伝えられることを、人間の身体の中で血脈が絶えることなくつながっていることにたとえていわれたものであります。

仏法における師弟の関係は、師としての仏が覚知した生命の極理を、そのまま弟子の生命に伝えることにあります。ゆえに、師がみずからの悟った法を、そのまま弟子に伝えていくことを「血脈」と称するのであります。

したがって「生死一大事血脈」ということを一言に要約して述べれば、生命の究極の法がいかにして仏から衆生に伝えられ、生死を繰り返す衆生の生命に顕現されていくか、ということであります。これこそ仏法のもっとも肝要であり、たんなる観念ではどうしようもない、実践の哲理、感応の哲理たるゆえんがここにあるわけであります。

「生」は顕在化「死」は潜在化

以上、概説しましたが「生死」「一大事」ということについて、少々私の考えるところを述べてみたい。なお血脈については、本文に入って詳細に論じてまいります。

まず「生死」とは、生と死ということであり、大きく二つの意味があります。一つは、生老病死の

四苦を略して「生死」といい、いま一つは、永遠の生命観に立って、生まれては死に、死んではまた生まれてくるという、生死を繰り返す当体をあらわす場合とであります。

ここでの「生死」は、いうまでもなく生命を意味しているのであります。生と死は、生命の変化の姿であり、逆にいえば、生と死にしか生命はあらわれないのであります。

凡夫の眼には、生命は生で始まり、死で終わるとしか映らない。しかし、仏法の視点は、この限界を打ち破って、生とあらわれ、死として持続している全体を貫く「生命」そのものをとらえたのであります。

この観点から、仏法では、生命の変化相としての生と死を、どうとらえているのでしょうか。

法華経寿量品に「若退若出」――もしは退き、もしは出ずる、と説かれております。（正しくは「生死の、若しは退、若しは出有ること無し」と説かれている）この「退く」というのが「死」にあたり、「出ずる」というのが「生」にあたります。また寿量品では、永遠の生命観から、生命は、退いたり、生じたり、生まれたり、死んだりするものではない、という説き方をしておりますが、日蓮大聖人の「御義口伝」では、さらに深く本有の生死、つまり本来もともとの生死であり、退出（退く、出ずる）ととらえるのが、ほんとうの正しい生命観であると説き明かしております。

ゆえに、生命が顕在化した状態を「生」とし、潜在化した状態を「死」ととらえ、しかも、その生死を無限に持続しているのが、生命そのものなのであります。

生を顕在化、死を潜在化ととらえる仏法の究極の哲理は、なんと、悠久、偉大な生命をみてとって

いることでしょうか。

しかも、その生と死は不二であると説いているのです。生を働かしているものは潜在化した妙なる力であり、また、潜在化した生命は、やがて縁にふれて顕在化し、ダイナミックな生を営み、色彩豊かに個性を発揮していきます。やがて、その生は静かに退き、死へとおもむく。しかし、その潜在化は新しいエネルギーを蓄えつつ、新しいつぎの生をいわば、生は、それまで休息し、蓄えた生命の力巻の書を綴り終えて、死におもむく。その、宇宙そ力をそこに充電させながら、生への飛翔を待つのでこれが、本来の生死であり、この宇宙本然のリズが、その本然のリズムとの波長が合わず、偏向性をとして地獄、餓鬼、畜生界等に偏りつつ、ぎごちなれるものが、それであり、重々しい鉄鎖にしばられこの偏向した生死を、本有の生死へと転換していい運命をたどっていきます。いわゆる宿業といわつつ生まれ、また死んでいくのであります。

華経の一法に帰し、その一法から発していくしかないのであります。

一瞬に永遠が凝縮

なお、これは生死を三世という巨視の眼でとらえたものでありますが、私どもは瞬間瞬間にも生死を繰り返しつつ、一生という、より大きな生死を形成しており、小さな生命の生死が大きな生命の生死を支えていることも、知らなければならないと思うのであります。

空間的な尺度で生死をみていった場合でも、たとえば星雲が生々流転を遂げるのは、個々の星の成住壊空の集積であり、その星も、さまざまな生物や山河の生死のうえに、その一生をつくりゆくのであります。

人間の一生をみても、生まれたときに受けた色法は、最後までたもつのではない。大部分の細胞は、生まれては死に、生まれては死んでいく。その生死が新陳代謝をして身体へ若々しい活力を与え、全体としての生命を支えていくのであります。またわれわれの生命に生死が同居している場合もあります。たとえば、爪や髪は非情でありますといってもよい。その根源は生でありましょう。生から死への移行は水の流れるごとく自然であり、また新しい髪や爪が伸びてくる。この生死の累積が一個の生命となるのです。

このように、生命は個別的、無統一的に存在するのではなく、重層的、統一的存在であり、小さな生命がより大きな生死の流れに注ぎ込んでいき、やがては宇宙生命という大海に流入していくのであります。

また、時間的な眼でみれば、一瞬一瞬、私どもは生死を体験しているといえる。いまこの一瞬の生命が地獄界であれば、地獄界が「生」で、他の九界は「死」の状態である。ところが病気で苦しんで

いたのが、病気が治ったとする。うれしくてうれしくてしようがない。天界です。そうすると、一瞬前の地獄界は、どこにもない。地獄界の死でありますとともに死となり、そこには天界の生命が生きいきとあらわれる。病気が治って、さあ、この歓喜を皆に伝えていこう、信心を教えてあげようというふうに変わっていけば、天界の死で、菩薩界の生というふうに移っていくでありましょう。

瞬間瞬間、十界のいずれかが生、他の九界は死となっており、つぎの瞬間には他の生死と変わっていく。その積み重ねとして一生があるのです。

このように瞬間に生死がそなわるのも、けっして天界が生のときに他の九界が「無」になっているということではない。冥伏（みょうぶく）しているからこそ、つぎの瞬間に「生」となってあらわれるのは、いうまでもないことであります。

したがって、生死といっても、現在の一瞬をどう生きるかの積み重ねであります。永遠も一瞬の連続であり、一瞬に永遠が凝縮されてくる。瞬間の一念が生死の根源となっていくのであり、大きくは宿命転換の原理もそこにあると考察できるのであります。

現在の一瞬を大切にし、立派に生を輝かせ、さわやかにつぎの一瞬の生へと移っていけば、還滅門（げんめつもん）の生死となり、六道のなかを、暗き生死から暗き生死へと落ち込んでいく生死は、流転門（るてんもん）の生死であります。そのゆえにこそ、生死の二法を貫く南無妙法蓮華経の仏法によって、一瞬を永遠に生きる生死の転換が必要となってくるのであります。

一大事とは生命の究極

つぎに「一大事」とは、究極ということであります。

この一大事ということの意義に関して、「御義口伝」には「唯以一大事因縁」をめぐって詳しく述べられていますので、参照しておきたいと思います。

まず、一大事の「一」とは、もっとも根本の肝要という意味であります。「一」とは、三、五、七といった数字に相対していわれる「一」ではなく、絶対的な意味における「一」であります。いいかえれば、これ一つ以外にはないという意味の「一」であります。

また「大」とは、根本唯一の法、すなわち妙法は、人間生命のみならず、宇宙森羅万象のいっさいを貫いていることを意味しています。小は微細な微塵から、大は大宇宙の運行にいたるまで、妙法のあらわれである。

この妙法が万法の根源として普遍的な広がりをもっていることを「大」といったのであります。

さらに、宇宙と生命の根源である妙法蓮華経は観念ではなく、事実の活動それ自体であります。私たちが生命活動を営んでいるのも、また、春夏秋冬の四季がめぐるのも、すべて妙法蓮華経である。この厳然たる事実としてあらわれていることを「事」というのであります。

この「一大事」とは、また、空仮中の円融三諦にも開かれます。

「御義口伝」には「一とは中諦・大とは空諦・事とは仮諦なり此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華経是なり」（御書全集七一七㌻）とあります。

「一」とは、妙法それ自体をさし、中道となります。

「大」とは、宇宙と生命の根源たる一法が、普遍的に万象をつつみこむ虚空のごとき雄大な広がりをもつことをあらわすゆえに空諦となり、「事」とは、根源の一法といっても、具体的に事実のうえで千変万化する万物のうえに顕現するのであり、仮諦となるのであります。

しょせん、「一大事」とは円融三諦の南無妙法蓮華経になるのです。

すなわち、南無妙法蓮華経とは宇宙と生命の根源であると同時に、全宇宙の森羅万象をことごとく包含する。そして、それは、けっして観念でも、抽象でもなく、茫漠としたものでもない。現実のうえに具体的な姿をもってあらわれるのであり、この生命の融通無碍な実相を「一大事」というのであります。

さらに、「御義口伝」には「一とは一念・大とは三千なり此の三千ときたるは事の因縁なり」（御書全集七一七㌻）とも説かれています。

「一」たる一念を、「大」たる三千万法に、事実のうえに作動させる根本の力を「事」というのであります。この事の一念三千を「一大事」というのです。しょせん、妙法の電源体ともいうべき御本尊こそ、一大事であるとおおせられているのであります。

妙法は久遠以来の血脈

御状委細披見せしめ候い畢んぬ

最蓮房、あなたからのお手紙は委しく読ませていただきました、ということです。

ところは佐渡流罪の地であります。客観的には厳しい不自由の地にありながら、日蓮大聖人は、門下一人ひとりの便りを逐一御覧になられ、全生命をかけた指導をされていらっしゃるわけであります。まさしく佐渡の流罪地をも、日蓮大聖人は激闘の地とされ、仏法実践の道場としきっておられるのであります。

御本仏日蓮大聖人の広大な御境界のまえには、なにものも妨げとなりえない事実を、この一節から私は実感するのであります。

夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華経是なり

「生死一大事血脈」とは妙法蓮華経、南無妙法蓮華経そのものである、と、まず結論を明示されております。

本来、生死一大事血脈とは、天台仏法で論じられた法門であり、それがいったいなんであるかを、最蓮房は大聖人にご質問したのでありましょう。冒頭に「御状委細披見」とおおせられているのは、最蓮房が天台学僧として学んだこと、そして、それが結局、どういうことかわからなくなってしまった経緯などが、縷々述べられてあったにちがいありません。

そうした繁雑な論議に対して、大聖人は一言のもとにこの奥義を明かし、迷妄を打ち破っておられるのであります。

結論だけみれば簡単なようでありますが、そこにいたる過程は、たいへんな哲理を経なければならない。それを、以下に示されていくのであります。

> 其の故は釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華経の五字過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり

なぜ妙法蓮華経をもって「生死一大事血脈」の体とされるか。その理由の第一は、法華経の儀式において末法に流布すべき法体として説かれたのが妙法蓮華経である。そして、この付嘱を受けて末法

に弘通する上行菩薩にとって、久遠本地の生命が妙法蓮華経であるとおおせです。

したがって、この御文は「釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて」が一往の教相の立場であり、「過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり」が再往の観心の立場という、二重の構造になっているわけであります。

上行菩薩は、一往文上の辺では、法華経の虚空会で釈迦、多宝の二仏から妙法蓮華経を譲り受ける という儀式をふみます。しかし、再往文底からみれば、上行菩薩の本地は久遠元初の自受用報身如来です。本来、妙法の大地に住し、人法体一である、もっとも根本の仏なのであります。ゆえに「過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈」なのです。

無作三身如来の内に脈打っているその生命こそ、妙法蓮華経——南無妙法蓮華経にほかならないのであります。

「妙は死、法は生」と解明

妙は死法は生なり此の生死の二法が十界の当体なり

つぎに、総じて十界の一切衆生、いいかえれば私ども凡夫の、この生命の根源の体——すなわち、

われわれの「生死一大事血脈」もまた、妙法蓮華経にほかならないことを示されるのであります。「妙は死法は生なり」とは、生死の二法は即妙法なり、ということです。生まれる、死んでいく、この生死という生命のあらわす姿は、そのまま妙法なのです。

生まれては死んでいくこの現実の生命をはなれて、別に妙法があるのではない。この生命自体が妙法です。そして、この生死の二法を現ずる妙法の生命がまた、十界の当体でもあります。

つぎになぜ「妙」を死、「法」を生とされるかといいますと、死の状態にある生命を、私どもは思議することができません。どこに、どのようにして存在しているのか。宇宙のなかに溶(と)け込んで存在しているのだときかされても、容易に理解しがたいことであります。ゆえに、死が「妙」になるのです。「妙」とは不可思議ということです。

これに対して、生きている状態というのは、さまざまな働き、形、姿をもってあらわれます。しかも、その働きは、十如是の法によって示されるように、法則性をもっています。長いあいだ、食事をとっていなければ、なにか食べる物が欲しくてたまらないという餓鬼界の状態を示します。人にバカにされればハラが立つ。当然の、生命の法則です。したがって、生は「法」になるわけです。

「法」という漢字は「サンズイ」に「去る」と書く。水が流れるという意味になる。水は平らかで悠久であり、公平にして全宇宙に普遍的な意味をもっており、「去る」は久遠の過去から永劫(えいごう)の未来への流れを象徴しているかのようであります。また、悪を去らしめるための存在という意味を含んでいるとの古文書もあります。

山深き渓流からほとばしる飛沫も、とうとうたる大河のうねりも、瞬時としてとどまることなく、上流から下流へ、そして大海へと、注ぎ込んでいく。仏法の眼は、起きては滅し、隠れては顕れる森羅三千の現象を、因果の法でとらえております。したがって、事物の流れのなかで「法」をみているということになる。静止した、抽象的な法をみるのではないのであります。そのゆえに、法を水の流れに象徴してとらえたのでありましょう。現実生活に即し、生命の実感のなかに法はある。「諸法」を現象と訳すのはそのゆえであります。

一般的な感覚からいえば「法」はむしろ「死」ととらえられるかもしれない。万有引力の法則とか、相対性原理であるとか、経済学の法則という「法」は、現実的な生活における事象を総合、抽象化したものであり、それ自体は外にあらわれないものと考えるからであります。

しかし、仏法における考え方は、現象に即して法をとらえているところに特質があり、また抽象的で現実から遊離した哲学に陥るのではなく、生活法として定着していくゆえんもここにあるのであります。この考え方に立ったとき「法は生なり」というおおせが明らかになってくると思う。

さて、この「現象」そのものをみるだけでは、なんら他の学問と変わるところはない。川の流れを調べるのは科学の分野であります。川の流れを起こしている根源の力を知ることにこそ、宗教の意義がある。その根源の力は、けっして現象から遊離したものではない。しかし、姿や形としてとらえられるものでもありません。「思議」できないものであります。それを「妙」と表現したのであります。

又此れを当体蓮華とも云うなり、天台云く「当に知るべし依正の因果は悉く是れ蓮華の法なり」と云云此の釈に依正と云うは生死なり生死之有れば因果又蓮華の法なる事明けし

生死の二法をあらわして存在している十界の当体を「当体蓮華」ともいうのであります。生死が「妙法」で、それを現ずる体が当体の「蓮華」ですから、十界の生命は、そのまま「妙法蓮華」であります。

これを天台の法華玄義の釈を引いて、その証文とされております。すなわち「依正の因果は悉く是れ蓮華の法なり」と。「依正の因果」とは、依報、正報によって成っているこの生命のあらわす因果、ということであります。すなわち、現実に存在する生命――いいかえれば、十界の衆生をいうのであります。

現実に存在する生命を、タテに時間の流れのなかでとらえれば、かならず生まれては死んでいきますから「生死の二法」になります。一方、ヨコに空間的な広がりのなかでとらえれば、依報、正報のかかわりあいとなります。ゆえに、大聖人は、天台の場合は、ヨコに依正としてとらえているけれども、それはタテに生死としてとらえてもまったく同じであるとして「此の釈に依正と云うは生死なり」といわれているのであります。

この依正とも生死ともとらえられる現実の生命は、因果の法をあらわしていく。そして、この生命

の因果の法はかならず「因果倶時」であって、したがって「蓮華の法」となるわけであります。

ここで「蓮華の法」「因果倶時」ということについて、申し上げておきたい。

蓮華は、華と同時に実を生ずるところから、因と同時に果があるという原理を象徴することは、よく知られているとおりであります。

しかしながら、では因果倶時とは、いったい、いかなる場合をいうのか、という点を正しく理解しておく必要があります。通常の物理・化学的現象、あるいは社会的事象においては、原因と結果はかならず異時であります。

因果倶時とは、生命事象、それも法華経がはじめて明らかにしている生命の法に認められることなのです。「観心本尊抄」に、十界について述べられた御文があります。いわゆる「瞋るは地獄・貪るは餓鬼・癡は畜生・諂曲なるは修羅・喜ぶは天・平かなるは人なり」（御書全集二四一ページ）等とおおせられているところであります。

これは「瞋る」というその生命の働きが因であり、それが地獄界であるという果をもたらすというのである。しかし、瞋りを起こして、のちにいつか地獄という果を生ずるというのは爾前経の説き方です。法華経は、瞋りにとらわれているそのときに、地獄という果を得ているというのであります。これが因果倶時です。

この場合、瞋りというのが正報の働きであるのに対し、その境涯が地獄界であるというのは依報の面からとらえたことになります。正報が因で、依報が果であり、ゆえに天台は「依正の因果」と表現

しているわけであります。

同様にして、妙法を信ずるということが因となって、その瞬間、仏界であるという果を生じているのです。ここに、成仏ということにおける因果倶時の原理があるのであります。

生死の二法は一心の妙用

伝教大師云く「生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覚の真徳」と文、天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果・生死の二法に非ずと云うことなし、是くの如く生死も唯妙法蓮華経の生死なり、天台の止観に云く「起は是れ法性の起・滅は是れ法性の滅」云云、釈迦多宝の二仏も生死の二法なり

伝教大師は、天台法華宗牛頭法門要纂のなかに、こういっている。

――生まれるのも、死んでいくのも、一つの心のあらわすところの不可思議な働きである。この世界に生命として存在するのも、死んで、無の姿になるのも、仏のもともとの覚りのあらわす特質である――と。

ここで伝教大師のいっている「一心」とは、妙法蓮華経のことであります。また「本覚」とは、こ

の妙法を覚知した仏の境界をさします。生死の二法化をいいます。これに対して「有無の二道」とは、存在の仕方をいうのであります。

あえていえば、生によって〝有〟となり、死によとは絶対無ではない。仏法では〝空〟の意味でありともあれ、ともに妙法蓮華経のあらわすところのといえます。このことは、逆にいうならば、万物はその体は、常住不変の妙法蓮華経そのものであるということなのであります。

以上が、あくまでも、この御文の基本的把握となり約して「生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覚の真徳」の文を論じてみたい。

「一心」とは信心の一念であり、御本尊と境智冥合し、南無妙法蓮華経と唱える私たちの一念ありますが、この妙法を信行する強い一念によって、生死の二法を支配しきっていけるということでありますす。生死の大海におぼれているわれわれの生命を、妙法によって確立するならば、その生死の大海を悠然と泳ぎきっていくことができるということであります。また、有無という現象界も、妙法の一念を確立することによって、思う存分に乗りきっていけるということであります。

私たちが「一心の妙用」によって生死の二法を転換するといっても、生死そのものがなくなるわけではない。不老不死の仙人のような存在になるのです。あくまでも一介の市井の人として

の一生は、なんら変わることがない。しかし、暗きから暗きへと煩悶する生死ではなく、本有の生死を楽しんでいけるのが、生死の二法を支配するということであります。

「御義口伝」にいわく「自身法性の大地を生死生死と転ぐり行くなり」（御書全集七二四㌻）と。

私たちの三世にわたる人生は、車に乗って大地を生死、生死とめぐっていくようなものである。しかし、泥沼のなかや岩のゴロゴロした道をガタガタの車で苦しみながらめぐっていくのか、ハイウェーを軽快にさわやかに走っていくのか、そこに同じく生死といっても違いがある。前者が無常断滅の生死であり、後者が本有の生死を送っていくことができる。それが一心の妙用なのであります。そのためにまず、勤行の実践が必要となってくるのであります。

すなわち、実践的立場からいえば、いかなる生死の二法を現出し、いかなる有無の二道を歩みゆくかを確かに決定づけるものこそ、自身の妙法への一念の姿勢いかんであり、御本尊への信の強弱であります。現象の世界には現象の世界の法があり、因果律があることは当然でありますが、その生死、有無という現象世界にあらわれた自身の総体を、福徳に満ちた当体へと回転させるか、暗やみの淵へと沈没させるか。その、いわば舵をとり、方向を与えるものこそ、自己の信心の一念であります。

「命已に一念にすぎざれば仏は一念随喜の功徳と説き給へり」（御書全集四六六㌻）と説かれるように、妙法にめぐりあって歓喜する一念、広宣流布という未曾有の仏事に喜び勇んで邁進していく信心実践のなかに、無量の功徳が開かれ、人間としての勝利の人生が開かれていくことを知るべきであります。勇んでなす一念と、受け身の一念と、その差はほんのわずかでありますが、結果としては、現実

世界において莫大な開きとなってあらわれるのであります。

「天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果」うんぬんとは、この世界に存在するあらゆる存在も、この世界が刻々とあらわしゆく変化相も、生死の二法を現じないものはない、ということです。天と地、すなわち私どもの生きているこの大地も、限りなく広がる宇宙の空間も、やはり生死の二法をあらわしています。太陽や月も、生じ、やがて死滅していくのです。

五星とは、現代的にいえば、地球と同じく太陽の周りをまわっている兄弟の星たち、いわゆる太陽系の惑星です。歳星、熒惑星、太白星、辰星、鎮星を五星といい、「立正安国論」では五緯という呼び名を用いられております。

太陽に近いほうからいえば、水星にあたるのが辰星、金星が太白星、火星が熒惑星、木星が歳星、土星が鎮星です。今日、天体望遠鏡によってその存在を知られている天王星、海王星、冥王星は、当時は知られていなかったので、でてこないのです。

ともかく、こうした万物、万象の体が妙法蓮華経ですから、これら万物の示す生死は、しょせん妙法蓮華経の生死なのです。

天台大師が摩訶止観に「起は是れ法性の起・滅は是れ法性の滅」といっているのも、まったく同じ意味であります。法性とは妙法蓮華経ということです。森羅万象の起、滅――すなわち顕れてくるのも、滅していくのも、すべて妙法蓮華経の起滅にほかならない、との意であります。

「釈迦多宝の二仏も生死の二法なり」――釈迦は生をあらわし、多宝は死をあらわしております。法

華経の虚空会の儀式において、宝塔の中に座している釈迦、多宝の二仏自体、生死の二法をあらわしているのだとのおおせであります。

境智の二法に約せば、釈迦は智、多宝は境であります。ゆえに、能動的主体の智の表象にあたる釈迦は生、所証の境の表象である多宝は死となるのです。

大聖人の弟子檀那の肝要

然れば久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり、此の事但日蓮が弟子檀那等の肝要なり法華経を持つとは是なり

これまでのところをうけて、結局、いかにすれば、仏法の極理であり、仏の悟達の法であり、しかもわれわれの生命の体でもあるこの生死の一大事が、衆生のなかに脈々と湧現してくるか、という実践法を述べられるところであります。

ここでは、そのなかでももっとも根本となる、信心の姿勢をいわれていると考えてよいでしょう。すなわち「久遠実成の釈尊」――これは本果の立場の仏であります。久遠実成の釈尊自身の生命の体

も「妙法蓮華経」である。

「皆成仏道の法華経」については、この本果の仏衆生は皆、この法を信受することによって、己心の成仏道の法華経」の体もまた「妙法蓮華経」にほかなりません。

「我等衆生」もまた「天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果・生死の二法に非ずと云うことなし」とお示しの個所に対応しております。凡夫である「我等衆生」の体もまた「妙法蓮華経」であることを、明確に教示されたところであります。

したがって、この「久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我等衆生との三つ」という表現は、一往、法華経本門の五百塵点劫成道の釈尊と、二十八品の法華経と、「我等衆生」とみられましょうが、再往、元意の辺は、久遠元初の自受用報身如来即日蓮大聖人と、文底独一本門の大御本尊と、そしてこの三つはまったく差別はないと〝解りて〟と拝すべきであります。これを、差別があると思っていくのは、真実の仏法ではありません。

仏は、すばらしい特別な存在であるとし、われ衆生は、卑しく醜い存在であって、とうてい仏になどなれるはずがないと考えるのは、大なる誤りであります。

また、法華経は、架空の儀式、説法であり、今日のわれわれの生活や人生とはまったく無縁のものであるとするのも、この御文のお心に背いているといわなければなりません。

いわんや、文底の立場で、日蓮大聖人とわれわれのあいだに、越えることのできない隔絶があるよ

うに考えたり、御本尊をよそにみていくこともまた、みずから「生死一大事の血脈」を途絶している
ことになるのであります。

しかしながら、この「三つ全く差別無しと解りて」といっても、それを事実のうえで〝解る〟――
理解するというところまでは達していないのが凡夫であります。その場合〝解りて〟とはどういうこ
とかといえば、「以信得入」「以信代慧」と示されるごとく「深く信心をとって」ということになるの
であります。

ともかく、御本仏日蓮大聖人の御生命も南無妙法蓮華経であり、その大聖人の御生命をそのまま
「すみにそめながしてかきて候」（御書全集一一二四ページ）とおおせられている御本尊も南無妙法蓮華経で
ある。

そして、もったいないことでありますが、私どもの一人ひとりの生命もまた、同じ南無妙法蓮華経で
あると、こう信じて、南無妙法蓮華経と唱えるとき、私どもの生命に生死一大事の血脈、すなわち南
無妙法蓮華経の大生命が脈々と湧現してくるのであります。

これこそが、日蓮大聖人の弟子檀那――すなわち日蓮大聖人の仏法を実践する者にとっての肝要で
ある。「法華経を持つとは是なり」――これ以外にないということなのであります。

「臨終只今にあり」と自覚

所詮臨終只今にありと解りて信心を致して南無妙法蓮華経と唱うる人を「是人命終為千仏授手・令不恐怖不堕悪趣」と説かれて候

「臨終只今にありと解りて」ということは、たんに肚を決めるというのではない。「解りて」とは、事実がそのとおりであることを前提にし、この生命の真実の姿を見極めるという意味であります。

だれしも、まだまだ、自分の人生は先があると思っている。だが、いつ死がおそってくるかは、だれも知らない。一瞬の後には死んでいるかもしれないのです。これが、生命の真実の姿です。

いわんや、かりにまだ二十年、三十年、あるいは五十年と寿命のあることが確かであるにしても、永遠からみれば瞬時であるといわざるをえないでありましょう。これもまた「臨終只今」です。

この事実を理解したとき、心ある人ならば、いま生きて仏法を受持していることの重みを、ひしひしと感ぜずにはいられないはずです。目先の栄華、今生の名聞名利は問題ではない。永劫の未来のために、死してなお消えることのない福運を積むため、真実の人生の目的を凝視しながら、信心いちずに励まざるをえないでありましょう。

これが、信心の究極の姿勢であります。といって、では、仏法者であり、社会人であるわれわれも、文字どおり、いっさいをかなぐり捨てなければならないかというと、そうではありません。広宣流布という大目的に向かって、信行に励みゆくとき、すべてが妙法のもとに生きてくるのであります

す。それが、私どもの「臨終只今にあり」と解った生き方であります。

瞬間瞬間、この決意の持続に生きていくとき「千仏授手・令不恐怖不堕悪趣」となるのです。千仏が手を授けてくれたように、安心立命の境地になり、地獄、餓鬼、畜生、修羅などの悪趣に堕ちることもなくなるのです。

「是人命終為千仏授手」のこの文は、一往は一生の終わり、死の瞬間において、このようになるということでありますが、再往は、生きているあいだの、瞬間瞬間の境涯についていわれたものであることを知るべきであります。

「所詮臨終只今」ということは、只今に全生命をかけていくということにほかならない。日々を懸命に生きていく、広宣流布に、一生成仏へ、わが生命を燃焼させながら、戦いぬいていくということであります。

一人の人に仏法対話をしていくにも、今を逃したら、いつまたじっくり話せるかわからない、また、この人の宿命転換は今しかない、と真剣に接していくならば、その人生はすでに臨終只今の精神に通じているのではないでしょうか。御本尊への唱題にあっても、教学を学ぶにしても、激励の手紙を書くにしても、一瞬一瞬、真剣に取り組んでいくことがなによりも大切なのです。

思うに一生といっても、現在の一瞬の積み重ねであります。きょうを充実させられない人に、あすの開花はありません。瞬間を大切にできない人がいくら百年の大計を口にしても、絵にかいた餅にすぎない。過去の因も未来の果も、現在の一瞬に凝縮されているのであり、その一瞬の転換

が過去久遠よりの罪障の消滅も、未来に続きゆくでろう永劫の福運も決定していくものです。そのカギが「臨終只今」の信心を確立するかいなかにあるのだという、宿命転換の原理を教えられている御文と拝します。

この法華経勧発品第二十八の文を、文字どおりとって恐怖させることも絶対にないということです。

このように説かれているのは、死んで宇宙に溶けこんでいく生命は、もうみずからの意志ではいかんともできないからです。その人の生命状態そのまま業果につつまれなければならない。絶対的な厳しさです。そのときに、千仏が手を授けて守護する。これほど力強いことはないにちがいない。

また、これはたんに手を授けられるということではなく、永遠の生命を確立できるということでもあります。永劫不壊の絶対的幸福をつかめるとおおせなのです。

もちろんそれも、臨終只今の信心の持続があってこそであり、「心の固きに仮りて神の守り則ち強し」であることを忘れてはなりません。

御本尊への信と唱題もなくて、しぜんに千仏が守りにきてくれるということではないのです。ここは一往、命終した命、すなわち受け身の生命のゆえにこういわれているのであり、根本精神は、あくまで自身が、唱題の行に励むことにより、自分自身の胸中にある千仏の守りをみずからあらわしていくということにあります。

「千仏」とは生命守護の働き

悦ばしい哉一仏二仏に非ず百仏二百仏に非ず千仏まで来迎し手を取り給はん事・歓喜の感涙押え難し

この文は、念仏を打ち破っているところです。念仏においては、念仏を称えて死んだならば、阿弥陀仏の使いとして観音、勢至の二菩薩が、雲に乗って迎えにくると説いている。それを信じていた大衆が多かったから、そのような幼稚な教えで民衆を欺いていた念仏に対する激しい憤りを含めていわれているのです。

一仏とか二仏というようなものではない。まして二菩薩などというのではない。千仏が手を授けて守るのである。ぜんぜん規模が違う。つまり、どんなに三悪道に堕ちる生命であっても、浮上させていくということであります。

また「御義口伝」には「千仏とは千如の法門なり」（御書全集七八〇㌻）とあります。すなわち、宇宙のあらゆる生命守護の働きが作動して、法華経の行者を守護するのであるという意味になります。

このように、百界千如といわれているのは、「法」の観点からとらえられているのであり、法の原

理にかなうならば、宇宙のさまざまな働きが、その人の生命を守るように働くということです。しかも、その働きを起こさせるのは、一人ひとりの生命力であります。したがって、法華経の精神は真実の自立を説いているのです。

この「千仏来迎」をさらに身近なものとしてとらえるとき、このようにも考えられます。すなわち「千仏まで来迎し……」とは、人が亡くなったときに葬式をしたり、あるいは追善回向をするわけですが、そのさい、故人を慕って多くの友人、知人が、題目を送ってくれるということです。生前、崇高な使命の道をともに歩み、苦しいときも、喜びのときも、嵐のときも、希望の春も、ともに進んできた同志は、多くの尊き同志から題目の回向を受けることができるのです。

信、不信の差異は厳然

法華不信の者は「其人命終入阿鼻獄」と説かれたれば・定めて獄卒迎えに来って手をや取り候はんずらん浅猴浅猴、十王は裁断し倶生神は呵責せんか

それに比べて法華経を信じない人は、法華経譬喩品にあるとおり、命終したならば、地獄のなかでもっとも重い阿鼻地獄に堕ちるのであり、千仏が手を授けるのではなくして、獄卒が手を取って迎

えるというのであります。お迎えが獄卒ではやりきれません。妙法を信ずるか、逆に敵対するかは、これだけの決定的な差を生みだすのです。

生きているあいだは、いくら権力をほしいままにしようが、富を蓄えていようが、名声を博していようが、命終したならば、いっさい関係ない。一個の赤裸々な人間です。懸衣翁、奪衣婆によってはがされてしまう。その人がいかなる行いをしたかという「業」がそのままあらわれて、その果報を受けなければならないのです。

その告発は倶生神がして、十王が審判するというその人の善悪を、もらさず閻魔王に報告するというで、初七日から三周忌までしだいに裁断するといわれは裁判官です。世間法や国法ではいい逃れできるい。倶生神―同生同名と考えてもいいのですが、生がありません。

これは仏法が生命の内奥の因果を教えているものであり、一般に、地獄は譬え話であり、生きているあいだれております。地獄として絵画的に示されている話どうであろうと、そういう生命の境界があることはうな苦しみを味わう等活地獄もあれば、周囲から圧しつぶされるような衆合地獄、身を焼かれる焦熱

地獄等、あらゆる苦しみが充満しているのは、悲しいが厳然たる生命活動の事実です。

三世が変わらざる時の流れであるならば、死後においても、なんら違うことはあるはずがない。生命自体が苦楽を受けなければならないのは理の当然でもありましょう。

懸衣翁や奪衣婆も、永遠の生命の厳しき因果観からみるならば、あらゆる外見的な虚飾が、死後の生命においてはなんの役にも立たないこと、生命内奥の真実のみの世界であることを教えているのであり、十王や倶生神も、一瞬一瞬の色心にわたる言動が、すべて業として刻印されていることを教えた、優れた譬えとして理解されるのであります。

この観点からするならば、妙法への不信誹謗の行為は、自己自身の生命力を損減させる行為であり、やがては生命力をまったく失ってしまって、繋縛不自在、すべてに縛られて身動きできない泥沼の生命になっていくのです。

いかに恐ろしいといって阿鼻獄ほど恐ろしいことはない。その地獄のありさまを聞けば血を吐いて死ぬほどであるといわれております。これは地獄の恐ろしさをいったものであるとともに、生命内奥からの不幸は、外見のそれと違って、筆舌に尽くせないものがあるということでもあります。

生きていくということ自体が苦しい、気力が衰えてくる、希望を失う――これほど哀しく惨めな人生はない。なにをしても、ぜんぶうまくいかない。「聖人御難事」に述べられている「始めは事なきやうにて終にほろびざるは候はず」（御書全集一一九〇㌻）とはこのことです。

建物が、外から台風等によって打撃をうけた場合はよくわかるし、また修理することもできる。し

かし、内から腐っていった場合は、一見してわからことはたいへんな困難です。

法華誹謗は、わが身の宮殿を、内部から腐らせてあります。まさしく獄卒が迎えにきて手を取る恐ろゆえに、いかなる苦しいことがあっても、悲しいらない。福徳を消し、仏種を永く断じてしまうからです。

仏法では臨終という問題を重視している。臨終はを踏みだす第一歩であるとみているからです。

諸法実相で、その死の瞬間に、一生の善悪の業績いです。少しのごまかしもきかない。臨終の明暗は映しだす鏡であります。

「夫以みれば日蓮幼少の時より仏法を学び候しが念待つ事なし・風の前の露尚譬えにあらず、かしこき り、されば先臨終の事を習うて後に他事を習うべしの一節です。

私は、真剣に、かけがえのない〝今世の生〟を生拝するのです。

が一つも残さず、その相にあらわれる。怖いくらそのまま、今世の姿の諸法実相であり、未来を願すらく人の寿命は無常なり、出る気は入る気をもはかなきも老いたるも若きも定め無き習いな」（御書全集一四〇四㌻）とは「妙法尼御前御返事」きんとする者のあり方を教えられた御文であると

識者も志向する仏法の精髄

「臨終」がなぜ大事かということについては、最近は、欧米でもいろいろな学者が、さまざまな角度からこの点について研究をしています。

シカゴ大学の精神科医学部の教授をしていたエリザベス・キューブラー・ロス女史は、プロテスタントで、死後の生命を信じることはなかった方ですが、最近十一年間に一千人におよぶ患者の死に接するにつれて、どうしても死後の生命を信ぜざるをえなくなってきたと告白しています。

ロス女史は、死んだものと一度宣告された人が蘇生してもらい、つぎのようにレポートしています。

――肉体的死の瞬間、彼らは物理的な肉体から抜けて浮遊する。彼らは、ベッドに寝ている自分自身の姿を見ることができる。種々の情景を識別できる。だれが部屋へ入ってきたか、どの医師が、どの看護婦が部屋にいたかをぜんぶ知っている。患者は、すでに生命兆候がすべて失われているにもかかわらず、周囲にいる人たちの着物の色まで識別できた。

このような現実の体験を、ロスに話したという。これ――。

――また、死ぬときの最初の瞬間は、だれでも気持ちのよい状態になる。（苦痛の極限からのがれられたという意味で）しかし――つぎの瞬間以後が問題である。

たとえば、キリスト教では、天国と地獄を説くが、たしかに、そのような差がやってくる。しかし、キリスト教に述べられている〝天国〟と〝地獄〟の様相と、実際に死から蘇った人の体験とはまったく異なっている。（その人たちのなかに、キリスト教徒もいた）

死んだ後――生命兆候がなくなった後――彼らは、ひとつの光源をめざしていく。そのとき天国とか地獄といわれるような状態が訪れる。しかし、その状態は、生命の外側から訪れるのではない。彼らは自分の生を反省するように強要されるのである。

ちょうど、テレビの画像を見ているように、その人の眼前に、一生のことが現れては過ぎ去っていく。おこなった行為のみならず、思考の内容までが、走馬灯のように展開していく。

その人が生涯になしたこと、考えたことが、ことごとく見えるのであるから、ある人にとっては天国、また、他の人にとっては地獄を経験するといってもまちがいではない。

しかし、他者（たとえば、絶対神）が、その人を裁くのではない、その人自身が自分を裁くのである。

――という体験を、死から蘇った人は語るのである。

このような体験をふまえて、なしたことはけっして消えない、という仏法の業論は、すばらしい、美しい真理である。自分が種子のなかに注ぎ込んだものは、すべて、その人が刈り取るところのものである――私は、ほんとうに、それを信じる。それは、絶対的な法則である、とロスは述べております。

ロスの、仏法の業論への信は、彼女自身の患者と接した長い体験からくるものです。すべて、科学

的に確かめることができる、と彼女はいうのです。

ロスは、自分の考えが、仏法と一致していることを聞いてひじょうにうれしいと述べ「生きているうちにしたこと、悪いことが全部自分に返ってくるのだということを知ることが是非とも必要です」

「もし、人びとがこういう体験を知っていたら、生きている送りうることができるであろうと考えるからです」とも語っております。

こうした肉体離脱体験の一例として、ヘミングウェーも、ひどい怪我をしたときにみずからが経験したと、文学者らしい表現でつぎのようにいっています。

「わたしは、ちょうどひとが絹のハンカチの片隅をつまんでポケットからひっぱりだすように、自分の魂らしきものが、肉体からすいと出てくるのを感じた。それは飛びまわり、それから帰ってきて、再び体内に入り、そしてもうわたしは死んではいなかった」

彼は、この体験をそのまま「武器よさらば」で使っています。

評論家の松田道雄氏の編集した〝死〟と題する書のなかに、死の幻影をみたという体験がありま す。小林勝氏という作家の体験です。

長い体験記録なので、内容を要約しながら紹介してみましょう。

生死にかかわる手術をして、その後、麻酔が切れはじめたところから、その手記は始まっています。

「十日の深夜から意識がもどってきたが、それと共に苦痛が来た。それは怒濤といってよかった。それに襲われると眼の前も頭の中も、真っ赤になった。血の色である」

「そして痛みの極みに達した時、私はすうっと飛びはじめたのを感じた。私はその時、私の姿をはっきり見た。私がこなごなに割れて、燃えつきた黒いかたまりになって、果てしない空間を、とてつもない速さで飛んでいくのである。私は地球を離れたと感じていた。(中略)私は空間を飛びながら、あ、おれの地球はあたたかだった、と思っていた。

とてもつめたい。いっそうつめたいところへ飛んでいく。そして私の前方は無限の宇宙空間であり、うす青い色からしだいに濃い青へ、そして黒々とした色へとつづいていた。そうだ、このまま飛びつづけて、あそこへおちこんだ時(中略)これが死なんだ、と私ははっきり思った」

「そこにはもう、ただ一つのことを除いては、どのような人間感情も存在しなかった。(中略)私の親しい人々に対しても、また私自身についてすら、喜んだり悲しんだりするすべての感情はもはや消滅していた。これはいまにして思えば全く予期しないことであった。親しい多くの人々と別れて、淋しいとかつらいとか悲しいとか、そういった感情はここにくると、もう存在しなかったのである。

ただ一つだけ、最後まで残っていた感情がある。それは、何とも云えない無念さであった。こうやってついに生命に別れを告げるのか、という確認と同時に、かつて人間であり、ただ一度の生を生きたというその証拠を、自分がこうしてバタッと消えるにしても、やはりつづいていくであろう人間の歴史の上に、たとえどんなかすかな爪あととしてでも刻むことなくして飛び去らなくてはならないという無念さであった。

これは、意外だった。自分なりに精いっぱい生きてきたつもりだったのに最後にそんなものが残る

とは夢にも思わなかった」

「生のまさに終えんとするそのどたん場で、はじめて愕然として云い知れぬ無念な思いを抱いて死に突入するほど、凝縮された絶望はほかにあるまいと思えるのである」

喜怒哀楽の感情さえも消えたあとで、ただ一つ残る無念さという感情――生命それ自体からわきあがる生命感でありましょう。

人類の歴史に貢献できなかったという無念さが、ひきかえすことのほとんど望みえない生と死の境で、死にゆく生命を凝縮された絶望に陥れる。この生命感の体験は、きわめて貴重であるように思うのです。

真実の生き方を凝視

つぎに哲学的な側面からは、生の哲学者ベルクソンも、身体と心の深い考察から、死後の生命を肯定するにいたっています。またアーノルド・トインピー博士は、不死の海である宇宙本源の〝精神的実在〟に帰ることが死であると信じ、一人の学者として、高等宗教、とくに、仏教の〝空〟に、生と死の解答を求めておられました。

「死という現象は、われわれが心身統一体としてなうわけですが、しかしそれは〝実在それ自体〟からみれば、じつは人間の知的着想力の限界から生

じる幻想にすぎないことになります。（中略）私は、『実在それ自体』には時間もなければ空間もないと信じています。といって、それが時間と空間に束縛されたこの世界から、全く遊離して存在するものだとは思っていません」

「生命は、はたして死後も存続するのか。また、肉体が無機物の世界へと還元されてしまった後、精神はどこへ行くのか。――要するに、これらの疑問は、空間とか時間の基準からは答えられず〝空〟ないし〝永遠〟の概念によって初めて答えられるのだと信じます」

さらに、死を見すえての生に関して、ガンで亡くなった作家の高見順氏は、その著「死の淵より」のなかに〝過去の空間〟と題する詩を載せております。

「手ですくった砂が
痩せ細った指のすきまから洩れるように
時間がざらざらと私からこぼれる
残りすくない大事な時間が
……
時間の洩れる音だけがいそがしく聞えてくる」

この詩には、残り少ない時間を愛惜しながら、永遠の生への限りない悲願がよみこまれています。

時の一秒は、血の一滴よりも貴い――これが、この世に生をうけた人間の真実の生き方でありましょ

う。しかし、人は、死をつきつけられるまでは、あまりにも、時をむだに過ごしているようです。

これもガンに倒れたある有能なルポ・ライターの話ですが、ガンと診断され、死期の迫りつつあることを宣告されてからというものは、その人はカレンダーを〝日めくりのカレンダー〟にかえたということです。残された貴重な一日一日を思えば、年間あるいは月間の月日がその他大勢といったふうに並べられているカレンダーを使うことは、とてもできなくなった。朝起き、昼を生き、夜になって、一日が終わろうとするとき、その日の日付をいとおしむように破りとる、そして「ああ、今日一日も生命があったか」と、生の膚ざわりをしみじみと感じたというのです。

「人間は死への存在である」といったハイデッガーの言葉をまつまでもなく、生の底には死が流れています。いや、瞬間ごとに死に接し、死から生へと蘇っているといえます。

こうした死の自覚こそが、生を限りなく豊かにし、充実させるのです。死の自覚なきところに、真実の生もありません。充実した時間を送れるはずもありません。ここに死はそのまま生の問題なのです。死を解決しないところに、生の確立もないといえるのではないでしょうか。

四年前の春、トインビー博士から招請をうけ、第二回の対談のためロンドンに行き、五日間の対談を終え、パリに寄り、列車で二時間、平和な田園の詩情あふれるロワールの谷を訪れたときのことです。

緑の岸辺を洗う清流、牧羊の群れ、なだらかな丘陵、古城の尖塔、小鳥がさえずる小径、深閑とした森、咲き乱れる花、歳月を刻んだ石造りの農家……。そんなつた草におおわれた館の一つに、ルネ

サンスの巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチが晩年を過ごした家がありました。ダ・ヴィンチがその偉大な生涯を閉じた寝室に、彼の言葉が銅板に刻まれていました。

「充実した生命は　長い
充実した日々は　いい眠りを与える
充実した生命は　静寂な死を与える」

スイスのC・G・ユングはいっています。

「人生の半ばから先は、生きながら死ぬ覚悟のできている人だけが、本当に生き生きと生きていると いえる」（「死の意味」）

ユングは、人生の後半をとくに重視してこの言葉をはいたのでしょうが、人生そのものに、生きながら死ぬ覚悟のある者のみが、真実の生きいきとした生を生きぬいたことになるということもいえるかもしれません。

トインビー博士はいっています。

「生のさなかにわれわれは死のなかにいる。誕生の瞬間から、つねに人間にはいつ死ぬかわからない可能性がある。そしてこの可能性は、必然的におそかれ早かれ既成事実になる。理想的には、すべての人間が人生の一瞬一瞬を、つぎの瞬間が最後の瞬間となるかのように生きなければならない」（「生きることと死ぬこととのあいだの関係」）と。

しかし、この理想状態で生きぬくことはむずかしい。――としながらも、トインビー博士は、つぎのように結論しています。

「確信をもって云いうるのは、人間がこの理想の精神状態を手に入れるところへ近づけば近づくほど、それだけ立派な、そして幸福な人間になるということである」と。

つぎに、この生と死の問題について、自然科学者の側からみた一つの眼を紹介してみましょう。大阪大学の名誉教授で物理学者の岡部金次郎博士は「人間は死んだらどうなるか」という著で、ユニークな見解を述べられています。岡部博士は、自然科学の法則を土台にしながら、そこから一歩、推理を進めて死の問題を説こうとする。岡部氏の提唱する推理科学であります。

――物質の科学では、不生不滅の法則が成立する。つまり、エネルギーや物質が、なにも無いところから突然に出現したり、反対に現に存在するエネルギーや物質が、完全に跡形もなく消滅してしまうことはありえない。

人間の魂は、超物質的、超エネルギー的なもので、五感でとらえることはできない。

しかし、人間の魂なるものを認めなければ、人体を構成する物質は、新陳代謝によって、何年かのうちにぜんぶ入れ替わってしまうのであるから、現在の自分と子供のときの自分はまったく別人になってしまう。たんに、ある程度、形質が似ているだけということになる。

そこで、現在の自分と子供のときの自分との「自己同一性」を認めるとすれば、人間の魂なるものを認めざるをえないであろう。

魂のようなものも、それが存在するものとすれば
り、死によって、人間生命が消滅してしまうのでは
せざるをえない。なんらかの状態で存続するのであると推測

魂の中心を魂の核と呼ぶ。生のときは、魂の核が
る。つまり、活性状態にあると考えられる。死にお
つまり、死の生命では、生きているときのような機
に、その人間としての機能を潜在させているのであ
そして、生命が死から生へと蘇ると、再び、魂の
このように、人間の生死は、魂の核が活性状態で
り、魂の核そのものは生死にわたって存続するので
岡部氏のいう魂、魂の核とは、通常の霊魂ではな
ても、涅槃経において、徹底的に否定されています
る「自己同一性」をもたらす生命の〝我〟に通ずる
ともあれ、人生においてなにが大事か。それは生
義をはずして、いかに他事に心を奪われても、しょ
ことはないが、死を見つめ、生を緊張して生きる、
でしょうか。

肉体と一体不二であり、種々の機能を発揮してい
いては、魂の核が非活性状態になるのであろう。
能を発現することはない。しかし、生命のなか
る。
核の機能を発揮するようになるであろう。
あるか、非活性状態になっているかの違いであ
ある――。（要旨）
いと私は思う。霊魂という考え方は、仏法におい
。私は、氏のいっている魂の核とは、仏法におけ
ものがあるように考えるのです。
きる目的観であり、生死の問題であり、この根本
せんそれはむなしい。なにも悲壮感にとらわれる
求道の厳粛な姿勢を失ってはならないのではない

現代人は、そして現代文明は〝生の奢り〟に浸っているのではないか、と憂える識者の声もあります。死の重みを忘れた軽薄な生は、真の意味での生の充実をもたらさない。「臨終只今にあり」の言は、混迷の一途をたどる今日の時代において、千鈞の重みをもつものと、私は思います。

今日蓮が弟子檀那等・南無妙法蓮華経と唱えん程の者は・千仏の手を授け給はん事・譬えば蔵夕顔の手を出すが如くと思し食せ

「是人命終為千仏授手」の法華経勧発品の文は、まさしく、末法の大白法を信受し実践する日蓮大聖人の弟子檀那にあたるのであるといわれております。ウルリやユウガオの蔓がからむように、千仏が、御本尊を持つ私たちを、全力をあげて支えてくれるとのおおせであります。

このことを前提としたうえで、今度は指導者としてのあり方を考えてみたい。仏が衆生を守るのは、手をさしのべて、地獄へ堕とすまい、恐怖を味わすまいとする精神に立っているという法華経の文からするならば、私たちもまた、同志に対しても、また友人に対しても、この精神に立たなければならないと思うのであります。

どうすれば皆が喜んで人生を満喫できるか、悲しい思いをしないでいけるかをつねに考えていくこと、すなわち同志愛、隣人愛、人類愛こそ、「令不恐怖不堕悪趣」の仏の精神であり、そのために手

をさしのべて協力し、励ましていくのが「千仏授手」であります。
人間、崩れるときもあれば、沈むときもあります。そのときにこそ、千仏、すなわち周囲の人々が励まし、支えあっていくなかに、その人自身の蘇生も、ひいては地域の発展もあると私は思う。またつねに私は、このことを念頭におきつつ接しているつもりであります。

現在の一念が洋々たる未来開く

> 過去に法華経の結縁強盛なる故に現在に此の経を受持す、未来に仏果を成就せん事疑い有るべからず
>
> 心地観経に「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」とあります。この文に照らしてみるならば、過去において御本尊への結縁が強盛であったというのは「過去の因」であります。現在に御本尊を持ったというのは「現在の果」となる。しかも、御本尊を受持していることは、そのまま「現在の因」であり、「未来に仏果を成就せん」すなわち「未来の果」を決定づけているのです。
>
> 私たちがいま御本尊を受持しているということは、また広宣流布、一生成仏をめざして実践してい

るということは、まことに不思議なことであります。それは過去にそれだけの因を積んでいたからにちがいない。「在在諸仏土常与師倶生」の原理からするならば、つねに御本尊のもとに妙法弘通に挺身してきた「因」のゆえにいま、御本尊にあえたという「果」がある。

しかし、御本尊を受持できたということを、たんに「果」としてのみとらえるのでなく、その「果」をそのまま「因」としていってこそ、つまり未来への発条としていってこそ、未来のさらに輝かしい開花があると知っていただきたいのであります。

「現在に此の経を受持す」の「受持」において、「受」とは過去の因による果でありましょう。しかして「持」とは、未来の果をめざしての因でなければならない。不断の精進、不屈の信仰の連続のなかに「持」の一字があると心得ていただきたい。「受くるは・やすく持つはかたし・さる間・成仏は持つにあり」（御書全集一一三六ページ）とあるのも、この意であります。

このように、過去の結縁が現在の受持とあらわれ、その現在の受持が未来の仏果となることは疑いないという、三世にわたる種熟脱の原理を示されたのがこの文でありますが、それでは、現在において信心を起こすことのできない人は、過去に結縁がないのであって、そういう人は諦める以外にないのかというと、けっしてそうではありません。

現在のこの人生で仏法の話を聞くことができたということも「過去の結縁」そのものになります。そして、人間は過去世の業によってのみ縛られ動かされていく存在ではなく、現在の一念によって、未来をどのようにでも変えていける主体的存在であります。厳密にいうならば、過去の結縁が強盛

であったかどうかは、だれにもわからないことである。ただ、現在の諸法実相が根本であり、もっとも大事なのです。「諸法実相抄」の「地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」（御書全集一三六〇㌻）と同じであります。地涌の菩薩だから唱えているのではない。題目を唱えているからこそ地涌の菩薩であるということです。

したがって、過去に日蓮大聖人の本眷属として結縁強盛であり、さまざまな国土での妙法流布を誓いつつ、この世に生を受けてきたのだと決めて、現在の一瞬一瞬の積み重ねとしてのこの一生を、みずから切り開いていくことが、仏法の根本精神なのです。ですから、広宣流布に現実に挺身していくことこそ、誉れある地涌の菩薩の証であるという強い決意をもって、日々の精進に取り組みたいと思うのであります。

信仰の持続こそ最も大切

過去の生死・現在の生死・未来の生死・三世の生死に法華経を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり

さきに生死一大事の血脈について、妙法蓮華経とその体を明かされ、また妙法蓮華経と唱え

ることであるとその実践を示されましたが、ここではその持続のなかにこそ、血脈が連綿と受け継がれていくことを教えられているのであります。

いわゆる「血脈」には、唯授一人の別しての法体の血脈と、総じての信心の血脈とがあります。ここでおおせられているのは、総じての血脈であることはいうまでもありません。

この総じての血脈、すなわち久遠元初自受用報身如来たる日蓮大聖人の御一身に流れる生死一大事の血脈は、親から子へ血のつながるごとく、三世にわたって御本尊を持ち、題目を唱える私たちの生命に受け継がれていくのであるとの御文であります。

これは一往、大聖人の教えを受けるようになってから日の浅い最蓮房に、また、ともすれば理に走りがちなその傾向も感じられて、信仰の持続こそもっとも大切であることを教えられているのでありましょう。

私たちの立場においては、仏の生命と感応道交できる生命の開発、すなわち信心のなかに血脈相承があるのであり、それには生涯、いな三世にわたる持続がなければならない。一生において、一つの信念を貫くことさえ容易ではない。しかるに三世にわたる信心を教えられているのは、簡単なことであるようにみえながら、これほど困難な、またこれほど大切なこともないと教えられていると拝したい。

大聖人の生命にある生死一大事の血脈を、私たちはどうすれば相承できるか。大聖人御自身はすでにおられません。だが、大聖人は人法一箇の当体たる御本尊を残してくださっております。ゆえに純

一な信仰による唱題という実践によって、大御本尊の生命をわが生命に移すのです。というよりも、わが生命のなかにある、大聖人の御生命、仏界の生命を湧現させる以外にないのです。

すなわち、大聖人の命を受けるとは、わが己心の大聖人を湧現させる以外のなにものでもない。空の鳥が御本尊であり、その鳥に呼応して鳴く籠の中の鳥が、わが生命の仏界であります。その意味では、信心の血脈相承といっても、いっさいわが生命にあるのであり、それを決定させるのは、したがってみずからの信仰以外にないといえるのであります。

謗法不信の者は「即断一切世間仏種」とて仏に成るべき種子を断絶するが故に生死一大事の血脈之無きなり

謗法、不信の者は、みずからの手で種子を断っているのであり、そのゆえに、謗法、不信の者に、生死一大事血脈があろうはずはないと述べられているのであります。

「一切世間の仏種を断ぜん」とは、どこの世界へ行っても救われない、どこへ逃げようとも逃げられることはない。地獄の世界へ行くということであります。

あらゆる衆生の成仏の種子が南無妙法蓮華経であるがゆえに、妙法を信ぜず誹謗することは、一切世間の仏種を断ずることになるのであります。

仏法実践の究極は異体同心

総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する処の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か

ここは異体同心の人間関係のなかに総じての生死一大事の血脈が流れ通うことを示されたところであり、広く一切衆生が仏に成る血脈を継ぐための具体的実践のあり方を明かされた御文であります。まず「総じて」と述べられていますが、これは、ごぞんじのように「別して」に対する言葉です。別して生死一大事の血脈が流れ通うところを尋ねれば、本抄のはじめに「釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華経の五字過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり」とありますように、文上においては、釈迦、多宝の二仏から付嘱を受けた上首上行菩薩の生命に、その血脈はある。

したがって再往、文底の立場から拝するならば、法華経文上に垂迹上行菩薩と現れた久遠元初自受用身如来の再誕たる日蓮大聖人の御生命こそが、別しての生死一大事の血脈の当体なのであります。

したがって、この御文は、日蓮大聖人の御生命に流れる血脈が、総じては大聖人門下の異体同心の団結の姿のなかにあらわれると結論づけられた個所なのであります。仏の血脈は、異体同心に題目を唱え、広宣流布をめざしてゆく一人ひとりの生命に脈打つとのおおせなのであります。

これは、末法の荒凡夫が成仏できる具体的な道を明かされた重要な依文でもあります。

「今日蓮が弘通する処の所詮是なり」と述べられているように、大聖人の妙法弘通の元意は、空間的次元でいうならば、末法万年尽未来際の人々に、また、時間的に広げれば全日本、全世界の人々に、日蓮大聖人の根本の御精神であられるのであります。

ここに正法の伝持を主眼とした正像の摂受のいき方と、全民衆の成仏をめざされた日蓮大聖人の末法折伏のいき方との根本的な相違点があるといえるのであります。

そうした大慈悲のお心から、成仏の根源の当体として大御本尊を御建立くださり、具体的実践、運動の方軌として異体同心の原理を教えてくださったのであります。

私どもは、この御遺命に照らし、御本尊を根本として日蓮正宗を外護し、異体同心に妙法流布に励み、人間同士の交流のなかで錬磨、研鑽を重ねていくことを根本精神としているのであります。

恩師戸田城聖先生は、つねづね「創価学会の組織は戸田の命よりも大切である」といわれておりましたが、それも自他彼此の心なく異体同心の人間連帯の和を築いていくところに、総じての生死一大事の血脈が厳然と受け継がれ、一切衆生を仏になしゆくカギがあることを知悉しておられたがゆえで

あると確信するのであります。

一般的にみても、組織というものは、たんなる個の総和としての力をもつだけではない。異体同心の原理によって適材適所の構築がなされれば、想像を絶する力や働きが生みだされ、その組織の目的を成就していくものであります。人間の文化、伝統は、すべてこうした組織のなかにはぐくまれ、継承されているというのが否定しえない事実なのであります。

しかも、創価学会の組織は、個々の会員の人間革命、一生成仏をめざし、ひいては広宣流布をめざして生みだされたものであります。私どもは、戸田先生が遺されたこの創価学会の生命的連帯の組織を、なによりも大切にし、慈しみ、守りぬいていかなくてはなりません。

なお、この御文に関連して、異体同心のあり方について、一言申し上げておきたい。というのも、異体同心の和合僧団にしてはじめて、総じての生死一大事の血脈が流れ通うとのおおせだからであります。

まず、異体同心を身近な例でいえば、広宣流布のためにつねに寄りあい、御書を学んだり、諸行事を企画したりして、互いに励ましあい、指導しあっていく事実の姿のなかに、その縮図があるといえる。「心ざしあらん諸人は一処にあつまりて御聴聞あるべし」（御書全集九五一ページ）とも説かれているとおりです。

人間の心というものは、時々刻々と変化します。その変転きわまりない当体であるゆえに、集合し

ては信心の呼吸を合わせ、磐石な家庭建設のため、地域の繁栄のために離散し、再び仏法求道の座談の場に集いあうのであります。この繰り返しこそが、仏法の真髄を現じゆく事実上の方式であり、「異体同心なれば万事を成ず」との御文も、この姿をさすと拝せる。創価学会の今日があるのも、恩師戸田前会長を中心に、つねにこの異体を同心とする離合集散の実践が営々と持続されていたことに帰着するのであります。

私どもの信心の目的は、みずからの生命の連続革命にあるといってよい。しかも、私どものめざす広宣流布は、利害や名誉を目的とした世間のそれとはまったく次元を異にする、もっとも崇高な人類的、宇宙的、永遠的な普遍性をはらんだものであり、これを可能にする根本要因こそ異体同心の団結にあるということを強く申し上げておきたいのであります。

この異体同心の原理で大事な点は、まず第一に、異体を前提としていることであります。一人ひとりの個性や立場、特性を最大限に尊重し、その当体を輝かせていくのが、日蓮大聖人の仏法なのであります。

「御義口伝」には「桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作三身と開見す」（御書全集七八四ページ）とおせであります。この自体顕照の姿をもって広宣流布に戦っていく、そこに自己の人間革命の軌跡があるのであります。

ややもすると、通常、組織集団というものは、異体を拒絶し、同体化をはかって統一したものをつくりだそうとするものであります。その端的な例が、軍隊組織であったし、また世間における閨閥の

ようなファミリー集団であるといえましょう。

ファミリー集団は強いようにみえながら、その実くなってくる。また同体のようでありながら、かえって派閥化し、阿梨樹の枝のごとき、複雑怪奇な様相を呈してくるものです。やがては腐敗堕落をきわめ、人間の心に悪心を呼びさます温床ともなっていく。今日までの多くの組織が、血縁関係のファミリー化した組織となり、低迷を余儀なくされている事実にも、このことは明らかであります。

ともかくも、学会員は、個々の特性を最大限に発揮しあい、互いに同志を尊敬しあっていくこの尊い伝統を、どこまでもたもち続けていっていただきたいのであります。

総体革命ですから、さまざまな立場の人が信仰の庭に集い、見事に咲き薫っていくのが、その理想の姿です。たとえば、魚屋さんなら魚屋さんばかりが集ったのでは、魚屋さん革命はできても、総体革命はできない。個性の面でも、才能の面でも、多種多様の人々が、自体を顕照しつつ、広布という新世紀の山脈をめざしゆくところに、はじめて総体革命は成就されていくのであります。

こうした異体の一人ひとりが、同じ心に立脚して目であり、もっとも大事なポイントであります。

大聖人は「自他彼此の心なく水魚の思を成して」という存在、また、彼、此という、さまざまな立場があることは当然であり、それを否定したものではない。問題は、そこに人間の心の通いあいがなく、それぞれが、自己のことのみを中心にものごとを

考え、己の感情のみを根本として行動していくことで
に分断されてしまいます。こうしたアンバランスで、
も通わないというのであります。
これに対して「水魚の思」とは、魚は魚、水は水と
魚は水がなければ瞬時も生きていけない。と同じよう
関係に支えられていることを知り、それを大切にして
間関係であり、魚とは自分自身をたとえられたといえ
体同心の和合僧に親しみ、それを構成する一人ひとり
でありましょう。
仏法では報恩ということが強調され、父母の恩、師
われますが、これは自身の存在を生命的つながりのな
門です。自己の存在、他人の存在を、ともに重視して
こうした基盤をふまえたうえでのものであることを知
しかしながら、現実の社会は、利害と打算、反目と
のままであります。あたかも、狐狼のような隙あらば
すえていかなければならない。
悪に負けたり、利用されてはけっしてならない。社
会はけっして甘いものではない。そのなかにあ

って、あらゆる邪悪な勢力を打ち破り、真実の人間勝利の社会を築き上げていく唯一の勢力こそ、御本仏日蓮大聖人のおおせどおりの道を歩む、われらの異体同心の鉄桶の団結以外にないと申し上げておきたいのであります。

こうした「水魚の思」を成していく根源、いいかえれば、異体同心の〝同心〟とは、御本尊を信ずる心が同じことです。そして御書に「日蓮と同意ならば」、また「わたうども一陣三陣つづきて」とおおせのごとく、広宣流布の大目的を、同じく己が使命とすることであります。

我見と感情とを中心としていけば、そこにはおのずから異体異心となり、不平不満と怨嫉とが渦を巻くことになるのであります。

――彼は彼の立場で懸命にがんばっているな。あの人もあそこで戦っている。この人もここで一歩前進の指揮をとっている。皆、心を洗われるような日々を送り、清新な息吹をたたえている。心から敬意を表したい。私も私の立場で、私の使命を果たしていこう――という姿になるでしょう。こうした生きた組織には、総じての生死一大事の血脈が清冽に豊かに流れ通い、功徳の花が瀾漫と咲き薫ることは、必然の道理であると確信するものであります。

有名な「異体同心事」には「殷の紂王は七十万騎なれども同体異心なればいくさにまけぬ、周の武王は八百人なれども異体同心なればかちぬ」（御書全集一四六三㌻）と述べられています。

中国古代の王朝の交代劇という、一つの史実を引かれての指導であります。紀元前十一世紀のころの古い事柄でありますが、時代性、歴史性はともかくとして、人間の振る舞いという点においてみれ

ば、一つの真理がそのなかに含まれております。

司馬遷の「史記」によれば――殷の紂王は悪逆の限りを尽くしている。妲己におぼれ、酒池肉林の宴を張り、自身の意に逆らうものがあれば、あるいは殺し、あるいはその肉を塩辛にし、あるいは干肉にし、また、諫言をした忠臣・比干の胸をえぐる等々であった。当然のことながら、民衆の幸福は一顧だにされることがなかった。一方、その殷の支配する諸国の一つであった周に文王がおり、善政をしき、諸国の王の信望を集めていた。この文王の跡を継いだのが武王であり、彼は文王の遺志を受けて、暴逆の紂王を討つ軍を起こした。その時を得た軍に、期せずして八百の諸侯が志を同じくして集まり、討伐に向かった。これに対した紂王は、七十万の大軍を繰り出した――と記されております。

武王の軍は諸侯が集ったものであったが、天命のもと、悪を討つとの名分を掲げてその士気は十分に高かった。一方、紂王の軍は七十万と数こそ多いといっても、戦意はまるでなかった。むしろ、心のなかでは武王がやってくるのを待ち望んでおり、いっせいに反乱を起こして武王を迎え入れたといいます。ここに殷が敗れて、周王朝の誕生をみたのであります。まさしく武王の軍は、民衆の輿望を担い、人々の心をとらえたがゆえに、異体同心の団結が可能となり、大事を成しえたといえるのです。

われわれもまた、信心を根本に、異体同心で進むならば、やがて、すべての人々が、ここに唯一の光明を見いだし、陸続と集ってくるでありましょう。

「若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か」との御文は、その異体同心の団結のあるところ、かな

らずや広宣流布は成就されるとの御断言であります。

異体同心の実践なくして、ただ時を待っているのみでも、広宣流布の実現はないのであります。広宣流布をみずからの使命とし「如来の所遣として如来の事を行」じている人々の功徳は、まさに「仏の智慧をもってしても測り難し」との経文どおりであることはいうまでもありません。この重大な使命と福運に満ちみちた人生軌道を一直線に邁進して、最高に満足の境涯へと入っていかれますことを心より念願いたします。

我執、驕慢が異心の本源

剰え日蓮が弟子の中に異体異心の者之有れば例せば城者として城を破るが如し

異体異心の者は、師子身中の虫であり、最大の敵であるとのおおせです。異体同心の団結を乱し、生死一大事の血脈を途絶えさせていくゆえに、その罪は大きい。仏法のうえからいえば、一往は、五逆罪のなかでももっとも重い破和合僧の罪にあたります。しかし、再往これを論ずれば、それにはとどまらず、さらに重い「誹謗正法」の罪にあたるわけであります。なぜなら、仏法の根源である生死一大事血脈、すなわち妙法蓮華経に背くゆえであります。

この「異心」とは、根本は日蓮大聖人のお心に反することでありますが、だれも最初から大聖人に背こうとして背く人はいないでありましょう。では、なにゆえ異心に陥ってしまうのか。私は、その異心の本源は、我執であり、自己の利益、自己の感情、慢心を中心としたいき方であると考えるのであります。

大聖人の門下においても、三位房の例がありますが、彼は日蓮門下でも重きをなした高弟です。だが、彼も和合僧を破り、変死を遂げています。

「三位房が事は大不思議の事ども候いしかども・とのばら原のをもいには智慧ある者をそねませ給うかと・ぐちの人をもいなんと・をもいて物も申さで候いしが、はらぐろとなりて大難にもあたりて候ぞ、なかなか・さんざんと・だにも申せしかば・たすかるへんもや候いなん、あまりにふしぎさに申さざりしなり」（御書全集一一九一ページ）

ここには、重要な教示があります。三位房について指導し、まちがいをいってあげられない雰囲気がつくられていたという点です。なにかいいづらい。そうしたムードを、弟子たちがいつのまにかつくってしまったのです。

三位房日行は、学はあり、門下の長老でありました。比叡山に遊学もしているし、竜象房をものの見事に破折する等、学に秀でていた。弁も立つ人であった。しかし、才知に慢ずるところがあり、また「御持仏堂にて法門申したりしが面目なんどかかれて候事・かへすがへす不思議にをぼへ候」（御書全集一二六八ページ）とあるように、世間の権威に弱く、一閻浮提第一の法門を持する誇りと自覚に欠けて

いた。「日蓮をいやしみてかけるか」（同ページ）と指摘されていますが、京の貴族の権威よりも大聖人の仏法の存在を下にみる心があったようです。

熱原の法難のさい、後輩にあたる日興上人の応援を命ぜられたのですが、行智の奸策にかかり、日興上人に敵対し「大難にもあたりて候ぞ」という悲惨な死を迎えてしまうことは、皆さん、ご承知のことと思います。後輩が中心になって戦っている。それを応援すべく派遣されたが、それが面白くなかったのではないか、と私は推量しています。

時期は日蓮門下の興亡をかけた戦いのさなかなのに、三位房日行の心を覆うものは、自分の出番のないことを不快に思うエゴの一念、しょせんは名聞名利を願う気持ちだけでありました。

もとより、大聖人の大智は、日行の生命傾向を鋭く洞察しておられました。そして、彼の京都弘教のおりに、戒めてもおられる。その学智を惜しみ、それが驕慢と退転に結びつかないよう、いくたびとなく注意されようとしたにちがいありません。しかし、それを許さない雰囲気があったことが、かえって、彼の決定的な不幸をまねきよせてしまったのです。

三世各別あるべからずです。今日においても、この教訓はすこしも変わらず生きているわけです。

大聖人滅後においても五老僧に代表されるごとく、違背の流れがあったことはよくご承知のことと思います。

五老僧は親しく大聖人にお目にかかりながらも、大聖人御入滅後は、残念なことに大聖人の法門を天台門流に同じ、天台沙門と名乗り、離反していってしまった。これは理解がおよばなかったという

よりも、法門を曲げてまで天台仏法という権威のなかに、自己の保身をはかっていった姿であると思うのであります。その権威のために彼らは、仮名文字で書かれた御書を「先師の恥辱」であるとして「スキカエシに成し或は火に焼き」までしているのであります。全民衆のために「身命を期と」された大聖人の御精神は、まったく踏みにじられてしまいました。

五老僧のうちの一人、大国阿闍梨日朗は、大聖人のもとにあっては、まさに師弟不二の法戦を展開し、それゆえに入牢の身ともなっております。大聖人がその日朗の強盛な信仰を称賛されていることは「土籠御書」（御書全集一二一三㌻）に書かれているとおりであります。この日朗が、第二祖日興上人の時代に入って違背し、一歩後退している事実こそ、私は後世の信仰者が銘記すべき広宣流布への重大な意義が刻印されているように思えてならない。

日蓮大聖人のもとでは活躍したが、日興上人の時代においては背信していることは、当然のことして「三世各別あるべからず」の御聖訓に背くものであり、この原理はそのまま、現在、未来にも通ずる仏法弘通上の重要な明鏡として拝さなければならないのであります。

脈打つ民衆救済の大慈悲

日本国の一切衆生に法華経を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとするに・還って日蓮を種

種の難に合せ結句此の島まで流罪す、而るに貴辺・日蓮に随順し又難に値い給う事・心中思い遣られて痛しく候ぞ

ここからは大聖人の御心境を述べられて、最蓮房を激励されているところです。

大聖人のお心は、ともかく一切衆生に「仏に成る血脈を継がしめんとする」大慈悲以外のなにものでもなかった。そのために誤れる他宗教を厳しく破折され、当時の精神、思想界の指導者と目されていた極楽寺良観へも舌鋒鋭く迫られた。これらはすべて民衆の幸福のために、自身をも顧みず正義を貫いたお心のあらわれです。

しかるに、「還って日蓮を種種の難に合せ結句此の島まで流罪す」とありますが、邪悪の僧たちの奸智と策動にのって、時の幕府が大聖人を迫害し、ついには佐渡流罪にまでいたらしめた。「此の島」とは、佐渡のことです。

佐渡流罪ということは「此の国へ流されたる人の始終いけらるる事なし、設ひいけらるるとも・かへる事なし」（御書全集九一七㌻）とあるように、たいへんな境遇におかれたということなのです。手入れのまったくされていない、荒れ放題の塚原三昧堂で起居し、ところどころ破れた板ぶきの屋根の下で極寒をしのぐ。凡夫であれば、地獄のどん底としか表現しようのない日々でありました。

こうして一国がこぞって大聖人に迫害を加え、憎悪の炎を燃え上がらせているなかで、「而るに貴辺・日蓮に随順し又難に値い給う事」うんぬんとあるように、最蓮房は大聖人に「随順」された。ま

た、それゆえに難も受けた。どのような難であったか詳しくは不明ですが、その心はけなげである。個人的に難を受けたのではなく、大聖人門下全体が弾圧という大難を受けている渦中だったのです。そのときに、少しもひるまず「随順」していくことは、なみたいていのことではできないし、逆に根底からその人の信心が試されているともいえるでしょう。

この「随順」について「御義口伝」には「随順是師学の事」に「信伏随従」とあります。また同じく「御義口伝」に「信伏随従とは身を此の経に移すなり」（御書全集七六五㌻）とあります。随順または随従とは信受であり、身も心も、つまり色心ともに従うことであります。

大聖人がかつてなかった最大の難を受けたときに、ともに難を受けた最蓮房に対して、大聖人はこのように、あたたかく励まされているのです。

日蓮大聖人の受けられた難は、たんなる非難中傷ではない。僭聖増上慢による難であり、宗教界の権威が策謀し、権力者を動かし、社会的力をもって制裁を加えたものであります。日本国中が蜂の巣をつついたように騒然として大聖人を憎んでいた。そうした大難のときに大聖人に随順しきり、自身が受けた難にも少しも揺るがなかったがゆえに、大聖人は最蓮房を御信頼になっておられるのであります。

「又難に値い給う事・心中思い遣られて痛しく候ぞ」との一節に、日蓮大聖人の、弟子に対する厚い思いやりがしのばれます。どれほど恐ろしくも思い、心の葛藤もあり、無念に思ったであろうかと、

いたわっておられるのであります。大難大苦を受けられている御自分のことよりも、まず弟子を思われるこの深い心こそ、御本仏のお心であると拝するものであります。

つねに正道歩む〝真金の人〟たれ

> 金は大火にも焼けず大水にも漂わず朽ちず・鉄は水火共に堪えず・賢人は金の如く愚人は鉄の如し・貫辺豈真金に非ずや・法華経の金を持つ故か、経に云く「衆山の中に須弥山為第一・此の法華経も亦復是くの如し」又云く「火も焼くこと能わず水も漂わすこと能わず」云云

金は火で焼かれても酸化しない。水にも、重いから流されないし、また朽ちない。それに対して鉄は、火に焼かれても、水の中に沈められても、錆びて、ついにはボロボロに崩れてしまう。この例にあてはめてみれば、賢人とは金のように、どのような大難にあっても、自身の信心において微動だにすることのない人である。愚人とは鉄のように脆くはかない人をいう、とのおおせなのであります。

ここでは、火とか水とかは難をあらわしていますが、もう一歩広げて日常の生活のなかで考えてみますと、「八風抄」につぎのように述べられています。

「賢人は八風と申して八のかぜにをかされぬを賢人と申すなり、利・衰・毀・誉・称・譏・苦・楽なり、をを心は利あるに・よろこばず・をとろうるになげかず等の事なり」（御書全集一一五一ページ）と。

このなかの利・誉・称・毀・譏・苦といった迫害の苦難が、ここでいわれる火、水の具体的内容ということができるのであります。これら、諸行無常の世界の毀誉褒貶に紛動されることなく、ひと筋の道をまっすぐに進んでいく人生は、あたかも金のごとく眩しい光を放っていくものであります。

最蓮房は、仏法ゆえの難という大火、大水を身に受けた。しかし、それに屈することなく信心を貫きとおしているがゆえに「貴辺豈真金に非ずや」と御本仏よりほめたたえられたのであります。

戸田先生の青年訓に「愚人にほむらるるは智者の恥辱なり。大聖にほむらるるは一生の名誉なり」との一節がありますが、大聖人から称賛される生涯を、自分らしく着実に送っていきたいものです。

「法華経の金を持つ故か」とは、真金の道を歩めるのも、ひとえに法華経という最高の教えをたもつがゆえであるとのおおせです。「持たるる法だに第一ならば持つ人随って第一なるべし」（御書全集四六五ページ）との御文もありますが、内に懐いた思想の高低浅深がその人生の内容を決定づけるとするのが仏法の原理であります。

私どもは、すでに末法の御本仏日蓮大聖人が「智者に我義やぶられずば用いじとなり」（御書全集二三二ページ）と宣言された閻浮提第一の御本尊を根本に奉持しております。あとは、この御本尊を生涯持

ちつづけていくことが肝要であり、そこに黄金の人生道を成就できることは絶対にまちがいないのであります。

「経に云く」、「又云く」とは、いずれも薬王品の文です。「衆山の中に須弥山為第一・此の法華経も亦復是くの如し」の文は法をたたえたもので「火も焼くこと能わず水も漂わすこと能わず」の文は受持の人の福徳を述べたものです。

火とは煩悩の火であり、水とは生死の水であるとされます。御本尊を持った一人ひとりの生命が、いかなる水火にも崩されない絶対的幸福を獲得しゆくことは、この経文の原理からも明らかであります。

生涯、広宣流布にわが人生を

過去の宿縁追い来って今度日蓮が弟子と成り給うか・釈迦多宝こそ御存知候らめ、「在在諸仏土常与師倶生」よも虚事候はじ

さきにも述べたように、大聖人の御一生のなかにおいてももっとも厳しい大法難のなかで、最蓮房は弟子となった。今世だけの現象的世界を中心とした考え方からすれば、あまりに不思議な存在で

す。ゆえに過去の宿縁によって、いまこのように弟子となったのであろうとおおせです。

「釈迦多宝こそ御存知候らめ」とは、大聖人は、自分は凡夫であるからわからないが、仏である釈迦多宝はごぞんじであろうという意味です。その元意は、三世にわたる生命の深理、仏法の道理からすれば、現在、大聖人の弟子として難をともにすることは、かならず過去世の深い契りによるものである、との御説法なのであります。

化城喩品の「在在諸仏土常与師倶生」の文は有名です。大通覆講で十六人の王子が、それぞれに六百万億恒河沙等の衆生に法を説き、師弟の契りを結んでいった。その人々は、その後、諸の仏土につねに師とともに生じて教えをうけ、ともに仏法を実践していったというのです。そして、いまこの娑婆世界にあっては、第十六番目の王子であった釈尊が出現し得道したがゆえに、その弟子たちも倶に生じて、聞法し、得脱していくのであると、化城喩品には説かれています。

つまり、師と弟子とは、かならずともに仏法を行じていくものであるというのであります。この師とは、末法においては御本仏日蓮大聖人であられることはいうまでもありません。

それでは、大聖人滅後、この経文をいかに読むべきでしょうか。大聖人は、そのためにこそ、戒壇の大御本尊を遺されたのであります。また、日興上人にいっさいを御付嘱あそばされたのであります。ゆえに私たちが、戒壇の大御本尊を根本とし、日夜、わが家の御本尊を拝し奉ることは、さながら御在世のごとし、であります。まさしく「在在諸仏土常与師倶生」であります。

そして私たちは、広布の庭に戦っている宿縁深厚の仏法兄弟であります。その絆をより強くしてい

くものは、御本尊への同じ祈りであり、民衆救済、広宣流布への同じ悩みであり、実践であります。

皆さんは、順風満帆のときも、逆境のときも、この広布への異体同心の和合のなかで生ききり、つぎの生を再び大御本尊の慈光をうけながら、そこでまた衆生所遊楽の人生を満喫しきっていこうではありませんか。

この「在在諸仏土常与師倶生」の文は、信心の眼で拝していくならば、甚深の意義を含んでいると思う。この文を、どれだけわが身の実践のうえに顕現するかで、日蓮大聖人の本眷属であるかいなかが決定されるといってもよい。

世の中には、さまざまな縁があります。親子、兄弟といった血縁もあれば、知人、友人、上司と部下、教師と生徒という、社会的な縁もある。それらもひじょうに重要な縁であり、それが円滑にいくかどうか、建設的意欲にあふれて交流していくかいなかで、家庭、社会の昇華の成否もあります。

しかし、師匠と弟子、すなわち師弟の関係、宿縁はもっとも深く、重にして大である。人間としていかに完成していくか、どう人生にかかわっていくか、人類史に貢献していくかを教え、研磨しあう師弟相対の関係こそ、今世にとどまらず、三世永劫に、また山海空市いずれにあっても絶えることのない生命の絆であるからであります。

利害によって結ばれた縁は利害によって離れていく。外から与えられた縁は、条件の変化によって、また時間、空間の推移によって変貌していくのであります。しかし、生命の心奥からの共鳴である師弟不二の協奏曲は、三世にわたり十方に通ずる妙音となるにちがいない。

私たちは、御本仏日蓮大聖人の末弟子であります。そしていま、純信の和合僧団が築き上げられている。この姿こそ人類史上、いまだかつてない最高に麗しい人間関係の精華であると、誇りに満ちて確信していただきたいのであります。

この「在在諸仏土常与師倶生」の文に接するたびに、私には、昭和二十一年十一月十七日における牧口先生の三回忌法要での戸田先生の、烈々たる気迫で語りかけられた言葉が胸につきささってくるのであります。

「あなたの慈悲の広大無辺は、私を牢獄まで連れて行ってくださいました。そのおかげで『在在諸仏土・常与師倶生』と、妙法蓮華経の一句を、身をもって読み、その功徳で、地涌の菩薩の本事を知り、法華経の意味を、かすかながら身読することができました。なんたる幸せでございましょうか」

戸田先生は、御本尊を持っていけない牢獄のなかでさえ、御本尊を思い浮かべ、唱題に唱題を重ね「在在諸仏土常与師倶生」の御文のままに、御本尊とともにあるご自身を発見され、そこから、この御本尊を生涯流布していくとの、広宣流布への深い使命感に立たれたのでありました。

この「あなたの慈悲の広大無辺」といい、「なんたる幸せでございましょうか」との叫びといい、ただただ、御本尊への純一な信のあらわれでなくしてなんでありましょうか。ゆえに、この戸田先生の激闘を思うにつけ、いずこであれ、いかなる境遇であれ、信心のなかに「在在諸仏土常与師倶生」を実感できることを知るのであります。

「在在諸仏土」とは、一往は人間の住む世界でありますこ。いっさいの生命が一念三千の当体であるこ

とは当然でありますが、自身の変革をし、仏道へとみずから向かうことができるのは、聖道正器たる人間生命にかぎるからであります。

譬喩品によれば、法華経誹謗の人は、あるときは野良犬として痩せ衰え人々から卑しまれ、あるときはロバとして杖で打たれながら重い物を背負いつづける一生である。あるときは蛇身となって腹行し、人々から忌みきらわれるのであります。それに比べれば、私たちは永遠に、生命の大空に妙なる音楽が流れ、胸中の花園に遊楽するがごとき生を受けるのであり、人間としてもっとも尊い一生を送り、終わることは、今生最高の思い出であります。それだけでも感謝の念をもたなければならない。そのゆえにこそ、その一生になにをなしうるかを考えるべきであると思うのであります。

しかし「仏土に生まれる」とは、仏国土があらかじめ存在していて、そこに私たちが生まれるというのではありません。依正不二の原理からすれば、居住する当体に即して国土がある。ゆえに御本尊とともに仏道を歩むところ、いっさいの国土が常寂光土となるとの意であります。

つぎに「在在諸仏土」の文を、ヨコにみていくならば、十方世界のあらゆるところに仏土があるということをも示しております。よく戸田先生は壮大な宇宙観を語られながら「この地球上で折伏し広宣流布したならば、また他の星へ行って働くのだ」と懇談的にいっておられた。仏法は三世十方に仏土ありと説いております。たんに地球上だけというような狭い教えではない。

また、現代の天文学も、この仏法の宇宙観を支持しているかのようであります。いま星雲と星雲の間に漂う微細な宇宙塵が、寄り集まって、生命体のもととなる物質を作りだしている可能性があると

もいわれております。人間のような高等生物が生息している可能性も、無量の星のなかには数多くあると考えてよさそうであります。それを「在在諸仏土」と表現されたとも考えられます。

私たちは、タテに久遠の過去から永遠の未来に、ヨコには全宇宙に広がる仏国土に自在に遊戯しつつ、人間共和の理想郷建設に励む生死であると確信して進みたいのであります。

求道実践で境涯革命

殊に生死一大事の血脈相承の御尋ね先代未聞の事なり貴貴、此の文に委悉なり能く能く心得させ給へ、只南無妙法蓮華経釈迦多宝上行菩薩血脈相承と修行し給へ

最蓮房が「生死一大事血脈」について質問したことに対し、このような大事な問題についての質問は、いまだかつてないことであり、まことにすばらしいことである、と誉められているのです。そして、それについては、この手紙に詳しく書きましたから、これをよくよく心に刻んでいきなさい、と。

その結論は「只南無妙法蓮華経釈迦多宝上行菩薩血脈相承」と修行することであるとのおおせです。すなわち、南無妙法蓮華経こそが釈迦、多宝の二仏より上行菩薩に付嘱された血脈相承であると

信じ、修行、実践しなさいということであります。

求道ということがいかに大切かということを大聖人は開かせていく大聖人の深い御指南であろうと拝するのでございます。

求道の精神を教えたものとして、雪山童子の修行は有名でありますが、それに関して私がとくに強調したいのは、雪山童子が悟りを得るにいたった過程であります。

ごぞんじのとおり、雪山童子は、法を求めて修行して聞く。そのなかに悟りの法があると感じた雪山童子は、す。これはじつは帝釈天王が化作した姿でありますが、る。当時、略奪等が頻繁にあったという歴史的背景もあな姿、地位によるのではなく、いかなる「法」をもつかの教えも込められているでありましょう。

しかし、私はさらに、もう一歩深めてその意味を探っておきたい。

鬼神は雪山童子に、人間の温かな肉を求める。雪山童えを受けることができたのであります。仏法を求めるに当然でありますが、それにしてもなぜ人間の肉が必要なのか、また、なぜ帝釈は鬼神となって肉を求めたのでありましょうか。そこで雪山童子が鬼神から教えられるとともに、求道即実践へと境涯をたいのであります。

それは「生滅滅已寂滅為楽」、すなわち「生滅滅し已って寂滅を楽と為す」という法門であります。現実の世界における生滅というものを滅し已って、生も滅もない寂滅涅槃の境地を楽とするという意味であります。これは一往、小乗教の思想であり、法華経の究極、なかんずく日蓮大聖人の南無妙法蓮華経には遠くおよばない法門でありますが、現実の人生に起こる生や滅に目を奪われ執着するのではなく、その奥にある寂滅の世界を求めなくてはならないことを教えたものとして、不変の真理といえます。

したがって、この法門を真実に聞き、悟るためには、雪山童子がまず、わが身に執着する生命の傾向を脱皮する必要があった。そのために、鬼神が必要だったのであります。考えてみれば、鬼神が現れ、雪山童子に肉を求めたことが、答えでもあったのでありましょう。雪山童子がそれにこたえて、身を捨てる決意をしたとき、後の半偈を受ける資格がそなわった、というより、もはや雪山童子は悟ったのであります。

仏の説法を聞く人のなかには、「諸行無常是生滅法」や「生滅滅已寂滅為楽」という教えを聞いてもわからない人がいる。そういう人にとって、雪山童子の実践の姿自体、法門の内容を教えたものだったのであります。経典に譬えが多く説かれるのも、深遠な哲理を平明に教えようとするゆえでありましょう。

これをさらにいえば、鬼神が肉を求めてから法を説こうとしたことは、仏法の悟達とは実践のなかにあることを示しております。雪山童子の悟達の高低浅深は別として、人間の行為のなかにしか仏法

はないのであります。もし雪山童子が、身を捨てて法を求めるという実践がなければ、いかに高邁な法に接しても、けっして悟ることはできなかったにちがいない。実践なくして仏法の体得はない。仏法理論は、その悟達のうえに、後に体系づけられていったものであります。

たしかに、仏法には深い生命論の展開があり、それをおろそかにしてはならない。しかし、仏法教義は本来、仏の悟りを展開したものであり、悟りは実践によって体得する以外にない。仏法はなにもむずかしいことをいっているのではない。いかにすれば人間にとってもっともかなった道であるのか、わが生命をいかに変革していくかを、力強く説いたものにほかならない。それが人間の真実の生き方にかなっているゆえに、深い哲学的な裏づけが発見されるのであります。

ゆえに生死一大事血脈ということも、わが生命のなかに発見するしかないのであります。わが生命の日々刻々の回転とともに、この一書の脈動が伝わってくることを訴えたいのであります。

つぎに「南無妙法蓮華経釈迦多宝」で、釈迦、多宝の二仏並座のあらわす法華経の体が南無妙法蓮華経であるということです。これは、天台学僧として、最蓮房がともすれば文上の法華経に引きずられる面をもっているのに対して、その法華経の究極が南無妙法蓮華経であると、かさねていわれているのであります。

そしてさらに「上行菩薩血脈相承」で、この法華経の会座で付嘱を受けた上行菩薩は、末法弘通の大導師でありますから、これこそが末法今時の唯一の正法であることを示された言葉と拝せます。

「五大」は妙法五字の力用

> 火は焼照を以て行と為し・水は垢穢を浄るを以て行と為し・風は塵埃を払ふを以て行と為し・
> 又人畜草木の為に魂となるを以て行と為し・大地は草木を生ずるを以て行と為し・天は潤すを
> 以て行と為す・妙法蓮華経の五字も又是くの如し・本化地涌の利益是なり

地水火風空の五大の働きを示し、それが妙法蓮華経のあらわす用であり、本化地涌の利益にほかならないことを述べられたところであります。

地水火風空は、宇宙万物を構成する要素であり、これを五大といいますが、五大はそのまま妙法蓮華経であります。

「三世諸仏総勘文教相廃立」に「釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき」（御書全集五六八㌻）と述べられている「我が身は地水火風空なり」ということも、「我が身は妙法蓮華経なり」との意にほかなりません。

ともあれ、万物究極の法たる妙法蓮華経は、この現象の世界を離れたどこかにあるのでなく、現実の物質世界を形成している地水火風空それ自体であると喝破したところに、仏法の偉大な卓見があ

の力、地涌の利益としてみた場合、どのような意味になるかということです。

「火は焼照を以て行と為し」とは、物を焼くのと、まわりを照らすのと、この二つの働きが火にはあるということですが、その仏法哲理からの意義については、「御義口伝」――序品の「阿若憍陳如の事」（御書全集七一〇ページ）に詳説されております。

そこで、火とは法性の智火であり、照らすほうは「随縁真如の智」、焼くほうは「不変真如の理」で、この照焼の二徳を具えているのが南無妙法蓮華経である、と。

そして、私どもが妙法を唱えるならば「生死の闇を照し晴して涅槃の智火明了なり」、すなわち〝生死の闇〟を照らすことになる。また「煩悩の薪を焼いて菩提の慧火現前するなり」、すなわち〝煩悩の薪〟を焼くのである、とおおせであります。

この〝火〟は、上へ行くがゆえに、四菩薩のなかでは、上行菩薩をあらわしています。

つぎに「水は垢穢を浄るを以て行と為し」とは、宿業の垢、五濁の穢れを浄めるということであります。すなわち妙法という生命本源の力のもっている、生命浄化の働きを象徴しているわけであります。これが、四菩薩のなかでは浄行菩薩にあたることはいうまでもありません。

御本尊を受持したとき、過去の悪業によって未来、長いあいだにわたって受けていくべき苦しみが、今世に集約されて軽いかたちで出てくる――いわゆる転重軽受という原理は、ここからあらわれてくるのであります。

あたかも、古いホースの中につまった汚れが、水を流すといっきょに出てくるようなもので、当座

の力、地涌の利益としてみた場合、どのような意味になるかということです。

「火は焼照を以て行と為し」とは、物を焼くのと、まわりを照らすのと、この二つの働きが火にはあるということですが、その仏法哲理からの意義については、「御義口伝」――序品の「阿若憍陳如の事」（御書全集七一〇ページ）に詳説されております。

そこで、火とは法性の智火であり、照らすほうは「随縁真如の智」、焼くほうは「不変真如の理」で、この照焼の二徳を具えているのが南無妙法蓮華経である、と。

そして、私どもが妙法を唱えるならば「生死の闇を照し晴して涅槃の智火明了なり」、すなわち〝生死の闇〟を照らすことになる。また「煩悩の薪を焼いて菩提の慧火現前するなり」、すなわち〝煩悩の薪〟を焼くのである、とおおせであります。

この〝火〟は、上へ行くがゆえに、四菩薩のなかでは、上行菩薩をあらわしています。

つぎに「水は垢穢を浄るを以て行と為し」とは、宿業の垢、五濁の穢れを浄めるということであります。すなわち妙法という生命本源の力のもっている、生命浄化の働きを象徴しているわけであります。これが、四菩薩のなかでは浄行菩薩にあたることはいうまでもありません。

御本尊を受持したとき、過去の悪業によって未来、長いあいだにわたって受けていくべき苦しみが、今世に集約されて軽いかたちで出てくる――いわゆる転重軽受という原理は、ここからあらわれてくるのであります。

あたかも、古いホースの中につまった汚れが、水を流すといっきょに出てくるようなもので、当座

は苦しい思いをするかもしれませんが、それを出しきってしまえば、あとはゆうゆうと福徳を積み重ねゆく人生となるのです。

「風は塵埃を払ふを以て行と為し」とは、この人生において心の途上に起こってくる障魔の克服をたとえております。風が塵や埃を吹きとばしてしまうように、力強い、朗々たる題目によって、いっさいの障魔や人生の苦難は打ち砕き、吹きとばしていくことができるのであります。この〝風〟にたとえられているのが、四菩薩のうち、無辺行菩薩です。

また、この〝風〟が「人畜草木の為に魂となる」とおおせられているのは、古来、風は宇宙自然の生気を吹き込むと考えられたのによるようであります。

つぎに「大地は草木を生ずるを以て行と為し」とはあらゆる生命に、その安定性を与えていく働きをいったものであります。考えてみると、生命の営みほど複雑、微妙なものはない。たとえば、私どもの体温は平均三十六・五度前後ですが、ほんの二、三度上がっただけでも、たいへんな苦痛を味わいます。いったい、どのようにして、ほぼ一定の温度に保たれているのか、そのシステムは不思議としかいいようがない。心の働きも、瞬間ごとに変化しながら、しかも統一性が保たれている。この心身にわたる安定性をもたらしているのが、四菩薩のうちの安立行であります。

「天は潤すを以て行と為す」――この〝天〟とは、地水火風空の〝空〟に相当すると考えられます。それは、四菩薩とは別に、妙法蓮華経それ自体の象徴であります。天空が雨を降らして万物を潤すよ

うに、妙法蓮華経が一切万法を利益し、万法の働きの根源となっているということであります。

この「生死一大事血脈抄」の御文が、「御義口伝」の一節にあります。

「今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱え奉る者は皆地涌の流類なり、又云く火は物を焼くを以て行とし水は物を浄むるを以て行とし風は塵垢を払うを以て行とし大地は草木を長ずるを以て行とするなり四菩薩の利益是なり、四菩薩の行は不同なりと雖も、倶に妙法蓮華経の修行なり、此の四菩薩は下方に住する故に釈に『法性之淵底玄宗之極地』と云えり、下方を以て住処とす下方とは真理なり」（御書全集七五一ページ）

火が物を焼くのも、水が物を浄めるのも、風が塵垢を払うのも、大地が草木を育てるのも――それ自体、本然の作用であります。これは、大自然の働きに地涌の菩薩を配した場合であります。

自発の意志が地涌の菩薩の本分

さらに、人間の営為として地涌の菩薩を論じていくならば、つぎのようにいえると思います。

みずからの生命を燃焼しながら人々の幸福のために戦っていくのも、自他ともに生命を浄化させていく生命変革の活動も、いかなる醜い世間の塵埃も風の吹くがごとく払いさっていく振る舞いも、人人が安心して依処としていく信頼の柱となっていく姿も、地涌の菩薩の本然の発露であるということであります。

だれからいわれるというものでもない。だれから押しつけられたというのでもない。自発の意志で、人のため、世のため、社会のために、妙法という最高の哲理をもって活動していくことは、地涌の菩薩の本分なのであります。

内より、地涌の菩薩という生命は発動してきます。それは、どこからか。わが胸中のいずれに、地涌の菩薩の本拠地はあるのでしょうか。

日蓮大聖人は、それを、天台の釈を引用して「法性之淵底玄宗之極地」といわれています。法性の淵底も、玄宗の極地も、生命の奥底、生命の根源の意味であります。すなわち、南無妙法蓮華経という真如の都こそ、地涌の菩薩の住処であります。

南無妙法蓮華経と唱えたとき、南無妙法蓮華経を内より開いていったとき、真如の都を顕現し、内なる生命の力を社会と人生に発揮しながら、地涌の菩薩の使命を全うしていくことができるのであります。これは、しょせん地涌の菩薩は妙法蓮華経の作用であるということです。

してみるならば、自身が南無妙法蓮華経の当体とあらわれたとき、その所作として地涌の菩薩の振る舞いとなるのであります。私たちは、久遠の流れに棹さして生きる地涌の菩薩の眷属の集いであります。

地涌の菩薩ということで思い出されるのは、恩師戸田城聖先生の獄中における二つの体験であります。なかんずくその二回目の使命の自覚であります。

昭和十九年元旦を期して、大石寺の大御本尊を思い浮かべながら唱題の響きのなかに、法華経を読むことを始められました。三月の初め、法華経の開経である無量義経徳行品第一のなかにある〝十二行の偈の三十四の否定〟から「仏とは生命の働きなんだ！」と、込み上げてくる感動を抑えることができなかったとのことであります。これが第一回目の体験であります。

それから、牢獄の春が過ぎ、夏も去り、秋もゆかんとしていました。恩師は、戦時中の凍るような独房のなかで、骨と皮だけの衰弱した体ながらも、激烈な思索を続けられていた。十一月中旬のある日、恩師は法華経の従地涌出品第十五の偈を想い出しておられた。

――是の諸の菩薩、釈迦牟尼仏の所説の音声を聞いて、下より発来せり。一一の菩薩、皆是れ、大衆の唱導の首なり。各六万恒河沙等の眷属を将いたり、況や五万、四万、三万、二万、一万恒河沙等の眷属を将いたる者をや。況や……

恩師はいつのまにか、虚空にある自身を発見されていた。数かぎりない六万恒河沙の大衆のなかで荘厳無比な大御本尊に合掌している自分、その自分がいる厳粛な久遠の儀式を鮮明に体験されていたのでした。狭い粗末な獄舎のなかで、朝日を浴びて、喜悦の感動に茫然となりながら、熱い涙をぬぐおうともされませんでした。「確かに自分は地涌の菩薩であったのだ！」という、深い激しい生命の大歓喜は、筆舌には尽くせないものがあったことでしょう。

戸田先生は、地涌の菩薩としての使命を自覚され「これでわが一生は決まった。きょうの日を忘れまい。この尊い大法を流布して、わが生涯を終わるのだ！」と一大決心をされたのであります。

ちょうど、この同じころ、別棟の独房におられた戸田先生の人生の師・牧口常三郎先生は、七十三歳という老齢の身でありながら軍部権力の弾圧に一歩も退くことなく戦っておられましたが、ついにその尊い殉教の生涯を閉じられたのでありました。昭和十九年十一月十八日のことです。まさに牧口先生の死と戸田先生の地涌の菩薩としての自覚は、時を同じくしていたのであります。

この戸田先生の体験、そこから得られた御本尊への確信、広布への大情熱が、戦後の創価学会においても、広宣流布への使命感が展の基点となったことを銘記すべきであります。戦前の創価学会の嵐が吹くや、もろくも崩れ去っていった事実なかったわけではありません。しかし、ひとたび弾圧は、その使命感の弱さを物語るものでありました。戸田先生の叫びは、獄中という最悪の事態のなかで、御本尊を思い浮かべての唱題による法悦と感謝報恩の念で、地涌の菩薩の眷属としての自覚から広宣流布を叫ばれたところに、深い意義があるのであります。

この一念は、いかなる波浪のなかにも厳として揺るがぬ広宣流布への強い自覚であります。この一点において、創価学会の折伏弘教の団体としての大発展の道は開かれたのであります。

恩師は「創価学会の歴史と確信」において、つぎのようにいわれています。

「ちょうど、牧口先生のなくなったころ、私は二百万べんの題目も近くなって、不可思議の境涯を、ご本仏の慈悲によって体得したのであった。その後、取り調べと唱題と、読めなかった法華経が読めるようになった法悦とで毎日暮らしたのであった」

まさしく、まんまんたるエネルギーを秘めながら、大地より湧きいずるであろう多くの地涌の

集いを、因果倶時として決定づけた一瞬であったといってよいのであります。

四十五歳の戸田先生は、このとき「四十ニシテ惑ハズ、五十ニシテ天命ヲ知ル」との孔子の言に比して「彼に遅るること五年にして惑わず、彼に先だつこと五年にして天命を知りたり」と叫ばれました。

そして、翌年七月、出獄され、焼け野原に一人立たれて、学会再建の第一歩を踏みだされたのであります。師は死して獄門を出、弟子はいま、生きて同じ門を出たのであります。生死の二法は一心の妙用であります。戸田先生の胸中には、万感の思いがかけめぐったことでありましょう。ここに、今日の学会の広布弘教の源流があったことを、けっして忘れないでいただきたいのであります。

大聖人こそ末法万年の闇照らす御本仏

南無妙法蓮華経の法門を弘めるため、上行菩薩が末法の今の時に出現されるであろうということは、法華経の文には説かれているが、どうなのであろうか。上行菩薩が出現されているにせよ、出現

上行菩薩・末法今の時此の法門を弘めんが為に御出現之れ有るべき由・経文には見え候へども
如何(いか)が候やらん、上行菩薩出現すとやせん・出現せずとやせん、日蓮先ず粗(ほぼ)弘め候なり

されていないにせよ、その上行菩薩が弘められる法を、日蓮大聖人はまず、ほぼ弘めているのである、ということです。

いうまでもなく、日蓮大聖人の御自覚は、外用の辺において――すなわち行動、実践においては、御自身が上行菩薩の再誕にほかならないということにあります。内証すなわち奥底の本地は、久遠元初の自受用報身如来であられます。しかし、一般的に示された御書においては、この外用・上行再誕ということすらも、ひじょうに遠回しに表現されている。

「先ず」「先立ちて」等といわれ、御自分がその当人であるとは、なかなかおっしゃらない。これは、上行といえば、法華経によると、本門の釈尊でさえも色あせてみえるほどの堂々たる大菩薩群の本化地涌のなかにあって、もっともすぐれた上首である。それに対し、大聖人の現実のお姿は凡夫僧であられる。このことから、もし大聖人が自分こそ上行であるといっても、人々はよけいに疑いを起こし、謗法の罪を深くするのを心配されて、直接的表現を避けられたと考えられます。

だが、もし、仏法の眼からみるならば「日蓮先ず粗弘め候なり」とのお言葉に、明らかに、大聖人御自身が上行であるとの元意がうかがわれるのであります。

なぜかならば、法華経がなんのために説かれたか、という一つの目的は、本化地涌を召しいだして、滅後末法の弘通を付嘱することにあったからであります。ゆえに、神力、嘱累の付嘱が終わるや、十方の諸仏はみな本土に還り、多宝の塔も元へ戻って、荘厳な虚空会の儀式は、霊山会に復帰するのであります。

これだけたいへんな力を入れて本化地涌、そのなかでも別して上首上行への付嘱がなされたのに、いま末法にいたって、上行菩薩の弘めるべき法を日蓮大聖人が弘められている。もし、大聖人が上行ではない、まったく別人だとしたら、あの法華経の儀式はなんのためだったのかということになってしまうわけであります。多宝如来の出現も、十方諸仏の来集も、意味を失うことになってしまうのであります。そんなことがあるわけがない。

この明白な道理のうえからも、日蓮大聖人御自身が、一往外用の辺において、上行菩薩の再誕であり、しかも内証においては末法万年の闇を照らす新たなる大仏法建立の仏、すなわち久遠元初の自受用報身如来であられることが知れるのであります。

信心の血脈なくば法華経も無益

相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華経・臨終正念と祈念し給へ、生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ、煩悩即菩提・生死即涅槃とは是なり、信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり、委細の旨又又申す可く候、恐恐謹言。

「相構え相構えて」とかさねていわれているところに、これこそがもっとも肝要な結論であるとのお

心がうかがわれます。まさしく最蓮房にとって、もうかのもっとも重要な時を迎えていました。なんとせたいとの強い御一念が拝せられます。生死一大事妙法蓮華経と唱えること以外にない、ということであります。

「強盛」といい「大信力」といい、大聖人が全生命れようとしているお気持ちが伝わってきます。

「臨終正念」とは、死に臨んで、この妙法に対するを無上の喜びとし、これで思い残すことはないという満足しきった心境で、一生を終わる姿でありま す。

したがって「南無妙法蓮華経・臨終正念と祈念しわが正念であるように、いまからしっかり祈念してが臨終であるとの自覚で真剣に祈っていきなさい、ということでもあります。

臨終正念の祈念に立ったとき、己心の奥底の妙法こに、生死の一大事が脈々と流れるのであります。現する道はないということであります。そのとき、れ、したがって煩悩即菩提、生死即涅槃となるのです。

それゆえに、本抄の総結論として「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」と厳しくおお

せられているのであります。結局、信心に始まり、信心に帰結する。

「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」――法華経という法のみでは、真実の成仏の道には入れない。法華経を身をもって読み、人法一箇の当体とあらわれてくださった日蓮大聖人以来の正統の信心――これが「信心の血脈」なのであります。この人法につながった信心でなくては、いかに法華経をたもっているといっても無益なのです。

この文は、信心のなかにこそ御本尊の仏力、法力も顕れるという御指南でもあります。

有名な「日女御前御返事」の一節に「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり……此の御本尊も只信心の二字にをさまれり」（御書全集一二四四㌻）とある。

御本尊も信心の二字におさまっているとの大聖人の明言であり、信ずるなかにこそ御本尊の力は顕現されるということなのです。

日寛上人は「観心本尊抄文段」において「我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華経と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり」といわれ、「故に唯仏力・法力を仰ぎ、応に信力・行力を励むべし。一生空しく過して万劫悔ゆることなかれ」と結論されているのであります。

このように「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」とは、じつに厳粛な御指南なのであります。信力、行力がなければ、仏力、法力は顕れませんし、もったいなくもわが身が即一念三千の当体とあらわれるはずもないのであります。「血脈」とは「信心」である――ということに、いっさ

いはつきるのであります。

さらに、この信心の血脈ということに関して、第九世日有上人の「化儀抄」には、つぎのように述べられています。

「信と云ひ血脈と云ひ法水と云ふ事は同じ事なり……高祖已来の信心を違へざる時は我れ等が色心妙法蓮華経の色心なり、此の信心が違ふ時は我れ等が色心凡夫なり、凡夫なるが故に即身成仏の血脈なるべからず」と。

この「化儀抄」を解説した堀日亨上人の「有師化儀抄註解」には、つぎのような説明を加えられております。

「信心と血脈と法水とは要するに同じ事になるなり、信心は信行者にあり・此信心に依りて御本仏より法水を受く、其法水の本仏より信者に通ふ有様は・人体に血脈の循環する如きものなるに依りて・信心に依りて法水を伝通する所を血脈相承と云ふが故に・信心は永劫にも動揺すべきものにあらず・攪乱すべきものにあらず、若し信が動けば其法水は絶えて来ることなし、爰に強いて絶えずと云はば其は濁りたる乱れたる血脈法水なれば・猶仏法断絶なり、信心の動かざる所には・幾世を経とも正しき血脈系統を有し仏法の血液活潑に運行す」と。

また「仏法の大師匠たる高祖日蓮大聖開山日興上人已来の信心を少しも踏み違へぬ時、末徒たる我等の俗悪不浄の心も・真善清浄の妙法蓮華経の色心となるなり此色心の転換も只偏に淳信篤行の要訣にあり、若し此の要訣を遵奉せずして・不善不浄の邪信迷信となりて仏意に違ふ時は・法水の通路

徒らに壅塞せられて・我等元の儘の粗凡夫の色心なれば・即身成仏の血脈を承くべき資格消滅せり、悲しむべき事どもなり」とも峻厳に記録しておられます。

すなわち「信心の血脈」とは、日蓮大聖人、日興上人以来の信心を、すこしも踏みたがえぬところに受け継がれるものであることが明確であります。ここに、遺使還告唯授一人の代々の御法主上人の尊きお立場があられる。

そして「仏法の血液活潑に運行す」とあるごとく、私たちが、日蓮大聖人御遺命の広宣流布に向かって、正しき信心を貫くとき、もったいなくも、大聖人の御生命が流れ通うのであります。

しかして、その信心とは日蓮大聖人、および日興上人に学ぶのであり、大聖人の御書に学び、日興上人の遺誡置文を肝に銘じつつ、御法主上人の御指南をうけて、広宣流布のため不惜身命の実践を貫く信心のなかに、御本仏の血脈が「活潑に運行」していることを断言するものであります。

文永九年壬申二月十一日

最蓮房上人御返事

桑門日蓮花押

「生死一大事血脈抄」を著された文永九年二月十一日という日について申し上げておきたい。この日

は、奇しくも、日蓮大聖人が「立正安国論」において、また前年の九月十二日の竜口法難のさいにも、幕府に対して厳しく予言し警告されていた「自界叛逆難」、すなわち内乱が勃発した日でありま す。

「今年二月十一日十七日又合戦あり……薬師経に云く『自界叛逆難』と是なり、仁王経に云く『聖人去る時七難必ず起らん』云云、……日蓮は此関東の御一門の棟梁なり・日月なり・亀鏡なり・眼目なり・日蓮捨て去る時・七難必ず起るべしと去年九月十二日御勘気を蒙りし時大音声を放てよばはりし事これなるべし纔かに六十日乃至百五十日に此事起るか」（御書全集九五七ページ）と、事件直後の三月二十日に「佐渡御書」のなかでおおせのように、大聖人の予言が的中したのであります。

当時、京都の六波羅南探題だった時宗の庶兄・時輔が、弟の時宗を倒して執権の地位を奪おうとの陰謀をたくらんだことが発覚し、その一味とされた教時、盛直らを、時宗が先手をうって討滅したものであります。同族あい食む死闘が展開されたが、やがて時輔の一族が全滅して、戦いは終わった。これが「二月騒動」です。

大聖人は、この内乱の勃発が間近いことを、すでに一か月ほど前の一月十六日に、塚原問答の終了後、本間六郎左衛門尉に対して指摘し、警告されているのであります。

したがって、大聖人は本抄を執筆されているとき、騒然たる内乱に日本中が動揺していることを予感しておられたにちがいない。そのなかで悠然と永劫の未来を眺望しつつ、令法久住の血脈を残そうとされたのであります。

また「桑門」とは、沙門のことであり、静志、貧道、勤息などとも訳します。善法を修して悪法を破すという意味で、出家して仏道を修行する者をいう。

大聖人は、文永十年四月の「観心本尊抄」では「本朝沙門日蓮撰」とされており、また、同じ文永十年閏五月の「顕仏未来記」でも「桑門日蓮之を記す」としたためられております。「桑門」とは「扶桑沙門」の意味で、すなわち「本朝沙門」と同意で用いられているとも考えることができます。

本尊抄で「本朝沙門」とされたのは、天台沙門に対する言葉であり、じつは大聖人の強い御確信のうえからの表現であります。つまり本朝、すなわち日本国こそ、末法万年の民衆を救済される御本仏出現の地であることを示しており、末法における最高の善法を修し、悪法を破される日蓮大聖人こそ、まさにその御本仏であることを明かされているともいえます。

以上、「生死一大事血脈抄」をとおして、私の感ずるままを述べてまいりました。

最後に、わが同志よ、わが久遠の友よ、広宣流布の道を進んでいく私たちの実践こそ、そのまま総じての生死一大事血脈なりとの、強く深い確信を持続して、新世紀をめざし凛々しくわが道をスクラム組んでいこうと申し上げ、講義を終えさせていただきます。

（昭和五十二年四月「聖教新聞」掲載　ここでは総本山第六十六世日達上人御監修の改訂版を収録いたしました）

池田会長全集十巻　中

「観心本尊抄」講義

信心帰命の原点は〝観心の本尊〟

全国の会員の皆さま、一九七八年の新春、まことにおめでとうございます。「教学の年」第二年の本年冒頭にあたり「観心本尊抄」の一節について講義を発表することにいたしました。まず、当抄に開顕され、末法万年の一切衆生救済のために御建立あそばされた「観心の御本尊」について、愚感の一端を述べさせていただきます。

私は、愚昧の身であり、とうていこの重書を講ずる資格はありませんが、ひたすら血脈付法唯授一人であられる御法主日達上人の御指南を仰ぎながら、愚迷にして凡夫の立場から展開していく所存であります。

それは、三大秘法の南無妙法蓮華経こそ仏法の究極であり、日蓮大聖人は、末法一切衆生の成仏のために「観心の本尊」として これを建立くださり、遺されました。ゆえに、この「観心の本尊」にこ

そ、私どもの仏道修行の極理、信心帰命の原点がある。末法万年にわたって、真実の仏法実践の正しき軌道はこれ以外にありえないことを、この時にあたり、大聖人のおおせを拝しつつ、はっきりと確認しておきたいからであります。

いうまでもなく、本尊とは、根本として尊敬するとは帰命ということであり、帰命する対境を本尊というのであります。

さて、この帰命の対象について、大聖人は「御義口伝」に、つぎのように教示されております。

「御義口伝に云く南無とは梵語なり此には帰命と云う、人法之れ有り人とは釈尊に帰命し奉るなり法とは法華経に帰命し奉るなり」（御書全集七〇八㌻）と。

ここにおおせの「釈尊」とは、文底独一本門の教主としての釈尊であり、久遠元初自受用報身、末法御本仏日蓮大聖人御自身であられます。

また「法華経」とおおせられているのも「今末法に入りぬれば余経も法華経もせん（詮）なし、但南無妙法蓮華経なるべし」（御書全集一五四六㌻）と「上野殿御返事」に示されているごとく、釈尊の二十八品の法華経などでないことは明らかであります。したがって「但南無妙法蓮華経」をさして「法華経」とおおせられたと拝するのであります。

諸御抄を拝するとき、大聖人は、種々の場合に応じて、あるときは「人」の面で表現され、あるときは「法」としてこれを述べておられる。

たとえば「三大秘法抄」で本尊を明かされている御文は「人」の面であります。いわく「寿量品に

建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり」（御書全集一〇二二㌻）と。

「報恩抄」の「日本・乃至一閻浮提・一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし」（御書全集三二八㌻）の御教示も、同じく「人」の本尊をいわれております。

これに対して「本尊問答抄」の場合は、法の本尊を示されている。すなわち「問うて云く末代悪世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや、答えて云く法華経の題目を以て本尊とすべし」（御書全集三六五㌻）とございます。

このように、一方においては「人」としておおせられ、他方、法華経の題目、妙法蓮華経という「法」として示されている元意は、人即法、法即人を明かされるにあり、そして、一幅の曼荼羅の御本尊こそ、この人と法とが体一である人法一箇の御当体なのであります。

さきの「御義口伝」の御教示は、それを前提としての表現であり、また、同じく「御義口伝」には「無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり」（御書全集七五二㌻）と、人法体一の義を示されております。

しかして、この大御本尊こそ、その人法一箇の当体であることを「日女御前御返事」には、つぎのようにおおせられている。

「伝教大師云く『一念三千即自受用身・自受用身とは出尊形の仏』文、此の故に未曾有の大曼荼羅とは名付け奉るなり、仏滅後・二千二百二十余年には此の御本尊いまだ出現し給はず」（御書全集一二四

四六一）とございます。

結論していうならば、日蓮大聖人御自身が、わが身妙法の当体と覚知された法即人の仏であり、無作三身の如来であられる。

ゆえに「御義口伝」に「無作の三身とは末法の法華経の行者なり」（御書全集七五二ページ）と。

大聖人は、この無作三身如来としての御自身の生命を、そのまま一幅の曼荼羅として御本尊に顕された。そこに人法一箇の御本尊たるゆえんがあります。

四条金吾夫妻に与えられた「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし」（御書全集一一二四ページ）と述べられているのは、まさに、このことなのであります。

これらの御教示を信心で受ける私どもは、御本尊即、生身の日蓮大聖人と拝するのみであります。

末法御本仏大聖人は、戒壇の大御本尊として総本山大石寺の正本堂にまします、そして、法灯連綿の御法主上人のお力によって分身散体されて全世界の各寺院、各会館に、おのおのの家庭に厳然とまします。

したがって、七百年前、御在世の時代に生まれあわせえなかったことを嘆く必要もありません。大聖人御誕生、大御本尊御安置の日本に住めないことを恨む必要もないわけであります。御本尊を受持し、勤行唱題を行うところ、いつの時代であれ、いずれの地であれ、朝々仏とともに起き、夕々仏とともに臥すの、常住の寂光土にあることを、深く確信していただきたいのであります。

胸中に赫々たる久遠の本地

大御本尊が人即法の御本尊であられることの背景には、この御本尊を図顕せられた日蓮大聖人が、法即人の仏であられた事実があります。いいかえると、大聖人の生命をそのまま顕された御本尊が、事の一念三千の当体であるということは「一念三千即自受用身」でありますから、大聖人の生命が自受用身でなければなりません。

御本仏のお振る舞い、その甚深の御境地を、私ども凡愚の者が拝察申し上げるのは、あまりにも恐れ多いかぎりでありますが、大聖人の立宗より竜口の法難、佐渡流罪にいたる二十余年の激闘は、この人本尊としての御自身の確証のためであったと思われるのであります。

すなわち、悪世末法に妙法を弘める人が受けると記されている、法師品の況滅度後、宝塔品の六難九易、勧持品の二十行の偈にある三類の強敵等の文を読まれました。弘教者としての、事実の振る舞いのうえでの法華経身読は、法華経が明かしている五百塵点劫の当初の久遠本仏、また、虚空会の儀式が暗示している事の一念三千の大生命も、ほかならぬ大聖人の御生命そのものであるとの内証の境地の御確認でもありました。

「開目抄」にいわく「されば日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は・をそれをも・いだきぬべし」（御書全集二〇二㌻）と。

ここに、二十余年にわたる筆舌に尽くせぬ大難を忍ばれたことは「慈悲のすぐれたる事」と表裏の関係になっていると拝せられる。なぜなら、大聖人の難は、当時の日本国民衆を救済しようとして、折伏の戦いをされたために起こったものであるからであります。

三類の強敵のうちもっとも厳しい、そして見ぬくことのむずかしいとされる僭聖増上慢が起きたのも「立正安国論」による幕府諫暁を皮きりとしてでありました。もし民衆救済の大慈悲の実践がなかったならば、難は起きなかったとさえ考えられます。大聖人みずから「世間の失一分もなし」（御書全集九五八㌻）といいきられているように、これらの難は、世間法、国法の罪によるのではない。慈悲のゆえの難であり、難のいかに大なるかをもって、そこに貫かれた慈悲の広大さを知ることができるのであります。

ゆえに私どももまた、御本仏の大慈悲の一分を受けて、この世に実践していく以上は、難を受けることは当然であります。そして、いかなる難にもひるむことなく、忍びぬいていったとき、仏法の実践の真偽が証明されることを確信していきたいと思うのであります。

ともあれ、大聖人は竜口、佐渡の法難をもって、法華経に記されている外用の辺の予言をすべて身読しおわり、御自身、久遠御本仏としての内証を確証されるや、初めて御本尊を顕されたのであります。

大聖人の御内証においては、久遠の仏としての境地は、すでに赫々としてあった。恩師戸田城聖先生は「清澄寺大衆中」の御文を講義されたさい、大聖人は、虚空蔵菩薩に、日本第一の智者となし給

えと祈願された清澄寺在住のとき、すでに御本仏と覚(さと)られたと拝せるといわれておりました。

事実、もし、末法御本仏としての御境界(きょうがい)を得ておられなかったならば、三十二歳の立宗宣言もなかったはずであります。時すでに釈尊の白法は隠没(おんもつ)した末法であることは明々であり、したがって釈尊の仏法をもって立てられる道理がありません。釈尊の仏法ではない新たなる仏法を立てられたことは、御自身が末法救済の御本仏であるとの御確信があったればこそであります。

しかも、大聖人は二十余年間、釈尊の法華経を身をもって読みきられ、大聖人の出現によって釈尊の法華経は虚妄(こもう)でなくなったといえるまで実践しぬいてまさにこの発迹顕本(はっしゃくけんぽん)の時でありました。

舞いに移られたわけであります。竜口、佐渡の時期は、

己心を観じて妙法と見る

さて、大聖人は、末法万年の衆生の成仏のために、御本尊を顕されました。御在世当時の人々は、法即人の当体であられる大聖人という仏の生命に縁することができる。しかし大聖人も、いつかは入滅なされる。その滅後の衆生のために、御自身の生命を曼荼羅(まんだら)の御本尊として顕し、遺(のこ)されたのであります。

この人即法の当体としての御本尊は、一往は法本尊でありますが、再往は人法一箇(いっか)の御本尊であります。ゆえに「南無妙法蓮華経　日蓮(にちれん)」と中央にしたためられております。南無妙法蓮華経は〝法〟、

日蓮在御判は〝人〟をあらわすのであります。

このように、顕された大聖人のお立場に約せば、御本尊の根本的特質は「人法一箇」ということであられますが、では、御本尊を拝する私どもの立場でいえば、なにがもっとも根幹となる特質でありましょうか。それを日蓮大聖人は御みずから「観心」であると教えてくださっているのであります。法本尊開顕の書を「観心本尊抄」と題されたのは、このゆえであります。

「観心」とは、どういうことかといえば、本尊抄の文中では、一往の立場で「我が己心を観じて十法界を見る是を観心と云うなり」（御書全集二四〇㌻）と示されております。そして鏡を用いなければ、自分の眼、耳、鼻等の六根を見ることができないように、己心の十界も、仏法の鏡なくしては見ることができない、と教えられています。

いわく「設い諸経の中に処処に六道並びに四聖を載すと雖も法華経並びに天台大師所述の摩訶止観等の明鏡を見ざれば自具の十界・百界千如・一念三千を知らざるなり」（御書全集二四〇㌻）と。

これで明らかなように「十法界を見る」といっても、一念三千を見るということであります。しかして、たんに一念三千というなら、それは理であり、南無妙法蓮華経こそ「事の一念三千」であるというのが、大聖人の結論であります。したがって「我が己心を観じて十法界を見る」とは、わが己心を観じて南無妙法蓮華経を見ることにほかなりません。

十界のいかなる衆生であれ、わが己心の究極の実相は南無妙法蓮華経であります。この本来、わが身が妙法の当体であるという真理を教えたのが、法華経の迹門であります。

なかんずく迹門方便品の「諸法実相」が、これを述べたものであることを、大聖人は「諸法実相抄」に、つぎのように論じられておられます。

「下地獄より上仏界までの十界の依正の当体・悉く一法ものこさず妙法蓮華経のすがたなりと云ふ経文なり」（御書全集一三五八㌻）、「万法の当体のすがたが妙法蓮華経の当体なりと云ふ事を諸法実相とは申すなり」（御書全集一三五九㌻）と。

しかしながら、本来、わが身が妙法の当体であるという道理だけでは、成仏にはならない。もし、それだけで成仏であるなら、万物は等しく妙法の当体でありますから、仏と衆生の差別が現実問題としてあるはずがないし、仏道修行も必要なくなるはずです。

問題は、わが身が妙法の当体であることを、自身が覚知するかいなかにある。この事実のうえでの覚知した仏の境地を明かしたのが本抄であります。そして、覚知したとき成仏といい、それを知らずに迷うのを凡夫、衆生というのであります。これを「諸法実相抄」に「然れども迷悟の不同にして生仏・異なるに依って倶体・倶用の三身と云ふ事をば衆生しらざるなり」（御書全集一三五九㌻）と述べられていることは、すでにごぞんじのとおりであります。

また「一生成仏抄」にいわく「夫れ無始の生死を留めて此の度決定して無上菩提を証せんと思はば すべからく衆生本有の妙理を観ずべし、衆生本有の妙理とは・妙法蓮華経是なり故に妙法蓮華経と唱へたてまつれば衆生本有の妙理を観ずるにてあるなり」（御書全集三八三㌻）と。

衆生本有の妙理、すなわち、わが身が本来、妙法蓮華経であることを観ずることが「無上菩提を証

すること」、すなわち成仏の本義であります。わが身を妙法と観ずるとは、いいかえれば「観心」でありますから、「観心」とは、すなわち成仏得道の謂にほかならないのであります。

ゆえに「観心の本尊」とは、十界の衆生が、わが身妙法の当体なりと観じて成仏するための本尊であり、十界のいかなる境界であれ、それを受持するならそのままで、いわゆる即身成仏できる御本尊ということになるわけであります。この「観心の御本尊」を建立された大聖人によって、初めて、あらゆる衆生の成仏の直道が開かれたのであります。

〝の〟の字を形見と思え

「観心本尊抄」の題号をめぐって、第二十六世日寛上人は「観心の本尊」と読むべきことを強調され「〝の〟の字を形見と思え」とおおせられたことは、あまりにも有名であります。それは「心の本尊を観る抄」とか「心を観る本尊抄」とかの、大聖人の本意から外れた邪義を破していわれたものでありますが、それ以上に「教相の本尊」に対して「観心の本尊」であることを明示せんがためであられたのであります。

「教相の本尊」とは「文上脱益・迹門理の一念三千」であり、それに対し「文底下種・本門事の一念三千」を「観心の本尊」といいます。すなわち、釈尊の説いた脱益の文上の一念三千ではなく、文底秘沈の下種の一念三千こそ、大聖人の顕された御本尊の正体であるということが、ここでの論議の主

題であることはいうまでもありません。

この点を、さらに広い立場で考察してみるならば、信仰する衆生の外にあって、衆生の運命や生涯を支配し動かしていると考えられた超越的な力の具象化、あるいは表現でありました。したがって、そこに求められる信仰の姿勢は、あるいはそうした力に救いを求め、赦しを乞い、慈悲を願い、怒りをといてくれるよう祈る、奴隷的ないき方であったといって過言ではありません。

そして、一般的にはそのような信仰姿勢は、それらの本尊に直接仕える神官、聖職者を、本尊である超越者とのあいだをとりもつ存在であるとし、現実社会においても厳しい差別の相を現出してきたのであります。また同時に、世俗の体制内においても、王などの権力者を、特別の恩寵を受けた存在であるとすることにより、身分制的階級構造を生みだすことになった。

このように、過去のほとんどの宗教は、人間の平等の尊厳性という考え方に対して、真っ向から否定的な非人間主義、反ヒューマニズムの牙城というべき様相を呈してきたのであります。

「教相の本尊」すなわち「脱益の一念三千」は、もとより、それらと同等にみるべきではありませんが、すでに得脱した立場とする以上、迷いの底にある衆生とは天地の相違があり、そこに、既存の多くの宗教がもたらしたのと同じ弊害に陥る要因を多分にもっていたのであります。

文上脱益法門を立てた天台仏法が、民衆とは縁の遠い特権的宗教となり、もっぱら王侯貴顕と結びつかざるをえなかったその歴史をみるとき、この事実は明々白々であります。

それに対し、日蓮大聖人の「観心の本尊」は、文底下種の事の一念三千であります。この観心とは、日寛上人によれば、我等衆生の観心であります。ゆえに「観心の本尊」とは、人々の生命の外にあるものではなく、本来、平等に、生命の内にある妙法という尊極の当体につながっていくのであります。そこでは、あらゆる人にとって、本尊と自分とのあいだに、まったく距離がないと説くのであります。ゆえに、なにものも入り込むすきまはない。衆生は、ただ朝な夕な唱題して、自身が妙法の当体であることを覚ればよいのであります。

だが、これを覚るには、それだけの「智」が必要です。その「智」を得る方法を、法華経は「信」と教えたのであります。「以信代慧」「以信得入」というのは、それであります。日蓮大聖人の教えでは、この「信」がさらに具体的に「受持」として明確化されます。それは、受持する当体として御本尊が顕されたことによるといえます。

したがって、御本尊を受持することが、わが身を妙法の当体と覚る観心であり、これを「受持即観心」というのであります。

三大秘法も「大御本尊」に収まる

最後に、三大秘法に配して「観心の本尊」を拝するならば、御本尊それ自体が本門の本尊であり、御本尊を信受し唱える題目は本門の題目、御本尊所住の処が本門の戒壇でありますが、この三大秘法

も、究極するところは「観心の本尊」の一大秘法におさまることを知らなければなりません。

すなわち、本門の本尊とは、久遠元初自受用報身としての生命それ自体であり、本門の題目は、この無作三身の生命の宝号たる南無妙法蓮華経であります。すでにあげた「法華経の題目を以て本尊とすべし」（御書全集三六五㌻）との「本尊問答抄」の御文に照らしても明白であります。

さらに、戒壇もまた、壇とはマンダーラの訳であり、その本来的意義は、御本尊即戒壇でありますが、魔を寄せつけないために四隅に四天王を配して守護せしめ、中央に釈尊像を安置して、これを歴史的にみると、インドにおいて、僧への授戒の場として壇を設けたのが戒壇の始まりであります。

そこで授戒の儀式を行ったといわれております。

この中央の仏の資格を明らかにするために、種々の脇士がおかれ、その形式がととのえられていった。本尊抄のなかにもおおせられているように、小乗の釈尊は文殊、普賢等を脇士としたのでありますす。

しかるに釈迦、多宝を脇士とし、そのさらに脇士が上行等の四菩薩となっている、久遠元初の仏を中心にした戒壇即本尊は、正像に未曾有であり、これが大聖人御建立の「観心の本尊」なのであります。この御本尊が即事の戒壇であるという深義については、すでに日達上人が明確にお説きくださっているとおりであります。大御本尊を三大秘法総在の御本尊と申し上げ、三大秘法といえども一大秘法に帰着するといわれるゆえんは、ここに存するのであります。

この三大秘法総在の御本尊こそ、弘安二年十月十二日御図顕の本門戒壇の大御本尊であることは、

いうまでもありません。「聖人御難事」に明らかなように、日蓮大聖人の出世の御本懐はここにつきるのであり、末法万年の人類救済のために、完璧に法体は確立せられたのであります。

日寛上人の文段には、大御本尊の功徳の広大深遠を、つぎのごとく讃えられております。

「これ則ち諸仏諸経の能生の根源にして、諸仏諸経の帰趣せらるる処なり。故に十方三世の恒沙の諸仏の功徳、十方三世の微塵の経々の功徳、皆咸くこの文底下種の本尊に帰せざるなし。譬えば百千枝葉同じく一根に趣くが如し。故にこの本尊の功徳、無量無辺にして広大深遠の妙用あり。故に暫くもこの本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱うれば、則ち祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来らざるなく、理として顕れざるなきなり」

どうか、われわれは真の仏法者として、このすばらしい大御本尊に巡りあえたことを無上の喜びとし、一人の退転もなく、いよいよ「受持即観心」の修行に励み、進んではこの大法を広宣流布して、所願満足の人生を送っていただきたいことを心よりお祈り申し上げます。

「無二の志」でこの書を開祐

今回講義しますのは、本抄のなかでももっとも重要な、受持即観心について説かれた段であります が、講義にあたって一言申し上げておきたい。それは、本抄を拝読し、学ぶ心がまえについてであります。

この点に関しては、本抄御述作の翌日付でしたためられた「観心本尊抄送状」に、日蓮大聖人御みずから述べられているので、この送状の御文を中心に申し上げることにしたいと思います。

はじめに帷、墨、筆等の御供養に対するお礼を述べられ「観心の法門少少之を注して太田殿・教信御房等に奉る」（御書全集二五五㌻）と、本尊抄のことをいわれております。

「少少之を注して」ですから、軽い内容のようにも聞こえますが、あくまでこれは御謙遜されているのであって、御本意はつぎに述べられるように、たいへんな甚深の法門であり、心血をそそがれた書であります。

すなわち「此の事日蓮身に当るの大事なり之を秘す、無二の志を見れば之を開祐せらる可きか」と、この「観心本尊抄」の内容が、大聖人の内証の生命を明かした法門であり、いいかげんな姿勢で読んでは絶対にならないことを戒められております。

富木殿、太田殿、曾谷殿等、ここに名前を記されている人々は、一往、その信心を認められて許されたのでありましょう。しかし、もし、他の人に見せる場合は「無二の志」の人でなければならないと断られているのであります。「無二の志」とは、どこまでも大聖人を信じて疑わない人、どんなことがあっても退転せず、生涯、信心を貫く人、また、その覚悟があるということです。

このことから、私どももまた、本抄を拝し学ぶには、生涯不退転の確固たる信心、そしてさらに進んでは、御本仏大聖人の生命と大慈悲を受け継いで、末法広布に邁進する燃ゆるがごとき大情熱に立つべきであることを、強く訴えておきたいのであります。

また「此の書は難多く答少し未聞の事なれば人耳目を驚動す可きか、設い他見に及ぶとも三人四人坐を並べて之を読むこと勿れ」と。

仏法の歴史において、究極の真理、法体は「言語道断・心行所滅」で、言葉としてあらわしうるものでも、思惟の及ぶところでもないとされてきました。いわんや、具体的な当体として顕しうるものとは、考えられもしなかったのでありましょう。

それを大聖人は、御本尊として具体化し、題目として万人が唱え実践できるものとされたのであります。この極理は、難信難解であり、既存の知識や道理で説き明かせるものではありません。

したがって、これを公にするなら、疑惑を生ずるのみで、それがひいては不信、誹謗に発展し、かえって多くの人々を堕獄の罪に追いやることにすらなる。このことから「之を秘す」といわれ、「三人四人坐を並べて之を読むこと勿れ」と戒められているのであります。

ただし、だからといって、絶対にだれにも見せてはならないというのではないことは「無二の志を見ば之を開祐せらる可きか」の御文からも明らかです。開祐の祐という字が、衣偏になっていることに注意してください。すなわち、真に胸襟を開いて語り合える同志であったならば、ともに研鑽してもよいとのおおせなのであります。

この御文に関連して、日寛上人は、本尊抄を講義されたとき、受講する人々が異体同心であり、信心無二であるがゆえに「四十余輩寧ろ一人に非ずや」といわれ、この戒めをまぬかれていると断ってなされたエピソードがあります。

原理は同じであります。私どももまた、御本尊を無二と信ずる同志の集いであり、広布の大願に立った異体同心の同志であります。

むしろ、これだけの膨大な人々が、これほどまでに無二の志、異体同心の生命をもって、大聖人己心の法である本抄を、こうして拝し学んでいる姿を、大聖人はどれほどお喜びくださっていることかと、私は確信するのであります。

同送状の終わりに「仏滅後二千二百二十余年未だ此の書の心有らず、国難を顧みず五五百歳を期して之を演説す乞い願くば一見を歴来るの輩は師弟共に霊山浄土に詣でて三仏の顔貌を拝見したてまつらん」とおおせられております。

私は、本抄を拝するたびに、佐渡流罪という国家権力による大難のなかでこの書をしたためられた大聖人のお姿をしのび、大慈大悲に涙を禁じえません。その身は流人であり、念仏者たちは昼夜に大聖人の命をねらっていた。

全編十七紙からなる本抄の御真筆は、前半と後半が同質紙ではなく、ふつうの和紙と雁皮紙（ガンピの樹皮の繊維を原料にして作った和紙）を用いられ、裏にもしたためられている。――筆や紙も思うように手に入らなかった、当時の窮状がしのばれるのであります。

そのなかで書かれた本抄は、まさに心血をそそいでしたためられた書であります。

ゆえに本抄を一見した人は、仏法の真髄にふれたのであり、誤りなく信心を全うし、かならず成仏を遂げなさい、と励まされているのであります。

「三仏の顔貌を拝見」するとは、釈迦、多宝、分身諸仏を三仏ということはご承知のとおりですが、この三仏はまた、法・報・応の三身をあらわし、文底の辺からいえば無作三身如来を意味するのであります。

そして、その顔貌を拝見するとは、わが身が無作三身であると覚ることであり、成仏得道ということです。「霊山浄土に詣で」は依報に約してのおおせであり、「三仏の顔貌を拝見」は正報に約していわれております。

ここで拝読するのは、全編の一部分ではありますが、もっとも肝要の個所であり、意義はすこしも変わるものではありません。

とくにこの御書が、佐渡御流罪中に著されたということの深い意味を、かみしめていただきたいと思います。大聖人は、大難の真っただ中において法本尊を開顕され、仏法の極理を、私どもに教えてくださっているのであります。

ここより始まって、戒壇の大御本尊御建立にいたる大聖人の御生涯を拝するとき、私は、本尊抄にとどめられた甚深の意義が感じられてならないのであります。

ゆえに、この御本尊を根本として強盛な祈りを奮い起こすとき、かならず難は即、成仏得道へと開かれていくのであります。私は「観心本尊抄」の深義を、そのように拝したいのであります。

どうか、ひとたび本抄を拝する以上は、なにがあっても退くことなく、かならず信心を全うして、わが人生を縦横に生きぬき、悔いなき生涯の歴史をつづっていただきたいのであります。

仏の智慧を生む根源の種子を内包

問うて曰く上の大難未だ其の会通を聞かず如何

「観心本尊抄」のなかでも、もっとも重要な受持即観心の義を明かすにあたって、このすこしまえに一つの疑難を設けられています。それは仏のもっている功徳、力、智慧、威光は、あまりにも荘厳であり、広大、甚深である。そのようなすばらしい仏の生命が、われら凡夫の小さな生命のなかに具わるなどということは、とうてい信じられない、ということであります。

それに対して、前段では、法華経の開経である無量義経の、諸仏の国王と是の経の夫人の和合によって菩薩の子が生ずるという文、法華経の結経である普賢経の「此の大乗経典は諸仏の宝蔵、十方三世の諸仏の眼目なり。乃至、三世の諸仏の如来を出生する種なり」等の文をあげられております。

すなわち、たしかに、仏のもっている福徳は無量であり、智慧は深遠、力は広大であるけれども、それらを生じたところの種子があるのだというのであります。

爾前権経においては、仏の福徳や力、智慧の一つ一つについて、それを生ずる因の修行を説き、それらをつぎつぎと、一つずつ行ずることによって、仏と等しい無量の福徳、智慧を具えさせようとし

た。ゆえに、その実践は、たいへんな長い期間を要する歴劫修行とならざるをえなかったのであります。たとえていえば、樹木の生育過程を探るのに、一枚の葉、一本の枝の分析から始めるようなものでありましょう。それに対し、根源の種子に目を向けるように促しているのが、法華経であります。

法華経の開経である無量義経は「無量義とは一法より生ず」と説き、そうした無量の福徳、智慧を生ずるただ一つの法が実在することを宣言しました。そして法華経の結経である普賢経は、この一法から、あらゆる仏の福徳と智慧が生じていることを述べて、その偉大さを讃えたのであります。

まさに、この〝一法〟それ自体を、真っ向から説き明かした経典こそ、法華経にほかなりません。そしてさらに、この法華経が明かしている〝一法〟の正体、種子そのものとは、法華経の題目、妙法蓮華経であり、すなわち南無妙法蓮華経なのであります。

したがって、いっさいの仏の種子である妙法蓮華経を受持する——すなわち、凡夫がわが生命に南無妙法蓮華経を植えるとき、仏のいっさいの功徳、智慧は、ことごとく凡夫の生命に具わるのであり、これを大事に育てるならば、凡夫がそのまま功徳と智慧に満ちあふれた仏となる。——これが、受持即観心の義であります。

ともあれ、この「問うて曰く……」は、さきの疑難に対する答えの結論を求めているのであります。ちなみに〝会通〟とは「和会疏通」の意で、異議や異説を照らし合わせ、その本義を明確にして筋道を通すこと、つまり納得ができるようにすることをいいます。

六波羅蜜は自然に在前

> 答えて曰く無量義経に云く「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も六波羅蜜自然に在前す」等云云

これは無量義経に「是の経の不可思議の功徳力」として十個あげられているなかの、第七に述べられている文であります。いうまでもなく、無量義経は法華経の開経と位置づけられる経でありますから、ここでいう「是の経」とは法華経であり、なかんずく妙法蓮華経の題目をさします。

いま、その前後をあげますと、つぎのようにあります。

「若し善男子、善女人、仏の在世若しは滅度の後に於いて、是の経を聞くことを得て、歓喜し信楽し希有の心を生じ、受持し読誦し書写し解説し説の如く修行し、菩提心を発し、諸の善根を起し、大悲の意を興して、一切の苦悩の衆生を度せんと欲せば、未だ六波羅蜜を修行することを得ずと雖も、六波羅蜜自然に在前し、即ち是の身に於いて無生法忍を得、生死、煩悩一時に断壊して、菩薩の第七の地に昇らん」（妙法蓮華経並開結一〇八ページ）

すなわち、真底から歓喜と求道心と感謝の念をもって、自行化他にわたる実践に励むならば、菩薩

の修行の要諦とされている「六波羅蜜」の一々を修行せずとも、自然に具わりあらわれてくる、との意であります。それは「是の経」すなわち妙法蓮華経に、いっさいの諸仏の宝蔵が包含されているからであります。

ここで六波羅蜜について、若干、申し上げますとともに、これは大乗の菩薩が悟りを得るために修行しなければならないとされた六種の修行で、それだけについて説かれた「大乗理趣六波羅蜜多経」という経典もあり、古来、大乗仏教においては、必須の修行として重視されてきました。

波羅蜜とは、梵語のパーラミターの音写で、その意味は、度、到彼岸等と訳されます。迷い、苦しみの境涯を此岸とし、涅槃、悟りの境地を彼岸として、此岸から彼岸へ渡るということです。そのための修行の内容が六波羅蜜のそれぞれであります。

このことと関連して申し上げておきたいことは、無量義経のこの文は、妙法をたもつ人は修行として六波羅蜜を行ずる必要はないと教えているわけでありますが、六波羅蜜を行じたことによって得られる種々の徳は、おのずから具わるとの意であることを見逃してはならないということです。

六種の修行は人間の条件

では、六波羅蜜のあらわしているものはなにか。たものといってよいと考えるのであります。これを私は、端的にいって人間の条件をあらわし

古来、人間の条件とはなにかという問題は、多くの思想家によって論じられ、また文学者を刺激しつづけてきたテーマでもあります。さまざまな人が、それぞれに、この問題に対して答えを模索してきました。六波羅蜜とは、ある意味で、そうした大きな疑問への、一つの集大成された回答ともいえるのではないかと考えるのであります。

そして、それは同時に、人間革命運動を進める私どもにとって、自己の変革、完成のために、黄金の光を放つ指標ともなるものといえましょう。確固不抜の生命観に立脚した人間革命の実証とは、要するに、どのようになることなのか、この目標がここに示されているといえるのであります。

まず六波羅蜜の第一は「布施」です。

これには大きく分けて、財物を与える財施と、法を説き教える法施と、恐怖を取り除き安心を与える無畏施の三つがあるとされている。このそれぞれについては、ここでは詳しく述べませんが、布施といっても、財物を与えるだけが布施ではない。むしろ法を説き教えること、あるいは恐怖を除き安心を与えることのほうが、仏法においてはより大きい比重を占めております。

財物の布施によって救えるのは、わずかの期間にすぎない。財物自体、限られておりますから救える範囲も狭くなります。たとえば飢えた人にパンを与えても、一日の命をつなぐことができるだけです。だが、なんらかの仕事の技を教えてあげれば、その仕事によって一生、飢えないで生きていけるでしょう。これは広い意味での法施です。

さらにまた、生きていくのに困らないですむだけの技術をもっているけれども、絶望に陥り、生き

る意欲すら失っている人々に対しては、その不安や恐怖を取り除き、安心を与える無畏施が、大きい布施となります。

財施が、どちらかといえば、依存心を増長させ、個人の自立を奪う結果になりがちなのに対して、法施、無畏施は、自立の心と力をもたらします。

そして仏法がもっとも重視しているのも、法施であり、無畏施であり、講義、指導などは、無畏施を含む法施といえます。私どもの実践に約せば、仏法を教え、導く折伏弘教、

す。

ともあれ、妙法をたもった場合、布施行の根底を形づくるものは、慈悲であります。しかし、恩師はよく「われわれは凡夫である。慈悲といっても、なかなかそれを実践できるものではない。それに代わるものは勇気である。勇気が慈悲に通ずるのである」ということをいわれておりました。

すなわち、いかなる怒濤にも決然と立って、妙法弘通に勇往邁進していく姿そのものが、慈悲の行につながっていくのであります。どうか皆さんは「日蓮が弟子等は臆病にては叶うべからず」（御書全集一二八二㌻）の御金言を胸に、広布の街道を、朗らかに進んでいってください。

つぎに、六波羅蜜の第二は「持戒」であります。

持戒の戒とは「防非止悪」の戒とされ、身口意にわたる悪業を断じ、いっさいの不善を禁制することをいいます。元来、仏教を修行する者が守るべき規範として定められたものですが、仏教修行者が

出家僧団に代表された初期のころに、その集団生活の規律のため定められたところから、戒といえば、生活のあらゆる面にわたって束縛する煩瑣なものという印象が強い。

そしてそのために、時代が変わり、状況が異なると、そうした戒は、そのままでは実践できないものとなりました。いいかえると、戒は、人間性にとって、プラス面よりもマイナス面をもつ結果となったのであります。

戒律を主体とする小乗仏教が、時代でいえば像法、末法、地理的にいえば中国、日本において、もはや顧みられなくなったのは、このためであるといえます。

しかし、これはある社会の、ある状況下につくられたものを、異なった状況の人々に、そのままあてはめることが誤りであるということであって、戒そのものの原点に立ちもどっていえば、それぞれの状況のもとに、それにかなった戒が立てられるべきであります。

人間の心には、仏法の十界互具論が徹底的に解明しているように、善の心もあれば悪心もあります。「治病大小権実違目」のつぎの御文は、このことを明確に示されているのであります。

「善と悪とは無始よりの左右の法なり権教並びに諸宗の心は善悪は等覚に限る若し爾ば等覚までは互に失有るべし、法華宗の心は一念三千・性悪性善・妙覚の位に猶備われり元品の法性は梵天・帝釈等と顕われ元品の無明は第六天の魔王と顕われたり」（御書全集九九七㌻）

妙覚の位、すなわち仏といえども、十界を具足しており、一念三千の当体であります。ゆえに地獄、餓鬼、畜生、修羅等の悪心も、当然、具わっているとのおおせです。いわんや、われわれ凡夫に

おいて、これらの悪い生命が具わり、つねにその働きを顕現させようとしていることはいうまでもありません。

餓鬼、畜生、修羅等の悪心は、本来、生命のもっとも基本的な動因である生存本能と結びついており、そのゆえに、もっともあらわれやすい働きといえる。これに対して、善心の代表である声聞、縁覚、菩薩等の働きは、そうした自己の醜い深淵から飛翔しようとするもので、強い引力に逆らわなければならないでありましょう。

したがって、悪心に引きずられないようにすることは、絶えまない用心と努力とを必要とする。それは、あたかも、険難の断崖の道を進むようなものでありましょう。「防非止悪」すなわち戒をたもつということは、この険路を過たないでハンドルを操作するようなものであります。

一般的にも、自分自身の意思でみずからに課した義務も、戒ということができましょう。

ロマン・ロランが「ベートーベンの生涯」について記している文に次のようなところがあります。

「彼は自己に課せられていると感じた義務についてしばしば語っている。それは自己の芸術を通じて『不幸な人類のため』『未来の人類のため』に働き、人類に善行をいたし、人類に勇気を鼓舞し、その眠りを揺り覚まし、その卑怯さを鞭うつことの義務である。甥への手紙にも書いている――『今の時代にとって必要なのは、けちな狡い卑怯な乞食根性を人間の魂から払い落すような剛毅な精神の人々である』と」（片山敏彦訳）

このベートーベンが「自己に課せられていると感じた義務」も、彼にとっては生きていくうえでの

一つの戒であったといってよいでしょう。

この現代的にいえば自己規制が戒であり、その意味において、重要な人間の条件と考えられるのであります。

六波羅蜜の第三は「忍辱」であります。

成仏という最高の理想をめざして登攀する以上、荊棘の道があるのは当然としなければなりません。「山中の賊を破るはやすく、心中の賊を破るは難し」といわれますが、実際、仏教経典には、仏道修行をする人が、いかに大きな苦難を忍び、障害を乗り越えなければならなかったかが、数えきれないほどあげられております。

舎利弗が過去において、婆羅門から眼を乞われて与えながら、そのあとの処遇に耐えきれず退転してしまったことは、忍辱の厳しさをあらわしたエピソードといえましょう。

釈尊自身、九横の大難と呼ばれる多くの迫害や苦しみに遭いながら、それを耐え忍んだことは周知のとおりであります。「されば釈迦如来の御名をば能忍と名けて此の土に入り給うに一切衆生の誹謗をとがめずよく忍び給ふ故なり」（御書全集八八五㌻）、また「此の世界をば娑婆と名く娑婆と申すは忍と申す事なり・故に仏をば能忍と名けたてまつる」（御書全集九三五㌻）と、日蓮大聖人も、忍辱ということを、釈尊の特質として強調されております。

さらにいえば、末法御本仏日蓮大聖人こそ、釈尊よりもさらに大きい苦難を耐え忍ばれた、真実の

「能忍」であられました。悪世末法に逆縁の衆生を救うために出現された大聖人の遭われた難は、客観的にみても、釈尊のそれより厳しいものであったことはまちがいありませんし、経文にも「滅度後」と予記せられているとおりであります。

これは仏道修行、仏法実践にかかわる問題でありますが、広くいえば、この世界を人間として生きていく過程においても、思うにまかせないこと、つらいこと、苦しいことは、つきものであります。それを耐えられないで、若くしてみずから生命を断つ傾向が、一部ではありますが顕著になっていることは悲しむべきことであります。

もとより、この人間社会から、苦しみをもたらすようなことは、できるだけ取り除き、すべての人が人生を楽しんで生きられるよう、互いに力を合わせるべきであります。まして、互いに争いあい、いじめあうような愚はなくすべきです。だが、それでもなおかつ、避けることのできない苦難は、どこまでもつきまとうと考えなければなりません。それに耐えぬくこと、さらには、己の信ずる正義のために、あらゆる苦難を耐え忍ぶこと——これは、人間としての大事な条件なのであります。忍辱とは、それを教えたものといえましょう。

六波羅蜜の第四は「精進」です。これは、これまでの布施、持戒、忍辱、およびこのあとの禅定、智慧の五つの波羅蜜を、心身ともに力をつくして修行することをいいます。

精進の意味は、精とは無雑、進とは無間と釈されるように、純粋に、絶えまなく実践することであ

ります。

これを敷衍して、人間としての生き方という立場で考えてみたいと思います。人間は、だれしも未完成であります。凡夫であり、喜怒哀楽に生きる生身の存在であるかぎり、未完成は当然でありましょう。真実の宗教とは、そうした微妙な感情を、ある特定の方向へと圧迫するのではなく、喜怒哀楽のヒダを一本一本たどりつつ、その根底から生きる勇気と生命力を奮い起こさせていくものでありま す。私は、未完ということは、むしろ人間の紋章であるとさえ思っております。

しかし、それゆえにこそ、向上ということを、欠かすことができないでありましょう。未完であるからこそ向上心が必要なのであり、向上があるからこそ人間といえるのであります。進歩と向上への努力を失えば、人間社会は、畜生界、または修羅闘諍の巷と化してしまうでありましょう。ここに、つねの精進が要請されてくるのであります。コマは回転しているからこそ、細い心棒によって立つことができるのであります。また自転車は、走り続けることによって、平衡を維持しております。人間も同様でありましょう。

六波羅蜜の第五は「禅定」であります。

禅とは、静慮と訳し、心を一つに定めて真理を思惟することをいいます。釈尊が、苦行を捨ててナイランジャナー河で沐浴し、スジャーターの捧げた乳粥を食べて、心身ともに爽快になり、菩提樹の下で瞑想に入ったのは、この禅波羅蜜の代表といえます。

くだって中国の天台大師は、一般的に観念観法の仏法といわれるように、一心三観・一念三千の法を立て、禅定の修行をとりわけ重視しております。

このように、禅定といえば、仏道修行の仕上げとも いうべき重要な実践とされているわけでありますが、広く人間の生き方の条件としてみても、きわめて大切な要素の一つであります。

この広い意味での禅定とはなにかといえば、人生においても、明確な理想と確固たるよりどころなくといってでありましょう。さきにあげた忍辱といい、精進いくうえで根本のよりどころとするものをもつことては、挫折せざるをえないでしょうし、耐えぬいて挫折はまぬかれても、事実は彷徨に終始してしまうでありましょう。

初代会長牧口常三郎先生は、あの獄中にあっても、悠々たる心境であられました。それは、つぎのような獄中書簡の一節からもうかがえるのであります。

「警視庁と異って、三畳一人のアパート住居で、本が読めるから、楽であり、何の不足はない。心配しないで留守を守って下さい。……独房で、思索が出来て、却ってよい。朝夕の勤行、外に特別の祈願をまじめに怠らない。……お互に信仰が第一です、災難と云ふても、大聖人様の九牛の一毛です、とあきらめて益々信仰を強める事です。広大無辺の大利益に暮す吾々に、斯くの如き事は決してうらめません。経文や御書にある通り必ず『毒変じて薬となる』ことは今までの経験からも後で解ります」

まさに、この澄みきった心と高邁な気迫は、生涯を広布殉教に生きぬいた禅定の心からくるもの

と、私は推察するのであります。

社会的にいっても、そのときどきの状況や、ときには衆の心の不安定さ、どこへ暴走するかわからない危険をによるともいえるのであります。そして、そのあげくはうものを見失い、互いに傷つけあい、殺しあう事態にさまさにこの人間の悲しむべき性の露呈であり、それゆえるにたる仏法の広宣流布こそ、私どもの恒久平和へのもす。

最後に、六波羅蜜の第六は「智慧」であります。これ実を正しく見極める智慧を得ることとされております。

仏道修行の究極の目的は、いうまでもなく成仏すること同じ語である事実から明瞭に知ることができます。

覚り、智慧といっても、現代的にいえば物理学のそれもあれば、経済学、数学等のそれもあるように、多種多様であります。そのように多岐にわたり、多彩に広がる〝智慧〟に対して、そのすべての根源であり、すべてを包含する、最高究極の智慧が仏の得る智慧であります。

ゆえに、仏の得るこの智慧を、梵語で「阿耨多羅三藐三菩提」というのです。阿耨多羅は無上、最高の意で、三藐は正等、正遍と訳し、清浄にして偏頗がない、いっさいを包含していることを意味しています。三菩提は正覚、正しい智慧ということであります。これを総称して「無上正遍知」「無上正等覚」と訳されております。

したがって、六波羅蜜にいう智慧とは、こうした仏法の究極的な覚りからでた智慧をいうのでありますが、広く人間のあり方として考えても、智慧は、古来、洋の東西を問わず、人間の基本的な条件とされてきたものであります。

西洋において、学問的に現人類を「ホモ・サピエンス」と呼んで、先行の旧人や猿人と区別しているのも、この一つであります。ちなみに、ホモ・サピエンスとは賢い人、知性ある人、智慧ある人の意であることは、周知のとおりです。古代インドでも、人間のことをマヌシャと呼びましたが、これは「思惟する人」の意で、やはり智慧を人間の特質とする考え方からでたものであります。なお、これは言語学の問題になりますが、同じインド・ゲルマン語系であるドイツ語で、人間をメンシュというのは、このマヌシャの転化と考えられます。

ともあれ、智慧によって人間は、あらゆる現象を正しく把握し、そこに貫かれている因果の法を究めたのです。それによって、ある事象が起きたときに、つぎにどのような事象が起こるかを予知し、それに対応できるようになったのであります。

このように、人間が自然の脅威から身を守るためにも、また自然の力を応用して価値を創造してい

くためにも、智慧は重要な力であった。生物学的にいえば、かよわい存在である人間が、今日まで生き延びてこられたのは、智慧あったればこそといっても過言ではありません。

それはそれとして、この強力な智慧によって、人間は、他のあらゆる生物を制覇し、自然を破壊し、ひいては、みずからの生存を危機に陥れているのが実情であります。このときにあたって、なによりも求められるのは、外界の事象に対してふるう智慧の力を、内なる自己を、生命を知る智慧によって正しく調整することでありましょう。この内なる自己の智を説き明かしたのが仏法であり、そのゆえにこそ、仏法の智慧が、今日の人類にとってもっとも要請されていることを、私は強く訴えておきたいのであります。

以上のように、六波羅蜜は、人間が人間らしく生きるための条件をじつに見事に説き示しているわけですが、過去の思想、宗教は、それらのいずれかを、個々別々に説いたにすぎない。六波羅蜜は、それを総体として完璧に明かしている。ここに大事な意義があります。

それは、これらの条件は、いずれも大切でありますが、もし、その一つ、二つのみにとらわれたならば、行き詰まってしまうし、偏頗になり、偏狭にさえなってしまうからであります。

もし布施、利他のみにとらわれたならば、現実社会に生きる人々は、ほとんどが絶望感に陥らざるをえないでしょう。また、持戒のみを事とするいき方は、発展性を失い、固定化、歪曲化をまねくでしょう。忍辱のみを強調した場合は、悪の跳梁を許すことになるでしょうし、精進のみでは、人を踏

みにじっても、ということになりかねません。禅定のみの場合は、現実社会から遊離し、独善主義に走る危険がありますし、智慧のみでは、狡猾になってしまうでしょう。

したがって、ほんとうの意味で人間らしいといえるのは、これらの条件が、その正しい時と所をえて発揮されていることが大切であります。

その意味で、六波羅蜜として総括して示されていることに重要な意義があるのでありますが、さらには、無量義経のこの文に明かされているように「六波羅蜜自然に在前す」ということが大事なのであります。

すなわち、この文は、妙法を受持したとき六波羅蜜の全体が、おのずと具わってくるということであり、いいかえると、この妙法蓮華経こそ、六波羅蜜のあらわす諸条件を、正しい調和を保って顕現させる当体であるということなのであります。

十界の生命作用が本有の尊形と輝く

しかも、六波羅蜜とここでいっているのは、成仏をめざす菩薩の修行という観点からであって、より根本的にいえば、十界、三千のことごとくが、この妙法蓮華経の一法に具わり、そのそれぞれがその所をえてあらわれてくるのであります。

十界三千をどこまでいっても具えているのが凡夫であり、人間が人間として生きていくには、その

いずれが欠けてもなりません。それが〝生命〟の正しい姿であります。ただ、その働きが偏向を生じ、働く場を誤ったところに、悩み、苦しみが生じます。

南無妙法蓮華経は、いっさいを具足し、統合させゆく力であります。

本抄に「其の本尊の為体本師の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華経の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏……」（御書全集二四七㌻）とおおせのように、南無妙法蓮華経という根源の一法を中心にした場合には、地獄界から仏界にいたるまでの種々さまざまな生命作用が、本来の正しい位置を与えられ、本有の尊形と輝くのであります。

互具であるべき十界の個々が、割って離れればなれになり、断絶と孤独、悩みの淵をさまよっていたものが、みずからの位置を回復し、自然に本来の機能を発揮するのであります。ゆえに円教というのであります。

これを私どもの実践にあてはめていえば、御本尊を根本とする人生には、行き詰まりも挫折もなく、そこには六波羅蜜にわたるいっさいの修行の功徳が、おのずと具わってくるでありましょう。唱題によって妙法と合致した生命は、同時に大宇宙の生命を呼吸しつつ、あらゆる障害を跳躍台に、そして逆風を追い風に変えつつ、ダイナミックな回転の輪を、幾重にも広げていくのであります。

私どものあらゆる振る舞いは、深き一念の所作として、南無妙法蓮華経を〝体〟とした〝用〟として、見事に所をえていくものであります。

御書にいわく「南無妙法蓮華経は師子吼の如し・いかなる病さはりをなすべきや……いかなる処に

て遊びたはふるとも・つつがあるべからず遊行して畏れ無きこと師子王の如くなるべし」（御書全集一一二四㌻）と。

もとよりこれは、御本仏の御境界ではありますが、凡愚の私どもも、御本尊根本の信心を貫きとおすならば、かならずやその一分に浴することができるのであります。これ「六波羅蜜自然在前」の意義であります。

ゆえに恩師も「功徳の大海に思うがままに遊戯する、自在の境涯を会得せしむるために、忍辱の鎧を著、慈悲の利剣をひっさげて戦うのである」と述べております。皆さん方も、こうした大福運と大満足の人生をかちえていってくださるよう、お願い申し上げます。

具足の道の本体は妙法

法華経に云く「具足の道を聞かんと欲す」等云云、涅槃経に云く「薩とは具足に名く」等云云、竜樹菩薩云く「薩とは六なり」等云云、無依無得大乗四論・玄義記に云く「沙とは訳して六と云う胡法には六を以て具足の義と為すなり」吉蔵疏に云く「沙とは翻じて具足と為す」天台大師云く「薩とは梵語なり此には妙と翻ず」等云云

ここは、まえの無量義経の文を受けられて、妙法蓮華経即御本尊がいっさいの因行果徳を具足していることを裏づけるために、経文および論釈をあげられているところであります。

最初の「法華経に云く……」の文は、方便品にあるもので、一座の大衆の疑問を、舎利弗が代表して仏に質問した言葉であります。

この要請に答えて、釈尊は開示悟入の四仏知見を明かし、すべての衆生に一仏乗の法を得させることが、仏の一大事因縁であることを述べるのであります。この一仏乗の法が法華経の全体を明かしているものであり、それこそ妙法蓮華経にほかならないのであります。したがって、舎利弗が仏に聞いた「具足の道」の本体は、妙法蓮華経となるのであります。

つぎに「涅槃経に云く……」以下の文は、妙法蓮華経の〝妙〟にあたる梵語の「薩」や「沙」が具足、六の意味になることを明らかにされております。

ごぞんじのように、法華経の梵語の題名は「サ・ダルマ・フンダリキャ・ソタラン」といい、これをそのまま音写しますと「薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覧」となる。これを鳩摩羅什が、その意味を訳して「妙法蓮華経」としたのであります。

「御義口伝・南無妙法蓮華経」には「又云く梵語には妙法蓮華経と云うなり、薩は妙なり、達磨は法なり、芬陀梨伽は蓮華なり蘇多覧は経なり」（御書全集七〇八ページ）とあります。ここに「薩は妙なり」とあるように、妙法蓮華経の〝妙〟にあたるのが、もとの梵語の〝薩〟なのであります。

無依無得大乗四論玄義記の文には「沙とは訳して六と云う。胡法には六を以て具足の義と為すなり」と記されております。

これは、涅槃経の「薩とは具足」、竜樹の大智度論の「薩とは六」を受けて、なぜ同じ「薩」（沙）という言葉が一方では具足、もう一方では六と説明されるのかを、中国、唐代の学僧・慧均（えきん）の文によって解明されているわけであります。すなわち「胡法には六を以て具足の義と為す」とあるように、胡法すなわちインドの習わしでは、六を具足の義としたからであるといわれている。

なぜ、六が具足の義とされたか。これも興味をそそる問題でありますが、おそらく、古代インドで、六をもって満数とする習慣があったと考えられます。これは、一日を十二刻、二十四時間、一年を十二か月、角度を三六〇度、また十二支、十二を一ダースとする等、六を基調とする数え方の慣習は、いまも世界的にいたるところにある事実にもうかがわれるのであります。

ともかく、妙法はいっさいを具足するのであります。それは、妙法が宇宙森羅万象を貫いて脈動する〝生命〟そのものの法であるからにほかなりません。

「蒙古使御書」にも「外典の外道・内典の小乗・権大乗等は皆己心の法を片端（かたはし）片端説きて候なり、然りといへども法華経の如く説かず」（御書全集一四七三㌻）とお示しのとおり、妙法は〝生命〟を、あまさず説きつくしているのであります。それに対して、外典、爾前・権教の諸経典は〝生命〟を部分部分に分割して説いているにすぎません。

したがって、いっさいの経典、ならびに外典の思想、哲学は、妙法に具足するのであり、妙法に支

えられて初めて蘇生するのであります。

六波羅蜜の修行に代表される釈尊の仏法の因行果徳の二法が妙法の五字に具足されるのも、まさに妙法が、生命の全体を把握した究極の法にほかならないからであります。

受持即観心の義を明示

> 私に会通を加えば本文を翳が如し爾りと雖も文の心は釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う

これまでの引用の文をうけて、受持即観心の義を正しく釈されたところであり、本抄のなかでも肝要中の肝要といえる個所であります。

「私に会通を加えば本文を翳が如し」とは、どこまでも経文ならびに論釈を重んじ、自分勝手な解釈を慎まれた謙虚な姿勢を示されております。

しかしながら、これらの経論から明確に、まちがいなく結論できるとしておおせられているのが「釈尊の因行果徳の二法は……」以下の、一切衆生成仏の根源を明快に断言された、珠玉の御金言であります。これこそ、仏法の究極であり、最も有名な御文であります。

すなわち、まえにもかかげましたが、日寛上人が「観心本尊抄文段」において「この本尊の功徳、無量無辺にして広大深遠の妙用あり。故に暫くもこの本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱うれば、則ち祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来らざるなく、理として顕れざるなきなり」とおおせのように、私どもが日夜拝している御本尊の広大無辺の功力と尊貴さを、じつに明快に示されております。

恩師戸田城聖先生も、生前、ことあるごとにこの御文を引き、病気や貧困と必死に戦う人々に、最大の激励とされておりました。

まさに「私に会通を加えば本文を黷が如し」とは、今この御文を講義している私自身の痛感しているところであり、大聖人のお叱りをうけるのではないかと恐れるのであります。どうかこの御文をしっかりと胸に刻み、その妙法蓮華経の五字を御本尊として顕し、私どもに譲り与えてくださった日蓮大聖人の大慈大悲に、心から報恩の誠を尽くしていってほしいと念願いたします。

ともあれ、今この御文を拝するとき、重々の深義が秘められていることを実感いたします。

いうまでもなく、一つは文字の意味から、このままま顕されているところであり、インド応誕の釈尊のあらゆる因位の修行によって得た功も、仏果を成じてからの衆生救済の大行動による徳も、すべて妙法蓮華経の五字に具足されており、私どもはこの妙法を受持することによって、おのずからそのいっさいの功徳を譲り与えられるということであります。

ひとことに「釈尊」といっても、そこには、さまざまな意味が含まれていることを知らなければならない。日寛上人は「観心本尊抄文段」や「末法相応抄」において、そこに六つの意味を立て分けられております。すなわち、インド応誕の釈尊は、蔵・通・別・円の四教を説く過程に即して、それぞれ蔵教の釈尊、通教の釈尊、別教の釈尊というふうに、仏身を現じてきた。さらに円教である法華経においても、迹門の釈尊、本門文上の釈尊と異なりがあります。

以上五つの釈尊が、釈尊の仏法の領域であるのに対し、日蓮大聖人は、寿量文底に秘沈せられた南無妙法蓮華経を説く、末法の御本仏としての本地を明らかにされているのであります。これ文底の釈尊であり、釈尊といっても、このように多義にわたることを心得ていかねばなりません。

広大無辺の功徳具う御本尊

さて本抄に「釈尊の因行果徳の二法」とおおせられており、しかも釈尊の功徳のみならず、あらゆる仏の諸法の力を包含しております。

ゆえに日寛上人は「観心本尊抄文段」において「一切諸仏の因位の万行、果位の万徳、皆悉くこの妙法五字に具足するなり。故に本尊の功徳無量無辺にして広大深遠の力用を備えたまえり。而るに但『釈尊』というは即ちこれ一を挙げて諸に例するが故なり」とされているのであります。

じつに御本尊は、十方三世の諸仏の因位の万行、果位の万徳の凝結した宝珠であり、しかもそこ

に、宇宙をもつつむ偉大なる力用が具足されているのであります。

では、インド応誕の釈尊は、どのような因行、果徳を明かしているのかということについては、この段の前文の質問として詳しくあげて述べておられます。

要約していえば、爾前迹門の始成正覚の立場でいっても、その因位の修行は三千塵点劫にわたり、能施太子、儒童菩薩、尸毘王、薩埵王子等として仏道を行じ、あるいは多くの仏に供養をしている。果位の菩提樹下で成道してからの功徳も、凡夫の想像を絶するたいへんなものであります。

さらに本門の久遠実成の立場でいえば、その因位の修行は、五百塵点劫以前の菩薩道であり、果徳にいたっては「十方世界に分身し、一代聖教を演説して、塵数の衆生を教化し」と明かされているように、始成正覚の立場の遠く及ばぬ膨大なものであったかは、私どもは、雪山童子や楽法梵志の例によって学んでいるところであります。

ここでは、本抄にもあげられている薩埵王子についてふれてみたい。

無量世の昔、ある国に大車という国王がおり、その国王に摩訶波羅、摩訶提婆、摩訶薩埵という三人の王子がいた。あるとき王は、三子を連れて野へ出かける。大竹林のなかを進んでいるうちに、一匹の傷ついた虎に出会う。かなりの重傷らしく、獲物をあさる力もなく、ひどく飢えているようである。周りには、生まれてから七日ほどたったぐらいの七匹の子供が取り囲んでいる。

波羅がいうには「この虎は七匹の子を産んで飢えきっている。そのうち、きっと子まで食べてしまうだろう」と。また提婆はそれを聞いて「かわいそうに、この虎はまもなく死んでしまう。なんとかして助けてやれないものだろうか」という。

それを聞いて薩埵は、心中深く「わが身は、百生千生を経ても、むなしく朽ちてしまう。しかも、なんの利益も及ぼすことができない。ならば、なんとかして今、命を捨てることができないだろうか」と思う。

そして、兄二人が王宮へ帰ったのちに、衣服を脱いで、虎の前にわが身を投げだす。しかし虎は、薩埵の威勢に恐れをなしたのか、一声うなったのみで手を出そうとしない。そこで薩埵は、断崖をよじ登り、はるか下の飢えた虎の前をめがけて身を投げる。

しかし弱っている虎は、その肉体に牙をかける力もない。そこで薩埵は、身を引きずるようにして一本の乾いた竹を手にし、自分の頸動脈に突き刺す。飢えた虎は、鮮血をしゃぶり、たちまち勢いづいて、薩埵王子の肉体を骨だけ残すのみで食べつくしてしまう——。

釈尊は、阿難に向かってこのような故事を語り、その薩埵王子が、じつは自分の因位の修行の姿であったことを明かすのであります。「捨身飼虎」として知られている物語であります。

経典には「時に大地六種に震動し、風の水を激するが如く、涌没して安からず、日精明無きこと羅睺の障るが如し。天は衆の華及び妙香末を雨し、繽紛として乱れ墜ち林中に遍満し、虚空の諸天咸共に称讃したまう」とあります。

これは一つの説話であり、釈尊の因位の修行の壮絶さを説いたものであります。これらの因位の修行も、妙法の広大無辺の功力のほんの一部に位置づけられてしまうのであります。しかし、この功徳は釈尊の仏法における因果をよく示しています。過去の因によって現在の果があるという原理であります。

これと関連して恩師は、よく〝浄玻璃の鏡〟の譬えを引かれておりました。

その鏡は、業鏡とも呼ばれている。亡者が閻魔のそばへ行って「おまえは、生きているあいだに、こんな悪いことをしただろう」といわれると「なにもそんな悪いことをしておりません」と答える。すると閻魔は「そこにある浄玻璃の鏡を見よ」という。するとその鏡に、生前の悪事のかずかずが、あますところなく映しだされるというのであります。

たんなる勧善懲悪ではなく、生命にはごまかしのきかぬ因果応報があるということを、譬えをかりて示しているのであります。

恩師は「この娑婆世界においては、われわれのこの身、この境遇が、浄玻璃の鏡なのである。過去世にわれわれのなした業が、この現世にわれわれの心身に業報として感ずるのである」と述べています。

これが、だれびとも逃れることのできない、生命というものの真実の相なのであります。これを避けて通ろうとしても、絶対に避けることも逃れることもできません。その衆罪衆禍を滅尽させんがた

めに、釈尊は、歴劫修行の重要性を説いたのであります。

しかしながら、これは本文の一往、文上の義であります。この御文を、文底仏法の日蓮大聖人御自身の立場に拝するならば、無始永遠の過去から大聖人は、無作三身の仏として「百六箇抄」にあるごとく「本因本果の主」として、無量無辺の因果の功徳を具されております。

しかも、そこには、日寛上人が「一を挙げて諸に例する」と述べておられるように、釈尊一仏でなく、あらゆる仏の得分を、すべて含んでいるのであります。そして、御自身のいっさいの因行果徳を三大秘法の御本尊として、そのまま移されたのであります。

「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御心は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし」（御書全集一一二四ページ）とのおおせは、これをはっきりいいきられており、釈尊の仏法の月光のしだいに失せゆくなか、太陽の仏法の赫々たる出現を宣言せられているのであります。

まさしく、仏法史、いな人類三千年の歴史を画する一大事であると拝する以外にありません。

御自身の久遠元初の南無妙法蓮華経如来としての御生命を、妙法五字につつみ「我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」と、私ども末代幼稚に与えてくださったのであります。

私はこの「譲り与え給う」との御文に、御本仏の比類なき大慈悲が感じられてならない。なぜなら、久遠元初の生命といっても、仏法哲理の極理を究めた難信難解の法であり、凡夫の容易に知りう

るところではありません。私どもが今、それにふれることができるのは、七百年前の歴史の現実のうえに、日蓮大聖人が御出現になったからであります。

「旃陀羅が家より出たり」（御書全集九五八㌻）とおおせになり、みずから凡夫の姿をとりつつ、事実のうえに「因行果徳の二法」を示してくださったからであります。しかも、その偉大な力と無量の功徳を御本尊にとどめられ、末法万年の衆生をうるおす本源の力として残されたのであります。

「受持」の一念に輝く大功徳

「我等此の五字を受持すれば……」とは、この御本尊に帰依する受持の一念のなかに、もったいなくも日蓮大聖人の御命、そして久遠元初の自受用身如来の命が通ってくるのであります。それこそ、宇宙本然の姿である万法の体に合掌冥合しゆく尊い座であり、そこには、いっさいを包括し、統合し、作動させてゆく、あふれるばかりの力が秘められているのであります。

私どもは、御本尊に南無する今の一瞬において、根源の法に立っているのであります。そこから、社会に、人生に、わが当体に、妙法五字を顕現していくのであります。

いわば釈尊の仏法が、百千枝葉が一根に趣くように、妙法へと向かう努力、精進であったとすれば、私ども受持の当体には、妙法を百千枝葉へと展開する未曾有の宗教運動の世界が、豁然と眼前に開かれていくのであります。

そして今、この元初の太陽が、全世界を照らしつつある――。思うだに感無量であります。

さらに敷衍していえば、私どもの眼前には既存のあらゆる体制、イデオロギーというものが、あたかも峨々たる高山のごとくそびえ立っている。それらの既存の鉄鎖は、がんじがらめに人々を呪縛しつづけているようであります。人類は、みずからが生みだしたものの重圧の下に従属させられ、あえいでおります。大聖人の仏法は、その主客転倒、本末転倒を正す、壮大なる逆転劇なのであります。これまさしく、一個の人間の命は地球よりも重いという、人間ないしは生命を王座にすえ、はるか二十一世紀を望む、哲理の光芒といえましょう。

この根源的変革運動に、難がきそわないはずがありません。妨害の波浪が高まらないはずはないのであります。どうか皆さんは、人生と広布の途上になにが起ころうとも、未聞の大業なるがゆえの必然の試練と受け止め「賢者はよろこび愚者は退く」（御書全集一〇九一㌻）の御金言のままに、胸を張って進んでいってください。

だれびとも、それぞれの悩みをもち、また将来にかける夢をいだいております。病弱の人が健康になりたいという願い、住むに家なき人がせめて一家団欒の場をもちたいというせつなる願望、みずからの色心に荒れ狂う貪欲、修羅の衝動を克服しようとする必死の努力等々――こうした多種多様な願いをもちながらも、なすすべを知らず、悶々として楽しまざる日々を過ごしているのが、通常の人生といえましょう。

だが本因妙の仏法においては、いかなる人であれ、みずからの願いを、久遠元初の妙法の当体であ

る御本尊にかけることにより、未来の輝ける人生が開けゆくのであります。

いな、厳密にいえば、人それぞれの願いが、久遠の本因と冥合した瞬間、因果倶時で、結果そのものが生命の内奥にはらまれてしまうのであります。電源にスイッチを入れたとたん、暗かった部屋のすみずみまで電光に照らしだされるように、その瞬間、すでに生命の奥底では、宿命転換が成し遂げられ、未来の実証を呼び寄せる永遠無量の宝珠が積まれているのであります。

これ、ひとえに宇宙本源の当体たる御本尊に、三世十方の諸仏の因位の万行、果位の万徳がそなわっているからであり、御本尊の仏力、法力の無量無辺なるがゆえであります。もはや釈尊の爾前経の仏法のように、過去の悪業を未来永劫にわたって断ちゆく修行をする必要はありません。たとえ過去に少しも福運を積んでいないとしても、御本尊を信じ祈る一念のなかに、因位の万行が流れこみ、果位の万徳が満ちあふれ、未来の燦たる黄金道の実証を、現在のこの瞬間に開くことができるのであります。

ゆえに大聖人は、流罪の地・佐渡において「当世・日本国に第一に富める者は日蓮なるべし」（御書全集一二三㌻）とも、また「流人なれども喜悦はかりなし」（御書全集一三六〇㌻）ともおおせなのであります。

ともあれ、御本尊の御建立によって、末代の荒凡夫の私どもが、久遠元初の御本仏の生命と感応し、合一できる道が開かれた。いな、一切衆生を久遠元初の仏と同じ尊極の当体ならしめようとされたところに、御本仏大聖人の大願があったのであります。

「御義口伝」には「此の我等を寿量品に無作の三身と説きたるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱うる者是なり」（御書全集七二〇ページ）とおおせられ、「今日蓮が唱うる所の南無妙法蓮華経は末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり豈今者已満足に非ずや」（同ページ）といいきられております。

ただし、いうまでもなく、御本尊を受持するといっても、大切なのは信の一字であります。しかも「受くるは・やすく持つはかたし・さる間・成仏は持つにあり」（御書全集一一三六ページ）とおおせのように、信の一字をどこまで持続させ、深めていくか――そこに観心の成就のカギがある。

「一生成仏抄」に「深く信心を発して日夜朝暮に又懈らず磨くべし何様にしてか磨くべき只南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを是をみがくとは云うなり」（御書全集三八四ページ）とおおせのように、朝晩の勤行を欠かすことなく、たんたんと水の流れるような信心を貫いていっていただきたいことをお願い申し上げます。

四大声聞の歓喜はわが歓喜

四大声聞の領解に云く「無上宝聚・不求自得」云云、我等が己心の声聞界なり

譬喩品の〝三車火宅の譬え〟を聞いた中根の四大声聞、すなわち摩訶迦葉、迦旃延、須菩提、目犍

連の四人が、領解した喜びを述べた言葉であります。

いっさいの仏法の究極であり、釈尊の因行果徳のすべてを収めた具足の法である妙法を、いまわれわれは求めずして得ることができた、ということです。それは、この妙法を説いてくれた仏への感謝をあらわした言葉でもある。

いうまでもなく、法は求めてこそ得られるものであります。しかるに「求めざるに得たり」とは、仏の大慈悲のゆえといわなければなりません。だからこそ、四大声聞は心から歓喜し、仏に感謝の気持ちを込めて、この言葉を述べたのであります。

しかし、もう一歩厳密にいえば、これら声聞の弟子たちは、なにものも求めなかったわけではありません。まさしく、それをあらわしているのが三車火宅の譬えであります。

この譬え話をここで詳しく述べることはいたしませんが、長者が火事になった家から子供たちを誘いだすために、日ごろ子供たちがほしがっていた羊車、鹿車、牛車が、いま門の外にあるから出てごらん、と呼びかける。子供たちが急いで出てきたのは、そういった車をほしがっていたからです。

三車とは、声聞、縁覚、菩薩の三乗の法をあらわしております。これら三乗を求める心は、きわめて強いものがあったわけであります。しかし、父の長者は、子供たちに三車でなく、ずっとすばらしい大白牛車を与えた。すなわち、三乗の法でなく、最高の一仏乗の法、妙法を与えたということであります。

一仏乗の法、成仏の境涯は、あまりにも高く壮大で、声聞の弟子たちにとっては、想像すら及ばな

いものでありました。想像できないくらいですから、それを求める心が起きなかったのは当然です。

求めたのは、三乗の法という小さな安っぽい宝石でありましたが、この法華経にいたって仏から与えられたのは、求めもしなかった一仏乗の妙法という無上宝聚であったというのが、この文の意味であります。

これは、そのまま、末法の今日の御本尊を信受した私どもにも、当てはまるのではないでしょうか。御本尊を信受しようという気になった動機は、ほとんどの場合、人生、生活のうえでの、低い次元の小さな願いであったにちがいありません。成仏という最高の境涯を思い描いて、それにあこがれて信心に入ったという人は、おそらく皆無に等しいでしょう。

むしろ、仏といえば死んだ人のことと思い、成仏とは死ぬことだぐらいの認識しかありませんから、成仏をめざそうなどといわれると「縁起でもない」と思った人がいるのではないでしょうか。

ところが、信心を始めて、仏法を深く学ぶにつれて、仏とはけっして死人のことではなく、智慧と福徳と生命力に満ちた、最高の人格完成の姿であることが理解できるようになった。そして御本尊は、たんに小さな願いを実現させてくれるだけの存在ではなく、仏の生命の当体であり、私ども凡夫を無上の仏にしてくださる尊極の宝聚であることを、しだいに明確に知るにいたったのであります。

まさしく「無上宝聚・不求自得」と叫んだ四大声聞の歓喜の生命は、御本尊を受持した私どもの己心のなかにあるのであります。

信力、行力を奮い起こす精進を

つぎに「自得」ということでありますが、「自ら得る」とは、みずからのなかに得ていくことであり、みずからの力で得るということであり、さらに自由自在に得ていくことであります。

仏界の大生命は、御本尊と自身との真剣な冥合の作業のなかに湧現するものであり、しょせん、自得とは信心であり、受持即観心であります。御本尊は絶対の対境であり、御本尊なくしては私たちの成仏、観心はありえない。しかし同時に、受持すなわち、みずからの信心より発する修行精進がなければ、御本尊の功力が顕れるはずがないことも明らかであります。

なお、声聞界とは、声を聞くという名称が示すように、仏の説法、仏法の話を聞き、求める求道心をあらわします。求道の心とは、みずからの現状に甘んずることなく成長し、向上していこうとする心です。そうした求道、向上の心があってこそ、仏法の偉大さ、すばらしさは身にしみて感じられ、理解されてくることを忘れてはなりません。

この声聞について、信解品には、四大声聞が「無上宝聚・不求自得」と領解したことによって、いわゆる二乗根性を大きく脱皮して、真の声聞への大転換を成し遂げたことが説かれております。

「我等今者、真に是れ声聞なり。仏道の声を以って、一切をして聞かしむべし。我等今者、真に阿羅漢なり。諸の世間、天人魔梵に於いて、普く其の中に於いて、応に供養を受くべし」（妙法蓮華経並開

結二七五ページ）と記されております。

すなわち、自己の悟りのためにのみ、仏の声を聞いていた声聞たちが、ひるがえって、人々のために、仏の声を聞かしめる声聞として、見事に蘇ったことをあらわしております。

法華経以前の声聞について「開目抄」には「二乗は自身は解脱と・をもえども……父母等を永不成仏の道に入るれば・かへりて不知恩の者となる」（御書全集一九二ページ）と破折されています。

寂しい、孤独の世界に陥っていた声聞、増上慢とエゴイズムの暗闇の淵に沈んでいた声聞、また、それゆえに爾前権教において厳しく呵責され、自身が低くみていた大衆からもかえって軽んじられた声聞が、法華経にいたって、仏界という思ってもみなかった無上の宝聚を得て、大衆のなかへ仏の声を聞かしめる戦いへと出で立っていったのであります。

長い叱責に耐えて仏に随従してきた声聞たちは、法華経のこの開会を聞き、どれほど歓喜し、弘教の誓いを新たにしたことでありましょうか。経にいわく「歓喜踊躍」と。いまこそ、声聞の真実の使命が明らかにされたのであります。

この法華経の開会がなければ、声聞の修行はたいたずらごとにすぎません。法華経のこの二乗作仏が、珠玉の原理とされるのはそのゆえであります。

「我等が己心の声聞も、また法華経の声聞として、仏の声を聞かしめる戦いへと回転させていくべきでありましょう。

「御義口伝・譬喩品」には「仏道の声を以て一切をして聞かしむ」との文に関して、つぎのように記

されております。

「乃て身子此の品の時聞此法音と領解せり、聞とは一切とは法界の衆生の事なり此の音声とは南無妙法蓮華経なり」（御書全集七二二㌻）とあります。一切とは一切衆生のことである。一切の衆生の生命内奥から尊極なる仏界を湧現せしむる力こそ、妙法なのであります。

仏道の声とは、まさしく南無妙法蓮華経でありまして、ゆえに、南無妙法蓮華経の声をみずから聞き、体得するとともに、三悪道、六道の巷をめぐりゆく民衆に聞かしめてこそ、真の声聞、真の弟子となるのであります。したがって、五濁悪世の真っただ中で、名字凡夫の当体のまま妙法弘通に邁進する地涌の菩薩こそ、真実の声聞であります。

ある識者が「声は生命である。生命の奥深いところから発するものである。その声の響きは、宇宙に向かって発せられている」という意味の発言をしていましたが、まことに含蓄の深い言葉であります。

音吐朗々たる勤行、唱題の声は、まさにこれであり、いかなる名音楽にもまして宇宙と人間の生命を揺り動かしていくでありましょう。またその人がひとたび実践の場に立てば、大誠実より発するその音声は、固く凍てついた大地をたたき割るように、人々の心を閉ざす三毒の殻を、かならずや打ち破っていくものであります。

「若し能く駈遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子真の声聞なり」との涅槃経の文は、このことをさして

いるのであります。

妙覚の釈尊はわれらが血肉

「我が如く等くして異なる事無し我が昔の所願の如き今は已に満足しぬ一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」、妙覚の釈尊は我等が血肉なり因果の功徳は骨髄に非ずや

この段について、日寛上人は、自受用身に約して師弟不二を明かした文とされております。

引用の方便品の文のままでいえば「我が如く」の〝我〟は、まだ迹門始成正覚の釈尊であります。しかし、大聖人がここで引用された元意からいえば、この〝我〟は、久遠元初の自受用身と拝するのが当然であります。ゆえに日寛上人は「自受用身に約して」と釈されているのであります。

この点については「御義口伝・方便品」の「如我等無異・如我昔所願」の項に「我とは釈尊・我実成仏久遠の仏なり此の本門の釈尊は我等衆生の事なり……此の我等を寿量品に無作の三身と説きたるなり」（御書全集七二〇㌻）と述べられていることを考えあわすとき、さらに明瞭となりましょう。

したがって「如我」の〝我〟とは末法御本仏日蓮大聖人であられます。御本尊を受持し、真剣な唱題に励むとき、私どもの凡身が即、御本仏大聖人とまったく等しい、無作の三身とあらわれるとのお

おせであります。

「妙覚の釈尊は我等が血肉なり」とは、それをいわれている。「妙覚の釈尊」とは無作三身如来であり、「我等が血肉」とは凡夫の肉身であります。すなわち、凡夫即極の原理をおおせられたものにほかなりません。ここに「我等」とありますが、これはもとより、別しては日蓮大聖人のことであるのはいうまでもありません。

「因果の功徳は骨髄に非ずや」とは、これまで繰り返し申し上げたごとく、無作三身、自受用身の仏の因果の功徳が、ことごとく御本尊を受持する私どもの生命のなかに具わるとのおおせであります。なお「因果の功徳」をさらに掘り下げていえば、因とは九界であるがゆえに、凡夫、人間としてのあらゆる幸せをいい、相対次元の幸福になります。それに対して、果とは仏界でありますから、仏としての内奥に開かれた絶対的幸福をいうと考えられます。

ともあれ、三大秘法の御本尊を受持したとき「妙覚の釈尊は我等が血肉なり」とあらわれることを、日寛上人は「我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華経と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり」と教えられております。

久遠元初の自受用身としての大聖人の御生命を顕されたのが御本尊であり、ゆえに、御本尊を信受して南無妙法蓮華経と唱えるとき、私どもも自受用身の当体となる。師匠である大聖人も自受用身、弟子である私どもも自受用身であり、師弟不二となるのであります。

この段を拝するたびに、私は、日蓮大聖人の一切衆生を成仏させんとの大慈悲と、仏法の本源的な

平等観の深さを思わざるをえないのであります。

一人の人間の色心こそもっとも尊貴

古今のほとんどあらゆる宗教は、人間を超えたなんらかの〝絶対者〟を設けるのを常としてきました。西欧の宗教などでは、人間と神とのあいだに深い断層があり、ただ絶対神たる神の恩寵にすがる以外にない存在です。仏法においては、われわれ衆生が仏であり、尊極無上の存在なのであります。

ゆえにこの大聖人の宣言は、あらゆる人間蔑視の古き宗教に訣別を告げると同様に、権威の〝絶対者〟の手から人間の尊厳を取り戻そうと模索しつづけてきた、近代の多くの人権宣言の根源を射ぬく、高らかな人間宣言ともいうべき師子吼であったといってよいと考えます。

私は、大聖人が「妙覚の釈尊」を「血肉」に、「因果の功徳」を「骨髄」に配されていることに、甚深の意義が感じられてならない。

「佐渡御書」には、御自身のことをさされて「心こそすこし法華経を信じたる様なれども身は人身に似て畜身なり魚鳥を混丸して赤白二滴とせり其中に識神をやどす濁水に月のうつれるが如し糞嚢に金をつつめるなるべし」（御書全集九五八㌻）とおおせであります。月の映れるがゆえに、金をつつめるがゆえに、一人の人間の色心こそ、なににもまして尊貴なのであります。

三災七難の嵐が荒れ狂うなかで、必死に戦い生きていく民衆一人ひとりに、大聖人がどれほどの愛

情の眼をそそいでおられたかは、察するにあまりあるでありましょう。「日蓮は・なかねども・なみだひまなし」（御書全集一三六一㌻）とのおおせが、あたかも肉声のように胸中に響いてならないのであります。

思うに私どもの運動も、どれだけこの御本仏の生命に感応できるかということにつきるといえましょう。一人が一人の宝塔を開き、そのまた一人が一人の宝塔を開く――この地道にして着実な生命の開拓作業のなかに、御本尊との感応の響きは、いんいんと幾重にも、幾次元にも広がっていくのであります。

インドの詩人タゴールに、つぎのような言葉があります。

「偉大な心をもった人の体験から出てくる生きた言葉の意味はどんな体系的論理的な解釈によっても理解しつくされるものではない。それはひとりひとりの生活を通しての理解によって、たえず解明されなければならない。またそれは、ひとりひとりの新しい意味の発見によっていよいよその神秘と奥深さを増すものである」と。

ひじょうに含蓄の深い言葉であると思います。私どもの御書の拝読は、たんに文字を追い理解することで終わるものではけっしてありません。生命自体に刻んでいくのであります。「八万四千の法蔵は我身一人の日記文書なり」（御書全集五六三㌻）とのおおせのように、仏法はわが身一人の胸中にあるのであります。

多くの聖典のように、権威の響きをもって、上から人間を教化、訓導するのではなく、生命の内よ

り、生きて生きぬく不壊の力を引きだしてくれるのが御書の金言であります。だからこそ、生活のなかに生きているのであり、事の仏法なのであります。

ともあれ、人間の心を動かすものは、人間の心であります。大聖人は、みずから凡夫僧の姿をとって御出現になり、つねに庶民と哀歓をともにしつつ、心のヒダにふれながら、この原理を私どもに事実のうえで示してくださいました。これは、蔵の財、身の財の次元の満足をはるかに超えた心の財の充足、すなわち絶対の幸福境涯であります。

その点について、恩師は、つぎのように述べています。

「されば、この大宗教を信ずることによって生命のリズムは宇宙のリズムに調和して、生きている幸福をしみじみと感ずるのである。生命の歓喜こそ、幸福の源泉である」

私どもの一生成仏の目標は、まさにこの一点にあります。「我が如く等しくして異なること無からしめん」との、御本仏の大慈悲に浴する道は、ここにしかないことを確信しつつ、障魔に紛動されず、わが道を進んでいこうではありませんか。

已心の仏界と輝く三仏

宝塔品に云く「其れ能く此の経法を護る事有らん者は則ち為れ我及び多宝を供養するなり、乃

至亦復諸の来り給える化仏の諸の世界を荘厳し光飾し給う者を供養するなり」等云云、釈迦・多宝・十方の諸仏は我が仏界なり其の功徳を受得す「須臾も之を聞く・即阿耨多羅三藐三菩提を究竟するを得」とは是なり

ここは、無作三身に約して親子一体を成す段とされております。

なぜ無作三身に約すかといいますと、この宝塔品の文中の「我」とは釈迦であり、これは無作の報身にあたります。「多宝」は無作の法身、「諸の来り給える化仏」は法華経の会座に来集した十方世界の分身諸仏であり、これはそれぞれの世界に応現した仏でありますから、無作の応身にあたります。この「釈迦・多宝・十方の諸仏」を無作の三身というのであります。

さて、このように法華経の会座に列なった三仏は、無作の三身をあらわしているのであり、「能く此の経法（御本尊）を護る」者は、無作の三身を供養したと同じ功徳で、ちょうど子が親の跡を継ぐように、その跡を紹継して無作の三身とあらわれるのであります。したがって、これは、私どもの己心の仏界をあらわしているといわれるのであります。

ここで私が強調したい点は、「護る」ということの意義であります。経典には、諸処に法を護れと説かれている。「護る」というと、なにか保守的な響きがありますが、たんに消極的に護るということではない。真に仏法の流れを滅尽させないためには、よりすすんで人々に伝え、発展させるという姿勢がなければならない。なぜなら、不幸の人々に手をさしのべ弘教していくなかに、真の仏法の生

命があるからであります。

しかも御文には「能く護る」とある。私はこの「能く」ということに注目していただきたいと思うのであります。すなわち「能く」とは、受動ではなく能動であり、また身口意の三業で実践することであります。

護るとは、まず第一に、徹底して御本尊を護持しぬくことであります。それが、尊いみずからの仏界の生命を護りゆくことになるのであります。

「阿仏房御書」に「多宝如来の宝塔を供養し給うかとおもへば・さにては候はず我が身を供養し給う」（御書全集一三〇四㌻）とあるごとく、御本尊を護持することは、即わが生命を護持することになるのであります。御本尊におしたためのように、私どもの胸中の仏界は十界三千のさまざまな生命の渦巻くなかにある。修羅の命もあれば、地獄、畜生、餓鬼界の生命もある。さらに二乗や菩薩の働きも、本有のものなのであります。

ゆえに、少しでも油断をすれば、仏界の生命は、九界の厚い雲の陰に隠れてしまうのであります。ゆえに私どもは、つねに精進を忘れず、本来、眩いばかりの光沢を放っているこの妙法の主体が、障魔の雲によって覆われることのないよう、心して御本尊を護持しぬいていきたいものであります。

水は、つねに流れていなければ腐ってしまいます。生命も同様であります。「月月・日日につよりを給へ・すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし」（御書全集一一九〇㌻）とおおせのように、朝晩の勤行を欠かさず実践し、日々新たな目標に挑戦しつづける姿勢を貫いてください。

第二に、自分一人のみでなく、尊い仏子を護っていただきたい。仏子を護ることが、即経法を護ることに通ずるからであります。

御書には「伝持の人無れば猶木石の衣鉢を帯せるが如し」（御書全集五〇八㌻）、「持たるる法だにも第一ならば持つ人随って第一なるべし、然らば則ち其の人を毀るは即ち其の法を毀るなり其の子を賤しむるは即ち其の親を賤しむなり」（御書全集四六五㌻）等とおおせであります。ゆえに、仏子を徹底して護りぬくことが大切であります。

皆さん方にとって、因縁深き仏法兄弟であり、それぞれが尊い使命をもつ、地涌の菩薩の眷属であります。どうかそれらの人々を「起って遠く迎うべきこと、当に仏を敬うが如くすべし」の経文のごとく遇していっていただきたいと思います。

第三に大切なことは、互いに激励しあい、薫発しあえる尊い仏法教団を護りぬいていくことであります。大聖人は「されば仏になるみちは善知識にはすぎず、わが智慧なににかせん、ただあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば善知識たいせちなり、而るに善知識に値う事が第一のかたき事なり」（御書全集一四六八㌻）とおおせであります。すなわち、われわれ凡夫が仏道を成じていくには、善知識にあう以外にない。熱さ冷たさを知るほどの才覚があったならば、ひたすら善知識を求めよ、と述べられているのであります。

ここで私が訴えたいことは、私ども一人ひとりが、ほかならぬこの善知識であるということであります。一生成仏と広宣流布という尊い使命のもとに、互いに寄りあって自己をみがく友と友――これ

が日蓮正宗創価学会なのであります。ゆえに、この尊い法団、尊い同志を大切にし、尊重していくことが、護るということの重要な意義となってくるのであります。

私どもの教団は、世界的にみれば、まだまだこれからであります。しかし、そこに深く流れ通う御本仏の威光は、十年、二十年後には、かならずや人類の未来を明々と照らしだすでありましょう。「是あに地涌の義に非ずや」（御書全集一三六〇㌻）との御金言に照らして、それは私どもの確信であります。ゆえに、自身を護り、正義の仏教教団を護るということは、即、全人類の未来を護ることに通じていくということを知っていただきたいのです。

「我聞」は全生命で聞く義

つぎに「須臾も之を聞く……」は法師品の文でありますが、ここでいう「聞く」とは、御本尊を受持することであります。

「聞く」との言葉を、受持、実践の意に拝すべきことを示されている例としては「御義口伝」の「如是我聞」の項があります。そこで大聖人は「我聞とは能持の人なり」（御書全集七〇九㌻）との天台の釈をうけて「不信の人は如是我聞の聞には非ず法華経の行者は如是の体を聞く人と云う可きなり」（同㌻）と教示されております。

したがって「須臾も之を聞く」とは、ほんの一瞬でも御本尊を信受し実践するならば、「阿耨多羅

三藐三菩提を究竟するを得」――すなわち、無上の仏の悟りを得ることができるということです。これは、御本尊を信じ唱題しているその瞬間瞬間、私どもの生命に仏界が顕れているとのおおせです。

この瞬間瞬間の持続、また、真剣な祈りで出発し、報恩感謝の唱題で終わる一日一日の積み重ねのなかに、一生成仏があり、未来永劫の成仏が決定づけられることを忘れてはなりません。

なお、ここで「我聞」についての「法華文句」の文を紹介しておきます。

「問ふ、応に耳聞と言ふべし、那ぞ我聞と云ふや、答ふ、我は是れ耳の主、我を挙げて衆縁を摂す、此れ世界の釈なり」

「聞く」という本義が、ここに明らかに読みとれます。すなわち、たんに耳で聞くという作業ではなく、生命全体で迫ることが「聞」の趣旨なのであります。〝衆縁〟すなわち眼、耳、鼻、舌、身、意のすべてが作動して、〝我〟すなわち生命全体で聞くのが「我聞」の意義であるというのです。

また「釈論に云く、凡夫に三種の我あり、見と慢と名字とを謂ふ」という一節もあります。「我」といっても、いかなる「我」なのか、これが問題です。邪見の我や、慢の我であっては、真実の仏法の精神の流入は妨げられてしまうのであります。

「如是我聞」の「我」とは、具体的、直接的にいえば阿難をさしております。この阿難について、いまあげた釈論（智度論一）には「阿難は是れ学人、邪我無くして能く慢我を伏す、世の名字に随て我と称するに咎無しと」と説かれている。阿難のごとくに、慢心、邪見等を吹き払って、清浄な求道の生命で迫りゆくときに、初めて「聞く」ことになるということであります。

「聞を釈せば、阿難は仏の得道の夜生れ、仏に侍すること二十余年、未だ仏に侍せざる時は応に是れ聞かざるべし」との記述もあります。「仏に侍す」ことが「聞」の本義だというのであります。ここから「聞」とは、もはやたんに言葉として聞くというものではなく、生命のふれあいのなかに、その真義があることを知るのであります。

その生命それ自体のふれあいを妨げるものが怨嫉であります。御書には「障り未だ除かざる者を怨と為し聞くことを喜ばざる者を嫉と名く」（御書全集二〇一㌻）との妙楽の言が引かれております。

ここに「聞くことを喜ばざる」とある点に注目したい。〝忠言耳にさからい良薬口に苦し〟といわれているように、自分にとってきらいなこと、生命に痛いことは聞きたくないというのが、凡夫の常でありましょう。逆に、お世辞や甘言に、いとも簡単に乗ってしまう。こうした通性に棹さしていたのでは、そこには自身の成長などありえず、気の合った者や自分の取り巻きにのみ甘え、かえって墓穴を掘ってしまうことは必定であります。

「太閤記」のなかに、毛受勝助家照という人物が描かれています。柴田勝家の小姓頭であったのですが、若いに似ず、なかなかの見識の持ち主でありました。あるとき彼は、主君・勝家が、大将としての振る舞いが粗暴にすぎるのをみて、勝家から乞われた本のあるページを目につきやすいように折っておく。開いてみるとその個所には、暗に勝家を戒める文々句々が書かれてあった。それを読んだ勝家は、露骨にいやな顔をして、それ以来、毛受家照を遠ざけてしまうのであります。

しかし、真の忠臣はいったいだれであったのか。後に柴田勝家は、賤ケ嶽の戦いにおいて、秀吉軍に壊滅に近い打撃をこうむるのですが、そのとき死中の勝家を救ったのが、ほかならぬ毛受家照でありました。彼は敗走する主君に対して、大将の居所を示す馬印を手渡すように、再三にわたって懇願する。そして、ついにそれをもらいうけるや、わずかな手兵を引きつれて、秀吉軍のなかに取って返し、壮烈な戦死を遂げる。勝家は、馬印を望む毛受家照の姿を見て、翻然として悔い、悟るのであるが、すでに後悔先に立たずであった。そして勝った秀吉は、毛受家照の首を篤く弔い、彼の母を探しだして、丁重な慰問を行ったと伝えられています。

もとよりこれは、戦国時代史をかざる忠君道徳にまつわる一つのエピソードではありますが、私はここには、貴重な教訓が含まれているように思います。すなわち勝家は、毛受家照の言を聞くことを喜ばなかったのであります。その安逸におぼれる彼の怠惰と傲りが、後に賤ケ嶽の敗北をよび、北の庄での壊滅をもたらした遠因であったといえましょう。

ともかく私どもは、積極的に和合の輪のなかに飛び込んでいき、みずからも語り、人のいうことをよく聞いてあげるという姿勢を忘れてはなりません。怨嫉ということの恐ろしさは、本来、同心であるべき地涌の連帯のなかで、心の壁をつくってしまうことであります。そして、ひとたび壁をつくってしまうと、四壁に閉じ込められた狭い空間のなかで、三毒の炎は燃えさかるばかりであります。これでは、みずからの福運を消してしまいます。

ゆえに、個人指導、一人対一人の親身の激励が大切となってくるのであります。組織といっても、

せんじつめれば一人の人間をどう成長させるかの一点に、存在意義があるといえましょう。たしかに悩める友、嘆きの友の声を聞いてあげることは、たいへんな生命力を要するものであります。また、自分が苦手な人の前に胸襟を開いていくことは、ひじょうな勇気を必要とするでありましょう。しかし、そこをあえて突破してこそ、自身の人間革命もあるのであり、宮殿堂の奥深く眠っていた友の魂を呼び起こしていくことができるのであります。ゆえに私は、まず勇気をもって動こう、そして友の声を聞き、そして語ろう、と申し上げておきたいのであります。

御書に「竹の節を一つ破ぬれば余の節亦破るるが如し」（御書全集一〇四六㌻）と示されています。これは一人の成仏の重要性を述べられたものですが、このたとえを応用して、どんなつらいことがあろうと、それを避けずに「一つの節」を突破するならば、思ってもいなかった境涯が開けてくるものであるということがいえましょう。そのことを確信して、まず祈ることが大切であります。なぜなら御本尊への強盛な祈りが内なる真我を輝かせていくことになるからであります。

仏も菩薩もわが生命に厳然

寿量品に云く「然るに我実に成仏してより已来・無量無辺百千万億那由佗劫なり」等云云、我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり、経に云く「我本菩薩の道を

行じて・成ぜし所の寿命・今猶未だ尽きず・復上の数に倍せり」等云云、我等が己心の菩薩等なり、地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属なり、例せば大公・周公旦等は周武の臣下・成王幼稚の眷属・武内の大臣は神功皇后の棟梁・仁徳王子の臣下なるが如し、上行・無辺行・浄行・安立行等は我等が己心の菩薩なり

この一節は、久遠元初に約して君臣合体を示すと、日寛上人は釈されております。

すなわち、久遠元初の仏も私どもの己心にあり、地涌千界の菩薩も私たちの己心にあることを示し、ゆえに、久遠元初に立脚した私どもの一個の生命のなかに、君（仏）、臣（菩薩）ともにあると、合体を明かされているのであります。

まず寿量品の「然我実成仏……」の文は、五百塵点劫の成道を明かしたものでありますが、大聖人は「五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏」とおおせのごとく、久遠元初に所顕の無始無終の仏を示されております。

ここにいう「乃至」とは、後より前に向かって、つまり久遠本果の時から、久遠名字の時をのぞんで「乃至」といわれているのであります。したがって「乃至」とは「当初」の意であり、たとえば「当体義抄」に「釈尊五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に成道を唱え能証所証の本理を顕し給えり」（御書全集五一三㌻）とある「五百塵点劫の当初」にあたると拝するのであります。

また日寛上人の文段によると「我実成仏已来」は、通じて三身を明かしており、我は即無作の法身、成仏は即無作の報身、已来は即無作の応身となります。

つぎに「我本行菩薩道」の文は、因位の修行を明かしたものであり、ここでは本因の久遠元初の無始の九界をあらわしております。一方、さきの「我実成仏」の文は本果の久遠元初の仏をあらわし、この両者がともに私どもの己心にあることが示されているのであります。

日寛上人は「我本行菩薩道　所成寿命　今猶未尽」を〝流入の義〟と釈され、たとえば「衆流の海に入るが如し」といわれております。すべての河川がやがて大海にそそぐように、仏においては、いっさいの万行が果徳の海にそそぎこんでいるとの意であります。

もとより、これは久遠の仏についていわれているのでありますが、この原理は、私たちの実践においても、きわめて重要なものです。世間では、いかに辛酸をなめ努力を重ねたとしても、所期の目的が成就されるとは限りません。むしろ悲しい結末となることが少なくない。因は確実に果をもたらすのではなく、努力が空転し、幾多の悲劇を生んでいるのが現状であります。

しかし、御本尊を根本とした場合には、因はかならず果にいたるのです。いな、果のなかにすべての因は流れているのであります。広布のために尽力し、御本尊のために働いたことは、すべて無駄なく自身の財産となっていくのであります。

ちょうど深山に発した流れが、だれの目にも入らない微々たるものであったとしても、やがて平野へと躍りでて、大海へと流入しゆくようなものであります。と同じく、いかなる陰の目立たない努力

も確実に未来の大海へと向かっていく、その大海こそ大涅槃の大海、すなわち真実の幸福の世界なのであります。これが〝流入の義〟であります。

強い信心に立っての広布のための辛労は、すべて三世にわたる、功徳への揺るぎない道であると確信してください。

さて「地涌千界の菩薩は已心の釈尊の眷属なり」とおおせのように、地涌の菩薩の九界の生命が、つねに己心の釈尊の眷属として仏界を助け、その働きを顕していくと明示されております。このように久遠元初の仏も、地涌千界の菩薩も、私どもの己心にあることをお述べなのであります。

大聖人は、以上を説明するために、二つの例をあげられております。一つは、中国の太公や周公旦の例で、周の武王を助け、武王なきあとは幼い成王を助けても立てた。もう一つは、わが国の歴史にとられたもので、神功皇后を助けた武内宿禰は、神功皇后の孫である仁徳王子の臣下としても補佐した。この君臣の関係を例とし、已心の地涌千界の菩薩は已心の釈尊の眷属として、已心の釈尊を助け顕していく関係にあることを示されているのであります。

君臣の関係といいますと、なにか封建的なイメージがありますが、大聖人がここで述べられているのは、自身の生命に冥伏するところの仏界の生命を限りなく躍動させていくための君臣合体であり、自己の胸中の内なる高揚を説かれたものであることはいうまでもありません。

さらにいまの譬えのなかに、じつは重要な視点があります。太公とは太公望であり、周の文王に会

い、見いだされてその師となり、文王の死後はその子・武王に仕え、そして武王の滅後には武王の子である幼い成王を助けた歴史上の人物であります。周公旦は武王の弟で、成王にとっては叔父にあたります。その周公が成王が長ずるまで摂政となって政事を担当している。また、武内宿禰が助けた仁徳王子も、主君はいずれも幼児であります。

これは、私どもが御本尊を信受したとき、仏界の生命が顕れるけれども、まだきわめてかよわい状態であることを表現されているのであります。

では、この仏界の生命を揺るぎなく力強いものとするためには、なにが必要なのか。それは臣下にあたるところの地涌の菩薩の働きが不可欠であり、地涌の菩薩があってこそ、仏界の生命は脈動するのであります。

仏法広宣こそ地涌の本懐

地涌の菩薩とは、妙法流布への実践の生命であります。なぜなら、地涌の菩薩とは、悪世末法に仏法を流布する使命をうけるために法華経の会座に涌出した菩薩だからであります。つまり仏法広宣を己が使命と決定した実践の生命こそ、地涌の菩薩の真骨頂なのであります。

したがって、私どもの己心に住する仏界を助け、守り、育てていくためには、広宣流布への使命を深く自覚した力強い実践が不可欠であることを、この譬えをとおして教えられていると拝することが

できます。

振り返ってみれば、創価学会の今日あるは、まさしく獄中における初代会長牧口常三郎先生と二代会長戸田城聖先生の、壮絶無比な死身弘法の戦いあってのゆえであります。恩師戸田先生は、よく男子青年部に語られていました。

「男というものは、自分がどこの分野にいようとも、どのような仕事を担おうとも、当面する現実と、ともかく戦うことだ。私は獄中にあって『いまは獄にいる。獄にいるかぎり、私はここで戦うのだ』と決めていた」と述懐されておりました。

その獄中で戸田先生は、翻然としてご自身の深い仏法上の使命を自覚され、偉大な境涯を得られたのであります。

「出獄の日を期して、私はまず故会長に、かく、こたえることができるようになったのであった。『われわれの生命は永遠である。無始無終である。われわれは末法に七文字の法華経を流布すべき大任をおびて、出現したことを自覚いたしました。この境地にまかせて、われわれの位を判ずるならば、われわれは地涌の菩薩であります』と」(創価学会の歴史と確信)

この恩師の生命の叫びのなかに、私どもの原点の誓いと不動の使命があり、この自覚に立った不屈の実践行動によって、今日の未曾有の広布伸展があるのであります。

皆さんはどうか、妙法広布をめざす仏法運動にわが身をおき、敢然と成長、前進していくところに、日蓮大聖人がおおせのごとく、内証の仏界、わが己心の力強き生命を厳然と守り、薫発させ、た

くましく成長させていく地涌の金の道があることを深く銘記していただきたいのであります。

つぎに「上行・無辺行・浄行・安立行等は我等が己心の菩薩なり」とおおせであります。法華経涌出品において、この四菩薩を上首として、六万恒河沙の地涌の菩薩が、大地から陸続と出現したと説かれております。これはもとより、別して日蓮大聖人の己心の生命についていえることでありますが、総じての立場で拝すれば、私どもも、この四菩薩の生命をすべて己心にたたえているということであります。

御本尊に唱題していったとき、あの法華経の涌出品に説かれる無量の地涌の菩薩も、わが己心の菩薩であり、はたまた一切経の仏菩薩、そして、あらゆる十界の衆生は、すべてわが己心のなかにあるのであります。ゆえに天台大師は「説己心中所行法門」（己心の中に行ずる所の法門を説く）とされたのであります。結局、この己心の偉大な生命を説き顕していく対境が「観心の本尊」であり、その実践が「観心」すなわち御本尊を受持することにつきるのであります。

社会も揺れ動いています。それにつれて、人の心も猫の目のように揺れ動いていくでありましょう。しかし、私どもの信念のなかには、大宇宙と己心との偉大な律動が脈打っております。すなわち、御本尊という根源と、信仰という不動の一点があるということは、なににもまして、人生における強いささえであります。

なお、以上のように「我が如く等くして……」から「……己心の菩薩なり」の段について、師弟不

二、親子不二、君臣合体に拝するのは、主師親三徳具備の人本尊を開顕せられた「開目抄」の本意も包含されているゆえであり、そして、末法の人本尊としての御本仏日蓮大聖人の御生命は、いっさいそのまま、観心の御本尊のなかに移されているとの深意であります。

大聖人即御本尊、御本尊即主師親三徳具備の御本仏との甚深の義を深く拝するとともに、御本尊を拝することのありがたさを、いまさらのように実感するものであります。

一身一念法界に遍し

妙楽大師云く「当に知るべし身土一念の三千なり故に成道の時此の本理に称うて一身一念法界に遍し」等云云

妙楽大師の摩訶止観輔行伝弘決の文であります。ひじょうにむずかしい文でありますが、この段の結びとして掲げられた文であり、成仏の境地の広大深遠を知るうえで欠かすことのできない文でありますので、日寛上人の文段をよりどころに詳しく拝しておきます。

まず「身土」とは久遠元初自受用身の身土であり、十界互具・一念三千の御本尊になります。

「一念の三千」の〝一念〟とはわれらの信心の一念であり、したがって「身土一念の三千なり」と

は、自受用身の身土といっても、御本尊、妙法を信ずる私たちの一念のなかの三千である、ということであります。

「故に成道の時此の本理に称うて一身一念法界に遍し」とは、私どもの成仏の姿をいわれております。「本理」の〝本〟とは本地久遠元初であり、〝理〟とは難思境智の妙法であります。「本理に称う」とは、久遠元初の境智の妙法にかなうことであります。「一身一念法界に遍し」の〝一身〟とは五大からなる私どもの身体即生命であり、これは所証の境となります。〝一念〟は信心の一念で能証の智となります。すなわち、私どもの生命がそのまま、久遠元初の境智冥合の自受用身と顕れるとの意であります。

したがって、まとめてこの文の意味をいえば、御本尊が依正不二の一念三千の当体であるがゆえに、この御本尊を受持した私どもの生命も、即一念三千の当体となるということであります。受持即観心の義は、ここにつきるのであります。

と同時に私は「一身一念遍於法界」の文は、仏界の生命がいかに限りなく広大なものであるかを、また、衆生の生命も同様であるということを教えているように思われるのであります。たんに人界に十界を具足することの説明ではなく、衆生の生命がいかに大きく尊いものであるかを、雄大なスケールをもって示している文であり、真実の自由の境地を説いた御文であると読んでおきたいのであります。

「一身一念法界に遍し」といっても、抽象の世界の話に聞こえるかもしれない。しかし、現代科学の

知識は、人間生命がいかに巨大で精密な構造をもっているか、その一端を明らかにしております。

現代科学が明かす多くの例証

たとえば、われわれの肉体をとってみても、一つ一つて身体の中に入ってくる物質の解毒作用を行いますが、現在わかっているだけで約二百種類の働きを有している。おそらく千種類の作用にものぼると推定される。肝臓が作りだしているさまざまな化学物質の一つひとつは、人工的に作りだすことはむずかしい複雑なものばかりで、まさに一大化学工場と称すべきである。それを工場で作るとすれば、巨大な化学工場群を動員しても、まだ十分ではないともいわれている。肝臓の悪い人は精神状態にも影響し、夜中に突然、起きだしたり、夢遊病者のようになるという。

また、肺胞の壁の全面積は、比較的大きな部屋四つ分ほどの広さになる。その肺が血液を清浄にするのであります。その血液を運ぶ血管の長さは九万六千キロ。地球を二周してあまりあります。それをすべての人間がそなえているのであります。

これが脳になると、もっと規模が大きい。千数百グラムの大脳には約二百億の脳細胞がある。その神経細胞には突起があって、それがからみあっていくことによって知能の発達があるわけですが、そのからみあいの仕方によって個性ができていきます。その組み合わせたるや、地球的規模を超えて宇

宙的規模である。計算によれば、われわれを取り囲んでいる島宇宙のすべての原子の数よりもまだ多くなるともいうのであります。

単純な計算では、小さな電子卓上計算機でもわれわれはかなわない。大きな電算機ともなると、複雑な計算もいっきょにする。しかし、判断、創造などの高度な働きは、小さな脳細胞のほうがはるかに優れている。大脳に匹敵する人工頭脳をつくろうとすれば、現在の科学では地球の全表面を覆うほど巨大なものになるだろうとされております。それほどの規模と労力で作ったとしても、はたして人間の頭脳を超えるものが作れるかどうかは疑問であるといいます。

このように、外見たかだか一メートル数十センチの身体の臓器も、一つ一つが地球的規模、宇宙的規模の科学技術に相当する働きをもっているのであります。なおかつ、大脳にしても、身体の各機能にしても、本来もっている力の数分の一を、人間は一生のあいだに使用するにすぎないのであります。

これが人間の精神になると、もっと深遠で広大であります。意識的な精神活動さえ、いかに複雑多岐であるか、人間の生みだした人文、社会、自然の諸文明の成果をみるまでもなく、十分に知るところであります。

ところが、フロイト等によって見いだされた無意識の世界にいたると、もっと広大な世界であるといわれます。氷山の海面上に現れた部分を意識とすれば、氷山の海面下の部分を無意識にたとえられる。われわれが意識をもって行動していると思っているものも、じつは無意識の命ずるところによっ

て、意識が引きだされているとさえいわれている
心理学者・宮城音弥氏は、その著「精神分析入門」のなかで、無意識の力が意識や行動を動かす、つぎのような実例をあげております。私たちが偶発行動であると思っているものでも、その底には、無意識の深海からの衝動が働いているという例です。

チューリヒに住む人が、休日に自宅で楽しく過ごそうか、それとも行きたくはないがルツェルンの知人との約束があるから、そこを訪問しようかと迷っていた。しばらく躊躇したあと、思いきってルツェルンに向かった。そして、その途中の駅で朝刊を読みながら機械的に乗り換えた。ところが、やがて車掌がやってきて、初めて自分がチューリヒに帰る列車に乗り込んでいたことがわかったというのであります。

この事実は、自宅で楽しい休日を過ごしたいという無意識の願望のほうが、その人の義務的な力、意識の判断よりも強く、彼の行動を支配したのはまぎれもなく無意識の力のほうであったことを示している、と心理学者は主張しております。

また私たちは、ある人に会おうと思っているのに、ふと、この約束を忘れてしまうことがありますが、つぎのような興味深い例があります。

ある人が知人を招待しなければならないことができたが、内心ではそれを望んではいなかった。彼は知人に電話をかけて「ご招待したいのですが、日時を正確に覚えていないので、のちほど手紙で招待状をお送りします」といった。しかし、彼は、当日をすぎるまで、招待状を出すことをすっかり忘

れてしまったのです。この場合も、その知人に会いたくないという無意識の行動が、彼の行動を支配してしまったと考えられます。

プリルは「われわれは小切手の入っている手紙よりも、請求書の入っている手紙のほうを置き忘れやすい」と述べておりますが、人間心理の一つの模様であるといえましょう。

また、無意識からの力が色法の世界である身体に影響を与えずにおかないことも、精神身体医学でのかずかずの実験によって指摘されているところであります。

九州大学の池見酉次郎教授は「心療内科」という著書のなかで、無意識の力が身体にさまざまな病気をおこすことを立証していますが、二、三の実例をとりあげてみたいと思います。

ある中年の未亡人の社長の話ですが、両側の太ももの付け根あたりから足先までしびれて、自力で立つこともできず、なにかにすがらなければ一歩も歩けない状態になってしまった。

その女性は、結婚してまもなく夫の戦死を知らされ、それ以後は遺児をかかえて自活してきた苦労人ですが、四年ほど前に、ある会社を興して社長として経営に励んできた。ところが、二年ほど前に、信頼していた従業員に売掛金をごまかされて巨額の穴をあけてしまい、ひじょうなショックをうけ、そのときから人の心をまったく信用できなくなってしまったというのであります。同時に、そのころから、自転車に乗っているとき、足のしびれ感に気づくようになって、あらゆる治療をうけたにもかかわらず、いっこうによくならない。

この女性の場合、足が立たなくなった原因は、二年前のショックであり、自分以外は信頼できないという無意識の不信感であったことは明らかですが、本人はそれに気づくすべもなかったのであります。人間への心からの信頼を取り戻すことによって、初めてこの病気も治療しうるのであります。

「立つあたわざるショックのために、ほんとうに足が立たなくなった」という痛ましい話であります。

また、このような例もあります。数か月前からジンマシンと吐き気を訴えているサラリーマンの話ですが、この人の症状を日記につけさせたというのであります。

そうすると、毎週土曜日には、まったく無症状であり、日曜日の午後からジンマシンがではじめ、水曜日になると吐き気の症状があらわれてきた。さっそく、会社での状況をきくと、彼は職場で上役とうまくいっていなかった。仕事の内容も自分の希望に反していた。それが入社以来ずっと続いていたのです。

池見教授は、この病気の原因は、入社のときからの無意識の感情があらわれたものであると示唆しております。

心の内奥の感情のもつれ、未来への絶望、自己不信などが身体のうえに表出して、ジンマシンや吐き気をひきおこしていたのです。その証拠が、土曜日だけは解放感を味わうから無症状になり、日曜の午後になると憂うつになり、不安や絶望が症状をおこさせているという日記の事実でありました。

このように、人間生命の無意識層にうずまく、情念や衝動の葛藤が、色法の世界を混乱させ、病気をさえひきおこしていくのであります。

しかし、いままで述べたようなことは、まだ比較的生命の浅い領域の出来事にすぎないのです。人間生命の内面に広がる領域は、われわれの想像さえできない深層へとつながっていくのであります。

ユング心理学者であり、京大教授の河合隼雄博士は「無意識の構造」で、心の構造をつぎのように明言しております。

「ユングはこのような例から、人間の無意識の層は、その個人の生活と関連している個人的無意識と、他の人間とも共通に普遍性をもつ普遍的無意識とにわけて考えられるとしたのである。ただ、それはあまりにも深層に存在するので、普通人の通常の生活においては意識されることがほとんどないわけである」と。

また、普遍的無意識については「個人的に獲得されたものではなく、生来的なもので、人類一般に普遍的なものである」と。

この普遍的無意識という一個の人間生命の最深層は、その名の示すとおり、人類共通の基盤を形づくっているのであります。そして、この深層には、人類発生以来、二百万年ともいわれるすべての精神的遺産が流れこんでいるというのです。

たとえば、これもユング心理学では有名なことでありますが、ユングの弟子、C・S・ホールとV・J・ノードバイは、その著書のなかで、人間の蛇(へび)恐怖、暗闇(くらやみ)恐怖について、つぎのような趣旨のことを明言しております。

人間は、生まれてきてから、蛇や暗闇を経験することによって、これらの恐怖を身につけたのでは

なく、ただ経験は、恐怖の素質を強化し、再確認するだけである。われわれは、蛇や暗闇を恐れる素質を遺伝的に受け継いでいる。人類の先祖が無数の世代にわたって恐怖を経験してきたからである。つまり、このことは、人間生命の深層に、先祖の経験が記憶として刻印されている事実の証明となるのであります。

だが、無意識の大海は、人類先祖の経験を包含しているにとどまらない。さらには、人間以前の動物の先祖の経験さえもふくんでおり、最終的には、この大宇宙流転のあらゆる足跡が、一人の人間の最深部に脈動しているのであります。

ユングのいだいたイメージは、人類約四十億が一個の生命体であり、さらに、この大宇宙自体が巨大なる生命的存在である、そして、一人ひとりの人間は、その宇宙生命の根源力から生命エネルギーをえて活動する細胞のごときものであったと思われるのであります。この事実を、ユングは普遍的無意識という概念でさし示そうとしたのであります。

宇宙に遍満する仏界の生命がわが身に

「一身一念法界に遍し」の原理は、現代の自然科学の着目した一個の生命の広がりを、直観的にさらに宇宙大に拡大してとらえたものであります。仏法のこの発想は鋭く、限りなく人間の可能性を謳いあげたものであります。自然科学が到達した人間の潜在力の解明は、いまや地球的規模をも超えるに

いたっているといえる。

しかし、仏法の説いているのは、さらに広く、法界遍満であります。これほど広く強大なものはない。それをわが一身に湧現した存在を「自受用身」というのであります。

われわれが成就するところの自受用身とは「自ら受け用いる身」であります。これを「御義口伝」においては「ほしいままに受け用いる身」と読まれている。仏身とは、みずからを自由自在に回転させ、大宇宙をも揺り動かす生命のことであります。

「我即宇宙」は、けっして抽象の世界のことではなく、億劫の辛労を尽くす仏界の振る舞いにあっては、現実の荘厳な事実であると拝すべきであります。

しかも、この原理によれば、仏身と同じ力が潜在していることは明瞭であります。あと必要なのは、大聖人と同じ生命を、いかにすればわが生命のなかにも、仏身と同じ力が潜在していることは明瞭であります。あと必要なのは、大聖人と同じ生命を、いかにすればわが生命のなかに湧現することができるかであります。

そのために、大聖人は「観心の本尊」を御図顕してくださったのであります。しょせん「受持即観心」の義が成り立つのは、これを受持すれば観心になる、すなわち仏の悟達になっているという本尊、「観心の御本尊」を顕されたればこそであります。この「観心の御本尊」即三大秘法の大御本尊御図顕に、日蓮大聖人の生涯にわたる御苦闘があられたのであります。

ゆえに、末法一切衆生のために、信仰の根本対象として大御本尊を建立された弘安二年十月、大聖人は、余は二十七年にして出世の本懐を遂げたと叫ばれたのであります。

その間の大難は筆舌に尽くせぬものであり、しかも、対告衆たる純信の末法民衆の代表というべき、熱原の農民信徒の死身弘法の実証をみられて、初めて御図顕され、授与せられたのであります。まさに、弘安二年の大御本尊こそ、仏法の深遠の極理と御本仏の広大無辺の慈悲とが凝集された尊極以来、連綿幾星霜――。「日蓮が慈悲曠大ならば・南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」（御書全集三二九ページ）の御金言のままに、戒壇の大御本尊の御威光は、わが国一千有余万の人々の生命を照らし、全世界にまで及びつつあります。

そして教学の年・第二年を迎えた今、創価学会創立五十周年、そして宗祖第七百遠忌の佳節は、文字どおり指呼の間にあります。

どうか皆さん方におかれては、各自の一生成仏のため、全人類の幸福と平和のために、信心を奮い起こし、勇気をもって行学の二道を進んでいっていただきたいことをお願いして、講義を終わらせていただきます。

（「大白蓮華」昭和五十三年一月号・二月号掲載）

「佐渡御書」講義

文永九年三月

与弟子檀那

五十一歳御作

（御書全集　九五六ページ～九六一ページ
編年体御書四七一ページ～四七六ページ）

大難の時こそ強盛な信心を

この御書は、日蓮大聖人が、もっとも大きい難を受けられ、佐渡の国へ流されたときに、弟子檀那に与えられた御書です。したがって「佐渡御書」と申し上げます。

このとき、多数の弟子檀那が退転しました。そこで、大聖人が〝退転なんかしてはいけない、いまこそ強盛な信心をする時ではないか〟と、強く指導された御文です。

当時、流罪というのは死罪につぐ重い刑罰で、食べ物もあまり与えられず、大聖人は、ときには雪を食(め)しあがって、飢(う)えをしのがれていました。そういうひどい待遇だったのです。

師匠がそのような大難にあっていますから、当然、弟子檀那のなかには、臆病(おくびょう)になり、退転した人もいたでしょう。

日蓮大聖人は〝こういう難にあった時こそ退転してはいけない。いま信心しきっていけば、成仏は

疑いない〟といわれています。それが、この御書の元意です。

> 此文は富木殿のかた三郎左衛門殿大蔵たう辻十郎入道殿等さじきの尼御前一一に見させ給べき人人の御中へなり、京鎌倉に軍に死る人人を書付てたび候へ、外典抄文句の二玄の四の本末勘文宣旨等これへの人人もちてわたらせ給へ

「此文」すなわち「佐渡御書」は、富木常忍、そしてまた三郎左衛門（四条金吾）等のお弟子の方々に与えられたものです。

富木常忍も四条金吾も、大聖人のおんもとで、もっとも活躍した大信者です。それから「大蔵たう辻のつじ十郎入道」――この人はあまり御書にでていませんが、このように、大聖人が大迫害を受けられたときに、名前をおしたためくださった人でありますから、やはり強信な人であったと考えられます。

「一一に見させ給べき人人の御中へなり」――ここは、一人ひとり、多くの弟子に、この御書を見せてあげなさい。そして信心を奮起させなさい。この御書は、弟子檀那全員に与えるのだということです。

「京鎌倉に軍に死る人人」――この御書は、文永九年三月のものですが、この年の二月には、京都と

鎌倉で、北条一門の争い、すなわち自界叛逆難があって、そうとうの人が死にました。そのときに、やはり、日蓮大聖人の弟子、信者のなかの武士で、亡くなった人もいるであろう。その人たちの名前を、みんな書いてよこしなさい。ぜんぶ追善供養してあげますよ、という大聖人の大慈悲です。

大聖人御自身が、ほんとうは佐渡の国でたいへんな御難儀をしていらっしゃる——御本仏の大確信でいらっしゃるということより、亡くなった人々のことを思われて、追善供養してあげますよ、抜苦与楽の供養をしてあげますよ、とおおせになっているのです。

この一文をみても、大聖人が仏さまでいらっしゃるということが、よくわかるわけです。

そして「外典抄」また「法華文句」「法華玄義」あるいは勘文、宣旨等の資料も、こちらへ来る人に託して持ってきてもらいたいといわれています。

日蓮大聖人が、どれほど勉強なされていたかということがわかるでしょう。また、大聖人は根本をぜんぶ知っていらっしゃいます。しかし、さらにこのように、参考として、本を持っていらっしゃいとおっしゃっているのです。

世間に人の恐るる者は火炎の中と刀剣の影と此身の死するとなるべし牛馬猶身を惜む況や人身をや癩人猶命を惜む何に況や壮人をや、仏説て云く「七宝を以て三千大千世界に布き満るとも

手の小指を以て仏経に供養せんには如かず」取意、雪山童子の身をなげし楽法梵志が身の皮をはぎし身命に過たる惜き者のなければ是を布施として仏法を習へば必仏となる身命を捨る人。他の宝を仏法に惜べしや、又財宝を仏法におしまん物まさる身命を捨べきや、世間の法にも重恩をば命を捨て報ずるなるべし又主君の為に命を捨る人はすくなきやうなれども其数多し男子ははぢに命をすて女人は男の為に命をすつ、魚は命を惜む故に池にすむに池の浅き事を歎きて池の底に穴をほりてすむしかれども網にかかる、鳥は木にすむ木のひき事をおじて木の上枝にすむしかれどもをにばかされて釣をのむ、人も又是くの如し世間の浅き事には身命を失へども大事の仏法なんどには捨る事難し故に仏になる人もなかるべし

「世間に人の恐るる者は」――人が「恐ろしい」ということに二つある。

一つは「火炎の中と刀剣の影」――これは今でいえば戦争です。原爆も、水爆も入ります。大聖人のこの一節をみても、戦争反対です。戦争はみんな恐ろしいのです。この戦争を防ぐのが仏法です。正法です。

また「此身の死するとなるべし」――この生命が死ぬということも恐ろしい。その生命の問題を解明し、解決するのが、大聖人の仏法です。

したがって、絶対平和主義と、生命の根本的な救済、これが三大秘法の仏法なのであります。

牛や馬でもなお命を惜しむ、いわんや人身においてをや、重病人でもなお命を惜しむ、生あるもの

は死にたくはないのです。たくさん病人がいますが、どんな病人でも、少しでも長生きしようと努力しています。死にたくない証拠です。

「何に況や壮人をや」――まして健康な人が、死をこわがるのは当然です。

仏が薬王品に説いていうのには「七宝を以て三千大千世界に布き満るとも」――これは、金銀等の最高の七つの宝をもって、三千大千世界に布き満たして仏に供養するということであり、それよりも「手の小指を以て仏経に供養せんには如かず」――自分自身の体をいためて、仏に供養するほうが、この場合には小指を例にあげられていますが、もっと偉大なる供養になるのだということです。

三千年も昔に、ここまで経文に説かれているということは、ひじょうに革命的なことです。インドは、今日においてもそうですが、当時はいまよりもはるかに貧富の差がはげしかったのです。金持ちといったらたいへんな金持ちだった。その金持ちよりも、ほんとうに自分の体を使って仏に仕える、また、仏法のために活躍するという庶民の人々を、大きく宣揚しているのです。

なかんずく、大聖人の仏法は庶民のための仏法であり、それであって、また全体に通ずる仏法なのです。ぜんぶ、広く救っていける仏法です。

「雪山童子」は身をなげうって仏法を求めた。「楽法梵志」という人は、身の皮をはいで、それに経文を書きとめ、仏法を習おうと思った。そのようにして、みな仏になっている。

「身命に過たる惜き者のなければ是を布施として仏法を習へば必ず仏となる」

ということは、当時は、このような布施をして仏法を習わなければならなかった。したがって、そ

の身をなげうって、身命を捨てて仏法を習った人が、みな仏になったのです。

今の時代は、御本尊に題目をあげて、大聖人の仏法を人に知らしめていく折伏によって、大功徳を得られるのです。昔は小乗教ですから、そのような修行をしなければならなかった。大聖人の仏法は、大乗のなかの大乗で、根本的に違うわけです。

しかし、原理は同じです。信心という心がけ、求道心は同じでなくてはいけないのです。

「身命を捨る人・他の宝を仏法に惜べしや」――身命を捨てて、随力弘通をしようという人が、他の宝を惜しんだらおかしいではないか。

「又財宝を仏法におしまん物まさる身命を捨べきやう」――仏法のために宝を惜しむような、ケチくさい人間が、広宣流布のために、どうして、もっとも大事な命を捨てるであろうか。したがって、仏になれるわけがない。「世間の法にも」――一般社会の法は世間法、仏法は出世間法といいます。一般世間、社会の法のうえからみても、重恩をば命を捨て報じているではないか。世間のことでも、重恩を感じて命を捨てた例は、歴史をみればたくさんあります。

「又主君の為に命を捨る人はすくなきやうなれども其数多し」

忠臣蔵で有名な大石内蔵助をはじめ四十七士は、主君のために命を捨てております。西洋でも、東洋でも、日本でも、このような例はたいへん多い。しかし大聖人は、そのような必要はないとおっしゃるのです。主君のためなどに捨てる必要はない。あくまでも、御本尊に題目をあげて生ききって、御本尊に題目をあげながら死んでいきなさいといわれています。これだけでよいのです。

「男子ははぢに命をすて」――今はそんな恥で命を捨てる人などはいませんが、男というものは見栄や体裁を重んずるものです。

「女人は男の為に命をすつ」――これは気をつけなさいよ。これは今でも多いのです。男のために命を捨てたりしたら損してしまいます。御本尊以外に、信じて絶対にまちがいのないものはないのです。

「魚は命を惜む故に池にすむに……」――ここは、命ほど大事なものはないということです。生命の尊厳を明かしていらっしゃるのです。色心不二の法理は、一貫して生命の尊さを説いています。

新興宗教はみな、生命力を奪う宗教です。人々を奴隷にします。小乗教等は、厳しい戒律などによって、人々の主体性、個性を殺していく宗教です。日蓮大聖人の仏法は、人々の生命力、智慧を最高に発揮させていく宗教です。根本的に違います。

真言宗は、どうしても長男、一家の柱が倒れていく。残るのは女の人ばかりです。父親がいなくなってしまう。豊臣秀吉も、やはり真言宗です。だから長男がだめになってしまったのです。それから念仏は〝念仏無間地獄〟のとおりです。また神道の場合には精神障害者が多い。戦争中は神道が日本を支配しました。その代表的立場にいたのが大川周明で、やはり精神障害者です。

結局、ほんとうの生命の確立、幸福、それを説いていらっしゃるのは、大聖人の仏法だけです。

「池の浅き事を歎きて」――魚は、池が浅いとつかまってしまうから、それで池の底の方へ行って、穴を掘って、隠れよう隠れようとしているというのです。しかし、エサによって釣られてしまう。

「鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の上枝にすむ」――鳥は木の低いことをこわがって木の上の

ほうに住むけれど、やはりエサにだまされて、網にかかってしまう。

「人も又是くの如し世間の浅き事には身命を失へども」――人もまた同じようなものだ。恋愛に失敗して心中してしまったり、夫婦ゲンカ、兄弟ゲンカをして殺してしまったり、それから海や山に遊びに行って、大事な命を捨ててしまったり、それでは鳥や魚と同じようだというのです。生命の前途がわからないという点では、動物と同じなのです。

一生涯、正しく生きいきと、いな永遠に崩れない幸福への道を、今後歩んでゆくには、この仏法をたもち、鏡とし、レールとする以外にない、といわれているのです。世間の浅きことに大切な命を捨ててはいけません。

「大事の仏法なんどには捨る事難し故に仏になる人もなかるべし」

世間の浅いことにはみんな命を捨てているけれども、大事の仏法には命を捨てない。ゆえに仏になる人も少ない。絶対の幸福、色心ともに幸福に満ちみちた人生を、生ききっていける人は、ほんとうに少ないとのことです。

摂受・折伏時によるべし

仏法は摂受・折伏時によるべし譬ば世間の文・武二道の如しされば昔の大聖は時によりて法を

行ず雪山童子・薩埵王子は身を布施とせば法を教へん菩薩の行となるべしと責しかば身をすつ、肉をほしがらざる時身を捨つ可きや紙なからん世には身の皮を紙とし筆なからん時は骨を筆とすべし

仏法の修行には、時代によって、摂受と折伏の二通りがあります。

正法、像法年間までは、釈尊の仏法ですから摂受になります。末法の場合には折伏です。「時によるべし」とは、そう立て分けなくてはいけません。釈尊在世、正法、像法年間の時は摂受、それから末法は、邪智、謗法の時といって、人々の根性が悪い時です。

その時は、御本尊を根幹として、折伏していかなくてはいけない。なんのかんのと非難されるけれども、折伏によって大勢の人が御本尊を知り、救われてきたのです。末法の衆生は、人のいうことをなかなかきかない。生徒が学校の先生のいうことをきかないでも、すべて、折伏の精神でいく以外にないのです。

「譬ば世間の文・武二道の如し」

世間、社会においては、戦争の時は〝武〟です。平時は〝文〟です。摂受、折伏もそのようなものだというのです。末法のように、思想、宗教が紊乱して国が乱れている時には、闘諍言訟といって戦争の時代ですから、折伏のいき方をする以外にありません。

仏法は、かならず「摂受・折伏時によるべし」です。摂受ということは、相手が信じているものを

打ち破らないで、やわらかく人の機根にあわせながら教えていこうというやり方です。

釈尊の場合には、法華経を説くまえは「四十余年未顕真実」といって、四十二年間、ほんとうのことをいわないで、衆生の機根を調節しながら説いていきました。これを摂受というのです。

しかし、法華経は随自意といって、釈尊自身の境界で、そのまま最高の悟りの仏法を説いた。その意味からいえば、これは折伏になるのです、ですから、釈尊の場合においても、摂受、折伏が、じつはあったわけです。

けれども、釈尊の仏法と大聖人の仏法を比べると、法華経も爾前経も、ともに釈尊の仏法は、ぜんぶ摂受になってしまうのです。ですから、在世、正法、像法二千年までは、いっさいが釈尊の仏法を根底にした仏法ですから、総体的に摂受ということになります。そして末法にはいった場合には、大聖人の仏法では、根幹がぜんぶ御本尊になりますから、いっさいの振る舞いが折伏の行動になります。

「昔の大聖は」――「大聖」というのは、仏と訳してもよいし、立派な菩薩と訳してもよい。この場合には「大聖」は雪山童子、薩埵王子等をさします。しかし、これらは結局、釈尊の過去世の姿ですから、仏になります。

昔の立派な人は、かならず時にしたがって仏法を修行しております。たとえば「雪山童子」、また「薩埵王子」――ともに釈尊が過去世において因位の修行をしていたときの名ですが、この人たちは、身を布施としなければ仏になれない時代であったがゆえに、自分の体を布施としてささげることを菩薩の修行としたのです。

以前、国語の本にも、雪山童子と鬼に姿をかえた帝釈天との対話がありました。あるとき雪山童子が、仏法を求めていると「諸行無常、是生滅法」と、これは涅槃経にある経文なのですが、それだけがどこからか聞こえてきた。後の句を教わりたいと一生懸命探すと、向こうの方に鬼がいる。そしてその鬼が、おまえの肉を食わせてくれれば後の句を教えてあげるといいます。そこで雪山童子が身を投げて、食べてくれというのです。すると鬼がパッと変わって、帝釈と現れた。じつは雪山童子の求道心をためしたというのです。そのことをおおせられているのです。

薩埵王子は、飢えのために子を育てられないでいた虎のために、自分の体を与えたといわれております。いまは肉屋へ行けば肉はたくさんあります。ですから、無理に自分の肉を食べさせる必要はないのです。

また、楽法梵志は、紙がなかったから、自分の皮をはいで経文の紙にしたり、または筆がなかったから骨を筆のかわりにしました。当時は、そういう修行をして仏になったのです。今は、紙はいっぱいあります。ですから、そのような修行は絶対に必要ない。

そのように現代では、当時とは、ぜんぜん修行法が違うのです。ところが、今の邪宗邪義は、ぜんぶ昔の修行法をやっているのです。大聖人の仏法の修行法は、最高に近代的なのです。二十一世紀、三十世紀、五十世紀、いな、末法万年尽未来際までの近代性をふくんだ仏法であり、修行法なのです。

今は、まだそのはしりですから、他の人々にはわからないのです。みな、いままでの釈尊の仏法と、天台仏法とか、神道とか、キリスト教とか、そういう先入観念で大聖人の仏法をみておりますか

ら、どうしても、正しい判断ができない。だから皆さんが立派に成長して、だんだん理解をさせてもらいたいし、時代が進めば進むほど、科学が進めば進むほど、しだいに仏法に対する理解が深まっていきます。ですから、少々の批判とか苦難などに負けてはいけません。

破戒・無戒を毀り持戒・正法を用ん世には諸戒を堅く持べし儒教・道教を以て釈教を制止せん日には道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて命を軽うすべし、釈教の中に小乗大乗権経実経・雑乱して明珠と瓦礫と牛驢の二乳を弁へざる時は天台大師・伝教大師等の如く大小・権実・顕密を強盛に分別すべし

ここは、正法、像法、末法の時にしたがって、正しい修行のあり方を示されております。

「破戒・無戒を毀り持戒・正法を用ん世には諸戒を堅く持べし」

正法時代の修行は、戒をたもつことです。もともと〝破戒〟とは戒を破る、〝無戒〟とは釈尊の戒をたもたないということです。正法時代は、破戒、無戒ではいけなかった。戒をしっかりたもつことが正しい仏道修行でした。

「儒教・道教を以て釈教を制止せん日には道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて命を軽うすべし」

これは、像法時代の、天台出現以前の、権大乗教が流布した時代です。

儒教とは、中国の孔子の教えです。道教とは、やはり中国古来の外道の教えです。儒教だとか、道教だとか、そういう外道が、釈教すなわち釈尊の説いた仏教を批判して、流布することを止めようとしたときには、道安法師とか、慧遠法師とか、法道三蔵等が、仏教を妨げる王と戦ったごとく、命を捨てて戦わなくてはいけないということです。

その当時の歴史は、資料はいろいろ残っておりますから、将来、諸君が大学へでも行ったならば調べていただきたいし、または慧遠法師とか、法道三蔵の伝記などを読んで研究してください。

「釈教の中に小乗大乗権経実経・雑乱して明珠と瓦礫と牛驢の二乳を弁へざる時は天台大師・伝教大師等の如く大小・権実・顕密を強盛に分別すべし」。

ここは全体として五重の相対から述べられています。

「釈教の中に小乗大乗」――これは大小相対です。このまえのところまでは内外相対です。

それから「権経実経」――これは権実相対です。それが雑乱して、乱れて、明珠――きれいな珠と、瓦礫――かわらのかけらと、また、牛とロバの乳を混同しているように、乱れている時は、天台大師や伝教大師のごとくに、大乗教と小乗教、権教と実教、顕教と密教とをしっかり判別していきなさい、とのおおせです。

ここで「顕教」とは、だれにでもわかりやすい仏にしか理解できない甚深の法門、法華経を意味します。浅い法門、爾前教をさします。また「密教」とは、

また「道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて」というところは像法の前半です。そしてこの段の「天台大師・伝教大師等の如く大小・権実・顕密を強盛に分別すべし」のところは像法の後半です。この論じ方からいって、つぎには、末法の日蓮大聖人の時代がくるのです。

師子王のごとき信心を

畜生の心は弱きをおどし強きをおそる当世の学者等は畜生の如し智者の弱きをあなづり王法の邪をおそる諛臣と申すは是なり強敵を伏して始て力士をしる、悪王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮が如し、これおごれるにはあらず正法を惜む心の強盛なるべしおごれる者は必ず強敵に値ておそるる心出来するなり例せば修羅のおごり帝釈にせめられて無熱池の蓮の中に小身と成て隠れしが如し、正法は一字・一句なれども時機に叶いぬれば必ず得道なるべし千経・万論を習学すれども時機に相違すれば叶う可らず

なんといっても「佐渡御書」の前半の肝心要はこの段です。ここさえはっきりしていればよいので

「畜生の心は弱きをおどし強きをおそる」

「畜生の心」とは、弱い者に対しては威張り、いじめて、強い者にはへつらうという、いやしい心です。こういう心であってはいけない。たとえ相手がどんなに強かろうと、悪い者に対しては断固、戦わなくてはいけません。

「当世の学者等は畜生の如し智者の弱きをあなづり王法の邪をおそる諛臣と申すは是なり強敵を伏して始て力士をしる」

「当世の学者」とは、大聖人御在世当時の学者、邪宗の僧侶たちです。また現在の学者にもあてはまります。これらの学者等は畜生のような心をもっている。「智者の弱き」――日蓮大聖人が、権力をもたず、お一人であるのをあなどり、権力者の横暴な力をおそれ、へつらっている。「諛臣」というのは、このような者をいうのである。

強敵を倒してこそ、はじめてその力の強いことを知ることができるのである。

「悪王の正法を破るに智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし」

「悪王の正法を破るに」――「王」とは権力者、「悪王」とは悪い権力者のことであり、ここでは北条一門のことをさしています。

「邪法の僧等が方人をなして」――時の権力者が正法を破ろうとしているそのときに、邪法の僧等が方人をなす、仲間になるというのです。大聖人御在世当時でいえば、極楽寺良観や建長寺道隆のこと

であり、現在でいえば、全日仏や新宗連がまったくこのとおりでしょう。

「智者を失はん時は」――「智者」とは、日蓮大聖人の教えを正しく信奉し実践している日蓮正宗創価学会も、その末流の一分にあたるといってもよいでしょう。そしていま、日蓮正宗そして創価学会を破壊しようとする陰謀が、しばしばあります。しかし、私たちはこの大難を喜ばなくてはならないのです。

なぜならば、このような情勢だからこそ、広宣流布の戦いに、師子王のごとき信心をもって励んでいくならば、その人は、かならずこの御金言どおりの結果になれるからです。

「師子王の如くなる心をもてる者」の「心」とは信心です。たいへんなときほどがんばれば、偉大な功徳があるのです。

皆さんの日常生活においても、競争率の激しい試験に勝った場合に〝あの人は、なかなかがんばったな、頭がいいな〟と思うでしょう。競争が激しければ激しいほど、勝利の価値は大きいのです。これはオリンピックにしても、野球の試合にしても、世間の事象のすべてに通ずることです。仏法は道理ですから、その道理は同じなのです。

また「師子王の如くなる心」とは、私たちの信心に約していえば、あくまでも、困難にぶつかった場合に、御本尊を中心に題目を唱えて唱えて唱えぬいていく者という意味になります。個人においても、学会においても、広宣流布においても、結論はそこへきます。

しかし、題目を唱えるというだけのことなら、だれでもできます。ほんとうの師子王の心とは、あ

くまでも広宣流布を実現するという一念、戦いの信心がなくてはいけない。受け身でなく、積極的でなくてはならない。〝よーし、やるぞ！　みんな退転しても、自分はやるぞ！　断じて広宣流布するぞ、大聖人の教えを最後までいいきるぞ！〟と、その決意がなくてはいけません。

受け身の題目と、積極性の題目と、それは違います。積極性が師子王です。建設です。

戸田第二代会長は牢へ入られました。しかし〝断じて広宣流布する、負けてなるものか〟と決意され、題目をあげられたのです。それが師子王の心です。

建設的、積極的な強さ、同志を守ってみせる、広宣流布を勝ち取ってみせる、一人立ってみせるぞという、その強さがなくてはいけません。しかし、われわれはみな凡夫で、一人ひとりは弱いものです。だからこそ団結していきましょう。団結は力です。互いに励ましあっていくのです。また、人を励ましていけるような自分になっていくのです。

大聖人は御本仏だから、お一人で世界を変え、宇宙を動かされました。われわれは、そうはいきませんから、多数の人間が団結して、一つの目的に向かって、広宣流布を願って、題目を唱えていけば、大聖人御在世当時と同じように、世界をも変えていけます。今は民主主義の時代ですから、民衆が起ち上がる時です。その民衆の題目によって、大聖人の所作と同じようにさせてくださるのです。

「例せば日蓮が如し、これおごれるにはあらず正法を惜む心の強盛なるべし」

すなわち、大聖人こそ「師子王の如くなる心」をもって戦ってきた、もっともよい例である。これは、おごっているのではない、慢心しているのでもない。すなわち正法を惜しむ心が強く、民衆を救

おうという心が強いから、このように実践してきたのである。

私たちもまた、「正法を惜む心」が強盛でなくてはいけません。その人には仏界が湧現します。御本尊を大事にしよう、総本山を大事にしよう、仏法を守ろう、この心が大事なのです。そこから情熱がでる。丈夫の心が、脈々とでてくるのです。利己主義ではでません。

「おごれる者は必ず強敵に値ておそるる心出来するなり例せば修羅のおごり帝釈にせめられて無熱池の蓮の中に小身と成て隠れしが如し」

慢心している者は、かならず自分より強いものにあうと、恐れる心がでるものである。たとえば、おごりたかぶって大きくなっていた修羅が、帝釈に責められて、無熱池の蓮のなかに小さくなって隠れてしまったようなものだ、とのおおせです。

「正法は一字・一句なれども時機に叶いぬれば必ず得道なるべし」

「正法」とは日蓮大聖人の仏法です。具体的にいえば大聖人の御書が正法の一字、一句になります。これが末法の正法であり、成仏できる法です。他の経、釈、論ではだめなのです。

「千経・万論を習学すれども時機に相違すれば叶う可らず」

あらゆる哲学、あらゆる経典等を学んだとしても、時機に相違すれば、つまり現在においては、日蓮正宗の御本尊を根本としないかぎり、絶対に成仏することはできません。いくら東大でインド哲学をマスターして博士になったとしても、絶対的幸福境涯は得られない。

私たちは、日蓮正宗に入信できてほんとうによかったのです。そのことは、あとになって、皆さん

が、いろいろな時代を生き、人生の複雑性を知り、さまざまな体験を積んできて、初めてわかってきます。ですから御本尊だけはきちんと持っていなさい。あとで振り返ってみて、大勢の人々をみていけばわかります。

「立正安国論」の予言的中

宝治の合戦すでに二十六年今年二月十一日十七日又合戦あり外道・悪人は如来の正法を破りがたし仏弟子等・必ず仏法を破るべし師子身中の虫の師子を食等云云、大果報の人をば他の敵やぶりがたし親しみより破るべし、薬師経に云く「自界叛逆難」と是なり、仁王経に云く「聖人去る時七難必ず起らん」云云、金光明経に云く「三十三天各瞋恨を生ずるは其の国王悪を縦にし治せざるに由る」等云云

ここでは、自界叛逆難をはじめとする七難が起こっているのは、立正安国論の予言どおり、正法を用いない罰であり、日蓮大聖人を佐渡へ流した罪によるのであることを示されています。

「宝治の合戦」とは、宝治元年に、三浦一族が北条一族に対して謀叛を起こして滅亡した有名な合戦です。鎌倉幕府の内乱です。それから二十六年たって文永九年二月に、また内乱、自界叛逆難が起き

た。すなわち、北条時宗の兄時輔が、弟の時宗に執権職をとられたことを恨み、京都と鎌倉とで同時に叛乱を起こそうとして失敗し、殺された事件です。

「外道・悪人は如来の正法を破りがたし仏弟子等・必ず仏法を破るべし師子身中の虫の師子を食等云云」

外道、悪人は、如来の正法を破ることが絶対にできない。もし仏法が破れるとしたら、それは内部の者が破るのです。師子はどんな敵にも負けないが、自分の身中に発生した害虫には弱いのです。

皆さんも、創価学会を護る大事な役目があるのです。最後まで団結していっていただきたい。現在のことは、すべて最後は皆さんに、いっさいを任せていくための礎石なのです。ですから、みんな尊敬しあって、ガッチリ団結して、一人も師子身中の虫、悪人を内部からは発生させないぞ、という確信をもって進んでいっていただきたい。それを覚えておかなくてはいけない。

自分が師子身中の虫をわかしてもいけない。また、師子身中の虫なのです。これは私の決意です。それは、また代々の会長の精神でもあるのです。みんなで結束するのです。

会長は一人です。これは仕方がない。何人もいたら派閥になってしまいます。あとは皆さんが、御本尊を根幹にして、立派に成長し、そして世界の広宣流布を成し遂げようという異体同心の心で、お互いに尊敬しあい、信頼しあって進んでいっていただきたいのです。

「大果報の人をば他の敵やぶりがたし親しみより破るべし」

「大果報の人」とは、ここでは北条時宗のことをいいますが、もっとも大きい大果報の人は、大御本尊を持った人です。大御本尊を持った人は他には破られない。しかし内部からは、怨嫉や反感で破られてしまうのです。そのことは、十分気をつけていきなさいとおっしゃっているのです。

いままでは創価学会には、そんなことはありませんでした。だが、これから将来が問題である。というのは、みんな社会的に偉くなってしまう。そして、だんだんと信心を忘れてきて、我見がでてき、怨嫉が始まるのです。そのときに、それを食い止めていくのは、信心の伝統を護っていくのがあなた方です。

「薬師経に云く『聖人去る時七難必ず起らん』云云、金光明経に云く『三十三天各瞋恨を生ずるは其の国王悪を縦にし治せざるに由る』等云云」

薬師経に「自界叛逆難」と書いてあるではないか。このたびの北条一門の内乱は、幕府が、大聖人を島流しにしたから起こったのである。立正安国論の予言どおりです。それをわが弟子檀那はわかっていきなさい、とおっしゃっているのです。

日蓮大聖人は、御年三十九歳のとき、立正安国論で〝すでに、七難のうち五つの難が起きている。このまま北条幕府が正法を護持しないならば、さらに自界叛逆難、他国侵逼難が、かならず起こってくる〟と予言されていました。その自界叛逆難が、ここでまず的中したのです。

それからこのつぎに、他国侵逼難として、元寇があらわれてきます。すべて大聖人のおおせどおりです。

ところで、七百年過ぎた今日においては、その七難の起こる順序が逆次になっています。すなわち

他国侵逼難の太平洋戦争から始まったのです。今は自界叛逆難に移っています。日本じゅう、世界じゅうが自界叛逆難です。それから物価が上がるとか、七難がだんだんと現れてきている。疫病、これも七難のなかほどにでてきます。

仁王経のなかの「聖人」とは、日蓮大聖人のことです。大聖人が去る時とは、佐渡へ流された時です。鎌倉にいらっしゃればまだよかったのに流されたから、七難が厳然と起こってきた。

またじつをいえば、他国侵逼難も当時すでに起こっている。それは元の使いがすでに来ていて、その兆がありました。

それから最後に「金光明経に云く『三十三天……』」——これは天上界を三十三天に分けてあるわけです。ぜんぶの天上界が怒りをなす。瞋恨を生ずる。それは、国王が邪宗邪義をほしいままに流布させて、正法をおさえるから、三十三天が怒りをなして、自界叛逆難も起こるし、他国侵逼難もある。三災七難が競い起こるとの予言書です。

大聖人は全世界の棟梁

日蓮は聖人にあらざれども法華経を説の如く受持すれば聖人の如し又世間の作法兼て知るによて注し置くこと是違う可らず現世に云いをく言の違はざらんをもて後生の疑をなすべからず、日

蓮は此関東の御一門の棟梁なり・日月なり・亀鏡なり・眼目なり・日蓮捨て去る時・七難必ず起るべしと去年九月十二日御勘気を蒙りし時大音声を放てよばはりし事これなるべし纔に六十日乃至百五十日に此事起るか是は華報なるべし実果の成ぜん時いかがなげかはしからんずらん

「日蓮は聖人にあらざれども」とは、御謙遜です。「説の如く受持すれば」とは、色読です。大聖人が、身口意の三業で、法華経のままの実践をなさっているがゆえに「聖人の如し」、すなわち聖人であるということです。

「又世間の作法兼て知るによて」の「作法」というのは、理法と訳します。理の法、道理の法ということです。それは、悪人、正法誹謗の者ばかりがふえてくれば、世の中はどうなっていくか、それをまえもって見ぬいておられるのです。

「注し置くこと是違う可らず現世に云をく言の違はざらんをもて後生の疑をなすべからず」

ここで断言なさっているのは、大聖人が、立正安国論でなさった予言が、現世に厳然とあらわれてきたではないか、ということです。なにしろ大聖人が佐渡に御流罪になったので、みんな疑ったのです。疑ったけれども、現実には、大聖人が立正安国論で予言されたとおりになってきている。

この実証をみて、信心を全うするならば、かならず後生に成仏できることも、信じていきなさい。また、大聖人の門下は、かならず「現世安穏、後生善処」になるのだから、大聖人のいったことを疑わないで、素直に信心していきなさい、とのおおせです。

「日蓮は此関東の御一門の棟梁なり・日月なり・亀鏡なり・眼目なり」

「関東の御一門」ということは、一往は北条幕府ですが、再往は全日本ということです。全日本ということは、依正不二で、全世界ということになります。これは日寛上人の文段に、明瞭に示されています。

日蓮大聖人は、その「棟梁なり」――全世界の棟梁、柱である、との御文です。これは主師親の三徳のうち、主徳をあらわします。「日月なり・亀鏡なり・眼目なり」とは、日蓮大聖人の師徳をあらわしています。

「日蓮捨て去る時・七難必ず起るべし」

大聖人を流したから、当然、七難が起こっているのです。

たとえば、ここに、ひじょうに人柄のよい、そしてまた聡明な人がくれば、なんとなく雰囲気が変わるものです。きれいなお嫁さんがくれば、まわりの雰囲気が変わります。一人の人間で、そのように変わっていきます。ここにマイクを置けば、多数の人に大反響する、一個の当体でそうなるのです。一人のよい支部長がいれば、支部員がみんな変わる。よい部隊長がいれば部隊が変わる。悪い幹部がいると、みんなが迷惑をし、なんとなく悪影響がおよんでくるものです。一人の平凡な存在であっても、それだけ作用が大きいわけです。

ケネディが死んだときも、そのケネディはたった一人ですが、アメリカの国民にも、それから自由圏の人々にも、さらに共産圏の人々にも、なんらかの動揺を与え、注目をされました。それらもすべ

て、ただ一人の人間の作用です。

いわんや、日蓮大聖人は、宇宙の本源をぜんぶ悟っていらっしゃる末法の御本仏です。その方を佐渡へ流したり、いじめたりした場合には、宇宙に、大きい天変地夭、ならびにその影響によって、国土とか、社会に、なんらかの衝動、結果というものがあらわれないわけがありません。

「去年九月十二日御勘気を蒙りし時大音声を放てよばはりし事これなるべし」

この自界叛逆難、他国侵逼難のことは、前年の九月十二日、竜口の法難のとき、日蓮大聖人が平左衛門尉に向かって大音声でいったことである。わずかに六十日に蒙古の使いが来、百五十日で自界叛逆の現証が現れているではないか。

「是は華報なるべし実果の成ぜん時いかがなげかはしからんずらん」

日蓮大聖人を迫害した結果、自界叛逆難が起こってきた。しかし、これは華報、まだ軽い報いである。そのつぎの「実果の成ぜん時」、実果とは未来の重い果ということで、ここでは蒙古軍の襲来や国じゅうを巻きこむような内乱を意味しますが、そのときはいったいどうするつもりなのか、といわれているのです。

世間の愚者の思に云く日蓮智者ならば何ぞ王難に値哉なんと申す日蓮兼ての存知なり父母を打子あり阿闍世王なり仏阿羅漢を殺し血を出す者あり提婆達多是なり六臣これをほめ瞿伽利等こ

「日蓮智者ならば何ぞ王難に値哉なんと申す日蓮兼ての存知なり」

世間の信心していない人々は、日蓮大聖人がほんとうに智者ならば、どうして「王難」、すなわち竜口の法難や佐渡の流罪にあうのか、などと疑問に思っている。しかし日蓮大聖人は、それらの大難にあわれることは、「兼ての存知なり」、まえまえから知っておられたというのです。

阿闍世王は父の頻婆沙羅王を殺し、母をも殺害しようとした。また提婆達多は釈尊を殺害しようとして大石を投げ、釈尊の足の小指を破って血を出したし、多数の阿羅漢を殺しているのである。

「六臣これをほめ瞿伽利等これを悦ぶ」

謗法の人間は、そのような悪逆の行為をほめ、喜ぶものなのである。

日蓮当世には此御一門の父母なり仏阿羅漢の如し然を流罪し主従共に悦びぬるあはれに無慚なる者なり謗法の法師等が自ら禍の既に顕るるを歎きしがかくなるを一旦は悦ぶなるべし後には彼等が歎き日蓮が一門に劣るべからず、例せば泰衡が弟を討九郎判官を討て悦しが如し既に一門を亡す大鬼の此国に入なるべし法華経に云く「悪鬼入其身」と是なり

「日蓮当世には此御一門の父母なり仏阿羅漢の如し」

この御文が親の徳にあたります。さきにあげた主徳と御本仏であることをお示しになっているのです。

その大聖人を島流しにして、主君も家来も、みんな喜んでいるとは、哀れなことだ。また邪宗の法師徳をあわせ、大聖人は、三徳具備の末法の師等も、自分たちの謗法の罪が、大聖人の折伏によってすでに現れているのを嘆いていたが、このようにに大聖人が島流しにあったのをみて、いったんは喜んでいるであろう。しかし、後には、彼らの嘆きは、今の大聖人門下の嘆きに劣らない、たいへんなものになろう、といわれています。

「例せば泰衡がせうとを討九郎判官を討て悦しが如し既に一門を亡す」

藤原泰衡は、奥州の平泉にいた有名な豪族、秀衡の子供です。父の秀衡の遺言によって源義経をかくまっていたが、頼朝の圧力に耐えきれず、義経の味方であった弟の忠衡を討ち、義経を討ちました。しかしその後、頼朝の討伐をうけて、敗走の途中、家来の河田四郎に殺害されて、一族滅亡してしまったのです。

邪宗を信じている謗法の徒は、今は大聖人が難にあっているのをみて喜んでいるが、この例のとおり、後にはかならず滅びていくのだということです。

「大鬼の此国に入なるべし法華経に云く『悪鬼入其身』と是なり」

日蓮大聖人を島流しにして、みな喜んでいるのは、すでに日本中に謗法がはびこっているのである、とのおおせです。

日蓮大聖人に先業なし

日蓮も又かくせめらるるも先業なきにあらず不軽品に云く「其罪畢已」等云云、不軽菩薩の無量の謗法の者に罵詈打擲せられしも先業の所感なるべし何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出たり心こそすこし法華経を信じたる様なれども身は人身に似て畜身なり魚鳥を混丸して赤白二帝とせり其中に識神をやどす濁水に月のうつれるが如し糞嚢に金をつつめるなるべし

「日蓮も又かくせめらるるも先業なきにあらず」

日蓮大聖人が、このように佐渡の国へ流されたのも先業のゆえである、とのおおせです。

しかし、これは、あくまでも私ども末法の衆生を教化し、一生成仏せしむるために、因果の理法を示してくださったところにほかなりません。日蓮大聖人は久遠元初の自受用報身如来、人法一箇の当体であられますから、先業のあるわけがないと考えるのが道理です。

しかし大聖人も、少年時代、清澄寺にはいられ、道善房のもとで念仏も称えられたと思われます。

これらのことは、外用の姿の面においてではありますが、一つの罪障であるとも述べられております。

「不軽品に云く『其罪畢已』等云云」

ここで大事なことは、皆さんが信心をまっとうしていくために、どうしても三障四魔という具体的な現象なり、難がある。しかし、それらに信心で敢然と挑んでいったとき、「其罪畢已」（其の罪畢え已って）、すなわち罪障を消滅できる。そして、絶対的な幸福、永遠の幸福を確立することができるのです。

たとえば、お風呂へはいってよごれをとるでしょう。そのよごれはきたないですが、洗い去った後は、清潔になり爽快な気分になるでしょう。その道理と同じなのです。

したがって難を恐れてはいけません。莞爾としてりきっていく信心がなければ、一生成仏はかないて、その嵐というか、難というか、一つの現象を乗「不軽菩薩の無量の誇法の者に罵詈打擲せられしも先業の所感なるべし」

過去において不軽菩薩が、たくさんの誇法の連中に罵詈されたり、打擲されたのも、ぜんぶ過去世の誇法の所感であるということです。

「何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出たり」

日蓮大聖人は、貧乏な、賤しい、なんの特権も名誉もない家にお生まれになった。旃陀羅の家、すなわち漁師の家に生まれ、民衆のなかにお生まれあそばされた。これこそ大聖人が、民衆を救済され

る仏さまであるという証拠です。

大聖人は、どこまでも庶民の味方として振る舞っていらっしゃるし、説いていらっしゃるのです。皆さんが、究明すればするほど、実践すればするほど、大聖人の仏法の民主性がわかってきます。

なにしろ、まだ末法にはいって、わずか九百年前後です。末法にはいって一千年目が、西暦二千五十二年になるのです。末法万年尽未来際にわたる大聖人の仏法です。したがって、現在は土台のなかの土台です。先駆のなかの先駆です。時代が進めば進むほど、科学が進むほど、また、人々の社会観、人生観、生命観などが進めば進むほど、大聖人の仏法の正しさが証明されていくことは、絶対にまちがいありません。

「すこし法華経を信じたる様なれども」――御謙遜の立場でいわれています。凡夫僧のお姿です。

「身は人身に似て畜身なり」――大聖人の仏法は、どこまでも人間性を根本とした仏法です。虚像ではない。形式でもない。きらびやかでもないのです。ほんとうの人間性そのままの本源的な説き方をしていらっしゃるのです。

「魚鳥を混丸して」とは、魚や鳥を食べて自分の体ができるという意味です。「赤白二滴とせり」とは、お父さん、お母さんから生まれてきたということなのです。

「其中に識神をやどす濁水に月のうつれるが如し糞嚢に金をつつめるなるべし」

そのなかに識神、すなわち人間としての精神、生命を宿している。それはちょうど、濁った水に月が映っているようなものであるし、糞嚢に金を包んでいるようなものであります。

心は法華経を信ずる故に梵天帝釈をも猶恐しと思はず身は畜生の身なり色心不相応の故に愚者のあなづる道理なり心も又身に対すればこそ月金にもたとふれ、又過去の謗法を案ずるに誰か知る勝意比丘が魂にもや大天が神にもや不軽軽毀の流類なるか失心の余残なるか五千上慢の眷属なるか大通第三の余流にもやあるらん宿業はかりがたし鉄は炎打てば剣となる賢聖は罵詈して試みるなるべし、我今度の御勘気は世間の失一分もなし偏に先業の重罪を今生に消して後生の三悪を脱れんずるなるべし

「心は法華経を信ずる故に梵天帝釈をも猶恐しと思はず」

ここは大事なところです。皆さんも、これから十年先、二十年先、学会を背負っていくときに、この言葉を忘れないでもらいたい。

「心は法華経を信ずる故に」――末法の法華経、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華経、即御本尊を信ずるゆえに「梵天帝釈をも猶恐しと思はず」です。梵天、帝釈とは、生活に約していえば、権力者です。今でいえば、総理大臣や大臣級、大金持ちの人々で、民衆をいつも愚弄したり、正法を護持して

いる者をいつも弾圧しようとし、小バカにしている連中をさすのです。

御本尊を持った者は、そのような輩を断じて恐れてはならない。勇気がなくてはいけないのです。

正法を護持する人を弾圧する者に対しては、断固、戦いぬくぞという決心がなければいけない。

「身は畜生の身なり」

身体は、あくまで凡夫の身であるということです。

「色心不相応の故に愚者のあなづる道理なり」

ということは、日蓮大聖人は皇族として生まれて信心したのでもない。釈尊の場合には王家の生まれですが、大聖人はそういう立場でもない。いちばん貧乏な旃陀羅の家に生まれて、なんの名誉も、財産も、位もないから、いくら法華経が第一といっても、みな侮るであろうという意味です。

「心も又身に対すればこそ月金にもたとふれ」

心も、そのような貧しい身に対するから月や金にも譬えることができるのである、とおおせです。

「又過去の謗法を案ずるに誰かしる勝意比丘が魂にもや」

今は心に法華経をたもっているとはいっても、だれが、その過去にどんな謗法の罪があるかを知ることができるであろうか。過去をたずねるならば、小乗教に執着して、正法を毀った罪によって、生きながら地獄に堕ちた勝意比丘のような生命をもっているかもしれないということです。

「大天が神にもや」

大天という人は、仏の滅後百年にインドに生まれた人です。父を殺し、母を殺し、さらに阿羅漢を

殺し、三逆罪を犯した身で出家しました。そして、我見で仏法を乱し、後に仏教界分裂の源となった人です。過去をたずねれば、その大天の生命であったかもしれない。

いまでも、そういう人がいるかもしれないから気をつけなければいけません。また、そういう人になってはいけません。邪宗教は、ぜんぶこの眷属です。勝意比丘の眷属であるし、大天の眷属です。

「不軽軽毀の流類なるか」

不軽とは、威音王仏の滅後、像法の時代に法華経を受持した人です。その不軽菩薩をそしり、千劫のあいだ、阿鼻地獄に堕ちた人々の子孫でもあるのだろうか。

「失心の余残なるか」

失心とは、寿量品に説かれている本心を失った者のことです。すなわち、釈尊が法華経を説いたとき、五百塵点劫の昔の下種を忘れてしまって、信じようとしなかった者のことです。その失心の者の一人であろうか。

「五千上慢の眷属なるか」

釈尊が方便品を説いていたときに、五千人の増上慢の人々が、釈尊の説法をすべて悟ったと思って退座しましたが、その五千人の増上慢の者たちの眷属であろうか。

「大通第三の余流にもやあるらん宿業はかりがたし」

過去に釈尊が、大通智勝仏の第十六番目の王子として法華経を説いたときに、ある人々は信心して仏になり、ある人々は信心したが途中で退転し、後に釈尊によって救われた。そして残りの第三の人

人は、まったく法華経を信じようとしなかった。その人々が「大通第三」ですが、その流れをくむ者であろうか。

このように、過去をたずねてみるならば、われわれの宿業ははかりがたいのです。

「鉄は炎打てば剣となる」

鉄というのは、熱いうちに打てば打つほど、立派な剣とすることができるのです。この鉄とは、いまの皆さん方のことです。

「賢聖は罵詈して試みるなるべし」

賢人、聖人というのは、世間から悪口され、迫害をうけて、初めてその真価がわかるのです。迫害をうけながら、悠然と前進できる人が、ほんとうに偉いのです。

たいていの人は恐がったり、世間体を考えたり、臆病になったりします。そういう人は、根本的には偉くないのです。みえっぱりで、確信も、哲学も、信念もないということになってしまう。個人も団体も、ぜんぶ同じです。ここは大事なところです。

「我今度の御勘気は世間の失一分もなし」

大聖人の島流しは、世間の失はなにもない。世間的には、なにも悪いことはしていないというのですから、なにがあっても、それを試練と考えて、喜んで挑んでいくことです。この御書のこの段を、一生涯、どんなことがあっても忘れてはいけません。

「偏に先業の重罪を今生に消して後生の三悪を脱れんずるなるべし」

このように日蓮大聖人が、多くの難をうけられているのは、過去世の重罪をぜんぶ消してしまって、未来に地獄、餓鬼、畜生の三悪道に堕ちることをまぬかれていくためなのです。

御本尊を中心とし、広宣流布に進んでいけば、罪業はぜんぶ消えてしまいます。皆さんは、若いときから信心しているから、早く消してしまうことができます。ですから皆さんが、ちょうど私と同じ年輩になったときには、さぞかし立派な境涯になっていることでしょう。こんなにも自分は幸せになったか、すごい立場になったか、といえるような人生を遊戯していくことはまちがいありません。それは確信をもってください。

ただし、この世の中は娑婆世界です。使命があればあるほど、いろいろとたいへんなこともあります。だが、たいへんなことがあるということは、より以上福運が積めるという証拠なのです。

正法誹謗の者は在世の外道の末流

般泥洹経に云く「当来の世仮りに袈裟を被て我が法の中に於て出家学道し懶惰懈怠にして此れ等の方等契経を誹謗すること有らん当に知るべし此等は皆是今日の諸の異道の輩なり」等云云、此経文を見ん者自身をはづべし今我等が出家して袈裟をかけ懶惰懈怠なるは是仏在世の六師外

道が弟子なりと仏記し給へり、法然が一類大日が一類念仏宗禅宗と号して法華経に捨閉閣抛の四字を副へて制止を加て権教の弥陀称名計りを取立教外別伝と号して法華経を月をさす指只文字をかぞふるなんど笑ふ者は六師が末流の仏教の中に出来せるなるべし、うれへなるかなや涅槃経に仏光明を放て地の下一百三十六地獄を照し給に罪人一人もなかるべし法華経の寿量品にして皆成仏せる故なり但し一闡提人と申て謗法の者計り地獄守に留られたりき彼等がうみひろげて今の世の日本国の一切衆生となれるなり

まず「般泥洹経」の文を引かれています。

「当来の世……誹謗すること有らん」

「当来の世」とは、末法をさしております。末法において、かりに袈裟を着て、仏法の修行者のような姿をして、出家学道している者がいるであろう。そして、なまけ者で、最高の仏法を求めようともせず、方等契経を誹謗する者がいるであろうということです。

「方等契経」とは、大乗経のことです。文底から拝するならば、末法の法華経、すなわち南無妙法蓮華経になります。

「当に知るべし此等は皆是今日の諸の異道の輩なり」

末法において三大秘法の仏法を誹謗し、日蓮正宗を誹謗する者は、みな今日、すなわち釈尊の時代にさかのぼってみれば、ぜんぶ外道の輩だったのである。釈尊に対して敵対してきた輩が末法に生ま

ここは、禅宗の邪義について述べられています。禅宗は、釈尊の悟りが、経文に書かれたほかに迦葉に別伝されて、伝承されてきたとします。そして経文は、悟りの月を指さすものにすぎないから、そのような経文を根本とする教えにしたがっていても、なんの役にもたたないとしています。

「六師が末流の仏教の中に出来せるなるべし」

それらの、正法を誹謗する邪宗の輩は、ぜんぶ釈尊在世の時代の六師外道の弟子が末法に生まれて、仏教のなかに現れ、仏教を乱している姿なのである。

「うれへなるかなや涅槃経に仏光明を放て地の下一百三十六地獄を照し給に罪人一人もなかるべし法華経の寿量品にして皆成仏せる故なり」

これは、釈尊の仏法の広宣流布の時について、おおせられたところです。

涅槃経とは、釈尊が死ぬときに、一日一夜にして説いた経典です。

涅槃経で、仏が地獄を照らしたときに罪人は一人もいなかった。それは、法華経の寿量品のときに、みな成仏したからであるとおっしゃっています。

「但し一闡提人と申て謗法の者計り地獄守に留られたり彼等がうみひろげて今の世の日本国の一切衆生となれるなり」

ただし、一闡提人、すなわち不信謗法の者だけは、寿量品のときにも成仏できなかった。その人々が生み広げたのが、いま末法の時代の日本国の一切衆生なのである。そういう謗法の人々がだんだんとふえてしまったのです。ですから、御本尊の力によって仏になる以外ないのです。

「今生に念仏者にて」というのは、まえにも述べたとおり、大聖人が幼年時代に出家なされて、数年間、念仏の寺である安房国、清澄寺の道善房のもとですごされたことをいわれているのです。

「未有一人得者」というのは、中国の念仏者である道綽が「安楽集」という書のなかで述べたことばで、法華経では、未だ一人も成仏した者がいないという意味です。

「千中無一」というのは、善導が「往生礼讃」のなかで述べた言葉を、法然が「選択集」で法華経を誹謗するために引用して使っているのです。

せんじつめてみれば、今、われわれは御本尊を根幹として、これらの邪宗教を折伏していることになる。なぜなら、これまでもっとも仏に弓を引き、もっとも正しい仏法を誹謗し、ないがしろにしてきたのは、今の邪宗教だからです。釈尊の仏法、また大聖人の仏法を、ほんとうにふみにじってきたのです。

それを今、私たちは強折しているのですから、難があるのはあたりまえのことです。

「今謗法の酔さめて見れば酒に酔る者父母を打て悦し」
「今謗法の酔さめて後歎しが如し歎けども甲斐なし此罪消がたし」

謗法の酔がさめて、正法を護持してから、過去の自分を振り返ってみると、ちょうど酒に酔って自分のことがわからなくなり、父母を打って悦んでいたものが、酔がさめて自分のしたことに気がついて、たいへんなことをしたと後悔し、嘆いているようなものである。しかし、どんなに嘆いても、父

母を打った罪は消えないのです。

「何に況や過去の謗法の心中にそみけんをや経文を見候へば烏の黒きも鷺の白きも先業のつよくそみけるなるべし外道は知らずして自然と云い」

ここも、まえのところも、因果の理法を示されているところです。いっさいの事象は、すべて原因結果の法則です。生命科学なのです。生命の因果を追究した偉大な哲理であります。

一般の自然科学は、物質界の原因結果の法則について、帰納法的に確立したものであって、生命については、なにも解明できえない。外道は因果の理法を知らないから、生命のさまざまの現象をみても自然という。それ以上追究しようとしないのです。

仏法はいっさいを映すことのできる鏡です。その鏡がないから、どこまでいっても悪循環が繰り返されるのです。不幸な世の中です。皆さんも鏡があれば、自分がわかってくるのです。ソクラテスも〝汝自身を知れ〟といいましたが、鏡がなければ、汝自身は絶対にわかりません。

よく民主主義の基調は主体性の確立、自己の確立であるなどといいますが、それも、実際はできえないのです。できたつもりであっても、それは錯覚です。末法の仏法の真髄である御本尊を信心する以外にはできません。

私たちは、それを実行しているのです。ひじょうにたいへんな道を通っているようですけれども、

一人ひとりの主体性を確立しつつ、末法万年尽未来際への恒久平和をめざす大事な進軍です。

「今の人は謗法を顕して扶けんとすれば我身に謗法なき由をあながちに陳答して法華経の門を閉よと法然が書けるをとかくあらかひなんどす」

今の人、すなわち大聖人御在世当時の人は、大聖人が、その一人ひとりの謗法の罪を明らかに示して、信心につかせて、幸せにしてあげようとすると、自分にはそのような謗法はないといいはって信心しようとしない。そして法然の捨閉閣抛の言葉などをもちだして反対しようとするのです。

これは現代でも、つねにあることです。信仰なんか必要ないとか、罰がでるなんて非科学的だなどといっている。しかし、そういう人間ほど、心のなかでは信仰したいと思っているのです。御本尊の力がわかっているのです。

念仏者はさてをきぬ天台真言等の人人彼が方人をあながちにするなり、今年正月十六日十七日に佐渡の国の念仏者等数百人印性房と申すは念仏者の棟梁なり日蓮が許に来て云く法然上人は法華経を抛よとかかせ給には非ず一切衆生に念仏を申させ給いて候此の大功徳に御往生疑なしと書付て候を山僧等の流されたる並に寺法師等・善哉善哉とほめ候をいかがこれを破し給と申しき鎌倉の念仏者よりもはるかにはかなく候ぞ無慚とも申す計りなし

「念仏者はさてをきぬ天台真言等の人人彼が方人をあながちにするなり」

念仏者はともかくとしても、法華経を理論的に体系づけた天台、伝教の流れをくむ天台宗の人々までが、念仏の味方となって法華経を誹謗しているのである。

この姿は、ちょうど、今の全日仏と新宗連、既成宗教と新興宗教とが仲間となって、日蓮正宗創価学会を誹謗するのと同じです。

「今年正月十六日十七日に佐渡の国の念仏者等数百人印性房と申すは念仏者の棟梁なり日蓮が許に来て云く」

この文永九年の一月十六日、十七日の両日にわたって、佐渡はもとより越後、越中、出羽、奥州、信濃の国々から、念仏者などが数百人集まってきました。そして印性房を中心として、塚原の三昧堂の外へ押し寄せて、大聖人に法論をいどんできたのです。

「法然上人は法華経を拋よとかかせ給には非ず一切衆生に念仏を申させ給いて候此の大功徳に御往生疑なしと書付て候を山僧等の流されたる並に寺法師等・善哉善哉とほめ候をいかがこれを破し給と申しき」

これは、印性房を中心とする念仏者たちの言葉です。

法然は、法華経を拋よとはいっていない。「選択集」では、ただ念仏を唱える功徳を説いているだけである。山僧とは比叡山の僧、寺法師とは園城寺の僧をいいます。この島へ流されてきた天台宗の僧たちもそれを讃めているが、これをどう破折されるか、などと確信もなにもないような質問をして

きたのです。

「鎌倉の念仏者よりもはるかにはかなく候ぞ無慚とも申す計りなし」

日蓮大聖人は、たったお一人です。しかも流罪の身です。そこへ数百人もの人数が攻めてきましたが、みんながると打ち負かされてしまった。ある僧などは、その場で数珠を切って大聖人に帰依したりした。大聖人は、正しく強かったのです。どうか皆さんも、大聖人のように力強く戦っていってください。

鎌倉の念仏者等も、大聖人に破折されつくしてしまったのですが、その人々よりも、この佐渡の塚原へ押し寄せてきた念仏、天台、禅宗等の人々のほうが、なお愚かな姿であったということです。

八難がすべて符合

いよいよ日蓮が先生今生先日の謗法おそろしかりける者の弟子と成けんかかる国に生れけんいかになるべしとも覚えず、般泥洹経に云く「善男子過去に無量の諸罪・種種の悪業を作らんに是の諸の罪報・或は軽易せられ或は形状醜陋衣服足らず飲食麤疎財を求めて利あらず貧賤の家及び邪見の家に生れ或は王難に遇う」等云云、又云く「及び余の種種の人間の苦報現世に軽く受くるは斯れ護法の功徳力に由る故なり」等云云、此経文は日蓮が身なくば殆ど仏の妄

語となりぬべし、一には或被軽易二には或形状醜陋三には衣服不足四には飲食麤疎五には求財不利六には生貧賤家七には及邪見家八には或遭王難等云云、此八句は只日蓮一人が身に感ぜり

「いよいよ日蓮が先生今生先日の謗法おそろし」

先生とは前世、今生とは今世、先日とは大聖人の修行時代のことです。いよいよ大聖人の前世から現在にいたるまでの謗法は恐ろしい。

「かかりける者の弟子と成けんかかる国に生れけんいかになるべしとも覚えず」

このような重罪のある者の弟子となり、また、このような謗法の国に生まれているのだから、このさき、どのようになっていくかもまったくわからないたくわからない。

「般泥洹経に云く『善男子過去に無量の諸罪・種種の悪業を作らんに是の諸の罪報・或は軽易せられ或は形状醜陋衣服足らず飲食麤疎財を求めて利あらず貧賤の家及び邪見の家に生れ或は王難に遇う』等云云」

ここは般泥洹経に説かれる八種の大難です。過去におかした罪によって受ける報いをあげているのです。過去の罪の報いによって人からバカにされたり、容姿が醜かったり、衣食住に事欠いて、経済面でも恵まれず、貧乏の家、邪宗の家に生まれる等の難を受けるのです。

「又云く『及び余の種種の人間の苦報現世に軽く受くるは斯れ護法の功徳力に由る故なり』」

いまあげた八難やその他の苦しみを、正法を護持したことによって軽く受けているという経文です。「護法の功徳力に由る故なり」のところは、信心をしている場合をいうのです。

この世は娑婆世界――勘忍の世界ですから、また日本全体が総罰を受けているのですから、だれびとにも苦難はある。しかし、信心している者は、その種々の苦難を軽く受けているのです。法を護っているという功徳の力によって、どんなに苦しいことが眼前にでたとしても、それが、本来のものよりはるかに軽いものなのだとの経文であります。それを確信しなければなりません。

「此経文は日蓮が身なくば殆ど仏の妄語となりぬべし」

王難に遭うなどということは、釈尊の時代にも多少はありました。この八難ということは、末法の御本仏としてのお姿を予言してはまっている仏さまは、日蓮大聖人だけです。ということは、てあるこの般泥洹経に、ピッタリ符合しているのは、日蓮大聖人だけであるということです。

したがって、もし大聖人の出現がなかったら、このような実相がなかったならば、仏の金言は虚妄となってしまい、金言とはいえなくなってしまうのです。

つぎに、この八難の一つひとつをあげていらっしゃいます。

「一には或被軽易」

日蓮大聖人は、国じゅうの人々からバカにされ、悪口罵詈された。

「二には或形状醜陋」

大聖人は、形状醜陋ではありません。ほんとうに立派なお姿であったと思いますが、ただこれは貴

族階級のような高い身分ではない、また姿、形が貧族よりも、大聖人のほうが、ずっとご立派であったという意味だったのでしょう。どんな貴

「三には衣服不足」

着るものがなかったのです。

「四には飲食麤疎」

大聖人は、佐渡で、食べる物がなく、雪を食しあがっておられたこともありました。当時は佐渡の国へ流されるということは、死刑に匹敵したのです。

「五には求財不利」

財を求めるに利あらず、と読みます。だが大聖人はお金などは欲しくないのです。金もうけのための邪宗の僧とはぜんぜん違います。

「六には生貧賤家」

大聖人の場合は、貧しい漁師の家に生まれました。

「七には及邪見家八には或遭王難」

邪見の家に生まれ、また王難にあう。二度の流罪のみならず、死罪にもおよんだのです。

この八難は、日常生活において、皆さんが、自分自身にあてはめて考えていくべきです。なぜなら、ここは、大聖人が、示同凡夫のお姿で、身口意の三業で経文をお読みになって、われわれの信心のあり方、仏法の修行の決意をお示しになっているところだからです。

ですから、われわれがみな、こういう姿になっていることは、過去をたどってみるならば、謗法の罪なのです。地によって倒れた者は、地によって立つ。謗法によってこういう結果になったのですから、正しい仏法によって信心修行に励めば、ぜんぶ改革できる、そして人間革命ができるということなのです。

「此八句は只日蓮一人が身に感ぜり」

この八難は、ただ大聖人お一人の身にあてはまることである。かさねて、大聖人が末法の御本仏であることを述べられています。

厳しき因果の理法

高山に登る者は必ず下り我人を軽しめば還て我身人に軽易せられん形状端厳をそしれば醜陋の報いを得人の衣服飲食をうばへば必ず餓鬼となる持戒尊貴を笑へば貧賤の家に生ず正法の家をそしれば邪見の家に生ず善戒を笑へば国土の民となり王難に遇ふ是は常の因果の定れる法なり

ここもまた、因果の理法を述べていらっしゃるところです。

「高山に登る者は必ず下り」

山に登った人は、かならず下りなければならない。もし、そのまま帰ってこなかったら遭難です。

「我人を軽しめば還て我身人に軽易せられん」

一般的にもよくいわれることですが、人をバカにすれば、因果の理法で、やがては人からバカにされるようになるのです。まして仏法をたもち、広宣流布のために戦っている日蓮正宗創価学会を笑い、小バカにしている評論家などがいますが、未来にどれほどの報いがあるかしれません。かならず証拠がでるのです。この確信でいきましょう。

「形状端厳」とは、顔かたちが端正でおごそかなことをいいます。また日蓮大聖人、即御本尊にも通じます。そして「形状端厳をそしれば醜陋の報いを得」という報いをうけるのです。

ですから、女の人は、あんまりお友だちにヤキモチをやかないことが大事ですね。

「人の衣服飲食をうばへば必ず餓鬼となる」

人のものを盗めば、かならず餓鬼となる。食べられなくなって苦しむ。貧しい最低の生活におちるということです。

「持戒尊貴を笑へば貧賤の家に生ず」

すなわち、正法の御僧侶を笑えば、貧賤の家に生まれる。また総じては、御本尊を持った者を笑っても、貧賤の家に生まれる。ですから、われわれを笑う者がいたら、ああ、あの人はかわいそうに、

来世は貧乏な家に生まれる、と思えばよいのです。

「正法の家をそしれば邪見の家に生ず」

正法をたもっている家の悪口をいえば、邪見の家、すなわち謗法の家に生まれて、ふしあわせになるのです。

「善戒を笑へば国土の民となり王難に遇ふ」

「善戒」とは、御僧侶です。総じては日蓮正宗創価学会です。ですから、信心しているわれわれを笑っても、なにかの罪にとわれたり、牢へはいったりするというのです。また広く約せば、税金で苦しむとか、権力でさまざまに圧迫されていかねばならない生活になるともいえると思います。

「是は常の因果の定れる法なり」

これは世間一般の因果の定まった法なのです。

護法の功徳力による

日蓮は此因果にはあらず法華経は月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をかさね玉と玉とをつらねたるが如くなる御経を或は上げ或は下て嘲弄せし故に軽易せし故に法華経は月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をかさね玉と玉とをつらねたるが如くなる御経を或は上げ或は下て嘲弄せし故に此八種の大難に値るなり、此八種は尽未来際が間一づつこそ現ずべかりしを日蓮つよく

法華経の敵を責るによて一時に聚り起せるなり譬ば民の郷郡なんどにあるにはいかなる利銭を地頭等におほせたれどもいたくせめず年年にのべゆく其所を出る時に競起が如し斯れ護法の功徳力に由る故なり等は是なり

「日蓮は此因果にはあらず法華経の行者を過去に軽易せし故に」

大聖人が難にあわれるのは、この世間一般の罪業によるのではない。ひとえに、過去に法華経の行者をバカにし、御本尊に対して謗法を犯したゆえである、と。もちろんこれは、さきほども述べたように、大聖人が示同凡夫のお立場で述べられているのです。末法の一般の民衆の立場でおおせになっているのです。

したがって、われわれの不幸な生活の根本原因も、やはり御本尊を誹謗したことにあるのです。

釈尊の法華経に対する謗法、それから釈尊自身を誹謗した等のいろいろの謗法の姿がありますが、日蓮大聖人、また南無妙法蓮華経を誹謗するという罪は、いちばん重いのです。それを頭にいれておきなさい。

「法華経は月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をかさね玉と玉とをつらねたるが如くなる御経を或は上げ或は下て嘲弄せし故に此八種の大難に値るなり」

法華経が最高唯一の経文であるさまを、月、星、華山、玉をかさね玉とをつらねたるがごとくなる御本尊を、あるいは、立派な教えであるがむずかしくてだれも

それを実践できないといったり、あるいは、第二、第三の教えであると下したりした罪によって、この八種の大難に遭っているのである。

「此八種は尽未来際が間一づつこそ現ずべかりしを日蓮つよく法華経の敵を責るによて一時に聚り起せるなり」

この八種の大難は、尽未来際の長いあいだにわたって、一つずつ現れてくるべきものであったのを、日蓮大聖人は強く法華経の敵を責めることによって、一時に集まり起こされたのです。

これは一生成仏です。南無妙法蓮華経は、過去の謗法の罪をみんな消してしまう。それを一生成仏というのです。

今世がいちばん大事なのです。今世の実態が来世の実態となるわけです。ですから今世が大事なのです。今世をいいかげんにしておいて、来世にがんばればいいといっても、そうはいきません。やはり今世にきちんと罪業を消滅しておかなくてはいけません。大聖人の仏法はどこまでも現実主義なのです。

「譬ば民の郷郡なんどにあるにはいかなる利銭を地頭等におほせたれどもいたくせめず年年にのべゆく其所を出る時に競起が如し」

たとえば、民が地頭の領地のなかにいるあいだは、税金などを滞納してもひどくは責められないため、年々に延ばすこともできる。しかしそこを出て、他の土地へ移ろうとするときには、一時にぜんぶを払わなければならなくなってしまうようなものである。

「斯れ護法の功徳力に由る故なり等は是なり」

日蓮大聖人が、このような大難を受けて成仏なさったということは、護法の功徳力によるのです。

不軽菩薩の実践を

法華経には「諸の無智の人有り悪口罵詈等し刀杖瓦石を加うる乃至国王・大臣・婆羅門・居士に向って乃至数数擯出せられん」等云云、獄卒が罪人を責ずば地獄を出る者かたかりなん当世の王臣なくば日蓮が過去謗法の重罪消し難し日蓮は過去の不軽の如く当世の人人は彼の軽毀の四衆の如し人は替れども因は是一なり、父母を殺せる人異なれども同じ無間地獄におついかなれば不軽の因を行じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき又彼諸人は跋陀婆羅等と云はれざらんや但千劫阿鼻地獄にて責られん事こそ不便にはおぼゆれ是をいかんとすべき、彼軽毀の衆は始は謗ぜしかども後には信伏随従せりき罪多分は滅して少分有しが父母千人殺したる程の大苦をうく当世の諸人は翻す心なし譬喩品の如く無数劫をや経んずらん三五の塵点をやおくらんずらん

「法華経には『諸の無智の人有り悪口罵詈等し刀杖瓦石を加うる乃至国王・大臣・婆羅門・居士に向って乃至数数擯出せられん』等云云」

法華経勧持品第十三の文です。三類の強敵について明かされているところです。

「諸の無智の人有り悪口罵詈等し刀杖瓦石を加うる」が俗衆増上慢をあらわし、「国王・大臣・婆羅門・居士に向って」、そして「数数擯出せられん」が僭聖増上慢です。道門増上慢については、ここでは略されています。

一つひとつの経文がぜんぶ、日蓮大聖人のお振る舞いにあたっているのです。

「獄卒が罪人を責ずば地獄を出る者かたかりなん当世の王臣なくば日蓮が過去謗法の重罪消し難し」

獄卒が罪人を責めなかったならば、その罪を消して地獄を出ることができない。それと同じように、大聖人御在世当時も、大聖人を迫害した北条幕府がなかったならば、大聖人の過去の重罪も消すことができなかったであろう、といわれているのです。

「日蓮は過去の不軽の如く当世の人人は彼の軽毀の四衆の如し」

日蓮大聖人は、過去に種々の迫害をうけて仏になった不軽菩薩のようなものであり、大聖人を迫害する人々は、不軽菩薩をバカにした大衆のようなものである。

「人は替れども因は是一なり」

大聖人と不軽菩薩、大聖人を迫害した人々と不軽菩薩を迫害した人々というふうに、人はかわっても、同じ法華経を行ずるという因、また法華経の行者を誹謗するという因は同じである。

「父母を殺せる人異なれども同じ無間地獄におつ」

いかなれば不軽の因を行じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき」

父母を殺す人は異なるけれども、みな同じく無間地獄に堕ちてしまう。それと同じ道理で、不軽菩薩は二十四文字の法華経を弘めて、迫害をうけ、仏になっている。そして日蓮大聖人も、七文字の末法の法華経を弘めて、このような大難にあっていらっしゃる。どうして大聖人お一人が仏にならないことがあろうか、との大確信を述べられているのです。

「又彼諸人は跋陀婆羅等と云はれざらんや但千劫阿鼻地獄にて責られん事こそ不便にはおぼゆれ是をいかんとすべき」

「跋陀婆羅」というのは、不軽菩薩を軽毀して、地獄に堕ちたが、再び不軽に会って救われ、法華経の会座にも出席した大衆のなかの代表者です。大聖人を迫害する人々は、不軽軽毀の跋陀婆羅と同じように、のちには妙法に巡りあって救われるであろう。ただ千劫も阿鼻地獄で苦しまなければならないことが、かわいそうに思われる。

「彼軽毀の衆は始は謗ぜしかども後には信伏随従せりき数劫をや経んずらん三五の塵点をやおくらん程の大苦をうく当世の諸人は翻す心なし譬喩品の如く無罪多分は滅して少分有しが父母千人殺したるずらん」

不軽をそしった人々は、たしかに初めはひどい謗法をおかしたけれども、最後には不軽に信伏随従した。そのことによって、謗法の罪は大部分消えて、わずかしか残っていなかった。だが、その少分残っている罪によっても、父母千人を殺したほどの大苦をうけたのである。

ところが大聖人を迫害した人々は、まったく反省する気持ちもなく、ますます謗法の心が強盛であ

る。最後まで信伏随従しないのだから、どれほどの罪があるだろうか。

法華経譬喩品第三に説かれているように、無数劫のあいだ、阿鼻地獄にあって苦しまねばならないであろう。もしくは三千塵点劫、五百塵点劫の長きにわたるであろう、とおおせです。

これはさてをきぬ日蓮を信ずるやうなりし者どもが日蓮がかく斯なればなれば疑ををこして法華経をすつるのみならずかへりて日蓮を教訓して我賢しと思はん僻人等が念仏者よりも久く阿鼻地獄にあらん事不便とも申す計りなし、修羅が仏は十八界我は十九界と云ひ外道が云く仏は一究竟道我は九十五究竟道と云いしが如く日蓮御房は師匠にておはせども余にこはし我等はやはらかに法華経を弘むべしと云んは蛍火が日月をわらひ蟻塚が華山を下し井江が河海をあなづり烏鵲が鸞鳳をわらふなるべしわらふなるべし。

南無妙法蓮華経

文永九年太歳壬申三月二十日

日蓮弟子檀那等御中

日蓮花押

「これはさてをきぬ日蓮を信ずるやうなりし者どもが日蓮がかくなれば疑ををこして法華経をすつるのみならずかへりて日蓮を教訓して我賢しと思はん僻人等が念仏者よりも久く阿鼻地獄にあらん事不便とも申す計りなし」

ここも大事なところです。皆さんは将来、立派になることはまちがいないのです。日本的、いな世界的な人物として活躍する人もあるでしょう。そのときに、御本尊を忘れたり、信心を忘れれば、この教訓と同じになってしまいます。

「これはさてをきぬ」

謗法の者は別として、こんどは日蓮門下の弟子等に戒めていうということです。

日蓮大聖人がこのような難にあったのをみて、いままで信心していた者が疑いを起こして退転し、それどころか大聖人を批判さえしている者がいるが、その人々は、信心しない人よりももっと長いあいだ地獄へ堕ちるのだ、かわいそうだ、ということです。もっとも罪が深いのです。謗法の人より深いのです。

「修羅が仏は十八界我は十九界と云ひ外道が云く仏は一究竟道我は九十五究竟道と云いしが如く日蓮御房は師匠にておはせども余にこはし我等はやはらかに法華経を弘むべしと云んは蟹火が日月をわらひ蟻塚が華山を下し井江が河海をあなづり烏鵲が鸞鳳をわらふなるべしわらふなるべし」

増上慢の修羅は、仏の悟りは六根、六境、六識の十八界であるが、自分の悟りはそれより一界多い十九界であるといい、外道は、仏の最高の悟りは一仏乗という一つのものしかないが、外道には九十

五種の悟りがあるといっている。そして、その悟りの数が多いから、自分たちのほうがすぐれている
と慢じているのです。

同じように、退転していった者たちが、大聖人は師匠ではあるが、折伏などをあまりにも強くやり
すぎるのではないか、われわれはやわらかに法華経を弘めていこうといっている。それは、螢の小さ
な光が明るい太陽や月を笑い、蟻塚が中国のもっとも大きな山の一つの華山を自分より低いといい、
井戸や小川が大河や海をあなどり、烏鵲が鳥の王である鸞鳥や鳳凰を笑うようなものである、と大聖
人はおおせです。

われわれはどんなことをいわれても、悪口をいう人間はぜんぶ螢火である、われわれは日月の光で
ある、との大確信でいきましょう。

佐渡の国は紙候はぬ上面面に申せば煩あり一人もるれば恨ありぬべし此文を心ざしあらん人
人は寄合て御覧じ料簡候て心なぐさませ給へ、世間にまさる歎きだにも出来すれば劣る歎きは
物ならず当時の軍に死する人人実不実は置く幾か悲しかるらん、いざはの入道さかべの入道い
かになりぬらんかはのべ山城得行寺殿等の事いかにと書付て給べし、外典書の貞観政要すべて
外典の物語八宗の相伝等此等がなくしては消息もかかれ候はぬにかまへてかまへて給候べし。

「佐渡の国は紙候はぬ上面面に申せば煩あり一人ももるれば恨ありぬべし」

大聖人流罪の佐渡の地には、手紙をおしたためになる紙さえもないのです。また一人ひとりに便りをするのは煩雑ですし、一人でもお手紙をいただかない人があったら、その人は恨みに思うでしょう。ですから日蓮大聖人は、このお手紙を弟子檀那全員に与えられ、皆で見るように述べられているのです。

「心ざしあらん人人は寄合て御覧じ料簡候て心なぐさませ給へ」

大聖人をほんとうに信じ、師匠と思っている人は、寄りあって、みんなでこのお手紙を拝読しあっていきなさい。そして信心の糧としていきなさい、といわれているのです。

ちょうど皆さんが寄りあって、「佐渡御書」をこのように読みあっているのと同じ姿です。

「世間にまさる歎きだにも出来すれば劣る歎きは物ならず」

世間にあっても、大きな難が出来したときは、小さな難などは、なんでもなくなってしまう。

ここが大事です。自分の小さなことで悩んでいる人がいますが、広宣流布という最高の目的観に立った場合は、自分一個の小さい問題などはいっぺんに吹き飛んでしまうのです。偉大な目的観のない人は、小さい問題を拡大して苦しんでいるのです。信心が大切なゆえんは、ここにあるのです。

「当時の軍に死する人人実不実は置く幾か悲しかるらん」

この御書の初めに述べられている北条幕府の自界叛逆難の戦で死んだといわれている人々は、そのうわさの真偽のほどはわからないけれども、どれほどか悲しいことであろうか。

「いざはの入道さかべの入道いかになりぬらんかはの伊沢　酒部　河辺　山城得行寺殿等の事いかにと書付て給べし」

この人々は皆、大聖人の弟子です。その人々のことを、このように心配されているのです。こんどの戦いで皆どうなったか、消息を知らせなさい、という

「外典書の貞観政要すべて外典の物語八宗の相伝等此かまへて給候べし」

これらがなくしては消息もかかれ候はぬにかまへて

「貞観政要」とは、唐の太宗皇帝が群臣たちと政治について語ったものを編纂した書物です。その貞観政要や、その他の外道の物語、また倶舎、成実、律、法相、三論、華厳、天台、真言等の大聖人の時代にさかんであった八宗の相伝書などを送るように指示されています。それらも参考にされて、お手紙を書かれていたのです。

（昭和四十一年四月～五月　高等部講義）

「如説修行抄」講義

文永十年五月　五十二歳御作

佐渡一ノ谷に於て

（御書全集　五〇一ページ～五〇五ページ）
（編年体御書五五四ページ～五五八ページ）

法華経の行者にはかならず難がある

この「如説修行抄」は、日寛上人の文段にもとづいて拝読するのが、もっとも正しい読み方です。日寛上人は、日蓮正宗の第二十六世の御法主上人です。日寛上人は、「開目抄」とか、「観心本尊抄」とか、または「立正安国論」とか、重要な御抄について、それぞれ文段を著(あらわ)され、こう拝読すべきだと、ことこまかに御教示くださっております。

同じく「如説修行抄」についても、厳(きび)しく、そしてまた正しく読むことができるようにとの意味で、文段を著されております。

ただし、その文段をとおしての読み方は、ここでは略しておきます。あくまでも、この御抄を中心にして、信心のうえから読んでいくいき方にしておきます。

将来は、日寛上人の文段を根本とし、基本として拝読していくべきであることを、頭に入れておい

てもらいたいと思います。

> 夫れ以んみれば末法流布の時・生を此の土に受け此の経を信ぜん人は如来の在世より猶多怨嫉の難甚しかるべしと見えて候なり、在世は能化の主は仏なり弟子又大菩薩・阿羅漢なり、人天・四衆・八部・人非人等なりといへども調機調養して法華経を聞かしめ給ふ猶怨嫉多し

「如説修行抄」――説の如く、修行する抄、ということです。

「説の如く」とは、一義は、釈尊の説の如くということでありますが、根本は、末法の御本仏である日蓮大聖人の説の如くということであります。「修行する抄」とは、実践する抄、との意味です。

「夫れ以んみれば末法流布の時・生を此の土に受け此の経を信ぜん人は如来の在世より猶多怨嫉の難甚しかるべしと見えて候なり」

ここには、宗教の五箇が明らかに説かれています。宗教の五箇とは〝教・機・時・国・教法流布の先後〟をいいます。教え、機根、時、国、そして、教法が流布していく姿が、宗教の五箇です。

「夫れ以んみれば」――つらつら考えてみるならば、「末法流布の時」――末法とは、釈尊在世を中心にして、滅後千年が正法、つぎの千年が像法、それから釈尊滅後二千年以降を末法というのです。

いまは末法の時です。末法とは、末法万年尽未来際です。これから永遠に末法が続くのです。その先駆が今です。

宗教の五箇にあてはめれば「末法」は、〝時〟をあらわしています。「流布の時」というのは〝教法流布の先後〟にあたります。

「生を此の土に受け」――「此の土」が〝国〟になります。日本国のことです。

このように、大聖人の仏法の説き方は、ひじょうに論理的です。説いている論理が完璧なのです。

「此の経を信ぜん」の「此の経」が〝教〟になり、「信ぜん」が〝機根〟になります。

わずかこれだけの御文のなかに、宗教の五箇をぜんぶ明かしているのです。大聖人の御書のどこを拝読しましても、宗教の五箇とか、三重秘伝とか、五重の相対とか、四重興廃とかが、このように組みたてられているのです。それは、長く教学を学んでいきますと、だんだんわかってきます。

しかしながら、相伝のない日蓮宗の輩が御書を拝読すると、それが読めない。そこに大きい誤謬が生じるのです。

相伝ある日蓮正宗のみが、完璧な大聖人の仏法を、正しく、深く拝読することができるのです。

「夫れ以んみれば……信ぜん人は」――末法の時代に流布をしなくてはならない時に、生をこの日本国にうけ、そしてこの経、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華経を信ぜん人々は、「如来の在世より」――釈尊在世より、「猶多怨嫉の難甚しかるべしと見えて候」と、そのように法華経のなかに予言されている。このことは法華経の法師品、ならびに勧持品等々に説かれております。

「猶多怨嫉」――「猶怨嫉多し」と読みます。釈尊の時代よりも、末法において、三大秘法の南無妙法蓮華経を流布する人、それを信ずる人は、なお怨嫉が多い、やきもちを焼かれる、非難される。

しかし、いくらやきもちを焼かれても、批判されても、非難されても、経文どおりだから、なにも恐れる必要はないのです。

怨嫉されることによって、自分は罪障消滅になります。相手も罰をうけて、結局、最後は罪を消します。信ずる人も、謗ずる人もともに、せんずるところは救われていくのです。これが仏法の法則です。

「其の故は在世は能化の主は仏なり弟子又大菩薩・阿羅漢なり」

「其の故は」――それでは、なぜそのような難を受けるのだろうか。ここでは、釈尊在世のこと、仏法発祥の時のことを述べられております。「在世」すなわち釈尊の時は、「能化の主は」――一切衆生を指導し、救済してゆくあるじは、「仏なり」――釈尊であり、三十二相を具備した立派な仏さまであった。本をただせば、釈尊は王宮に生まれた貴族です。

「弟子又大菩薩・阿羅漢なり」――また釈尊の弟子は、大菩薩です。現代でいえば、東大の教授のような立派な人たちばかりです。釈尊が出現した当時は、大菩薩といえば、仏法を根底にして、その当時のインド全体を指導しきった指導者をいったのです。

いまは「菩薩」などというと、なんらわれわれの生活に密着しない別世界のもののように思われていますが、そこにも仏法の乱れ、また一般に仏教が現実生活に対して価値をなくしてしまっている姿

があらわれています。しかし、釈尊在世はそうではなかった。

いまわれわれは地涌の菩薩の眷属です。現実の社会に、国家に、民族に、世界に、もっとも貢献し、それを指導していく力ある指導者でなくてはいけないのです。

それはさておいて、つぎに「阿羅漢」というのは、やはり、悟りをえた大学者とでもいえましょうか。仏法上では、小乗教の悟りをえた人々をいいます。やはり大菩薩に等しい、優秀な人たちです。

「人天・四衆・八部・人非人等なりといへども調機調養して法華経を聞かしめ給ふ猶怨嫉多し」

人界の人々、天界の人々、そしてまた「四衆」――一般の僧侶、一般の尼僧、そして一般の男の人、一般の女の人、これを四衆といいます。

それから八部というのは、これは、天、竜、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅迦等で、ちょっと言葉はむずかしいですが、どんな生命の持ち主であっても、ということなのです。

それから「人非人」――これは、人生という観点からみた場合には、人間以下のものであってもということです。地獄界、修羅界、そういうところで生活をしているもののことであります。

「調機調養して法華経を聞かしめ給ふ」というのは、釈尊が長いあいだかかって、小乗教から、権大乗教、実大乗教と、説いてきたことをいうのです。だんだん仏法を認識させ、だんだん釈尊を信奉させるようにして、最後に法華経を聞かせたのです。

また、この調機調養というのは、「四十余年未顕真実」でいう四十余年間の調機調養という意味だけではありません。過去世の過去世、そのまた過去世を説かれているのです。何百年、何千年、何万

年のあいだ、釈尊が、何回も生まれては人々を教え、だんだんと衆生の機根がととのい、頭がよくなり、法華経がわかるようになってきて、信心するようにうまくリードしてきたという意味なのです。

それであっても、なお、まだ怨嫉があったというのです。仏にさせまいという魔の働きがでるものだ、批判があるものだ、ということです。この釈尊の時代の衆生のことを、本已有善の衆生というのです。すでに過去にずっと化導され、調機調養され、「本已に善が有る」衆生をいうのです。

しかしながら、末法の衆生は本未有善というのです。なにも仏道修行を積んできていない。ですから、御本尊のいわれを五年や十年聞いただけでは、末法の人々が信心するわけはないのです。

それを説明もしないで、はじめから信心しなければ罰がでるぞなどというのですから、怨嫉も大きいわけです。

このように釈尊は、やわらかく長く、そしてまた包容しながら、説明しながら、何百年、何千年、何万年と説いたが、まだ怨嫉が多かったというのです。

末法は三毒強盛の人が集う

何に況んや末法今の時は教機時刻当来すといへども其の師を尋ぬれば凡師なり、弟子又闘諍堅固・白法隠没・三毒強盛の悪人等なり、故に善師をば遠離し悪師には親近す、其の上真実の

法華経の如説修行の行者の師弟檀那とならんには三類の敵人決定せり、されば此の経を聴聞し始めん日より思い定むべし況滅度後の大難の三類甚しかるべしと、然るに我が弟子等の中にも兼て聴聞せしかども大小の難来る時は今始めて驚き肝をけして信心を破りぬ、兼て申さざりけるか経文を先として猶多怨嫉況滅度後と朝夕教へし事は是なり・予が或は所を・をわれ或は疵を蒙り・或は両度の御勘気を蒙りて遠国に流罪せらるるを見聞くとも今始めて驚くべきにあらざる物をや

「何に況んや末法今の時は教機時刻当来すといへども其の師を尋ぬれば凡師なり」

ここからは、末法の大聖人の時代のことを述べられています。

いかにいわんや末法の今の時は、「教機時刻当来す」――「教」は三大秘法の御本尊、「機」は、南無妙法蓮華経を信じなければならない衆生の機根です。「時刻当来す」とは、釈尊の仏法は、すでに二千年で終わった。いまは大聖人の仏法のひろまるべき時です。

「其の師を尋ぬれば凡師なり」――「其の師」とは人本尊。これは日蓮大聖人のことであります。

「凡師なり」とは、日蓮大聖人は、漁師出身の凡夫僧のお姿です。ですからだれも信用しません。なんだ、あんな僧侶が、といってきかないのです。釈尊の場合には、ずっときらびやかに振る舞ってきたから尊敬されたのです。

「弟子又闘諍堅固・白法隠没・三毒強盛の悪人等なり」

これは、大集経等にでている文です。末法の衆生は、「闘諍堅固」――教義の面で、闘諍言訟ともいいますが、みな喧嘩ばかりしている。いま、日本の国のなかでも、争ってばかりいる。また世界中が、広い意味でこの予言どおりではありませんか。

「白法隠没」――釈尊の仏法が、まったく効力を失う、ということなのです。新しい仏法でなくてはならない、という意味です。

「三毒強盛」――末法は本未有善の衆生ですから、〝貪・瞋・癡〟の三毒強盛の悪人ばかりです。

〝貪〟は貪欲です。人を殺しても、押しのけても、食っていこう、生きていこうとする。〝瞋〟は、すぐに怒ることです。おっとりして、悠々と人生を生きていくことができないのです。電車に乗っても、ちょっとしたことですぐ腹をたてる、怒りだす。〝癡〟はおろか。自分では、ひじょうに頭がよいつもりでいて、あすの生命すらもわからない。人生の根本のいき方を知らない。おろかなのです。そのように、末法の衆生はみんな悪人なのです。

「故に善師をば遠離し悪師には親近す」と述べられているのです。

「善師」とは日蓮大聖人、「悪師」とは邪宗の僧侶などのことです。

「其の上真実の法華経の如説修行の行者の師弟檀那とならんには三類の敵人決定せり」

「真実の法華経」とは法本尊です。三大秘法の御本尊を根本として、本門の題目を唱えきっていくという如説修行の行者の「師弟檀那とならんには」――現代でいうならば、日蓮正宗創価学会員として、広宣流布という使命に向かって、題目をあげながら進んでいく人は、「三類の敵人決定せり」――

かならず難があるのだ。批判をこうむるのだ。そんなことで驚いてはいけないとのおおせなのです。

「されば此の経を聴聞し始めん日より思い定むべし」

三大秘法の仏法を実践し始めん日より、決意をしなさい。心に決めてかかりなさい。

「況滅度後の大難の三類甚しかるべしと」

釈尊の予言どおり「況滅度後の大難」――これは末法をさしている予言です。その大難がかならずあるということを、覚悟しておきなさい、とのおおせです。

この大難に、事実遭われたのは、日蓮大聖人です。師匠に難があれば、その門下の一分であるわれわれにもやはり難があるのは当然です。

「然るに我が弟子等の中にも兼て聴聞せしかども大小の難来る時は今始めて驚き肝をけして信心を破りぬ」

この「如説修行抄」は、日蓮大聖人が佐渡の国へ流されたときの御書です。まえまえから、この三大秘法の南無妙法蓮華経を弘める人には大難があるとされ、また自分たちにも大小の難がふりかかってくるときいていた弟子檀那も、日蓮大聖人が佐渡へ流されるに対する戒めが、この御書なのです。それに対して、はじめてビックリして退転してしまった。

「兼て申さざりけるか」

まえもってよく教えておいたではないか、ということです。

「経文を先として」――あくまでも経文を示して教えられたのです。われわれもまた、御書どおりに

進めばよいのです。

「猶多怨嫉況滅度後・況滅度後と朝夕教へし事は是なり」

仏になるためには、末法においては、世の中が悪いのだから、難はかならずあるのだ。だが、難があったからといって、絶対に退転をしてはならないということは、朝夕教えておいたではないか。

「予が或は所を・をわれ或は疵を蒙り」

「所を・をわれ」とは、松葉ケ谷の法難であり、「疵を蒙り」とは、小松原の法難のとき東条景信の迫害をうけ、刀で眉間にきずをうけたことをいいます。

「或は両度の御勘気を蒙りて遠国に流罪せらるるを」

これは島流しです。「御勘気を蒙り」とは幕府のとがめをうけたということです。島流しにも近流、中流、遠流とありますが、日蓮大聖人は、いちばん遠い所へ流された。死刑に匹敵します。両度とは、二回ということです。弘長元年五月十二日の伊豆の伊東と、文永八年十月の佐渡の二回です。

「見聞くとも今始めて驚くべきにあらざる物をや」

大聖人が遠流されるのを見たり聞いたりしたとしても、今はじめて驚くべきことではないではないか。大聖人のこのお姿は、況滅度後の三類の強敵があるという釈尊の予言を、そのままの姿で示しているにすぎない、喜びなさい、とおっしゃっているのです。

諸君もこの段だけは、よく肝に銘じておくべきです。どんな難があっても、信心だけは破ってはいけないというのです。

スピードのある新幹線には、風は強く当たる。飛行機だって、強い風が当たります。風が当たるのがいやだったら、走らなければいい。だが、走らなければ目的地へ着きません。難があるということは、それと同じ道理なのです。

戦いのなかに真の安楽がある

問うて云く如説修行の行者は現世安穏なるべし何が故ぞ三類の強敵盛んならんや、答えて云く釈尊は法華経の御為に今度・九横の大難に値ひ給ふ、過去の不軽菩薩は法華経の故に杖木瓦石を蒙り・竺の道生は蘇山に流され法道三蔵は面に火印をあてられ師子尊者は頭をはねられ天台大師は南三・北七にあだまれ伝教大師は六宗ににくまれ給へり、此等の仏菩薩・大聖等は法華経の行者として而も大難にあひ給へり、此れ等の人人を如説修行の人と云わずんばいづくにか如説修行の人を尋ねん、然るに今の世は闘諍堅固・白法隠没なる上悪国悪王悪臣悪民のみ有りて正法を背きて邪法・邪師を崇重すれば国土に悪鬼乱れ入りて三災・七難盛に起れり

「問うて云く如説修行の行者は現世安穏なるべし何が故ぞ三類の強敵盛んならんや」

「如説修行の行者は現世安穏なるべし」ということは、じつは法華経に説かれているのです。「猶多

怨嫉況滅度後」と、三類の強敵の予言もまた、法華経にある。ひじょうに矛盾があります。一方では現世安穏と説き、他方では難があると説かれている。

ここは、法華経のなかには現世安穏と説かれている個所があるのに、なぜ、三類の強敵が盛んであるのか、という質問です。たしかに正しい質問です。

これは、一般論で申し上げますが、一つは、先覚者というものは、かならずその時代において大なり小なり難を受けるものです。また、福沢諭吉もそうです。吉田松陰もそうです。たとえていうならば、毒をあおって死んでおります。キリストもそうです。毎日命をねらわれていた。ソクラテスにしても毒をあおって死んでおります。孔子もずいぶん迫害を受けています。

いわんや、仏さまです。三世を知るを聖人といいますが、仏さまは、外道の聖人とは本質的に違うのです。外道の聖人は、今世のことはわかるかもしれない。でも来世のことはなにもわからないのです。それでも難を受けている。仏さまは、三世常恒、すなわち永遠の先まで見とおせるのですから、その時代の人々に仏の説く法がわかるはずもなく、したがってより大きな難があるのは当然といえましょう。

しかし、仏法には、あくまでも現世安穏と説かれている。難を受けても、かならず安穏になることもまちがいない。そこが外道の難とは違うのです。また仏法のために受ける難には、宿命転換という原理があるのです。

たとえば私たち個人にとってみれば、信心しきって、罪業を消滅し、自分自身の信心のうえの使

命、すなわち今世の使命を果たしていくならば、それによってかならず現世安穏になるのです。

さらに日本全体にとった場合には、折伏をしきって、そして広宣流布を実現していくならば、日本の国の現世安穏も疑いありません。広く開いて、世界も同じ方式になります。

ですから、たとえ日本の広宣流布はすぐには達成されなくとも、それをめざして励みゆくところに、個人の現世安穏、所願満足、すなわち一生成仏はまちがいないのです。われわれの前進には犠牲はありません。

しかし、個人だけ幸せになって、あと日本の国は、それからまた世界は、どうなってもよいというわけにはいかない。日本の、世界の平和を実現するまでは、どうしても戦わなくてはなりません。

ある中国の革命指導者のいわく「大闘争のなかに、はじめて平和がある」と。まさに至言です。

広宣流布を達成して日本の国を救おうと、題目をあげて戦いきっていく、その人生もまた大闘争です。苦労もあるでしょう。しかし、そのなかにこそ、自分のほんとうの大満足がある、安穏があるのです。

あれほどの鎌倉時代の権力主義の渦中において、日蓮大聖人は、真っ向から四箇の格言をかざして、大闘争をなされ、法体の折伏をされた。けれども、全員が信心したとはいえません。日本全国の広宣流布、いわゆる化儀の折伏を、後世の課題として残されたのです。しかし結局、日蓮大聖人は、最後には身延の沢にお入りになられて、安穏の生活で御入滅になっていらっしゃいます。これが証拠です。

「答えて云く釈尊は法華経の御為に今度・九横の大難に値ひ給ふ」

釈尊であっても、九つの大きい難に遭っている。難に遭ったからといって、それでは、現世安穏の仏の境地ではなかったかといえば、そんなことはありません。悠々たる仏の御境界でありました。

どんな人であっても、信心をしていない人は、その生活の実態、心境、境涯をみた場合には、みんな不幸です。砂上の楼閣なのです。

「過去の不軽菩薩は法華経の故に杖木瓦石を蒙り」

不軽菩薩は、二十四文字の法華経を弘めた人です。そしてやはり、法華経のために、杖で打たれたり、石を投げつけられたりしているのです。ここで、法華経というのは「生命の本源を説き明かした教え」と訳してよいと思います。法華経は、いつの時代にも、その時代の民衆救済の最高の哲理になるのです。そのもっとも究極的に完璧なものが、三大秘法の法華経、すなわち御本尊なのです。

たとえば飛行機といえば空を飛ぶ。人を乗せていくという働きにおいては、飛行機ならば、みな同じです。けれども、ひとくちに飛行機といっても、戦前の飛行機と、今のジェット機とはおのずと異なる。速度も、性能も、収容人数においても、格段の相違があります。

同じように、法華経といっても、釈尊の法華経と、日蓮大聖人の法華経とは目的は同じようであっても、その内容や規模など、ぜんぜんちがいます。南無妙法蓮華経は、これ以上の完璧な法理はないという、最高の法華経なのです。

「竺の道生は蘇山に流され」

道生とは、中国東晋の時代の人です。その道生は正法を弘通したために、大衆にあだまれて呉の国の蘇山に流された。

ここでは、正法を流布して難に遭った何人かを、日蓮大聖人が、正法流布の先覚者という意味で取り上げていらっしゃるのです。

「法道三蔵は面に火印をあてられ」

この人は、中国宋代、徽宗皇帝の時代に、やはり正法を護持していた人であります。仏法を護るためにたたかって、顔に火印を押されて、江南の道州に追放になったのです。

「師子尊者は頭をはねられ」

師子尊者は、釈尊滅後千二百年ごろのインドの人です。正法のために、国王の檀弥羅王に首をはねられた。

「天台大師は南三・北七にあだまれ」

天台大師は、中国に出現された像法時代の仏さまです。「南三・北七」とは中国の南北朝時代、江南に三人、江北に七人、それぞれ異なった学説を唱える者がいたのです。天台は、その南三北七に、たいへんにあだまれた。

「伝教大師は六宗ににくまれ給へり」

六宗とは、奈良の六宗、あるいは南都の六宗といい、当時のいちばん中心の指導階層がいた宗派です。これを伝教大師が桓武天皇の前で、法華経によって打ち破った。そして迹門の戒壇を建立したの

は有名な話であります。

「此等の仏菩薩・大聖等は法華経の行者として而も大難にあひ給へり」

これらの人々は、法華経を修行して、しかも大難にあっているではないか。

「此れ等の人人を如説修行の人と云わずんばいづくにか之を尋ねん」

この人たちは、在世の、脱益の法華経の、如説修行の人であります。それに対して大聖人は、下種の法華経の修行者であります。したがって、如説修行の人であることがかえって、難を受けていることが証明となるのです。

現在でも、あだまれているところは、日蓮正宗創価学会だけです。他の宗教は、天理教でも、立正佼成会でも、昔から存在する既成宗教の集まりである新宗連にしてもぜんぶ、日本仏教会（全日仏）でも、新興宗教の集まりであり、仏意仏勅を蒙って、権力と戦い、邪法と戦い、迫害をなにも迫害などは受けていない。

んか。ぜんぶ御書のとおりです。このように勇敢に戦っているのは、われわれだけではありません。永遠に幸せになる因をつくっているのです。確信をもって進むて、仏になれないわけはありません。

とくに男子は、たくましい人、強い生命の人になっていただきたい。女子は、純粋な信心の人になっていただきたい。

「然るに今の世は闘諍堅固・白法隠没なる上」

今の世、末法は、争いの絶えない時であるし、釈尊の仏法も隠没してしまう時です。

また「悪国」――国も悪い。たしかに悪いです。それから「悪王」――政治家も悪い。買収ばかりではないですか。選挙のときは頭を下げて、後はなにをしているかわけがわからない。悪いことばかりやっている。悪王です。「悪臣悪民のみ有りて」――官僚や民衆もよくない。悪臣悪民、結局、民衆のことです。

「正法を背きて邪法・邪師を崇重すれば」

日蓮正宗、大聖人の仏法に背いて、他の思想、哲学、邪教、邪宗等を崇重していくならば。

「国土に悪鬼乱れ入りて三災・七難盛に起れり」

国土の思想が乱れる。「悪鬼乱れ入り」とは、思想が乱れることです。思想が乱れるがゆえに、いっさいが乱れていくのです。それで三災、七難が盛んに起きてくる。あらゆる不幸が、悪循環で連続して起こってくる、との教えであります。

凜々たる折伏弘教の実践を

かかる時刻に日蓮仏勅を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背きがたければ経文に任せて権実二教のいくさを起し忍辱の鎧を著て妙教の剣を提げ一部八巻の肝心・妙法五字の旗を指上て未顕真実の弓をはり正直捨権の箭をはげて大白牛車に打乗って権門をかっぱ

と破りかしこへ・おしかけ・ここへ・おしよせ念仏・真言・禅・律等の八宗・十宗の敵人をせむるに或はにげ或はひきしりぞき或は生取られし者は我が弟子となる、或はせめ返し・せめをとしすれども・かたきは多勢なり法王の一人は無勢なり今に至るまで軍やむ事なし、法華折伏・破権門理の金言なれば終に権教権門の輩を一人もなく・せめをとして法王の家人となし

「かかる時刻に日蓮仏勅を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ」

このような悪世末法の時に、仏の命を受けて日本国に生まれたことこそ、時の不祥である。悪い時に生まれてきたものだ、とおおせです。

「法王の宣旨背きがたければ経文に任せて権実二教のいくさを起し」

この場合の「法王」は釈尊です。釈尊の命令に背くわけにはいかないから、権実二教のいくさ、邪宗破折のいくさを起こした。

大聖人の場合には、釈尊の命令に背くわけにはいかないと述べられて、わかりやすく論理的に釈尊を立てたわけです。一つの仏教史観です。ほんとうは、大聖人は、すべてお悟りあそばしているのです。ですから、大聖人の仏法は、まったく独自なものであるのですが、順序正しく、このようになっているのだと、帰納法的に御明示くださったところであります。

「経文に任せて」――法華経に任せて、「権実二教のいくさを起し」――権教と実教を、はっきり分けておっしゃっています。邪法と正法をはっきり立てわけなければならないという意味です。

「忍辱の鎧を著て」――「忍辱の鎧」とは慈悲です。どんな難があっても、一切衆生を救いきる三大秘法の仏法をたもたせて、根本的幸せを与えきるという、その行動です。

「妙教の剣を提げ」――「妙教」とは南無妙法蓮華経です。

「一部八巻の肝心・妙法五字の旗を指上て」

法華経一部八巻の肝心である南無妙法蓮華経の題目をさしあげてということです。陰でこそこそやっていてはいけないのです。「妙法五字の旗を指上て」です。その決心でいくのです。凛々たる信心の息吹をもって、というのです。

「一部八巻」が、釈尊の脱益の法華経です。「肝心」が、下種家の南無妙法蓮華経、すなわち大聖人の法華経です。種脱相対しているのです。

「妙法五字」とは、南無妙法蓮華経のことです。五字といっても、七字といっても、同じことです。

「未顕真実の弓をはり正直捨権の箭をはげて」

無量義経の「四十余年未顕真実」の弓をはり、法華経方便品の「正直に方便（権教）を捨て」の箭をつがえて、「大白牛車に打乗って」――この「大白牛車」とは、法華経のことです。インドにおいては、いちばん高貴な、強い、立派な車をいうのです。羊車、鹿車、牛車の三車とはくらべようもなくすばらしいのが、大白牛車です。

「権門をかっぱと破りかしこへ・おしかけ・ここへ・おしよせ念仏・真言・禅・律等の八宗・十宗の敵人をせむるに」

権教の門、邪宗教の門を打ち破り、あちらへおしかけ、こちらへおしよせして戦ったと――勇ましいですね、大聖人は。われわれは、こういうわけにはいきませんが、座談会でしっかり折伏しようではありませんか。

「或はにげ或はひきしりぞき或は生取られし者は我が弟子となる」

あるいは逃げ、あるいは退却し、また逃げおくれて生け取られた者は大聖人の弟子となった。

「或はせめ返し・せめをとしすれども・かたきは多勢なり法王の一人は無勢なり今に至るまで軍やむ事なし」

あるいはせめ返し、せめおとしたりするけれども、一人である。だから現在にいたるまで、邪宗破折の戦いはやむことがない。

大聖人は佐渡へ流されても、その広宣流布のための戦やむことなしだったのです。どんなことがあろうとも、こりはしない、死ぬまで広宣流布のために指揮をとるぞ、一人であっても、無勢であっても、最後まで、この戦は、法戦は、断固としてするぞ、といわれているのです。

それを、高等部員は忘れてはいけません。生涯の決心にしなければなりません。

大聖人の当時は、大聖人お一人で、無勢です。弟子はみんな退転したのです。しかし今は、老人から赤ん坊までぜんぶ入れれば、約一千万におよぶ同志がいるのです。日本の人口の十分の一いるのですから、むしろ敵は無勢、味方は多勢ではないですか。それでいて退転するなどというのは、よほどおろかな人ですよ。そのような人はどんなところへいっても、人生の敗北者です。

「法華折伏・破権門理の金言なれば」
「折伏」ということばが、はっきり御書にでておりますは、学会でかってにやっている実践でもない。大聖人がおっしゃっているのです。御書にあり、法華経にあるのです。

法華経は折伏であり、権教を破していくという金言です。
「終に権教権門の輩を一人もなく・せめをとして法王の家人となし」
この「法王」とは、ここでは大聖人と拝すのです。総じていえば、皆さん方は法王の娘であり、むすこであり、すなわち王子であり、王女です。その気位でいくのです。

人法共に不老不死

天下万民・諸乗一仏乗と成って妙法独り繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華経と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨壌を砕かず、代は義農の世となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理顕れん時を各各御覧ぜよ現世安穏の証文疑い有る可からざる者なり

これは広宣流布の暁のすがたです。この段は有名な言葉です。ここも日寛上人は、さまざまな角度からお説きになっていらっしゃいますが、いまは省略します。

大聖人は、今の中国が、昔、もっとも平和であったときの故事を引かれて、広宣流布した社会の様相を述べていらっしゃるところです。夢に見たよい社会ができるのです。

「天下万民・諸乗一仏乗と成って妙法独り繁昌せん時、」

「天下万民」とは、日本国民、また全世界の人々と訳して、日蓮大聖人の妙法が、独り繁昌する時、すなわち、万民一同に南無妙法蓮華経と唱え奉らば」てよいのです。人々が、あらゆる邪宗を捨向かって南無妙法蓮華経と唱えるならば、ということですべての人々が一同に、三大秘法の御本尊にです。

「吹く風枝をならさず雨壌を砕かず」

梢を吹く風は、そよそよと吹き、降る雨も、しとしと水を起こすようなことはなくなるのです。

「代は義農の世となりて」

古代、中国に、伏義、神農という帝王によって治められた、ひじょうに理想的な、平和な社会があった。泥棒などはいなかったのです。広宣流布になれば、そういう世の中となるのです。

「今生には不祥の災難を払ひ」――「不祥の災難」とは「長生きできる。もなくなるのです。「長生の術を得」――長生事故です。交通事故も少なくなる。炭坑事故「人法共に不老不死の理顕れん時を各各御覧ぜよ」

「人法共に」――人生も、そしてまた妙法もともに、ということです。妙法が、この宇宙のいっさいの本源力であり、その妙法にもとづくいっさいの社会、また人生なのです。

「不老不死」――どこまでいっても、幸福を満喫しきっていける人生を生きていくことができるということです。

ここは、日寛上人によりますと、深甚の解釈がありますけれども、わかりやすくいえば、妙法は宇宙の本源力です。永久に崩れることなく、発展せしめていく力です。したがって、妙法は不老不死です。

その法に全人類がのっとるのですから、妙法とともに、最高に満足できる一生を送ることができるというのです。所願満足です。

スウェーデン等は、ひじょうに社会保障制度が発達している。社会もよくなった。それでも自殺者が多い。これでは不老不死ではありません。どんなによい社会ができても、妙法がなければ、不老不死の所願満足はないのです。

「現世安穏の証文疑い有る可からざる者なり」

ですから、結局、現世安穏はまちがいない。広宣流布になれば、いま申し上げたような世の中になるのです。

因果倶時ですから、それを、まず個人が実践していくのです。そして自分自身の「吹く風枝をならさず」等の文の証拠をつくっていく。それから自分の住む社会へと広げていくならば、やがては、そ

の國へ、また世界へと、その証拠がつくられていくのです。そのようにしなさいとの御文です。このように、まず個人にとり、それから国家、人類世界にとっていくことが大切です。

これからも、この御書は何回も拝読していくようにしましょう。そうすれば、だんだんとわかっていくようになります。しっかり勉強していただきたい。

如説修行の行者とは

問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べきや、答えて云く当世・日本国中の諸人・一同に如説修行の人と申し候は諸乗一仏乗と開会しぬれば何れの法も皆法華経にして勝劣浅深ある事なし、念仏を申すも真言を持つも・禅を修行するも・総じて一切の諸経並びに仏菩薩の御名を持ちて唱るも皆法華経なりと信ずるが如説修行の人とは云われ候なり等云云

「問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べきや」

如説修行の行者というのは、どのように信ずる人をいうのか、との質問です。

「答えて云く」――ここは、世間一般の、如説修行の行者に対する考え方を述べられているのです。

当世（大聖人御在世時代）の日本の人々は「如説修行の人」について、つぎのように考えている。

すなわち絶待妙の立場から、声聞、縁覚の二乗、それに菩薩を加えた三乗のための経も、みな究極においては一仏乗を説いているのだと開会すれば、法華経以前のどの法も、みな法華経となって、勝劣浅深の差別はない。したがって念仏を唱えても、真言をたもっても、また禅を修行しても、その他いろいろな宗教を信仰しても、いっさいの諸経、ならびに仏菩薩の名号をたもって唱えるのも、みな法華経をたもつことになるのだと信じていく人が、結局、法華経からみればぜんぶ生きてしまうのだから、如説修行の人になるのではないか、というのです。

これは絶待妙を誤って用いているのです。ひじょうに巧みにこじつけの解釈をしていますが、このような手は、邪宗のよくやる論法です。

方便、真実を立て分けよ

予が云く然らず所詮・仏法を修行せんには人の言を用う可らず只仰いで仏の金言をまほるべきなり我等が本師・釈迦如来は初成道の始より法華を説かんと思食しかども衆生の機根未熟なりしかば先ず権教たる方便を四十余年が間説きて後に真実たる法華経を説かせ給いしなり、此の経の序分無量義経にして権実のはうじを指て方便真実を分け給へり、所謂以方便力・四十余

年・未顕真実是なり、大荘厳等の八万の大士・施権・開権・廃権等のいはれを心得分け給いて領解して言く法華経已前の歴劫修行等の諸経は終不得成・無上菩提と申しきり給ひぬ、然して後正宗の法華に至って世尊法久後・要当説真実と説き給いしを始めとして無二亦無三・除仏方便説・正直捨方便・乃至不受余経一偈と禁め給へり

「予が云く然らず所詮・仏法を修行せんには人の言を用う可らず只仰いで仏の金言をまほるべきなり」

前述の一般の人々の考え方を、大聖人が否定されているのです。

「法に依って人に依らざれ」とのことばもありますが、大事なことは「人の言」を用いるのではなく、「仏の金言」どおり実践することです。仏が説いたものをなんでも修行すれば、それは如説修行の人と思われるかもしれないが、じつはそうではない。諸乗一仏乗の法華経だけを信じて、他の諸経を破折していくのが、ほんとうの如説修行の人なのだと、つぎに経文のうえから証明されるのです。

では、法華経とそれ以前の爾前経とはどうちがうかといえば、たとえば家を建てるときに、足場を築いてから建てはじめますが、その足場にあたるのが爾前経なのです。できあがった家は法華経です。家ができれば、足場はもはや不用です。きれいに取り払わなくてはならない。その取り払うことが折伏なのです。

この例のように具体的なものの場合には、なかなかわかりますが、経文の内容などの場合には、

りにくい。そこで一般の人々は、釈尊が説いたことには変わりはないのだから、どの宗派を信じても、釈尊の如説修行になるではないかと思ってしまうのです。

ここで、すこし話が飛躍しますけれども、三大秘法の御本尊を根本とした場合には、流通分として、いっさいの経文を生かしてよい。使っていけるのです。さらにキリスト教哲学であろうが、マルクスの哲学であろうが、インドの哲学であろうが、学問として生かしていくことはいっこうにかまいません。

「我等が本師・釈迦如来は初成道の始より法華を説かんと思食しかども衆生の機根未熟なりしかば先ず権教たる方便を四十余年が間説きて後に真実たる法華経を説かせ給いしなり」

釈尊は、三十歳で成道して、五十年間、八十歳まで仏法を説きました。そして衆生の機根が未熟だったので、初めから法華経を説かないで、権教方便の教えを最初の四十二年間説きました。その後に、釈尊のほんとうの悟りである法華経を説いたのです。

「此の経の序分無量義経にして権実のはうじを指て方便真実を分け給へり」

「此の経」とは法華経であります。法華経の序分が、無量義経という経文になります。法華経の一歩手前に説かれたので、開経といわれます。

その無量義経に、「方便真実を分け給へり」、すなわち権教と実教との経文をはっきり立て分けた、と説いているではないかということです。

「方便」は権教である四十余年の爾前経、「真実」は実教である法華経のことです。そのように、無

量義経に明確に説いているのです。

「以方便力・四十余年・未顕真実」

これは無量義経の経文です。方便力をもって、四十余年、未だ真実を顕わさず、と読みます。すなわち、四十余年間の教えは、方便教であり、まだ真実を明かしていない、と無量義経に説いているのです。

「大荘厳等の八万の大士」――この菩薩たちは無量義経に説かれています。「八万の大士」とは多くの菩薩という意味です。

「施権・開権・廃権等のいはれを心得分け給いて」

法華経を立てるにあたって、釈尊の説法には三重の段階があります。

「施権」――為実施権といいますが、法華経を説く準備として、権教を説くことをいいます。それから「開権」――これは、開権顕実といって権教を開いて、実教を説くことです。そして「廃権」――廃権立実といって、権教を立てていくことです。

大荘厳等の多くの菩薩たちは、これらの意味を心得て、つぎのように述べたのです。

「領解して言く法華経已前の歴劫修行等の諸経は終不得成・無上菩提と申しきり給ひぬ」

「領解して言く」――仏の説法を聞いて、菩薩たちが、理解したことを述べたのです。

「法華経已前の歴劫修行等の諸経は」――爾前経では、菩薩はたいへん長いあいだ、種々の修行を行って、やっと成仏すると説かれています。

しかし、その歴劫修行を説く爾前経では、「終不得成・無上菩提」――終に無上菩提を成ずることを得ず、すなわち、菩薩たちは修行したけれど、ついに成仏することはできなかった、永久に成仏できない、と断言したのです。

「然して後正宗の法華に至って世尊法久後・要当説真実と説き給いしを始めとして無二亦無三・除仏方便説・正直捨方便・乃至不受余経一偈と禁め給へり」

「正宗」とは正宗分のことで、本論となる部分をさします。序分、正宗分、流通分とたてわけますが、これも仏法の方軌の一つです。ここでは、その正宗分について述べているのです。いちばん要というわけです。

序分の無量義経が終わって、正宗分の法華経方便品にいたって、初めて「世尊法久後・要当説真実」と説いた。ここに、法華経こそが、釈尊出世の本懐たる真実の教えであると宣言したのです。

この「要ず当に真実を説くべし」の「真実」とは法華経です。「世尊は法久しくして後」の「久」が爾前経になるわけです。

また「無二亦無三・除仏方便説・正直捨方便・乃至不受余経一偈」と説きました。

「二無くまた三無し」――唯一仏乗、法華経しかない、ということです。「仏の方便の説をば除く」――ただし、方便の教えは除くのです。

ゆえに「正直に方便を捨て」――方便品の方便でなくして、正直に爾前経の方便を捨てなさい、ということです。以上は、方便品の文です。

「乃至余経の一偈をも受けざれ」――譬喩品の文です。法華経以前の経文は、たとえ一偈といえども絶対に受けてはいけない。このように戒めてあるではないか。そのとおり、如説修行しなくてはいけないのだとおおせです。

今でいえば「不受余経一偈」というのは、御本尊以外は、すべて信仰の対象としてはいけないということです。「二無くまた三無し」とは、幸福になる道は、ただ御本尊しかない。他にはなにもないということです。

人生の究極の目的は、学者になることでもなければ、教育者になることでもない。また、大政治家になることが人生の目的でもない。それらは、みな方便です。根本の目的は成仏にある。私たちにあてはめていえば、そのように解釈できます。

ただ御本尊のみと信ずる人が如説修行の人

是より已後は唯有一仏乗の妙法のみ一切衆生を仏になす大法にて法華経より外の諸経は一分の得益も・あるまじきに末法の今の学者・何れも如来の説教なれば皆得道あるべしと思いて或は真言・或は念仏・或は禅宗・三論・法相・倶舎・成実・律等の諸宗・諸経を取取に信ずるなり、是くの如き人をば若人不信・毀謗此経・即断一切世間仏種・乃至其人命終・入阿鼻獄と定

め給へり、此等のを約きての明鏡を本として一分もたがえず唯有一乗法と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり

「是より已後は」――ここは、無量義経や法華経で定められた後は、という意味とも拝せますし、または、末法に入っては、とも立てられます。「唯有一乗法」の法華経だけが、一切衆生を仏にすることのできる大法であり、その他の諸経は、少しの利益もあるわけがないのです。

ところが末法の今の学者は、どの経にしても釈尊の説いた教えであるから、みな成仏できるだろうと思っている。そして、権大乗教の禅宗だとか、小乗教の三論、法相、倶舎、成実、律等のいろいろな宗教を、さまざまに信じているのです。

この三論、法相、倶舎、成実は、今は少ないですが、桓武天皇時代以前、伝教大師がでる以前においては、奈良朝文化の中心の宗教だったのです。

「若人不信」以下は、譬喩品の文です。

「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん。乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と読みます。

そのように、釈尊が定めた真実の教えに背き、自分勝手な解釈をして、禅宗などの邪宗を信仰する者は、または今日においては、日蓮正宗、三大秘法の御本尊を誹謗して、かってに邪法を信心する者は、釈尊が法華経譬喩品において「若し人信ぜずして此の経（三大秘法の御本尊）を毀謗せば、即ち一

切世間の仏種を断ぜん」といわれているように、絶対に幸福にはなれないのです。

「乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」――生きているあいだも幸福になれない。そして死しては、かならず地獄に堕ちる。阿鼻叫喚地獄――地獄には百何十種とありますが、そのなかでいちばんきびしい地獄です。無間地獄です。間断なく、ずーっと苦しみが続くのです。

そのようになると断定されている。こわいことです。ウソといおうが、信じないといおうが、そんなバカなことがあるかといおうが、真実なのです。これを確信してもらいたいのです。

「此等のをきての明鏡を本として一分もたがえず唯有一乗法と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり」

釈尊が説いたこの経文の明鏡を根本として、それに一分も違わず、唯有一乗法と信ずる、すなわち法華経だけが幸福になる道であると信じていく人を、如説修行の人というのである。このように釈尊が断定しているのです。

これは一往、釈尊の法華経を中心に立てております。その法華経の寿量品の文底に秘沈して、三大秘法の御本尊が説かれているのです。

初めから「三大秘法だ」と、そのまま説いても人々にはわからない。しかも、その三大秘法をわからないで誹謗すれば、かえって地獄へ堕ちてしまいます。ですから、理解できるように一往、釈尊を立て、法華経を表にだされて説かれたのです。

ゆえに、法華経とはなにかといえば、それは日蓮大聖人の仏法、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華

経と拝すのです。表面では法華経、法華経といわれているけれども、大聖人の御観心は、どこまでも南無妙法蓮華経につきるのです。

したがって「唯有一乗法」――一乗の法とは、三大秘法の御本尊のことです。これ以外に幸福になる道はないと「信ずるを」――行ずる、実践する人こそ、如説修行の人といえると、仏は断定されているのです。そしてこの「仏」とは、日蓮大聖人であると拝すのです。

しかし、文の上では、ここは一往、釈尊を表にし、法華経を爾前経に相対して立てておられるところです。

難じて云く左様に方便権教たる諸経諸仏を信ずるを法華経と云はばこそ、只一経に限りて経文の如く五種の修行をこらし安楽行品の如く修行せんは如説修行の者とは云われ候まじきか如何

このまえの段では、どのように信ずる者が、如説修行の行者といえるのか、との問いに答えて、大聖人は、釈尊が法華経の方便品で「唯一乗の法のみあり」「正直に方便を捨て」と説き、また譬喩品で「余経の一偈をも受けざれ」と説いた文に従い、権経を捨て、ただ法華経のみを信じてゆく者が、如説修行の人である、とおおせになっています。

ここでは、それに対して、それでは、法華経一経に限って、法師品の五種の修行や、安楽行品の四

安楽行のごとき〝授受〟の修行をする者が、如説修行の者ではないのか、と反論してきているのです。

「左様に方便権教たる諸経諸仏を信ずるを法華経と云はばこそ」とは、成仏できない方便権教の諸経諸仏を信ずるのを、法華経を信ずる人であるというのならばともかく、との意であります。

「只一経に限りて経文の如く五種の修行をこらし安楽行品の如く修行せんは」

釈尊の数多くの経のなかから、ただ法華経一経だけを取り出して、「経文の如く五種の修行をこらし」――法師品に説かれたとおりに、受持、読、誦、解説、書写等の五種の修行を行い、かつ安楽行品のごとく、他の経をまったく誹謗しないというような修行をする者が、「如説修行の者とは云われ候まじきか如何」――如説修行の行者とはいわれないであろうか、といっているのです。

これは、暗に、日蓮大聖人が五種の修行を行わず、また他の宗派を強く破折して、難にあっているのは、如説修行の行者ではないのではないか、という非難をふくんでいるわけです。

仏法修行の要諦は摂折二門

答えて云く凡仏法を修行せん者は摂折二門を知る可きなり一切の経論此の二を出でざるなり、されば国中の諸学者等仏法をあらあら学すと云へども時刻相応の道をしらず四節・四季・取取に替れり、夏は熱く冬はつめたく春は花さき秋は菓なる春種子を下して秋菓を取るべし秋

種子を下して春菓を取らんに豈取らる可けんや

ここは、法華経の修行にも、時によって、摂受と折伏の二門があることを述べられて、その時を違えては、成仏どころか仏法を乱してしまうとおおせられているところです。

そして、末法は折伏の時であり、法華経、すなわち三大秘法の御本尊を持って、他のあらゆる邪宗教を破折していくことが、如説修行になることを示されています。安楽行品に説かれたような摂受の修行は、正法時代、像法時代の修行である。末法の修行ではない、とこのまえの論難を打ち破っていくのです。

「答えて云く凡仏法を修行せん者は摂折二門を知る可きなり一切の経論此の二を出でざるなり」

仏法を修行するにあたっては、摂折二門を知るべきである。摂受と折伏です。この二つのうちのどちらかです。摂受とは、やわらかく、他の経を批判したりしないで、法を説くやり方です。法華経の安楽行品に説かれた修行です。正法時代、像法時代、天台大師の時代などは、摂受です。

摂受の場合には、御本尊がないのです。御本尊を根本とした場合には、折伏になっていくのです。今でいえばこう考えてよいでしょう。

ですから、釈尊の仏法の場合、天台仏法の場合、また伝教大師の仏法の場合には、御本尊がありませんから、やはり摂受です。いま末法においては御本尊がありますから、御本尊を根本として修行させていこう、救っていこうということになります。

釈尊在世、正法、像法年間は摂受、末法の日蓮大聖人の時代は折伏です。御本尊を中心にして、他のいっさいの爾前権教を破折していくのが、時に適った修行なのです。折伏をするのだから、三類の強敵が競い起こってくるのは当然でしょう。

「されば国中の諸学者等仏法をあらあら学すと云へども時刻相応の道をしらず」

「国中の諸学者」――国中の仏法を学んでいるもの、すなわち邪宗の僧などは「仏法をあらあら学すと云へども」――仏法をほぼ学んで知っているようではあるけれども、「時刻相応の道をしらず」――正法、像法、末法という時がある。その時に応じた修行を知らない。みな摂受と折伏の二道を知らないというのです。

あくまでも成仏していくには、その「時」をわきまえなくてはいけない。その時に適った仏法がある。末法においては、末法万年尽未来際、これから永遠に、この三大秘法の御本尊によって、御本尊を種にして成仏する以外にない。絶対の幸福をつかむ以外にないのです。

現在、日本にはたくさんの宗教がある。宗教法人だけでも十八万あるという。世界中では、たいへんなものです。しかし、時に適った正しい宗教は、また仏法の真髄というものは、太陽が一つしかないように、一国に国王は一人しかいないように、一つしかないのです。それが日蓮正宗であり、御本尊なのです。

「四節・四季・取取に替れり」

「時刻相応」ということ、時ということは、すべてのものについても大切です。一年のなかでは、春

夏秋冬という時の変化に応じて、自然界も、いっさいのものが変わってきます。

「夏は熱く冬はつめたく」――夏は暑く、冬は寒い。

「春は花さき秋は菓なる」――春には美しい花がいっぱい咲き、秋はその実がなる。

「春種子を下して秋菓を取るべし秋種子を下して春菓を取らんに豈取らる可けんや」――作物を穫るにしても、春に種をまいて、秋、その実をとります。秋に種をまいて、春にその実を収穫しようと思っても、それは無理です。そのように、すべてのものには時が大切であって、時をまちがえたらなんにもならないとのおおせです。

末法は法華折伏の時

極寒の時は厚き衣は用なり極熱の夏はなにかせん、仏法も亦復是くの如し小乗の流布して得益あるべき時もあり、実教の流布して仏果を得べき時もあり、然るに正像二千年は小乗権大乗の流布の時なり、末法の始めの五百年には純円・一実の法華経のみ広宣流布の時なり、此の時は闘諍堅固・白法隠没の時と定めて権実雑乱の砌なり、敵有る時は刀杖弓箭を持つ可し敵無き時は弓箭兵杖何にかせん、今の時は権教即実教の敵と成るなり、一乗流布の時は権教有って敵と成りて・まぎら

はしくば実教より之を責む可し、是を摂折二門の中には法華経の折伏と申すなり

われわれが折伏行を実践していくということは、いまこの御文にあるとおり、大聖人のおおせどおりの修行であり、実践です。それは明瞭であります。「摂折二門の中には法華経の折伏と申すなり」――折伏をしなさいと、こうおおせなのです。

「極寒の時は厚き衣は用なり極熱の夏はなにかせん」

ひじょうに寒いときには、厚くて暖かい衣は役に立つ。けれども、暑い夏には、なんの役にも立たない。かえってじゃまになります。

「涼風は夏の用なり冬はなにかせん」

すずしい風も、また同じです。夏には喜ばれる。けれども冬は、風があったらますます寒い。

「仏法も亦復是くの如し」

仏法もまた、同じように、時に応じた経、そして修行があるのです。

「小乗の流布して得益あるべき時もあり」

小乗教が広まって、功徳のある時もありました。

たとえていうならば、明治時代にも、蓄音機があった。それは、木の箱に大きなラッパのついた形をしていて、手でハンドルをグルグル回して、やっと音が聞こえるような蓄音機だった。それでもレコードを聞く役には立ちました。〝聞こえた〟といって喜んでいた。利益があったわけです。

同じように、釈尊在世や、滅後すこしのあいだは、小乗教でも、得益があった。ぜんぜんなんの宗教も信ぜず、人生観をもっていない人にとっては、幸せだったといえましょう。

「権大乗の流布して得益あるべき時もあり」

権大乗が広まって功徳のある時もあった。正法時代の後半や像法時代などはそうです。

「実教の流布して仏果を得べき時もあり」

実教である法華経が広まって、成仏できる時もある。

「然るに正像二千年は小乗権大乗の流布の時なり」

いろいろな時があるけれども、正法時代、像法時代の二千年のあいだは、小乗教、権大乗教が広まっていく時である。正法時代のまえのほうが小乗教、それ以後、正法時代の後半と像法時代は、権大乗の流布の時です。

「末法の始めの五百年には純円・一実の法華経のみ広宣流布の時なり」

「末法の始めの五百年」というのは、正法千年、像法千年、そのつぎの五百年ということです。仏法では五百年ずつくぎっているのです。

正法年間とは、釈尊滅後五百年とつぎの五百年の、最初の千年間をいい、さらにその後の五百年とつぎの五百年が、像法年間になります。ですからここでは、末法の始め、万年尽未来際の始めを五百年といわれたわけです。この末法の始めの五百年のちょうど中間、すなわち釈尊滅後二千百七十一年目に、日蓮大聖人は御出現になったのです。

そしてこのときに、「純円・一実の法華経」、これは三大秘法の御本尊、末法の法華経と拝すべきですが、それのみが広宣流布する時である、というのです。

絶対に広宣流布する。高い所にある水が、低い所へ流れると同じ道理なのです。

「此の時は闘諍堅固・白法隠没の時と定めて権実雑乱の砌なり」

この三大秘法の御本尊が流布する末法の時を、釈尊が予言して「闘諍堅固・白法隠没の時」といったのです。教義上の争いが絶えず、釈尊の仏法の功徳がなくなる時代になるとの意味です。そして「権実雑乱の砌」――権教と実教が入り乱れて、区別がハッキリしなくなってしまう時です。

今は、いうなれば宗教の戦国時代です。これを統一するのが、私どもの役目です。その方法は折伏行しかないのです。

「闘諍堅固」とは、広くいえば、争いやもめごとが絶えないということです。日本もしかり、また国際社会もしかりです。また日本の宗教界は、既成宗教も新興宗教も、たえずケンカをしては分裂している。

御本尊のもとに、わが日蓮正宗創価学会だけは、ガッチリ団結していこう。諸君がその中核になって、永久に広宣流布の基礎をつくっていくのですから、団結しあっていってください。

「敵有る時は刀杖弓箭を持つ可し敵無き時は弓箭兵杖何にかせん」

たとえていえば、敵があってはじめて、刀や杖や弓矢を持つかいがある。それらを持って、敢然と戦っていかなくてはならない。敵がなければ、武器は用をなさないのです。

「今の時は権教即実教の敵と成るなり」

いま末法の時に入ると、権教は、即実教の、正法の敵となっている。

「一乗流布の時は権教有って敵と成りて・まぎらはしくば実教より之を責む可し」

「一乗流布の時は」――大聖人の仏法、三大秘法の御本尊が流布されるにあたっては、「権教」――邪宗邪義があって、敵となって、広宣流布を妨げようという時には、御本尊を根本として折伏をしていきなさい、との御命令です。

「是を摂折二門の中には法華経の折伏と申すなり」

この戦いが、摂受と折伏に分けると、法華経の折伏といわれるのです。

天台云く「法華折伏・破権門理」とまことに故あるかな、然るに摂受たる四安楽の修行を今の時行ずるならば冬種子を下して春菓を求る者にあらずや、雞の暁に鳴くは用なり宵に鳴くは物怪なり、権実雑乱の時法華経の御敵を責めずして山林に閉じ籠り摂受を修行せんは豈法華経修行の時を失う物怪にあらずや、されば末法・今の時・法華経の折伏の修行をば誰か経文の如く行じ給へしぞ、誰人にても坐せ諸経は無得道・堕地獄の根源・法華経独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給いて諸宗の人法共に折伏して御覧ぜよ三類の強敵来らん事疑い無し

「天台云く『法華折伏・破権門理』とまことに故ある
天台大師は「法華経は折伏の教えで、権門の理を打
ことにそのとおりであるとのおおせです。
「然るに摂受たる四安楽の修行を今の時行ずるならば
そのように、末法は折伏の時代であるのに、安楽行品に説かれた「四安楽」などという摂受の修行
を行ずるならば、それは、時を違えたことになる。折伏もせずに、そのようなことをしているなら
ば、それはちょうど冬に種を蒔いて、春収穫を得ようとしているようなもので、なんの収穫も得られ
ないとのおおせです。
総じては、いまの邪宗教の僧侶は、この姿です。現在の宗教界は、これにピッタリあてはまってい
る。本来、衆生を救うべきであるのに救わない、安閑としている。ということは、法自体がまちがっ
ている証拠です、末法という時代に相応しないから、なんの役にも立たないのです。
「雞の暁に鳴くは用なり宵に鳴くは物怪なり」
鶏が、朝鳴けば、それは目をさまさせてくれ、役に立つ。夜、鳴いても役に立たない。それと同じ
ように、末法に折伏をせず、摂受の修行を行うのは、道理にはずれたことになってしまうのです。
「権実雑乱の時」――末法の、正法と邪法とが入り乱れている時ということです。
「法華経の御敵を責めずして」――御本尊の敵である邪宗教の輩を折伏もしないで、「山林に閉じ籠
り摂受を修行せんは」――世間を離れて、山や林に閉じこもり、自分一人で四安楽等の摂受を修行し

ているような人は、「豈法華経修行の時を失う物怪にあらずや」――法華経流布の時をまったくわきまえないバケモノであるとのおおせです。

「されば末法・今の時・法華経の折伏の修行をば誰か経文の如く行じ給へしぞ」

そのように末法の修行は折伏なのです。その末法に、「法華経の折伏の修行をば」――御本尊を中心とした折伏の修行を、「誰か経文の如く行じ給へしぞ」――だれが、経文のごとくに行じているかといえば、日蓮大聖人を除いて、だれもいないではないか。

「経文の如く」とは、総じては法華経全体になりますけれども、そのなかでもとくに、勧持品ならびに不軽品と拝せるわけです。勧持品ならびに不軽品の経文のごとく行ずる人はだれがいようか、日蓮大聖人お一人しかいないではないか、と示されているのです。

「誰人にても坐せ」――だれであってもよい、「諸経は無得道・堕地獄の根源・法華経独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給いて」――だれでもよいから、面前経では成仏できない、そればかりか人を地獄へ堕とす根源である、ただ法華経だけが成仏のための法であると、声も惜しまず叫んで、「諸宗の人法共に折伏して御覧ぜよ」――邪宗教の人々を、またかれらの邪義を、かたはしから折伏してみなさい。どういうことになるか。「三類の強敵来らん事疑い無し」――かならず、三類の強敵が競い起こることはまちがいないとのおおせです。

大聖人は佐渡の国へ流された。しかし、この勧持品、不軽品どおりに折伏をなさったゆえに、佐渡の国へ流されたのだから、なにも疑うことはないのだよ、とおおせなのです。

法華経の行者に三類の強敵

我等が本師・釈迦如来は在世八年の間折伏し給ひ天台大師は三十余年・伝教大師は二十余年・今日蓮は二十余年の間権理を破す其の間の大難数を知らず、仏の九横の難に及ぶか及ばざるは知らず、恐らくは天台・伝教も法華経の故に日蓮が如く大難に値い給いし事なし、彼は只悪口・怨嫉計りなり、是は両度の御勘気・遠国に流罪せられ竜口の頸の座・頭の疵等其の外悪口せられ弟子等を流罪せられ籠に入れられ檀那の所領を取られ御内を出だされし、是等の大難には竜樹・天台・伝教も争か及び給うべき、されば如説修行の法華経の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ

「我等が本師・釈迦如来は在世八年の間折伏し」

「在世八年の間折伏し」とは、釈尊の場合、最後の八年間に説いた法華経が、折伏にあたるということです。法華経は随自意です。だれが聞かなくても、どんどん説いていきました。そして爾前経はぜんぶ方便であったと説き、真実の法門を明かしました。そのことをいっているわけです。

「天台大師は三十余年」

天台大師は十八歳で出家し、二十三歳で法華経を究めて、その後、爾前権教の諸宗を破折して、五十七歳で摩訶止観を説きましたが、そのことをさしているのです。天台は三十余年のあいだ、権教を破折したという意味です。

「伝教大師は二十余年」

伝教大師もまた二十余年間、桓武天皇のまえで南都六宗を打ち破るなどの折伏をしてきたことをさしています。

「今日蓮は二十余年の間権理を破す」

日蓮大聖人は、建長五年に立宗を宣言なさってから、佐渡でこの「如説修行抄」を著されるまで、ちょうど二十年たっているのです。その間、大聖人は、四箇の格言等をもって、いっさいの「権理」、すなわち邪宗教を折伏してきたのです。経文のとおりのお振る舞いです。

「其の間の大難数を知らず」

その間に受けた大難は数えきれない。おもなものだけでも、小松原の法難、松葉ケ谷の法難、伊豆の流罪、そして竜口の頸の座と佐渡流罪等々、たいへんなものです。

「仏の九横の難に及ぶか及ばざるは知らず」

「仏の九横の難」とは、釈尊が受けた九つの大難です。大聖人の難が釈尊の受けた難と同じくらいであったかどうか、それは「知らず」といわれていますが、釈尊との比較は、謙遜して、ここではふせていらっしゃるのです。しかし事実は、比べものにならないのです。大聖人の受けた難のほうがどれほ

ど大きいか、天地雲泥の差です。

「恐らくは天台・伝教も法華経の故に日蓮が如く大難に値い給いし事なし」

おそらくは、天台大師も、伝教大師も、法華経を弘通するにあたって、権理を破るにあたって、大聖人ほどの大難にあったことはないであろう。

「彼は只悪口・怨嫉計りなり」

天台大師や伝教大師は、ただ悪口されたり、陰で怨嫉されたりしただけである。

「是は両度の御勘気・遠国に流罪せられ」

日蓮大聖人は、伊豆へ佐渡へと二度流罪された。

「竜口の頸の座・頭の疵等其の外悪口せられ弟子等を内を出だされし」

竜口で首を斬られようとなされた。小松原の法難のときには、眉間に傷を受けました。それらの大難のほかにも、ずいぶんと悪口されたりしている。大聖人の弟子も島流しにされた。また弟子を牢に入れられた。そして、大聖人の信者も、領地を没収されたり、所を追われたりした。

「是等の大難には竜樹・天台・伝教も争か及び給うべき」

この、大聖人とその一門が受けた大難に比べれば、竜樹や天台や伝教の受けた難などは、ものの数ではない。

「されば如説修行の法華経の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ」

このように、大聖人も種々の大難を受けられている。したがって、末法において仏の経文どおり、折伏をしていく人には、かならず三類の強敵が競い起こってくる、それを覚悟しなさい、とのおおせです。

日蓮大聖人とは、もちろん立場は違いますが、これは私たち信徒にも通ずることです。個人においても、一生成仏するためには、多少の難はあるのです。また、広宣流布を遂行していくためには、日蓮正宗創価学会においても同じです。難があるがゆえに経文どおりになるのです。それを臆病になったり、これだけ信心しているのに、と疑いをもつような信心では成仏はできません。大偉業をなしとげることもできません。

世間のことにおいても、戦争中など、平和運動家とか反戦主義者といわれる人たちが、どれほど多く牢へ入っていることか。やはり難を受けています。

偉大なことをなすためには、それぞれ苦難があるのです。いわんや、われわれは、広宣流布という最高の理想社会の建設をめざしています。また個人個人においても一生成仏という永遠の福運を積むためです。それくらいの難はあたりまえだと覚悟しなさい、という指導です。

ですから諸君は、いま仏道修行中ですから、ただ広宣流布を願い、題目をあげ、しっかりと勉強していくのです。なにも知らない人は、お題目をあげていると笑ったり、あんなにまで勉強しなければならないのかなどというかもしれないけれども、十年先、二十年先、三十年先になったならば、その差はたいへんなものになります。これだけを胸に入れて進んでいってもらいたい。信心だけは忘れて

はいけません。

大聖人こそ如説修行の行者

されば釈尊御入滅の後二千余年が間に如説修行の行者は釈尊・天台・伝教の三人は・さてをき候ぬ、末法に入っては日蓮並びに弟子檀那等是なり、我等を如説修行の者といはずば釈尊・天台・伝教等の三人も如説修行の人なるべからず、提婆(だいば)・瞿伽利(くぎゃり)・善星・弘法・慈覚・智証・善導・法然・良観房等は即ち法華経の行者と云はれ、釈尊・天台・伝教・日蓮並びに弟子・檀那は念仏・真言・禅・律等の行者なるべし、法華経は方便権教と云はれ念仏等の諸経は還(かえ)って法華経となるべきか、東は西となり西は東となるとも大地は持(たも)つ所の草木共に飛び上りて天となり天の日月・星宿は共に落ち下りて地となるためしはありとも・いかでか此の理(ことわり)あるべき

「されば釈尊御入滅の後二千余年が間に」

釈尊が入滅されてから、日蓮大聖人が御出現になるまでの、二千余年のあいだ、すなわち、正法時代、像法時代、そして末法の初めに、ということです。

「如説修行の行者は」

法華経に説かれたごとく実践し、大難を受けているものは、ということです。このまえの段にあったように、三類の強敵にあって戦っているものが、如説修行の行者になるのです。

「釈尊・天台・伝教の三人は・さてをき候ぬ」

釈尊自身と、像法の仏といわれる天台・伝教の三人は、いちおう、おいておく。

「末法に入っては日蓮並びに弟子檀那等是なり」

末法に入っては、如説修行の行者は、日蓮大聖人、および弟子檀那以外にはいないではないか、とのおおせです。

「我等を如説修行の行者といはずば釈尊・天台・伝教等の三人も如説修行の人なるべからず」

絶対の御確信です。大聖人門下を如説修行の行者といわなければ、釈尊、天台、伝教等の三人も、如説修行の人ではなくなってしまう。だれも、大聖人以上に、法華経のために、三大秘法の御本尊のために、難を受けている人はいないのです。ですから、大聖人を法華経の行者といわないならば、釈尊も、天台、伝教も、絶対に、如説修行の行者とはいえなくなってしまうのです。そんなバカなことはないわけです。

「提婆・瞿伽利・善星・弘法・慈覚・智証・善導・法然・良観房等は即ち法華経の行者と云はれ」

「提婆（だいば）」――釈尊の従弟（いとこ）で、釈尊にさんざん敵対し、迫害した提婆達多です。「瞿伽利（くぎゃり）」――これは、一度出家して仏弟子となったが、退転して、こんどは提婆達多を師匠としたため、生きながら地獄に堕（お）ちた。「善星（ぜんしょう）」――釈尊の出家前の子供です。やはり一度出家しましたが、低い悟りに執着して、

後、外道に近づき、仏法を否定した人です。それから「弘法」――日本の真言の開祖です。空海ともいいます。また「慈覚・智証」――いずれも天台宗の座主でありながら、真言の邪義を取り入れてしまった人です。「善導」――中国の念仏宗の第三祖です。これは、最後には、柳の枝で首をつり、七日七夜も苦しんで死んだといわれます。「法然」――日本の念仏宗の開祖です。「良観房」――極楽寺に住んでいた律宗の僧です。

もし、大聖人およびその門下を如説修行の行者といわないならば、これらの、大謗法をおかしたものや邪宗の開祖たちが、法華経の行者となってしまうではないか。そんなことはありえません。

しかし、もしありうるならば、「釈尊・天台・伝教・日蓮並びに弟子・檀那は念仏・真言・禅・律等の行者なるべし」――釈尊、天台、伝教、日蓮大聖人および弟子檀那が、念仏、真言、禅、律等の行者ということになってしまうではないか。

またそうであれば、「法華経は方便権教と云はれ」――法華経は、方便権教、かりの教えといわれ、「念仏等の諸経は還って法華経となるべきか」――念仏等の爾前権教が、かえって法華経となってしまうというのか。

「東は西となり西は東となるとも」――東と西とが逆になるようなことがあっても、「大地は持つ所の草木共に飛び上りて天となり天の日月・星宿は共に落ち下りて地となるためしはありとも」――大地は、草木とともに飛び上がって、天となり、天の日や月や星が、みな落ちてきて大地となるというような、まったく考えられないようなことが、たとえあったとしても、「いかでか此の理あるべき」

――どうして、大聖人が法華経の行者でないなどということがありえようか。どうして提婆達多等が法華経の行者となり、爾前経が法華経になるなどということがありえようか。あるはずがない、とのおおせです。

絶対の御確信です。大聖人の仏法は、まちがいありません。成仏得道の法理です。御本尊はまちがいないのです。絶対に幸福になれます。

われわれが幸福にならなかったならば、信心をなにもしないで、われわれを誹謗した人が幸せになり、成仏して、われわれが不幸になって地獄へ堕ちるか、そんなバカなことはありません。われわれを誹謗し、そしてまた批判する人々は、誹法であるがゆえに不幸になる。御本尊を持った者、広宣流布に進んだ者は、かならず成仏し幸せになれる。その断言の書です。

難を恐れて一生成仏はない

哀なるかな今・日本国の万民・日蓮並びに弟子檀那等が三類の強敵に責められ大苦に値うを見て悦んで笑ふとも昨日は人の上・今日は身の上なれば日蓮並びに弟子・檀那共に霜露の命の日影を待つ計りぞかし、只今仏果に叶いて寂光の本土に居住して自受法楽せん時、汝等が阿鼻大

城の底に沈みて大苦に値わん時我等何計無慚と思はんずらん、汝等何計うらやましく思はんずらん、一期を過ぐる事程も無ければいかに強敵重なるとも・ゆめゆめ退する心なかれ恐るる心なかれ

「今・日本国の万民・日蓮並びに弟子檀那等が三類の強敵に責められ大苦に値うを見て悦んで笑ふとも」

ここは、大聖人御在世当時の、世間の人々の姿を述べられていますが、広宣流布途上の日蓮正宗創価学会を笑い、誹謗する人々の姿に通じます。

日蓮大聖人が島流しにされ、弟子檀那も鎌倉幕府の権力による迫害にあっているのをみて、世間の人々はさんざんに嘲笑した。また現在でも、われわれが題目をあげ、広宣流布のために寸暇を惜しんで活動しているのをみて、なにもあれほどまでしなくても、などと笑っていることに通じます。

「昨日は人の上・今日は身の上なれば」

そのように、きのうまでは大聖人の弟子檀那を嘲笑し、苦しい姿をみて喜んでいた。人のうえとみていた。しかし、きょうはわが身のうえのことにかならずなるのです。

「日蓮並びに弟子・檀那共に霜露の命の日影を待つ計りぞかし」

したがって、霜や露が朝日の光にたちまちにとけて蒸発してしまうように、日蓮大聖人ならびに弟子檀那のこの苦しみは、ほんのわずかの辛抱であるとのおおせです。

生命は永遠です。大聖人の仏法は、永遠の福運を築く仏法です。そのために、すこしぐらいの難はある。しかし難があっても、すこしのあいだのがまんです。批判され、いじめられるならば、罪障消滅して、かならずあとは大福運を積めるのです。難のあることをむしろ喜んでいきなさい、とのおおせなのです。

御本尊を持つ人は仏身をたもつ。御本尊を持つ人は仏と同じなのです。ですから、われわれを批判した人は、仏をいじめたことになり、こんどは自分が罰をうけなければならない。これが生命の厳しい因果律です。

「只今仏果に叶いて寂光の本土に居住して自受法楽せん時」

ここは信心しきった姿、難を乗りきった生命の姿、強信の姿を述べているところです。

「只今仏果に叶いて」――大聖人のお心にかなって、すなわち大聖人のおおせどおりに実践して、「寂光の本土に居住して」――これは御本尊と境智冥合することです。「自受法楽せん時」――生きることそれ自体が、楽しくて楽しくてたまらないという境涯、絶対的幸福境涯を獲得したとき、すなわち仏の境涯、生命を獲得したときという意味です。かならず、そのようになっていけるのです。

そのときに、こんどは反対に「汝等が阿鼻大城の底に沈みて大苦に値わん時」――「汝等」とは、大聖人を誹謗してきた連中です。その人々が、誹謗してきた罰で無間地獄に堕ちて、たいへんな苦しみを受けていくのです。

「我等何計無慚と思はんずらん、汝等何計うらやましく思はんずらん」

われわれは、その姿をみて、どれほどか哀れにほどわれわれの福運に満ち、幸福を満喫しきったです。

創価学会が再建されて約二十年、わずかその二た人がたくさんおります。これからの前途洋々た進んでいただきたいと思うのであります。

「一期を過ぐる事程も無ければいかに強敵重なる「一期を過ぐる事程も無ければ」――一生は短いるとも・ゆめゆめ退する心なかれ」――すこしばても、それは、わずかのあいだのがまんで、あと縁に紛動されて退転してはいけないと戒められて

どうしても罪障消滅のためには、難や批判を受すからすこしばかり苦しくとも、歯をくいしばっ「恐るる心なかれ」――難を恐れてはいけない。

この段は、いちばん大事なところです。ここの生を生きていただきたいのです。

日蓮大聖人の時代には、有名な熱原の法難がありました。そのとき、大聖人、日興上人、また神四

郎兄弟等の法華経の護持者を迫害したのが、かの有名な平左衛門尉頼綱です。だが、その平左衛門も大聖人が御入滅になって十四年もたたないうちに、一族ぜんぶが謀反（むほん）の罪で、斬（き）られたり、流されたりしてしまったのです。それほどはっきりしているのです。

これは現在にも通ずる仏法の厳然たる法理です。

このように大なり小なり信心に反対して、諸君をいじめたらたいへんです。もしそのような人がいたならば、その人の姿を一生みていてごらんなさい。この御文のとおりになります。もしもこのとおりにならないとしたならば、それは、諸君のほうが退転してしまっているからです。電気だって電流が流れていなければ、手をふれてもしびれません。また電燈もつきません。したがって、こちらに信心があれば、現証ははっきりします。現証がでないのは、信心がないからなのです。

ともあれ、一生を通じてみなくてはわからない。誹謗した人の罪がどんなものであるか、どんな現証があらわれるか、最後はみえるのです。

命のかぎり題目を唱えよ

縦（たと）ひ頸（くび）をば鋸（のこぎり）にて引き切り・どう（胴）をばひし（稜）ほこ（鉾）を以て・つつき・足にはほだしを打ってきり（錐）を以てもむとも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経と唱えて唱へ死に死（しぬ）るな

らば釈迦・多宝・十方の諸仏・霊山会上にして御契約なれば須臾の程に飛び来りて手をとり肩に引懸けて霊山へ・はしり給はば二聖・二天・十羅刹女は受持の者を擁護し諸天・善神は天蓋を指し旛を上げて我等を守護して慥かに寂光の宝刹へ送り給うべきなり、あらうれしや・あらうれしや。

厳しい御文です。「縦ひ頸をば鋸にて引き切り」――首を鋸で引き切られても、「どうをばひしほこを以て・つつき」――胴をひしほこでつきさされても、「足にはほだしを打ってきりを以てもむとも」――足には足かせをかけて、きりでもんだとしても、ということです。

「命のかよはんほどは南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経と唱えて唱へ死に死るならば」どのような苦しい目にあっても、どのような大難にあっても、命のあるかぎりは、南無妙法蓮華経と題目を唱えぬいていきなさい、とのおおせです。

「釈迦・多宝・十方の諸仏・霊山会上にして御契約なれば須臾の程に飛び来りて手をとり肩に引懸けて霊山へ・はしり給はば」

そのようにして死ぬならば、釈迦、多宝、それから十方の諸仏は、法華経の霊山の会座で法華経の行者を守ることを誓っていますから、たちまちのうちに飛んできて、手をとり、肩に負って、霊山へ走って連れていってくれるというのです。

「二聖・二天・十羅刹女は受持の者を擁護し」

「二聖」とは、薬王菩薩と勇施菩薩です。「二天」とは、持国天王と毘沙門天王です。それから十羅刹女等、これらの諸仏、諸天が「受持の者」、すなわち御本尊のために大難と戦いぬいたものを、擁護しだきかかえてくれる。

「諸天・善神は天蓋を指し旛を上げて我等を守護して慥かに寂光の宝刹へ送り給うべきなり」

諸天善神も、天蓋を指し旛をあげて、われわれを守護して、たしかに常寂光の仏国土へ送りとどけてくれるとのおおせです。

ここのところは、簡単にいえば、そのように信心を貫き通したのだから、成仏、永遠の幸福はまちがいないということです。因果倶時です。受持即観心で、御本尊を守りきり、信心を貫き通したのですから、永久に仏の境界で、色心ともに絶対の幸福境涯に生ききっていけると、こういう意味なのです。

文永十年癸酉五月　日

人々御中へ

此の書御身を離さず常に御覧有る可く候

日蓮在御判

「此の書御身を離さず常に御覧有る可く候」

この「如説修行抄」を身口意（しんくい）の三業（さんごう）で読みきってなさい、とのおおせです。すなわち御本尊に向かって題目を唱え、折伏をしきって、広宣流布に邁進（まいしん）しゆくことが、この「如説修行抄」を読んだことになるのです。

（昭和四十一年六月～七月　高等部講義）

池田会長全集十巻　下

「経王殿御返事」講義

文永十年八月　五十二歳御作

四条頼基並妻に与う

（御書全集一一二四㌻～一一二五㌻
編年体御書　五六九㌻～五七〇㌻）

題号の、経王殿という方は、日蓮大聖人の門下の四条金吾という方は、ひじょうに強信で、大聖人にたいそうかわいがられた方です。竹を割ったような直情径行の気性をもち、主君には忠義な武士でありました。また酒の好きな方でした。

大聖人が竜口で首をはねられようとしたときも、四条金吾は、とるものもとりあえず、素足のまま、一目散に大聖人の御もとへ馳せ参じたのです。そして、大聖人のお乗りあそばされている馬の手綱にしがみついて、大聖人にもしものことがあるならば、自分も命を落とそうとの固い決心をもってお仕え申し上げたのです。

また、ひじょうに勇敢で、鎌倉中を折伏しきって歩いた闘士です。あまりにも折伏が激しく、また

同僚からやきもちをやかれて、讒言されて、ずいぶん苦しい思いをしてきております。

その折伏の結果によって、つけねらわれ殺されかけたことも再三あるのです。しかし、強信なる四条金吾は、あくまでも大聖人のおおせどおりに、指導どおりに、信、行、学に励みきっていかれた模範の方でありました。

今、私どもが一生成仏をめざして、宿命の大転換をするために、おのおのの幸福のために信心折伏に励んでいますが、どんなに折伏しようが、だれが私たちを殺そうなどという人がいますか。せいぜい新聞や雑誌に悪口を書かれるか、隣近所や親戚や友人などから悪口をいわれるぐらいなものです。しかし、大聖人御在世においては、刀をもって殺されかねないほどの戦いをしたのです。それからみるならば、今の私どもの信心のありかたは、ひじょうに楽なのです。

そういう楽な信心ができる時代に生まれあわせて、一生成仏をするという決心をしたならば、少しぐらいなことで退転していくような人は、日蓮大聖人の弟子ではないと、私は思うのです。

この御書は、その四条金吾のお子さんが、からだが悪くなったので、日蓮大聖人がわが子のごとく御心配あそばされて、四条金吾にたまわった御書なのです。ここでは、この対告衆はいちおう、経王殿として、お子さんの名前になっております。

其の後御をとづれ（音信）きかまほしく候いつるところに・わざと（態）人をくり給候、又何よりも重宝た

るあし山海を尋ぬるとも日蓮が身には時に当りて大切に候

大聖人が四条金吾一家のことについて、経王殿のことについて、心配しておられた。そのようすをきこうと思っておられたときに、わざわざ人を使わして、いろいろの報告をしてくれてありがとう。また、たくさんの供養を、わざわざ届けてくれてありがとう——と。

大聖人が御供養をおうけになっている御書がたくさんございますが、大聖人はぜんぶ日興上人に、その供養のお金を渡して、広宣流布のために、いっさいをお使いあそばされておられるのです。

このように、お弟子方が御供養をお持ちしたときには「ひじょうに助かるよ」とおおせです。功徳をうけるのは、御供養を申し上げた信者です。大聖人がおうけとりくださるから、私どもに功徳があるのです。その原理なのです。

日蓮正宗創価学会は、あくまでも日蓮正宗の信徒の集まりです。総本山の大御本尊に、そして御法主上人に御奉公申し上げていくのが、私どもの使命であります。

代戸田先生も、奉安殿の御供養、大講堂の御供養、五重塔の修復の御供養、また本日もお寺の御供養がありましたが、何十か寺の御供養と、その他かずかずの御供養をされています。立正佼成会や、霊友会や、国柱会や、生長の家や、その他のあらゆる邪宗教は、宗教をもって企業としております。しかし、創価学会は断じてちがうのであります。

社会の人々は、私どもの純粋なる信心ひと筋の姿を理解できない。あまりにも、乱れた世の中でありますし、悪い人々が多いからでありましょう。私どもの学会精神は、広宣流布の達成と、それから御本尊根本にして、人々の幸せを願う信心ひと筋の精神です。

総本山にどこまでも御奉公申し上げていくべき心で戦っているのが、初代の牧口先生以来の創価学会の伝統であります。

夫(それ)について経王御前(こぜ)の事・二六時中に日月天に祈り申し候

四条金吾のお子さんである経王御前のことについては、「二六時中」というのは朝も晩も一日中、ということです、一日中心配しています。そして日天、月天にも、早く病魔を去らしめるために、病気が平癒(へいゆ)するためにきちんと祈ってある、命じておりますよ、ということです。

日蓮大聖人は、御本仏でいらっしゃいます。したがって、宇宙それ自体を動かしていくべきお力があります。太陽は大日天という、月は大月天です。私どもが拝んでいる御本尊のなかにも、大日天、大月天としたためられています。したがって、御本仏であらせられる日蓮大聖人から、大日天、大月天に命ずれば、即大御本尊の威力と同じすがたがあらわれてくるわけなのです。

先日のまほり暫時も身を・はなさずたもち給へ

先日さしあげた、お守り御本尊を、けっして離してはいけませんよ。

お守り御本尊は、現在においては、日蓮正宗の大信者として功労のあった人に、順次お下げ渡しを願うことになっておりますが、ここでおおせの「まほり」とは、いま皆さん方が拝んでおられる御本尊のことを意味するのです。同じと考えてよろしいのです。

御本尊を暫時も離してはいけない。受持即観心です。御本尊を受持しきっていくことが信心である。それで初めて御本尊から守られるのです。どんな嵐があろうが、悪口があろうが、弾圧があろうが、御本尊を絶対に離さないでいく、それが信心なのです。守られるのです。

其の本尊は正法・像法・二時には習へる人だにもなし・ましてかき顕し奉る事たえたり

その「本尊」とは、弘安二年十月十二日の一閻浮提総与の大御本尊のことと拝します。正法千年、像法千年の二千年のあいだに出現した迦葉、阿難とか、天台、伝教とか、妙楽とか、そういう人々が

だれも顕すことができなかった御本尊であるというのです。正法とは釈尊がなくなってはじめの千年、像法とはつぎの千年をいいます。

この御本尊は、衆生を永遠にお救いくださるところの根本の法なのです。したがって、釈尊であろうが、天台、伝教であろうが、三世十方の仏さまであろうが、ぜんぶ、この御本尊を覚って仏になったのです。

本尊ということについては、これは「功徳聚」とも御書に説かれております。功徳の集まり、との意味です。または「輪円具足」ともいいます。すなわち十界三千の宇宙の法則が、そのまま御本尊にふくまれている、縮図されているのです。大宇宙の根本法則です。

また、本尊とは、根本尊敬、または根本尊仰ということで、すなわち根本の本と、尊敬、尊仰の尊で「本尊」と申し上げるのです。

およそ宗教というならば、本尊がなくてはならない。また、何をもって本尊とするかによって、おのずと高低浅深があります。この御文におおせのように、いまだかつて存在したことのない最高唯一の根本尊敬の当体こそ、この御本尊である。一大事の因縁によって、一切衆生を永遠にお救いくださる慈悲と大哲理をもって出現された、末法の御本仏であられる日蓮大聖人が、その御命をもって初めて顕された人法一箇の御本尊なのであります。この御本尊に南無したてまつる以外に、真に幸せになる道は絶対にないと、私は信ずるのです。

師子王は前三後一と申して・蟻の子を取らんとするにも又たけきものを取らんとする時も・勢いきをひを出す事は・ただを同なじき事なり、日蓮守護たる処の御本尊を・したため参らせ候事も師子王に・をとるべからず、経に云く「師子奮迅之力」とは是なり

「前三後一」とは、前に三歩進み、後ろに一歩用心のためにさがる、そのように慎重にかまえつつ、全力で獲物をとらえる姿勢を示しています。師子王は小さな蟻をとる場合でも、また猛獣に襲いかかる場合でも、同じように、全力を尽くして戦うといわれています。

この師子王の前三後一という言葉は、法華経をたたえている涅槃経にでてくるのです。そのような力をもって、日蓮大聖人が全身全霊を打ち込んでしたためた御本尊なのだ、すごい力があるのだ、とのおおせなのです。

また「師子王」の師とは、日蓮大聖人です。御本尊です。子とは子供で、弟子の意味になるのです。弟子が、師匠である大聖人について、一生懸命、信心に励んでいくならば、王のごとく悠々たる絶対の幸福境涯にいたる、このように拝することもできるのです。

「師子奮迅之力」とは、法華経涌出品の言葉です。御本尊の偉大な力用を意味するのです。師子王の奮迅の力をもってあらわした御本尊なのです。このように説かれておられるわけです。

又此の曼荼羅能く能く信ぜさせ給うべし

この御本尊をよくよく信じていきなさい、とおおせです。どんなことがあっても、御本尊に祈りきって信とは何か。「無疑曰信」――疑わざるを信という。疑わない。その信心なのです。願いはぜんぶかなうのです。それを御本尊に題目をあげながら、どうも紙を拝んでいて、病気は治りそうもないな、などと思えば、治りそうもないという思いのほうが通じてしまうのです。ですから疑ってはいけないのです。

南無妙法蓮華経は師子吼の如し・いかなる病障をなすべきや

「南無妙法蓮華経は師子吼の如し」

有名なお言葉です。生命力の弱い人、信心の弱い人は、この一節を暗記することですね。

南無妙法蓮華経という仏法は、「師子吼の如し」――百獣の王である獅子が吼えているような力があるのだ。師子王が一声吼えれば、百獣はこわくてぜんぶ逃げてしまう。と同じように、題目を唱えるならば、どんな病魔、悪鬼魔神も逃げていくのです。

戸田先生は、「南無妙法蓮華経と唱えるときに、たとえていえば、この脊椎を中心にして、放射線が、グーンと体内から宇宙に発散していくようなものだ」というふうに話されたこともあります。

この大宇宙の運行、その本源力が、南無妙法蓮華経です。私たちが御本尊にむかって、南無妙法蓮華経と唱えたときに、大宇宙の運行と合致する自分自身の生命の本源の力が出てくるのです。

だから、「いかなる病さはりをなすべきや」です。病魔などは逃げていってしまう。それほど力があるのだ。また病魔を克服していく、その力があるのだとおおせです。

鬼子母神・十羅刹女・法華経の題目を持つものを守護すべしと見えたり

これは法華経の陀羅尼品の約束なのです。きちんと御本尊に題目を唱える人を、いっさいの諸天善神、十羅刹女、鬼子母神等が、ぜんぶ、守ってくれます。

私どもは御本尊を拝んでおりますから、鬼子母神も、十羅刹女も、諸天善神も、あらゆる仏、菩薩も、私どもを守ってくれているわけです。ですから、御本尊を信じきってしまえば、悠々たるものです。経文にはっきり約束があるのです。

十羅刹女とは、鬼子母神の十人の娘です。子供です。この鬼子母神と十羅刹女が、御本尊護持の者を守る。この経文の約束に違えず、経王殿も守るのですよ、との大聖人のおおせなのです。

幸
さいはいは愛染(あいぜん)の如く福は毘沙門(びしゃもん)の如くなるべし

幸福境涯をひらき、幸福の生活になることは、愛染明王(あいぜんみょうおう)のごとく、また福運を積み、福徳のすぐれたことは、毘沙門天のようになる、とのおおせです。

愛染明王も、毘沙門天も、幸福をつかさどる働きを示します。私たちの生命にも、毘沙門天、愛染明王が具わっている。御本尊にも、愛染明王は左端に梵字で、毘沙門天は左上に、きちんとしたためられております。

願いがかなって幸福を感ずるのみならず、人生全体が福運に満ちみちていく、そういう生活にかなるのだというのです。これも御本尊の偉大な功力であります。

いかなる処にて遊びたはふるとも・つつ(慈)があるべからず遊行(ゆうぎょう)して畏(おそ)れ無きこと師子王の如くなるべし

どんな時代がこようとも、どんなところにいようとも、いつも楽しみきっていける。悠々たるもの

です。なにもこわいものはない。御本尊さえ拝んでいれば、諸天善神の加護が絶対にあるのです。

私どもの人生の目的は、信心の目的は、仏になって最高の永遠の幸福をつかむことです。毘沙門天や愛染明王の働きのように、幸福生活、福運の生活になることは当然なのです。

悠々と自由自在にこの人生を生きていく姿が、ちょうど師子王のごとき姿なのです。師子王はどこへいっても、百獣がこわがって逃げてしまう。師子王が威風堂々と悠々と生きていくように、私どもは、そのような師子王のごとき人生が送れるのだというおおせです。

十羅刹女（らせつにょ）の中にも皐諦女（こうだいにょ）の守護ふかかるべきなり

四条金吾のお子さんでありますから、鬼子母神の十人の子供である十羅刹女のなかでも、皐諦女の守護がとくに強いであろう。かならず経王殿の病気は治るはずだとのおおせです。皐諦女はひじょうに顔かたちがきれいだといわれております。

但（ただ）し御信心によるべし

ここが問題なのです。ただし、信心によるのです。ただし書きがあるのです。

ある御書には、「叶ひ叶はぬは御信心により候べし全く日蓮がとがにあらず」（御書全集一二六二㌻）とおおせであります。すなわち、どんな願いでもかなうう。ただし、おのおのの信心による。功徳をうけられないのは御本尊のせいではないよ、とも明確にお述べです。

信心の姿には二通りある。潔い信心と、濁れる信心です。清らかな水には、月がきれいに映る。濁った水には、月が映らない。そのように、御本尊の偉大な功力を、ひきだせるかどうかは、こちらの信心にかかっているのです。

潔い信心とは、清らかな水が流れるような信心です。朝晩の五座三座の勤行をまじめにいたし、学会の指導どおりに、信心に、折伏行に励んでいる人は、潔い信心、清らかな信心です。その人には功徳は絶対にあるのです。

濁れる信心とは、朝晩の勤行もろくにしない、折伏もしないという人です。折伏をするということも、なにも学会が発明したわけではありません。日蓮大聖人のおおせです。また釈尊の経文にも、はっきりしています。それ以外に、根本の修行はないという意味なのです。修行しないで仏になろう、功徳を受けようなどということは、おこがましいかぎりです。働かないで月給をくれというのと同じなのです。

濁れる信心の人は功徳がありません。それは批判している人か、折伏しない人か、怨嫉をしている人であり、そういう人は、顔色も悪いのです。もっともかわいそうな人です。

なにも私どもは、信心してくれといったおぼえはありません。ご紹介は申し上げたのです。批判されるべきなにものもありません。あくまでも自分のための信心です。日蓮正宗のために信心してくれとか、創価学会のために信心してくれとか、そんなことは、ひとこともいいません。

そのほか、広宣流布を実現しようということは、日蓮大聖人の民衆救済のための至上命令です。それは合言葉としていいます。しかし、自分のこともできないで、広宣流布のためなどということは、すこし話が大きすぎるのです。どうか、自分自身の幸福のために信心していただきたいと、こう申し上げるのです。それが結局は、広宣流布の前進にも、ぜんぶ通じるのです。

そのためにも、どうか信心の純粋な先輩、よき同志についていってください。

つるぎ剣なんども・すすまざる不進人のためには用る事なし、法華経の剣は信心のけなげ勇なる人こそ用る事なれ鬼に・かなぼう鉄棒たるべし

いくら名刀をもっていようとも、戦おうという勇気がなければ、その名刀の価値はありません。なんら必要なくなります。これは当然です。

御本尊を信心するということも同じです。大きい鐘がかねがあっても、そっとたたけば、その反響は小さい。力いっぱいたたけば、その反響も大きい。そのように、信心を強くすればするほど、それだけ功

徳も大きい。弱い信心の人は、それだけの小さい功徳である。

よく恩師戸田先生は「私の功徳は、公会堂いっぱいの功徳を受けている。あなた方の信心の功徳は、小指ぐらいだ。もっと、もっと、たくさん功徳をもらったらどうですか」と、このように指導してくださっておりました。

御本尊は宇宙大の功徳をお持ちになっていらっしゃるのですから、遠慮しないで、自分自身の宿命転換のためにも、罪障消滅のためにも、大功徳を受けるためにも、私どもは歓喜をもって信心修行に励んでまいりましょう。

「鬼に・かなぼうたるべし」とのおおせに、勇気が凛々とわいてくるではありませんか。

日蓮がたましひ魂をすみ墨にそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし

「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」

これは有名なお言葉です。「日蓮がたましひ」の「たましひ」とは、生命と訳すのです。日蓮大聖人の御生命を、墨にそめながしてかきあらわされたのが、日蓮正宗の御本尊なのです。日蓮大聖人のおおせどおりに、御相伝そのままに伝わっている御本尊です。

しかし、池上や身延や中山など、日蓮宗となのる邪宗日蓮宗各派には、日蓮大聖人の残された本尊はないのです。マネをしてまったくのニセモノを拝ましていているのです。そのうえ狐を拝ませ、狸を拝ませ、蛇を拝ませている。ぜんぶ、魔の姿です。この大聖人の御文からみて、それがどれほど邪道であり、恐ろしいことであるかしれません。

あくまでも、「信じさせ給へ」とおおせどおり、日蓮大聖人おしたための御本尊に南無することこそが、大聖人の教えどおりに信心する絶対の道です。大聖人は「日蓮を用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし」（御書全集九一九㌻）と厳しく戒めておられます。

「仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし」

これは、むずかしくいいますと、種脱相対という法門です。脱益の仏法と下種家の仏法との相違なのです。この御文を拝するならば、あくまでも日蓮大聖人が、末法の仏さまであって、釈尊は脱益の仏である、なんら末法の時代には関係がないということが、明確にわかるのです。

「仏の御意は」――釈尊の本意は、法華経二十八品である。脱益です。

「日蓮がたましひは」――日蓮大聖人の究極は、南無妙法蓮華経という五字、七字の法華経です。これ三大秘法の御本尊です。

それなのに、身延では、三宝といって仏・法・僧をたてるのに、仏の宝を釈尊とたてるのです。釈迦像を五百塵点劫の教主釈尊としてたてる。法の宝をば本迹一致の妙法とたてる。これらはひどい邪義です。「本迹の相違は水火天地の違目なり」（御書全集九九六㌻）と、はっきり大聖人は打ち破ってい

らっしゃいます。

それから、僧の宝をば日蓮大菩薩とたてている。これまた、大きい邪見です。このように、大聖人の法門をまったく知らないのです。

日蓮正宗の仏・法・僧は、仏の宝は久遠元初の自受用報身如来、即日蓮大聖人です。法宝は寿量文底秘沈の大法、事の一念三千の南無妙法蓮華経。僧宝は第二祖御開山日興上人になるのです。これが大聖人の仏法をそのまま受け継いだ日蓮正宗の正しいあり方なのです。

妙楽云く「顕本遠寿を以て其の命と為す」と釈し給う

妙楽大師は、天台宗の第九祖で、おおいに天台大師の仏法を宣揚した方です。天台大師滅後二百年ぐらい後に中国唐代に出現しました。

その妙楽大師は「法華文句記」に、本地の遠寿を顕すことをもって、その根本となす、と解釈している。

仏法には八万法蔵という膨大な経典がありますが、その根本が南無妙法蓮華経である、すなわち御本尊になるのです。久遠元初以来の大生命哲理をもって、仏法の極意となすのだとの意味です。

経王御前には・わざはひも転じて幸となるべし

この御文は変毒為薬の法門です。経王御前が病気であります。その禍を転じて、かならず幸福になりますよ、病気が治ることはまちがいないというお約束のお言葉です。

私どもが、よく「罰即利益」とか、「変毒為薬」——毒を変じて薬となす、といいますが、その力をお持ちくださっているのが御本尊、妙法なのです。

妙法の妙とは、不可思議です。われわれの頭ではとうてい考えられない法です。私どもは過去遠遠劫の罪業によって、いろいろな宿命をもっています。貧乏であるとか、病気であるとか、人にしいたげられるとか、そういうような禍や罰や毒の宿命をぜんぶ転じて、幸福、利益にかえていく、これが仏法の極理なのです。

皆さん方は、今、おのおのの生活のうえで、宿命と戦い、いろいろな禍や苦しみがあると思いますが、その罰をぜんぶ利益に、幸福に転じきっていく、強い強い信心をしていただきたいと、私は願うものです。

あひかまへて御信心を出し此の御本尊に祈念せしめ給へ、何事か成就せざるべき、「充満其

願・如清涼池・現世安穏・後生善処」疑なからん

「あひかまへて御信心を出し此の御本尊に祈念せしめ給へ」

またここで「信心」のお言葉があります。しっかりと信心をして、この御本尊に祈念していきなさい、祈り念じなさい。願いきっていきなさい。かならずよくなるのですから、と。

途中で休んでしまう人は功徳がないのです。もうすこしのところで、挫折してしまうのです。「こんなに信心をやったけれども」という愚痴をいう人がいる。しかしその尺度は、どこにあるか。「これだけお願いしたけれども」「こんなにやったけれど」という基準は、どこをもっていうのか。大聖人よりも、よけいに信心をやったのか。となれば、そうはいえないと思うのですね。

これだけやったけれども、まだ願いがかなわない。それほど自分は罪業が深いのだから、もっと勇気をだして、願いがかなうまでだれよりも御本尊に祈りきっていこうという心が、けなげな信心ではないかと、私は思うのです。

「何事か成就せざるべき」

短い御文でありますが、大聖人の絶対の御確信があらわれています。御本尊にきちんと御祈念していくならば、どんなことでもかなわないわけはない。なんと自信にあふれた明らかな文証でしょうか。「祈として叶わざるなし」と日寛上人がおおせになりましたが、大聖人がこの「経王殿御返事」

に、このようにはっきりと述べられていることなのです。

そのつぎに「充満其願・如清涼池」――その願い充満して、清涼池の如し、と読むのです。これは、薬王品の経文です。

ぜんぶ、自分の願いがかなって満足しきって、物心ともに幸せにみちあふれていく姿は、清涼の池に入るがごとく成仏の境界に入るのである、というのです。

それから、「現世安穏・後生善処」というのは、薬草喩品の経文をひかれております。

「現世安穏」とは、この世で物心ともの幸福生活をしきる、そして「後生善処」は、来世もまた、幸せなところへ生まれてくる、御本尊のおわしますところへかならず生まれてきて、また幸せな生活をしていけるという経文です。それは「疑なからん」と、この御文は絶対に疑いないのだとおおせでございます。

又申し候当国の大難ゆり候はば・いそぎ・いそぎ鎌倉へ上り見参いたすべし

「当国の大難」と記されていますように、大聖人は、このときは、佐渡の国へ流されておられる重大なときでありました。御自身が最大の艱難辛苦をうけられているにもかかわらず、「佐渡の国から許されて鎌倉へ帰ったならば、すぐにお会いいたしましょう」という御慈悲あふれる激励をされている

のです。

私どももまた、大聖人のこの御慈悲の万分の一でも、まねごととしても実践していきたい。同志の人々、信心がまだ強くない人、また信心をよく知らない人々に対して、御本尊をしっかり拝んで幸せになるように、一生懸命に、真心をこめて指導の任にあたっていかねばならないと、痛感しております。

法華経の功力を思ひやり候へば不老不死・目前にあり、ただ歎く所は露命計りなり天たすけ給へと強盛に申し候、浄徳夫人・竜女の跡をつがせ給へ、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経、あなかしこ・あなかしこ。

八月十五日

経王御前御返事

日蓮花押

「法華経の功力を思ひやり候へば不老不死・目前にあり」

こうした大御本尊の偉大なる功力を考えるならば、「不老不死」――老いず死なずということは、ひじょうに深い意味があるのですが、それは別として、簡単にいえば、絶対の幸福になることはまちがいない、ということです。仏になることはまちがいないのです。

いろいろな難があるけれども、病気や事業の失敗や、また三障四魔などの難があって苦しいときこそ、御本尊に願いきっていくならば、「佐渡御書」にも「師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし」（御書全集九五七㌻）との御文もあるとおり、かならず幸せになることはまちがいないのです。

しかもそれは、「目前にあり」といわれて励まされています。わずかのしんぼうなのです。

「ただ歎く所は露命計りなり」

ただ心配することは、その人の寿命である。今世の寿命というものはきまっております。五歳で死ぬ人もおります、二十歳で死ぬべき宿命の人もおります。八十の寿命の人もおります。

寿量品には「更賜寿命」――更に寿命を賜わん、との文もあります。

御本尊を拝するならば、寿命を、五年でも、十年でも、十五年でも、その人の信心によって延ばしていただけるのです。また、そういう証拠はたくさんあります。大聖人は仏さまでいらっしゃいますから、よくその寿命もおみえになるのです。だから、心配することは、その人の寿命である。宿命である。だが「天たすけ給へ」と強盛に祈ってあげます、との御慈悲あふれるお言葉です。

「浄徳夫人・竜女の跡をつがせ給へ」

浄徳夫人も、竜女も、法華経に説かれています。女人です。妙荘厳王の奥さんが、浄徳夫人です。竜女も八歳の竜女といって、提婆達多品に説かれている。そこに出現すべき女性の信者です。二人とも、やはり法華経によって、仏になったのです。

同じように、あなたも御本尊にすがりきって、仏になりなさい。生命は永遠なのだ、かならず幸せ

になれるのだとのお言葉です。

そして「南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経、あなかしこ・あなかしこ」でおわります。

（昭和三十五年九月八日）

「一生成仏抄」講義

御書を拝読する場合には、かならず、佐渡以前の御書であるか、佐渡以後の御書であるかということを考えて読まなければなりません。なぜかならば、佐渡以前の御書は、御本尊がまだ御建立になっていないのです。佐渡以後になりますと、御本尊の御建立がありますから、御書にも本尊、本尊ということばがありますが、佐渡以前は題目を中心にしてうえでお説きになっているのです。したがって妙法蓮華経というおことばについては、私どもが拝する場合には、かならず、御本尊を根幹として、拝していかなくてはいけないのです。

この一生成仏ということは、釈尊の仏法ではあくまでも調機調養（じょうきじょうよう）されて、長い長い歴劫（りゃっこう）修行によって仏になるのです。すなわち機根が違い、仏法が違います。それに対して、日蓮大聖人の仏法は、南無妙法蓮華経の末法の法華経は、一生のうちに成仏ができるという仏法なのです。御本尊を受持し

て、そして、御本尊に題目をあげることによって、今世の人生も、また来世も、仏の境界で、仏のふるまいで生活ができるという偉大なる仏法なのです。一生成仏ということについては、深い深い仏法の偉大さを説かれているわけなのです。

> 夫れ無始の生死を留めて此の度決定して無上菩提を証せんと思はばすべからく衆生本有の妙理を観ずべし、衆生本有の妙理とは・妙法蓮華経是なり故に妙法蓮華経と唱へたてまつれば衆生本有の妙理を観ずるにてあるなり

これが信心の目的です。「無始の生死」――生命は永遠である。宇宙が存在していたときから、私どもの生命はある。始めがあって終わりがあるというような生命ではない。無始無終、どこまでいっても、われわれの生命は永遠なのです。宇宙も長遠なのです。

その永遠の生命のなかにあって、「生死を留めて」、すなわち不幸、苦悩、苦しみというものをとどめて、「此の度決定して無上菩提を証せんと思はば」、すなわちここで一念発起して成仏を遂げたいと思うならば、「すべからく衆生本有の妙理を観ずべし」――自分の生命のなかに仏界が存在する、自分自身が妙法蓮華経の当体であることを知らなくてはならない。それを覚知するということは、御本尊に題目をあげる以外に道はないのです。

「衆生本有の妙理」とは、われわれの生命に本来そなわっている妙理のことで、それはなにかといえば、「妙法蓮華経是なり」と。それは南無妙法蓮華経のことである。妙法蓮華経と唱えれば、「衆生本有の妙理」を観じたことになるのです。

その南無妙法蓮華経という偉大なる法を御図顕あそばされたのが日蓮大聖人であり、すなわち御本尊なのです。御本尊に南無妙法蓮華経と唱えることによって「衆生本有の妙理」を観ずることができるのです。すなわち、自分自身が妙法蓮華経の大宇宙のリズムに合致した、妙法蓮華経の当体であるということを観ずることができる、覚知することができるというのです。

文理真正の経王なれば文字即実相なり実相即妙法なり唯所詮一心法界の旨を説き顕すを妙法と名く故に此の経を諸仏の智慧とは云うなり

「文理真正の経王なれば」

「文理」とは、南無妙法蓮華経という文と、文によってあらわされている法理のことで、それが真実の法であり、一切経の王である。すなわち、御本尊は、仏さまの悟りをそのままあらわされた究極の経であり、八万法蔵の大将であり、いっさいの経々の王さまです。

八万法蔵を要約すれば、三大秘法に帰着するし、三大秘法をせんじつめれば、帰趣するところは一

大秘法の御本尊です。ゆえに経王です。

したがって、「文字即実相なり」――御本尊のお文字は、即実相である。仏さまの姿である。御命であり、観念的なものではない。「実相即妙法なり」、御本尊には妙の働きがある。不可思議なる働きがある。信ずれば功徳があり、誹謗すれば大罰を受けるというその力がある。

「唯所詮一心法界の旨を説き顕すを妙法と名く」

「一心法界の旨」ということは、衆生の一心（生命）に法界（現象世界）のすべてが収まり、またこの一心が全宇宙に拡がっていくとの原理です。これを天台は一念三千の法理として示しました。いっさいの経の究極は、一念三千の法門になるのです。それを説き明かしたのを妙法というのです。

ゆえに、「此の経を諸仏の智慧とは云うなり」と。

その南無妙法蓮華経、即一念三千の仏法によって、三千の諸仏は仏になることができた。したがって、成仏できる本源の知恵は、南無妙法蓮華経である、御本尊なのであるというのです。

一心法界の旨とは十界三千の依正色心・非情草木・虚空刹土いづれも除かず・ちりも残らず一念の心に収めて此の一念の心・法界に偏満するを指して万法とは云うなり、此の理を覚知する

を一心法界とも云うなるべし

「一心法界の旨」について、ここでさらに説かれて
「十界三千の依正色心・非情草木・虚空刹土いづれ
全宇宙のありとあらゆる生命存在と現象世界のす
「十界三千の依正色心」――十界は、地獄から仏界
命の境地をあらわしたものです。
私自身一個の生命体とすれば、私のこの宿命、た
るならば、これは地獄界です。その地獄界でありな
が聞こえたと喜びを感じる、天上界です。地獄界即
す。
宇宙全体からみた十界ならば、自分自身は人間界
みがありますから、やはり十界の働きがそなわって
十界におのおの十界があるので百界、そのそれぞ
世間、五陰世間、衆生世間の三世間を具して三千世
「依正」とは、正報はわが身、依報は環境世界です
大空、「刹土」は小さい土地。
「いずれも除かず・ちりも残らず一念の心に収めて
いっさいの宇宙の全存在と現象が衆生の一心に、

心法界というのです。

「一念の心・法界に偏満するを指して万法とは云うなり」

また、これは逆にいったわけです。一念というものは、したがって、全宇宙に通ずるということなのです。

「此の理を覚知するを一心法界とも云うなるべし」

具体的にいえば、御本尊を拝むことによって、題目を唱えきっていくことによって、如来秘密神通之力の力をおだしくださることができるのです。大宇宙のリズムは、きちんとわが生命の幸福に及ぼす作用になっているのです。

但し妙法蓮華経と唱へ持つと云うとも若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらず麤法なり、麤法は今経にあらず今経にあらざれば方便なり権門なり、方便権門の教ならば成仏の直道にあらず成仏の直道にあらざれば多生曠劫の修行を経て成仏すべきにあらざる故に一生成仏叶いがたし

「妙法蓮華経と唱へ持つと云うとも若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらず」

御本尊を持ち、題目を唱えているとしても、わが身が妙法の当体であると信じられないならば、成

仏はできない。他に幸せになる道はないか、幸せにしてくれる人はいないかと、環境や他人を頼っていくいき方が、「己心の外に法あり」と思うすがたです。

それでは「妙法にあらず」です。**亡法**（そほう）というのです。

粗雑な法をいいます。御本尊を持っていない邪宗教は、法を盗んで、南無妙法蓮華経を唱えているけれども、それは**亡法**である。

「**亡法**は今経にあらず」――**亡法**であれば、それは法華経ではない。「今経にあらざれば方便なり権門なり」――法華経でなければ、方便経であり権経です。「成仏の直道」になるわけはありません。いつまで修行しても、絶対に成仏することはできないと断定していらっしゃるのです。

三大秘法の御本尊を離れたならば、ぜんぶ**亡法**になり、権教になり、外道になり、「多生曠劫の修行」、すなわちどんなに長いあいだ修行しても、永久に仏になることはできない。いわんや、一生成仏はできるわけはないのです。

故に妙法と唱へ蓮華と読まん時は我が一念を指して妙法蓮華経と名（なづ）くるぞと深く信心を発（おこ）すべきなり

「妙法と唱へ蓮華と読まん時」、すなわち御本尊にお題目を唱えるときは、自分の一念、生命を南無

妙法蓮華経と名づけられたのであると信じていきなさい、と。題目を唱えた結果は、生活のうえに、はっきり事実の相として、現証としてあらわれるのです。信心即生活で、南無妙法蓮華経は、即いっさいの生活活動の源泉なのです。

自分自身が妙法蓮華経の当体になるのだ、その働きを湧現するのだという深い信心をもって、御本尊に題目をあげきりなさい、というお言葉です。

都て一代八万の聖教・三世十方の諸仏菩薩も我が心の外に有りとは・ゆめゆめ思ふべからず、然れば仏教を習ふといへども心性を観ぜざれば全く生死を離るる事なきなり、若し心外に道を求めて万行万善を修せんは譬えば貧窮の人日夜に隣の財を計へたれども半銭の得分もなきが如し

「一代八万の聖教」――釈尊一代で説かれた膨大な経教といえども、また三世十方の諸仏、菩薩といっても、ぜんぶわが心の外にあると思ってはならない。

地獄というも、極楽というも、仏というも、修羅というも、すべてわが一念にあるのだというのです。つまり、不幸になる原因も、幸福になる因も、自分のなかにあると、とらえることが大切です。どんなに仏法を学し、有名な宗教家や学者になったとしても、「心性を観ぜざれば」ということは、

御本尊に題目をあげて、わが仏界を湧現していかなければ、自分自身が妙法蓮華経の当体なりと信じて実践しなければ、「全く生死を離るる事なきなり」、苦しみを離れることは絶対にできない、とのおせです。

大聖人が衆生のために御本尊を御建立くだされたということは、どれほどありがたいことか、御本尊にめぐりあい、題目を唱えられることが、どれほどの福運であるか、いまさらながら感謝にたえないではありませんか。

「若し心外に道を求めて万行万善を修せんは」

心外に道を求めてあらゆる仏道修行をしようとも、どんなに慈善事業をしようとも、御本尊を離れた修行であるがゆえに、なにも利益がないのであります。

「譬えば貧窮の人日夜に隣の財を計へたれども半銭の得分もなきが如し」

なんの得にもならない、くたびれ損だということのたとえです。

然れば天台の釈の中には若し心を観ぜざれば無量の苦行と重罪滅せずとて若し心を観ぜざれば無量の苦行となると判ぜり、故にかくの如きの人をば仏法を学して外道となると恥しめられたり、爰を以て止観には雖学仏教・還同外見と釈せり

天台大師もこのようにいっているではないか、「若し心を観ぜざれば、重罪を滅することはできない。御本尊を信じて題目をあげなければ、絶対に罪は消えない。また、御本尊に信心しなければ、どんな仏道修行をしても、ただ無量の苦行となる罪業を積むだけだ。業因をつくるだけだ」――と。

皆さん方は信心できたからよかったのです。世の中には、立派そうな人もいるし、ひじょうに福運のありそうな人もいるし、幸せそうな人もいるかもしれませんが、一生涯という長いあいだの人生をみ、また永遠の生命からみた場合には、かわいそうな姿になっていくのです。

反対に御本尊を持った人は、これから幸福へ、それから生命力を横溢して、福徳を積み勃興していけるのです。

したがって、「かくの如きの人をば」――御本尊を知らない、日蓮正宗以外の宗教、人々です。いくら仏法を勉強しているような姿をみせても、ぜんぶそういうような輩は外道である。

それで摩訶止観には、「雖学仏教・還同外見」、すなわち「仏教を学すといえども、かえって外見と同ず」、外道と同じであると釈しておられるのです。

さらにいえば、御本尊を持っていても、信じて実践できない人は、やはり外道と同じになってしまうのです。

然る間・仏の名を唱へ経巻をよみ華をちらし香をひねるまでも皆我が一念に納めたる功徳善根

なりと信心を取るべきなり

ゆえに御本尊にお題目を唱え、方便品、寿量品を読誦し、またしきみやお線香をお供えするということも、ぜんぶわが一念に功徳、善根として納まるのであると信じていくのです。

講義を聞くのも、座談会に行くのも、御供養することも、登山会に参加するのも、一切法はこれ仏法ですから、わが身が一念三千の当体になるわけですから、御本尊のためになすいっさいの行動が、感謝にあふれ、真心をこめたものであるならば、すべて自分自身の功徳、善根になるというのです。どんなにささやかな努力であっても、すべてわが身の福運となってかえってくるのです。

これがすこし、その一念がくるい、その一念が、信心から、この「一生成仏抄」の原理からはずれた場合には、とても苦しくなるのです。すぐにもんくやわがままをいいたくなるのです。その一念が、功徳をぜんぶ消してしまうのです。

之に依って浄名経の中には諸仏の解脱を衆生の心行に求めば衆生即菩提なり生死即涅槃なり
と明せり

「解脱」とは悟りです。あらゆる仏の得た悟りの境地、諸仏が悟ったその知恵が、じつはそのまま「衆生の心行」にあるということです。衆生とはわれわれ凡夫です。

そのことを、「衆生即菩提」――九界の衆生が凡夫の身そのままで成仏する、迷いの生活が悟りへと開ける、また「生死即涅槃」――苦しみの生命が幸福に輝く生命に転換する、と明かしているのです。われわれ凡夫が御本尊に題目をあげれば、すなわち、それが悟りであり、解脱なのです。

又衆生の心けがるれば土もけがれ心清ければ土も清しとて浄土と云ひ穢土と云うも土に二の隔なし只我等が心の善悪によると見えたり

われわれ凡夫の心が寂しければ、その土も同じように寂しく感ずるのです。われわれの心が楽しければ、その土も同じように楽しく感ずる。浄土というも、穢土というも、ぜんぶ、わが一念一心によって決定される、その反映であるというのです。すなわち、「土」には二つの違いはないのです。

「只我等が心の善悪によると見えたり」

自分の住んでいるところを楽しくするもしないも、それはわが一念によって決定されるのです。

自分の家庭というものを仏界にするか、地獄界にするか、天上界にするか、修羅界にするかはぜんぶ自分の一念一心によって決定される。広くいえば、全世界を地獄界にするか、修羅界にするか、仏

界にするか、天上界にするかは、そこに住む人々の一念によって決定されるのです。

ですから、御本尊を持つわれわれの一念で、どんなところをも楽しい国土にしていく、そういう環境をつくっていくのが、私どもの役目なのです。座談会へ行っても、わが家へ帰っても、会社へ行っても、わが一念で、喜びにあふれた楽しい世界にかえていけるのです。

衆生（しゅじょう）と云うも仏と云うも亦此（またか）くの如し迷う時は衆生と名け悟る時をば仏と名けたり

「衆生（凡夫）」といっても、「仏」といっても、なんのへだてもないのです。同じ当体なのです。同じ人間なのです。したがって、「迷う時は衆生」であり、「悟る時は仏」でもある。

同じ凡夫の当体でありながら、御本尊に題目をしみじみとあげて、わがこの生命こそ妙法と覚（さと）って、たくましい生命力と清らかな知恵をもって、人々を救ってあげたい、この法を教えてあげたい、という境涯の場合は「仏」です。

反対に信心を一生懸命やらないで、商売も苦しい、家庭も暗いといつも愚痴（ぐち）をこぼしている場合には「衆生」なのです。迷いなのです。

御本尊を拝んで、御本尊に照らされて、九界の現実の世界にあって悠々（ゆうゆう）と闊歩（かっぽ）していく、人生をたくましく切り拓（ひら）いていく、それが私ども信心をしているものの姿なのです。安心立命（あんしんりつめい）です。

悩みや苦しみがあっても、それに引きずられない。悠々とそれを見おろしてのりきっていける。それで、人々を、慈悲をもって、御本尊へ、御本尊へと導ききっていく心が充満している。これがもう地涌の菩薩の生命なのです。

譬えば闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し、只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり是を磨かば必ず法性真如の明鏡と成るべし

「闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し」

くもった鏡も磨けば、玉のようによくうつる。

「一念無明の迷心は磨かざる鏡なり」

したがって、私どもの「一念無明の迷心」は、生命自体にそなわった根本の迷いであるがゆえに、不幸なのです。

これを磨くならば、かならず「法性真如の明鏡」とかわるのです。「法性真如の明鏡と成る」とは、仏の生命、仏界の境地が湧現するということです。正しいものの見方ができ、豊かな知恵がわいてくるのです。

また染浄の二法でいえば、一念無明の迷心が「染」です。九界です。それから法性真如の明鏡が「浄」で、きよらかということです。仏界です。

一念無明の迷心は、魔の働きになってくるのです。法性真如の明鏡は仏の働きです。信心は魔と仏との闘争です。ですから題目をあげないで、御本尊を忘れては、その魔に負けてしまうというのは、ここにあるのです。

深く信心を発して日夜朝暮に又懈らず磨くべし何様にしてか磨くべき只南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを是をみがくとは云うなり

この御書の初めに「無上菩提を証せんと思はば」とありますが、無上菩提を証せんと思うならば、このようにして深く信心をしなさい、と結論されているのです。

無上菩提ということは、それ以上の悟りがないという意味なのです。無上に対して爾前経の悟りは有上なのです。まだ上があるという悟りなのです。世の中には名人とか、達人といわれる人がおりますが、それは有上なのです。

南無妙法蓮華経によって悟った悟りが、無上菩提なのです。最高の悟りになるのです。それを悟らんとするならば、「深く信心」をして、そして「日夜朝暮に又懈らず磨くべし」、今の皆さんの姿で

す。朝晩の勤行を怠らず、折伏行に邁進していることは、日蓮大聖人のおおせどおりに仏道修行している人です。

朝晩の勤行は、「日夜朝暮」とおしたためですから、朝だけでもいけないのです。晩だけでもいけないのです。地道な実践の積み重ねこそ、大切であります。

「只南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを是をみがくとは云うなり」

御本尊に、南無妙法蓮華経と題目を唱え、唱えきって、わが生命を磨いていくのであります。

抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心・不思議なる処を妙とは云うなり不思議とは心も及ばず語も及ばずと云う事なり、然れば・すなはち起るところの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとすれば色も質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず有無の二の心も及ばず有無に非ずして而も有無に偏して中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり

これはこのとおりです。「妙」とはどういう心か、ただわが一念の心が不思議な作用をする、これを妙というのである。したがって、妙法は不可思議、思議することのできないということです。言葉でもいいあらわすことができない、文字でもいいあらわすことができない、それを、「不思議」とい

い、「妙」というのであります。

「一念の心」は妙です。十界三千の働きは、縁にふれて刻々と変わっているのです。

ここは、恩師戸田先生が牢獄のなかで無量義経を読んでいたそのなかで、いきあたったところなのです。ちょうど、その三角でもない、四角でもない、まるくもない、青でも黄でも赤でもない、縦でもない、横でもない、長さでもない、距離でもない、という経文にぶつかったのです。なんのことだろう。それが仏性、心性、すなわち、生命そのものである。一念一心という表現だったそうです。それが、われわれの一念一心の作用なのです。

切ってみても出てきはしない。有るかといえば無いし、無いかといえば、きちんと精神作用、活動がある。妙であります。

有無ということばではとらえられないというのです。有でもない、無でもない。しかも有か無のどちらかをもってあらわれる中道一実の不思議な当体を妙というとのおおせです。

「此の妙なる心を名けて法とも云うなり、此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にかたどりて蓮華と名く、一心を妙と知りぬれば亦転じて余心をも妙法と知る処を妙経とは云うなり」

「此の妙なる心を名けて法とも云うなり」

妙法です。妙とは法性、法とは無明と説いてあるのですから、法になります。

御本尊は妙法の当体です。その妙法の当体に私どもが妙法蓮華経と唱えると、しぜんに病気が治る、生命力が湧く、功徳がでてくる。これが現証です。不思議といわざるをえないが、事実は事実です。

したがって、「此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にかたどりて蓮華と名く」これが譬喩蓮華です。妙法をあらわすものとして蓮華と名づけるのだというのです。

「一心を妙と知りぬれば亦転じて余心をも妙法と知る処を妙経とは云うなり」

心には善心、悪心、それから善心でも悪心でもない場合は、無記となぞらえておりますが、いっさいが妙法蓮華経なのだという意味なのです。

また、私どもの生活に約した場合は、御本尊に題目をあげる、妙法蓮華経と唱えているのですから、一心が妙です。生活のうえでも、さまざまな念心が起こります。だが、そのさまざまな瞬間瞬間の心、一念というものも、ぜんぶ妙法蓮華経なのだ、御本尊に通ずる念心であると信ずることが、南無妙法蓮華経の精神なのであります。

また、苦しい、楽しい、つらい、悲しい、その人、その人に応じて、おのおの刻々とその作用があります。それらはすべて妙法蓮華経なのです。苦しい、だからといって、南無妙法蓮華経を唱えるしかない。唱える当体が御本尊です。つらい、どうしたらいいか、南無妙法蓮華経を唱える。唱える当

体は何か、対境は何か。それは御本尊です。結局はそういうことになるし、それが大事なのです。

悲しい、といっても題目を唱える以外にない。さびしい、といっても題目を唱える以外にない、悩むといっても題目を唱える以外にありません。したがって、ぜんぶ仏になれる。結果はみな幸せになれる。これがこの妙境です。

然ればすなはち善悪に付いて起り起る処の念心の当体を指して是れ妙法の体と説き宣べたる経王なれば成仏の直道とは云うなり、此の旨を深く信じて妙法蓮華経と唱へば一生成仏更に疑あるべからず、故に経文には「我が滅度の後に於て・決定して疑有る事無けん」とのべたり、努努不審をなすべからず穴賢穴賢、一生成仏の信心 南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経。

日蓮花押

善心であり悪心であり、いずれにしても念々起こるところの心、その心自体が、こんどは南無妙法蓮華経と誓って、この題目を唱えればぜんぶ成仏できる。どんな悪心であろうが、男性であろうが、女性であろうが、愚かな人であろうが、高貴な人であろうが、ただ御本尊に題目をあげればいいのだ、仏になるのだ、というのです。

その一念の本体から悪心もでるし、それから善心もでるし、悩みもでるし、苦しみがでてくるのですから、なんでもその一心一念に、題目を、御本尊に向かって唱えさせればいいのです。ほんとうに簡単であり、ありがたい法門です。

「経文には」というのは神力品です。神力品には「我が滅度の後に於て」――釈尊滅度の後においてというのです。滅度には、三種類あります。神力品、滅度像法、滅度末法です。この「滅度」は末法と読んでいいのです。

「応に斯の経を受持すべし」――「斯の経」とは、すなわち南無妙法蓮華経です。その三大秘法の南無妙法蓮華経を受持した「是の人」とは、名字即の凡夫です。

「仏道に於て」――仏道とは仏道修行において仏になることは「決定して疑有る事無けん」――疑う必要は絶対にないというのです。

さらに「努努不審をなすべからず」と念をおされていらっしゃいます。

「一生成仏の信心南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経」

釈尊の仏法は妙法蓮華経序品第一、妙法蓮華経譬喩品第三、妙法蓮華経如来寿量品第十六というふうに、説明なのです。

日蓮大聖人の仏法は、南無妙法蓮華経です。すなわち南無妙法蓮華経を唱え、それ自体の生命活動が生活のうえに功徳としてあらわれる。実際なのです、実践なのです。即生活に通ずるのです。

釈尊の仏法は妙法蓮華経、序品第一、方便品第二というふうに説明書きなのです。文底から拝すれ

ば、御本尊の説明なのです。また御本尊を中心にした功徳論と罰論、これが法華経二十八品といってもいいでしょう。

それに対して、日蓮大聖人の仏法は南無妙法蓮華経の仏法であり、すなわち歴劫修行せず、この世で、このままの凡夫の姿で、成仏の境界の生活ができる、との意味なのです。

（昭和三十六年四月二十三日）

「富木殿御返事」講義

於文永九年四月　五十一歳御作

佐渡一ノ谷

（御書全集　九六二ページ
編年体御書四七七ページ）

この御書は、富木常忍が佐渡の国の日蓮大聖人よりたまわったお手紙です。

日蓮大聖人は、法華経の勧持品の「数数見擯出」の予言どおりに、二度島流しにあわれた。すなわち、釈尊の予言をそのまま日蓮大聖人の御身にあてはめて、伊東の流難、佐渡の流難となったのです。その佐渡の流難のときに、弟子である富木常忍にあてられた激励のお手紙が、この御書なのです。

日蓮が臨終一分も疑無く頭を刎ねらるる時は殊に喜悦有るべし、大賊に値うて大毒を宝珠に易ゆと思う可きか

この御文は、死身弘法の大精神をお示しになっておられます。

日蓮大聖人が佐渡へ流された。邪宗の輩の手によって、自分はいつ殺されるかしれない。しかし、妙法流布のために、まちがいなく首をはねられるというそのときこそ、これ以上の喜悦はないだろう、とおおせなのです。

私どもの師匠は日蓮大聖人です。日蓮大聖人のお振る舞いを鑑とし、手本として仏道修行し、日蓮大聖人からおほめのことばをいただけるような、信心を貫いている人が、ほんとうの日蓮大聖人の弟子といえるのです。

私どもも弟子の一分として、日蓮大聖人の仏法を弘めていくうえにおいて、どんな迫害があっても、むしろ迫害があればあるほど「喜悦有るべし」、これほどの喜びはないと、莞爾としていきれる、また修行しきっていける一人ひとりでなければならないのです。そういう境涯になっていける人は、まことの日蓮大聖人の弟子といえるのです。

日蓮大聖人は、「此経難持の事」という御書（四条金吾殿御返事）を残されております。この経はたもちがたし、御本尊を持てばかならず難にあう、とおおせです。

それなのに、少々悪口雑言されたからといって、すぐに「信心やめようかな」と思う。そういう弱い信心では成仏できるわけはないし、まして日蓮大聖人の弟子とはいいがたい。したがって、信心が浅いために、大功徳も受けられないのです。

信心していけば難があるのです。たとえば、自動車の運転の練習をするにしても、一人前の運転手

になるまでには、ドブへ落ちたり、電柱にぶつかりそうになったり、ハラハラするような場面に何回もあいながら、だんだんと力をつけて、自由自在に運転ができるようになるのでしょう。

運転なんか習わないと決めれば、難がないかもしれません。苦労はないわけです。と同じように「永遠の幸福をつかみきるのだ、絶対の安心立命、物心両面にわたる幸福な生活をきずこう」という場合には、御本尊を拝み、御本尊を根本とした信心修行をしていく。そうすれば罪業はでるし、また宿命転換のために難もあり、罪障消滅が必要だということになります。

それを「信心すると難があるのなら、それでは信心しないでおこう」などというのは、もっとものようにきこえますが、そうではないのです。信心してからうける難は、かならず変毒為薬されるのです。また、同じ罪業であっても、それでも軽くうけているのであり、すべて帳消しにしていけるのです。

それなのに、信心しないで、なんとかして罪業を消滅しようとか、悪口をいわれないように、難がないようにしていこうなどといったところで、どこまでいっても永久に不幸です。

ですから、御本尊を持った以上は、一生涯、勇敢に信心だけはしぬいていきましょう。いっさいが自分自身のためなのですから。日蓮大聖人の弟子として、もし、大難があって妙法流布のために命をおとすようなことがあったとしても、その瞬間に、「ああ、よかった」と、にっこりと笑っていけるような境涯になりたいものです。

「大賊に値うて大毒を宝珠に易ゆと思う可きか」というのはそこなのです。

これは、変毒為薬を明らかにした御文です。

法難にあうということは、ちょうど大賊にあって、もっていた大毒を奪われ、かえって宝珠をえたようなものだというのです。ということは、自分自身の罪業というものを、ぜんぶ大賊がもっていってくれるようなものであり、仏の境界だけ残るというのです。すなわち成仏疑いないというのです。これ変毒為薬です。

ですから日蓮大聖人は「種種御振舞御書」に「此の身を法華経にかうるは石に金(こがね)をかへ糞(ふん)に米をかうるなり」（御書全集九一〇㌻）とおっしゃっております。

すなわち、石を金にかえると思いなさい、しょせん糞のような生命ではないか、と。福運のない、罪業深いわれわれではないか、と。それゆえ御本尊のために生命を捨てることは、ちょうど金にかわっていくようなものである。その原理と同じなのです。

実際問題として、私などもノリ屋のむすこです。病弱で世間から見放されていくような運命の自分であったのが、御本尊にお目にかかり、また日蓮大聖人の仏法を教わり、創価学会員として今日まできたがゆえに、仏法も少しずつわかり、福運も積み、大勢の人々に信頼され、大勢の人々のために働いていけるなどということは、それこそ大毒を宝珠にかえたようなものでしょう。

皆さん方一人ひとりが、そうだと思います。自分自身というものを静かにふり返ってみた場合に、どれほどこの御本尊に巡りあったことによって救われていることか。これ以上の有意義な最高の幸せはないと、しみじみと感ずるはずだと、私は思うのです。

そのように感じていくことも、信心といえるのではないでしょうか。

> 鶴首員数の如く給び候い畢んぬ御志申し送り難く候

富木常忍のお使いの方が、きっと佐渡の一の谷まで日蓮大聖人をおたずねして、御供養にあがったわけでしょう。

戸田第二代会長は「今だから佐渡といっても近いけれども、七百年前の佐渡といえば、それこそ現在でいえば、アフリカの砂漠の真ん中のようなものだよ」といわれたことがありましたが、実際、そうでしょう。

汽車もなければ、飛行機もなければ、船だって今みたいに大きい汽船ではありません。それも、師匠が大法難にあわれ、弟子たちは牢へ入れられたり、所領を奪われたり、世間から見放されている最中にも、日蓮大聖人をお慕い申し上げて御供養にあがるという、これはほんとうに尊い信心だと、私は思うのです。

それからみれば、今の私たちの境遇はひじょうに楽なものです。これは幸福といいますか、また一面では不幸といいますか。一面は幸福のようにみえて、仏道修行の面からみれば、不幸なことです。しかし、実際問題として、朝な夕な不幸な人のために折伏をし、広宣流布に邁進していることは、こ

の富木常忍の振る舞いにまさるとも劣らないと、私は思います。

また、御供養については、あくまでも本部として、総本山にきちんと御供養申し上げておりますから、全学会員が総本山に御供養していることに通ずるのです。

このあいだも、大坊の落成式が終わり、また大客殿の起工式が厳粛にとどこおりなく終わりました。それと引き続いて、このあいだの幹部会でお話しした総坊や六壺、厨坊とぜんぶ設計にはいっております。また、墓地にしても、土地にしても、そうとうの御供養もしております。さらに、私は大客殿建立のときの御供養をはるかに越える御供養の決意もしております。

法門の事先度四条三郎左衛門尉殿に書持せしむ其の書能く能く御覧有る可し

これは、指導の方式を述べられているのです。

法門のことは、あなたの同志である四条金吾殿に、きちんと書いておいたから、「能く能く御覧有る可し」――よくその御書を、お手紙を、指導を、読みなさいとおおせです。

「私は日蓮大聖人から直接聞かなければ、承知しない」というような、身勝手ないき方ではいけないのです。

「あなたの同志にいっておいたから、それを聞きなさい」と。

したがって、現代において、このように、私どもが、日蓮大聖人の御書をみなで拝していることも、同じ原理です。

また、日常的な指導については、大勢なのですから、先輩のいうことを聞いてください、大白蓮華をよく読んでください。しかし、根本はなんといっても御書を読みあっていこうではないか、このいき方が、いちばん大事になってくるわけなのです。

それから「依法不依人」ということが大事です。「法に依って人に依らざれ」ということです。あくまでも「四条金吾殿に渡した手紙をあなたもよく読みなさいよ」と富木常忍におおせなのです。

粗経文を勘え見るに日蓮法華経の行者為る事疑無きか

これは日蓮大聖人が、法華経の文上においては、末法の御本仏である上行菩薩、文底においては、末法の御本仏であるという依文です。

「粗経文を勘え見るに」――法華経の経文に照らしてみれば、その上行菩薩の振る舞いというものは、自分自身の振る舞いと一致しているではないか。

「日蓮法華経の行者為る事疑無きか」――日蓮大聖人が御本仏であられることは、疑いのないことで

ある。法華経の行者とあったならば、これは「末法の御本仏」と拝すべきなのです。

なぜかならば、御義口伝にいわく「本尊とは法華経の行者の一身の当体なり」（御書全集七六〇㌻）と。

すなわち、法華経の行者の一身の当体が本尊です。本尊とは根本尊敬です。したがって、日蓮大聖人が、御本尊であり、人本尊です。人本尊であるならば、仏さまでしょう。

それであるのに、日蓮大菩薩と悪しく敬ったり、日蓮大聖人の教えは南無妙法蓮華経の法華経であるにもかかわらず、釈迦如来に対して題目を唱えさせるというような宗派は、まったく道理に合わないことは、この一事をみてもわかります。

但し今に天の加護を蒙らざるは一には諸天善神此の悪国を去る故か、二には善神法味を味わざる故に威光勢力無きか、三には大悪鬼三類の心中に入り梵天帝釈も力及ばざるか等、一一の証文道理追て進せしむ可く候

日蓮大聖人は仏さまであるのに、今、佐渡の国へ流されるというような法難にあったということは「天の加護」がなかったのかというのです。どうして、日蓮大聖人が、そういう大法難にあうかという理由を三つ、つぎにあげられております。

「一には諸天善神此の悪国を去る故か」

諸天善神が、悪国、すなわち謗法の国であるがゆえに、その国をすてて天にあがってしまうのです。「立正安国論」にくわしく論述されております。

「正直者の頭に神宿る」ということばがありますが、真実の正直とは、南無妙法蓮華経を唱える人をいうのです。正法を護持する人を正直という。その人に神は宿り、神は守るのです。これは御書にもありますけれども、それは当然でしょう。

国が悪国であるがゆえに、日蓮大聖人を迫害し、法華経をないがしろにしている国であったがゆえに、諸天善神は、仏のまえで「正法を守護する人を守る」と誓いをたてたのですから、この正法を護持していない国から去るのは当然であるというのです。これが一つです。

「二には善神法味を味わざる故に威光勢力無きか」です。

諸天善神は法味を味わうことによって、個人を、一国を守る力を得るのです。食事ができなかったり、月給をもらわなかった場合には、威光勢力もおとろえてしまいます。もし会社が、職員に対して月給をあげなかったら、威光勢力はおとろえて、仕事なんか、だれもしなくなるでしょう。ストライキをやるのはあたりまえです。

と同じように、あくまでも諸天善神は、南無妙法蓮華経の法味を食べて、神としての働きをするのです。これは法華経を拝し、御書を拝すれば、この原理は、はっきりしているのです。ですから、私どもは神を否定してはいないのです。むしろ、もっとも神を大事にし尊敬しているのは、私どもとい

えるでしょう。

神札は、これはだめです。神と神札は違うのです。はやく妙法が流布されて、天照大神や正八幡大菩薩も、そしてすべての諸天善神がぜんぶ来下して、日本国を守っていくようになれば、何千年の歴史にかつてない平和な世の中が到来することは、御書に照らして当然なのです。ですから、どうしても広宣流布をしなくてはならないのです。

七百年前からみれば、諸天善神もそうとう法味を味わっているといえるでしょう。二百何十万世帯の人が、法味をあたえているのですから、なにやかやいいながらも、刻々と日本の国はよくなってきております。

外国をまわってみても、物資が豊富という点では日本の国は世界一です。こんな小さな、それも敗戦国でありながら経済的にここまで立ち上がったのも、やはり、御本尊のお力が厳然とあらわれているのです。日本全体が大きく守られていると、私は確信するのです。

「三には大悪鬼三類の心中に入り梵天帝釈も力及ばざるか」と。

それはそうでしょう。なにしろ、十何万という宗教法人があるなどという国は、日本だけです。どこの国へ行っても、そんなにたくさんの宗教が乱立しているところはありません。

ですから「大悪鬼三類の心中に入り」――大悪鬼が、俗衆、道門、僭聖増上慢の三類の強敵となってあらわれてくるのです。

日本国中がこのような邪宗教の世界です。魔の働きが強いにきまっています。いわんや、日蓮大聖

人の御出現においては、すごい法難があることは当然です。「梵天帝釈も力及ばざるか」――当然、そうです。これは一往の義です。

日蓮大聖人御自身で経文どおりにお振る舞いになって、もう、すべてお見通しになっていらっしゃるのです。なにも恐ろしくはないのです。また、そういう三類の強敵が出現しなければ、法華経の予言どおりにならないからと、たなごころにのせての御行動のように拝するのです。

私たちもまた、事実、これだけの大折伏戦を、日蓮大聖人滅後かつてない大折伏、大法戦をやったのですから、三類の強敵は、紛然とおそいかかってくると覚悟しなくてはなりません。皆さん方も、難があればあるほど喜んで、宿命転換をしていってください。

釈尊の予言、また日蓮大聖人の御書を拝すれば、正法を護持するものには、かならず三類の強敵があると書いてあります。ですから、難があったからといって、これは、どうもやりかたが少し強すぎるからではないか、もっとやわらかに弘めるべきではないか、などと思うことはまちがいなのです。まことに、御書のとおりになっているのです。

日蓮大聖人も、「難来るを以て安楽と意得可きなり」（御書全集一三〇〇㌻）と、繰り返しおおせになってきたる」（御書全集七五〇㌻）、また「大悪をこれば大善

御書をしっかりと拝読してごらんなさい。どの御書を拝しても、すべて、難があるぞ、難があるぞと警告され、また「猶多怨嫉」と、如来の滅後にはかならず難がある、とおおせではありませんか。

にもかかわらず、難がでてくると、どうも強すぎるからとか、私は難がないようにうまくやってい

こうとか、人間にはずるい根性があるのです。

ですから、このように、三つの理由によって、自分は佐渡の国へ流されたのであると、富木常忍が疑わないようにおおせになったのです。

「一一の証文道理追(おっ)て進せしむ可く候」――証文どおり、道理のとおりに、このようになったのである。それゆえ疑う余地はないのです。あくまでも、経文をひかれて説かれているのです。

なにかあったら、皆さん方も、御書をきちんと拝読していきましょう。

今、大御本尊の御威光は、中天の太陽のように輝きわたっています。また、これだけの法華経の信者が団結していけば、どんなことでもできないわけはありません。ですから、お互いに守りあって、勇敢に楽しくやっていきたいと思うのです。

但生涯本より思い切て候今に翻返(ひるがえ)ること無く其の上又違恨(いこん)無し諸の悪人は又善知識なり

「但生涯本より思い切て候」とは、日蓮大聖人の御決意です。

どんな難があろうとも、もとより覚悟のうえである。法華経を弘めきって死ぬのだ、富木常忍、あなたもそういう決心をしていきなさい、と日蓮大聖人おんみずからの御決意を、披瀝(ひれき)されている御文であります。一生涯、信心を貫きとおすべきであるという激励でもあると思います。

総じては、日蓮正宗の全信者にたまわった御金言です。われわれへの激励として、受けとめなければならないところです。

「今に翻返ること無く」――どのような難があったからといって、退転などする考えはみじんもないのである。そして「其の上又違恨無し」――恨みもなにもない。ここが大事なところです。

かつて牧口初代会長の時代に法難があったときに、多くの同志は牧口先生、戸田先生を恨んだのです。法難がきたときに「牧口先生にいわれたから信心したのだ、戸田先生にいわれたから信心したのだ。それなのにこんなに難があって……。うちの主人が牢に入ってしまう」と、さんざん恨んだらしいのです。

現在もまれに、そういう場合があります。「創価学会でいわれたから、信心したのだけれども、こんな難がでてしまった。悪口をいわれてやりきれない」という人が、まれにいるのです。まるで創価学会のためにやっているみたいな考えではいけないということです。「違恨無し」です。信心は、ぜんぶ自分自身のためなのです。

いいときは、ああ、よかったよかった、ひとつも学会をほめないで、自分だけいい気になって、悪いことがあれば、なんでも会長が悪い、組織が悪い、支部長が悪いといいたくなるのです。

大事なことがあったときに、その偉さはわかるのです。信心もみえるのです。

「諸の悪人は又善知識なり」

また難があったからといって、諸の悪人はまた善知識である。大きいおことばです。大慈大悲の御

境界のおことばと拝すべきです。

いろいろ悪口雑言され、難があった。そのおかげで題目もあがり、御本尊の偉大さもわかるのです。また自身の成長もある。したがって、悪人といってもも、憎むのでなく、むしろ自分を仏にしてくれる人なのだと感謝していかなくてはならない。「ありがたいな」と心のなかで思えればよいのです。それだけ強い信心をするのです。

日蓮大聖人は、一切衆生はぜんぶ自分の子供であるとおおせなのです。悪人であろうが謗法であろうが、結局は、われわれを仏にしてくれる善知識なのです。ですから、軽蔑したり、憎んでいくということはまちがいです。

邪宗邪義はこれはいけません。これは憎むべきです。しかし、知らなくして謗法をおかし、正しい宗教を知らずたぶらかされている人に対しては、あくまでもめざめさせてあげる気持ちが必要です。

摂受・折伏の二義仏説に依る、敢て私曲に非ず万事霊山浄土を期す、恐恐謹言。

卯月十日

日蓮花押

土木殿

「摂受・折伏の二義仏説に依る」

摂受といい、折伏といい、仏法弘通の方軌には二義あるが、これは釈尊の説である。

「敢て私曲に非ず」――これは我見ではない、かってに、日蓮大聖人が決めた教義ではないのである

というのです。

よく、私たちが折伏、折伏というと、世間では、まるで創価学会が折伏ということを発明してやっているみたいに思っている。そうではありません。三千年前からあるのですから。仏法には、摂受か折伏か、どちらかしかないのです。

「佐渡御書」に「摂受・折伏時によるべし」（御書全集九五七㌻）とあります。今の時代は折伏です。末法においては、はっきり折伏となっているのです。それは釈尊の経文にも明確です。いわんや、七百年前に日蓮大聖人が御出現になって、みずから折伏を行じられた。それは御書を拝すれば厳然たるものです。

「万事霊山浄土を期す」というのは「霊鷲山会（りょうじゅせんえ）において、また会おう」と。現在においては「大御本尊を根幹として、人生を生ききっていこう」ということなのです。「霊山浄土」といえば、御本尊のことです。現実においては大御本尊が霊鷲山です。御本尊にいっさいをまかせて、人生を生ききっていこうとのおことばと拝せます。

（昭和三十七年四月五日）

「兄弟抄」講義

文永十二年四月　五十四歳御作

与 池上兄弟　於身延

（御書全集一〇八七㌻十行目～一〇八九㌻
編年体御書　六八八㌻十行目～六九〇㌻）

さ れ ば 天 台 大 師 の 摩 訶 止 観 と 申 す 文 は 天 台 一 期 の 大 事 ・ 一 代 聖 教 の 肝 心 ぞ か し 、 仏 法 漢 土 に 渡 って五百余年・南北の十師・智は日月に斉く徳は四海に響きしかどもいまだ一代聖教の浅深・勝劣・前後・次第には迷惑してこそ候いしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず、妙法蓮華経の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を取り出して三国の一切衆生に普く与へ給へり

「されば天台大師の摩訶止観と申す文は天台一期の大事・一代聖教の肝心ぞかし」

法華経に三種類あるということは、皆さんもごぞんじであると思いますが、像法年間における法華

経は、摩訶止観になるわけです。釈尊在世においては法華経二十八品、末法今時においては南無妙法蓮華経の五字七字の法華経、天台大師の法華経は摩訶止観です。

したがって、像法年間においては、一代聖教の肝心は摩訶止観なのです。摩訶止観といっても、こんどは文底から拝したならば、ぜんぶ御本尊になるのです。

「仏法漢土に渡って五百余年」

インドから中国に仏法が渡って約五百年後に、天台大師が出現し、摩訶止観の広宣流布があった。正法、像法年間を区切る場合に、五百年、五百年に分けますが、天台大師の出現までが五百年であるということは、ひじょうに不思議に感ずるのです。

それに対して、仏法が日本の国に伝来して約七百年後に、こんどは日蓮大聖人の立宗宣言があり、立宗宣言から七百年後に現在の隆盛があり、ちょうど題目の七文字の、七百年、七百年目にきわだった大事があるのもまた、不思議であります。

「南北十師」――江南の三派、江北の七派のことで、南三北七といいますが、その邪宗十派です。

それらの十師は「智は日月に斉く徳は四海に響き」とあらわされているように、大学者であり、大宗教家であり、大思想家であったけれども、唯仏与仏の境界ではないから、一代聖教の浅深、勝劣、前後、次第には、迷っていた。

また一大事の因縁によって出現した仏ではないから、相伝がないから、以上の理由によって仏法の極理がわかるわけがないのです。南北十派の教えは、知恵に対する知識になってしまうし、実践に対

する理論になってしまうし、仏法の真髄の奥義を会得していないというのです。

「智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず」

「智者大師」とは天台大師です。天台大師は、それらの南北十派を打ち破って、仏法の真髄を明かしたのです。

像法年間において成仏の直道はなにか。それは摩訶止観である。しかし、摩訶止観は、理論においても、またその実践においても、まだたいへんにむずかしいものでした。

末法においては、日蓮大聖人が摩訶止観のもっと本源である妙法それ自体を、一幅の曼荼羅としてお明かしくださったわけです。いかなる宿命の人でも、愚かなものでも、不幸なものでも、平等にぜんぶ仏になれる、それが御本尊です。

「教弥よ実なれば位弥よ下れり」（御書全集三三九ページ）で、実際問題として、日蓮大聖人は凡夫僧でいらっしゃるけれども、御本仏であり、私ども凡夫をぜんぶ仏にしてくださる御本尊をお残しくださったのです。幸せになる根本は、御本尊以外にないのです。この文の場合は、天台を立てて、天台の摩訶止観のうえから、仏になっていく直道を説明されているわけです。

「一念三千の如意宝珠」ということは、根本的には御本尊ということですが、ここは天台大師の一念三千の法門のことです。

「三国の一切衆生に普く与へ給へり」――三国とはインド、中国、日本です。それらの国々の一切衆生を救うために説かれた法門であるということです。

> 此の法門は漢土に始るのみならず月氏の論師までも明し給はぬ事なり、然れば章安大師の釈に云く「止観の明静なる前代に未だ聞かず」云云、又云く「天竺の大論尚其の類に非ず」等云云、其の上摩訶止観の第五の巻の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞかし

この「一念三千の如意宝珠」という仏法の真髄、極理は、漢土で初めて説かれたばかりでなく、インドの論師ですら明かさなかった法門である。どんな大学者、大宗教家、僧侶たりとも、明かすことのできない、またできなかった法門である。

そして、天台大師の説いた「法華文句」、「法華玄義」、「摩訶止観」各十巻、これが天台大師の三大部といって、経文になるわけですが、その摩訶止観を筆録したのは章安大師です。

その章安大師が「止観の明静なる前代に未だ聞かず」――摩訶止観という大仏法哲理は、いまだ前代に聞いたことのない明らかな立派な哲理であり、仏法であるといっているのです。

また章安大師のいうのには、「天竺の大論尚其の類に非ず」――インドの竜樹菩薩の著である有名な大智度論といえども、この摩訶止観にくらべれば問題にならない、とも述べています。

そして、その摩訶止観十巻のなかの第五の巻の一念三千という哲理は、摩訶止観のなかでもとくに

深い法門である、とおおせです。

これは、南無妙法蓮華経ということを、そのまま説けませんから、いろいろと論理的に明かしているのです。

> 此の法門を申すには必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず

大事な御文です。ここはあくまでも摩訶止観のことをさしていますが、しかし、いま日蓮大聖人の弟子として、日蓮大聖人の仏法を拝する身として、「此の法門」とは三大秘法の御本尊のことであり、日蓮正宗の仏法のことであると訳していいのです。

像法の法華経である摩訶止観を奉じ、論じ、それを説法しても難がある。いわんや、それ以上の極理である南無妙法蓮華経を濁悪の末法に説法するならば、折伏するならば、魔は競わないわけは絶対にないという御文なのです。

だから、折伏をするならば、「必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず」、魔が出来しなければ正法ではないのです。天理教、霊友会、立正佼成会などは、いくら広めても、なにも魔が競わないでしょう。

ところが、日蓮正宗の仏法を弘めていった場合、折伏行に励んでいった場合には、個人においても

創価学会においても、魔はたえずあるでしょう。これ正法であるという証拠なのです。正法である証拠であると同時に、仏になれるという証拠でもあるのです。

第五の巻に云く「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」等云云、此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ

三障四魔があったときには、この御文を拝読してください。この御文を身口意の三業で読めば、それで、その人は仏道修行の要に通達したことになるといってもいいのです。

「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず」

これは摩訶止観第五の巻の文です。信心修行がすすめばすすむほど、三障四魔は猛然と競いおこってくる。だが、その魔にしたがってもいけないし、恐れてもいけない。

魔が起きたならば正法である、大功徳を受けられるのだと、まず喜ぶのです。この魔を魔と見破り、魔と戦って、どんなことがあっても「随う可らず畏る可らず」です。

「之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」

これにしたがえば、人々を悪道に堕としてしまう。これを恐れてしまったならば、仏道修行はしき

っていけない、仏にはなれない。宿命転換もできない。断固としてこれをいいきればいいのです。これだけわかっていれば、あとはいいのです。

「此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり」

この法門は、日蓮大聖人御自身が身をもって読まれたのであり、日蓮門下の弟子檀那の鏡とすべきである。

「謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ」

ちょうどいまは日蓮大聖人立宗七百十年にあたります。その大聖人のおおせどおりに、それを資糧として実行、実践していく人こそ、日蓮大聖人のまことの弟子といえるのです。その弟子が功徳を受け、仏になれないわけは絶対にないと、私は信ずるのです。

この御文を私どもは生涯色心の二法で、色心のこの生命で読んでいこうと、これをきょう決意してもらいたいのです。

此の釈に三障と申すは煩悩障・業障・報障なり、煩悩障と申すは貪瞋癡等によりて障礙出来すべし、業障と申すは妻子等によりて障礙出来すべし、報障と申すは国主父母等によりて障礙出来すべし

これも有名な御文です。三障四魔の「三障」とは、煩悩障、業障、報障をいいます。

「煩悩障と申すは貪瞋癡等によりて障碍出来すべし」

まず第一番目の煩悩障は、貪瞋癡の三毒から、さまざまなかたちでおこるものです。

「座談会へ行こうか。いやそれよりも、家で寝ていたほうがいい」「総本山へ行こうか。いやその電車賃でどこかへ遊びに行きたい」、これ貪りです。

つぎに瞋りとは、感情です。「あの人に怒られたけど、なにも文句をいわれる必要はない」「学会は強すぎるからもうやめよう」などというのは感情です。これは自分自身の魔です。自分が永遠に幸福になっていくのだ、丈夫になるのだ、一言一句でも教わって自分の財産にしようという心を、自分で妨げてしまうのです。

それから、つぎは癡でしょう。題目をしっかりあげていけば「以信代慧」になってわかってくるけれども、題目をあげないで、自分の頭だけで判断して、指導を受けない。御書にわれわれが信じていくあり方が書いてあるのに、それもわからないで批判したり、ぜんぶ自分の心のなかの障です。

また、女の人は男の人に引きずられたり、男は男で女の人に迷って信心が進まなくなったり、商売に失敗して、いくら信心しても功徳がないなどと自分で決めこんでしまったり、これも癡かです。自分の一念から起きているのです。

いずれにしても、それを打ち破っていくのは題目です。それから、すこしでも自分がそういう弱い心になった場合は、自分を引き上げてくれる人に接していくこと、また、そういう和合僧の雰囲気に

なじんでいこうと努力する以外にありません。いずれも根本は題目です。

魔はかならずでてくるのです。むしろ信心が長くなってきた人が危いのです。「行解既に勤めぬれば」ですから、信心が五年、七年、十年、十四、五年になってきた人が危いのです。だれも、「それが魔ですよ」とはいってくれない。心が退転してはなりません。これが煩悩障です。

「業障と申すは妻子等によりて障礙出来すべし」

これは、もっとも気をつけてもらいたいところなのです。

かつて牧口初代会長、戸田二代会長が牢にはいったとき、まず退転したのは幹部の夫人たちだった。「すべて牧口先生が悪い。戸田先生が悪い」といいだした。牢から夫を早く出したいと思うあまり、同志をも憎むようになってしまうのです。人の心というものは恐ろしいものです。だから、そういうことのないようにしていただきたいのです。

しかし一面においては、女性は大事なのです。戸田先生も「広宣流布は婦人の手によって」と激励されておりました。これを縮図して一家においても、皆さん方がよく気をつけなければならない場合があるのです。夫が七の力しかない場合に、妻が立派であれば十にしていける。逆に夫が十の力があっても、妻が愚かであれば七にも五にも減じてしまう。へたすれば夫を落としてしまう。それほど大事な役目なのです。

「報障と申すは国主父母等によりて障礙出来すべし」

第三の報障は、国主、国家権力、それから大事なお父さんやお母さんが反対して信心を妨げること

をいうのです。

> 又四魔の中に天子魔と申すも是くの如し今日本国に我も止観を得たり我も止観を得たりと云う人人誰か三障四魔競へる人あるや

三障四魔の四魔のなかに「天子魔」という魔がある。第六天の魔王と魔民によって起こり、父母、妻子、権力者等のあらゆる姿をもって、仏道修行を妨げようとする働きのことである。四魔は、天子魔、死魔、煩悩魔、蘊魔です。

「今日本国に我も止観を得たり我も止観を得たりと云う人人誰か三障四魔競へる人あるや」

これは、現在にあてはめていえば、日蓮大聖人の仏法を学し、日蓮大聖人の仏法を修行しているという人はたくさんいるようであるけれども、だれびとも真実に実践してはいないという証拠の御文なのです。

なぜかならば、だれに、三障四魔が起きているか。だれにも起きてはいない。それは、正法を修していない証拠ではないか。

ということは、いま日蓮宗と名のる宗派の僧の、だれびとが法難にあっているか。三障四魔にあっているか、天子魔にあっていないか。あっていない。ただひとり日蓮大聖人の正統である日蓮正宗創価

学会だけが、三障四魔と戦っているのでしょう。

之に随えば将に人をして悪道に向わしむと申すは只三悪道のみならず人天・九界を皆悪道とかけり、されば法華経を除きて華厳・阿含・方等・般若・涅槃・大日経等なり、天台宗を除きて余の七宗の人人は人を悪道に向わしむる獄卒なり、天台宗の人人の中にも法華経を信ずるやうにて人を前へやるは悪道に人をつかはす獄卒なり

これは厳しいおことばです。摩訶止観第五の巻のなかに「之に随えば将に人をして悪道に向わしむ」という文があります。

その意味は、そういう人に随ってしまうなら、地獄、餓鬼、畜生界の三悪道に堕ちるというだけではない。人界、天界、九界までみな悪道となるのである。仏法のうえにおいては、絶対に成仏するということが人生の目的であるがゆえに、それ以外はぜんぶ悪道になってしまうのです。峻厳なる戒めです。

「されば法華経を除きて」――この法華経は、日蓮大聖人の南無妙法蓮華経の法華経です。

「天台宗を除きて余の七宗の人人は人を悪道に向わしむる獄卒なり」

また七宗（倶舎、成実、律、法相、三論、華厳の南都六宗と真言宗）は、人々をぜんぶ悪道に向かわせて

いく獄卒なのである。その原理からいけば、今の日蓮宗各派も新興宗教も、そのなかにぜんぶはいるでしょう。

このように日蓮大聖人が厳しくおおせになったそのとおりに、私たちはいっているのです。世間で、創価学会は折伏で邪宗教、邪宗教と悪口をいうのが悪いというけれども、末法の御本仏が宣言していらっしゃる、そのとおりにいっているのです。

さらに「天台宗の人人の中にも法華経を信ずるやうにて人を爾前へやるは悪道に人をつかはす獄卒なり」と。

天台宗の人々のなかにおいても、法華経を信じているようであるけれども、事実は、心は爾前経を信じていて、人をも悪道に堕としている獄卒がたくさんいる。また、真実の法華経を行じきれないで、我見で、邪見で法華経を行じている人もたくさんいる。これも獄卒であると喝破されているのです。伝教大師いわく「法華経を讃すと雖も還って法華の心を死す」とは、まさにこのことです。

日蓮大聖人の仏法を学し、日蓮大聖人の仏法を賛嘆する人はたくさんいるようであるけれども、同じく悪道に人をつかわす獄卒がたくさんいるわけでしょう。正しく成仏へ導いていくのは日蓮正宗しかないのです。この御文から推測すれば、はっきりわかります。

今二人の人は隠士と烈士とのごとし一も欠かけなば成ずべからず、譬えば鳥の二つの羽人の両

この「二人」というのは池上兄弟です。兄を大夫志宗仲といい、弟を兵衛志宗長といいます。二人の信心に、父の康光は反対でしたが、とうとう兄の宗仲が勘当されるという事態にいたりました。そのとき、大聖人より慈愛あふれる御指導をたまわったのが、この「兄弟抄」です。

池上兄弟二人は「隠士と烈士」のようなものである、とおおせです。隠士と烈士については、同じくこの「兄弟抄」のまえのところ（御書全集一〇八六㌻）にくわしく書かれてあります。

隠士が仙人になる法を修するのに、烈士の協力が必要でした。隠士の修行中、烈士は絶対に口をきいてはいけないといわれ、固く約束したが、つぎからつぎへと競いおこる魔に負けて最後にとうとう声を発してしまったため、隠士はついに仙人の法を成ずることができなかったというのです。

この池上兄弟も同じく、どちらが欠けても成就できない、二人が団結してお父さんを折伏し、成仏していきなさい、と激励されているのです。

「鳥の二つの羽人の両眼の如し」

みんな、こういう気持ちで団結していきたいものです。夫婦もそうであると同時に、兄弟も、そして、とくに同志は、広宣流布という目的に向かっての団結が大切です。そのような日蓮大聖人の御指導と拝していいのです。私ども仏法を信ずる身として、親類兄弟よりも、仏法の世界の契りというものは、もっともっと深い次元になるのです。

又二人の御前達は此の人人の檀那ぞかし女人となる事は物に随って物を随える身なり夫たのし
くば妻もさかふべし夫盗人ならば妻も盗人なるべし

この「二人の御前」というのは、この兄弟の奥さんでしょう。「檀那ぞかし」という、檀那という場合は、ふつう施主と訳するのですが、ここでは主人を守っている保護者という意味です。

「女人となる事は物に随って物を随える身なり」

この御文は有名です。これは、皆さん方が思索してください。また実践してください。

たいていは、物に随わなくて、物を随えさせてしまうものです。つごうがいいところは随って、つごうが悪いところは随わないで、随わなくてはならないときに随わないで、随ってもらわなくてもいいときに随ってしまうものです。この御文どおりに、どうか信心で実践していただきたいと思うのです。

「夫たのしくば妻もさかふべし」――これは、このとおりです。逆に、夫が退転してしまったならば、ちょうど夫が盗人ならば妻も盗人と同じように、いっしょに地獄へ行ってしまうのです。

どうか信心を根幹としてご主人をしっかり激励してください。妻の信心が大切なのですよ、と兄弟の夫人たちにも指導されているのです。

是れ偏に今生計りの事にはあらず世世・生生に影と身と華と果と根と葉との如くにておはする
ぞかし、木にすむ虫は木をはむ・水にある魚は水をくらふ・芝かるれば蘭なく松さかうれば柏
よろこぶ、草木すら是くの如し

「是れ偏に今生計りの事にはあらず世世・生生に影と身と」云云ということは、永遠の生命を明かしていらっしゃるのです。

夫婦の絆、またその因果というものは、今世ばかりのことではない。影あればかならず身があり、華が咲けばかならず果がなる、根が深ければ葉もしげるように、生々世々にどこまでもいっしょなのです。

今世のふるまいが世々、生々、因果の理法によって、ずーっと縮図されていくのです。ですからいちばん大事なのは、御本尊を根幹として妙法に照らされた現在なのです。

「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」（御書全集二三一㌻）なのです。

仏法の世界においては、御本尊に照らされて、いま激励を受けたり、いま薫陶を受けたり、いま自分が題目を唱えて宿命転換をしようと決意した場合には、その瞬間からもう成長していくのです。

「草木すら是くの如し」――木にすむ虫は木を食べて、また水にすむ魚は水を飲んで生きている。また芝が枯れれば蘭も生きていけない。松が栄えば、柏も喜ぶ。畜生や草木すら、助けあって生きているのです。いわんや人間として、また仏法を学する者においてをやです。

比翼と申す鳥は身は一つにて頭二つあり二つの口より入る物・一身を養ふ、比目ひほくと申す魚は一目づつある故に一生が間は離なるる事なし、夫と妻とは是くの如し此の法門のゆへには設ひ夫に害せらるるとも悔ゆる事なかれ、一同して夫の心をいさめば竜女が跡をつぎ末代悪世の女人の成仏の手本と成り給うべし

「比翼」という鳥のことは、白楽天の長恨歌という詩のなかにもありますが、雌雄それぞれ一目一翼で、つねに一体となって飛ぶといわれます。「比目」という魚も同じように一目しかないので、二匹が並んで泳ぐといわれています。そして一生涯離れることはない。夫婦というのは、このように仲むつまじく、ともに助けあい、支えあっていくものだとおおせです。

「此の法門のゆへには設ひ夫に害せらるるとも悔ゆる事なかれ」

信心、御本尊のことについてだけは、たとい、夫にたたかれようが、害されようが、あくまでもいさめるべきである。信心しきっていくべきである。これは日蓮大聖人の御教訓です。いざという場合

には、婦人が大事です。信心さえ貫き通すならば、夫を救えるのです。
そして、夫人たちが力を合わせて兄弟の信心をいさめていくならば、竜女が仏になったあとをついで、末代悪世の女人の成仏の手本となると激励されているのです。

> 此くの如くおはさば設ひいかなる事ありとも日蓮が二聖・二天・十羅刹・釈迦・多宝に申して順次生に仏になし・たてまつるべし

「此くの如くおはさば」――日蓮大聖人のおおせどおりに実践していくならば、「設ひいかなる事ありとも」――たとえどんなことがあってもということです。こういう小さいことばを信心で読まなくてはいけません。絶対にそれを自分のものとして実践しなくてはいけません。

「二聖・二天」――二聖は勇施、薬王。二天は毘沙門天（多聞天）、大持国天をいいます。

日蓮大聖人が、二聖、二天、十羅刹、そして釈迦、多宝にも命令して「順次生に仏になし・たてまつるべし」と。すなわち、永久に幸福を与える、御本尊のもとに生まれてこられる、壊れない仏の境界で人生を送っていけるようにしてあげましょう、と。ありがたいおことばではないですか。難に遭っている弟子をお思いくださる、日蓮大聖人の厳然たる御確信です。

心の師とは・なるとも心を師とせざれとは六波羅蜜経の文なり

「心の師とは・なるとも心を師とせざれ」、これも有名な御文ですが、六波羅蜜経にあります。心というものは微妙なもので、自分ではどうしようもないものです。それを正しく位置づけるには、どうしても師が必要です。

私たちの信心にあてはめてみれば、御本尊を拝することが「心の師」にあたります。または、広くいえば、信心強盛な先輩について指導をうけ、意見をきくことも「心の師とは・なるとも」にはいるのです。

「心を師とせざれ」ということは、我見や感情のままに判断したり、行動したりしてはいけない。あてにならない自分の心を師とするところに、不幸があるのです。

御本尊を根本とし、それから仏法の指導を根本としていくことが「心の師とは・なるとも」にはいるし、そこに自身の成長と価値創造がある。反対に「心を師とする」とは自分を中心にして、仏法の原理を聞かなかったり、御本尊を第二義にしたり、それから指導を第二義にするがゆえに、成長も前進もないのです。

法華経陀羅尼品にも「若し我が呪に順ぜずして　説法者を悩乱せば　頭破れて七分に作ること　阿梨樹の枝の如くならん」（妙法蓮華経並開結六四五㌻）との文があります。これは、よく御書にも引用さ

れていますけれども、法華経の行者を迫害すれば罰があるという文証です。

つぎに「世尊、我等亦当に身自ら是の経を受持し、読誦し、修行せん者を擁護して安穏なることを得」ともあります。今でいえば、御本尊を持って折伏する人を守るという意味になります。

そのつぎに「諸の衰患を離れ、衆の毒薬を消さしむべし」とは、衰退したり、患わないで、いっさいの毒といっさいの不幸を消してしまうということです。こういう経文もあります。

設ひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして只法華経の事のみさはぐらせ給うべし

「設ひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして」

どんなにわずらわしいことがあっても、そんなことは夢と思っていきなさい、とおおせです。私たちも、そう決めてしまいましょう。どんなに苦しいことが山ほどあっても、それは夢だと笑って進みましょう。たしかに、御本尊を根本として信心をきちんとしていけば、そんな悩みなどは、もう幻影のようなものです。この世の中は、一面では、諸行無常です。本有常住は御本尊しかないのです。

「只法華経の事のみさはぐらせ給うべし」

御本尊のことだけ考えていきなさい、というのです。広宣流布のことだけ考えていけばいいのではないですか。あとは、どんな事件があろうが、いやなことがあろうが、たいしたことはないというの

です。

信じられるのは、根本は御本尊だけです。ですから御本尊、それから御書を中心にして、永遠の幸福をめざし、一生成仏を願い、そのことを思索していきましょう。

お金などいくらあっても死ぬときに持っていけません。いくら名誉をもっても、自分はたいしたものだと思っても、人がみてくれないことはたくさんあります。いくらいいものを着ても百年着られません。みんな一時的な虚栄にすぎません。

中にも日蓮が法門は古(いにし)へこそ信じかたかりしが今は前前いひをきし事既(すで)に合(あひ)ぬればよし由(よし)なく誇ぜし人人も悔(くい)る心あるべし、設ひこれより後に信ずる男女ありとも各各には歎(かへ)思ふべからず

日蓮大聖人が「真言亡国、禅天魔」と、大折伏行に御活躍をなされたが、初めは南無妙法蓮華経を信じ、唱える人は、少なかった。かえって、迫害ばかりして、批判ばかりしていたけれども、日蓮大聖人が「立正安国論」等で予言された「他国侵逼難」「自界叛逆難」がそのとおりに的中した。それにびっくりして、理由もなく謗じていた人も、批判していた人も徐々に悔いる心がおきてきたことでしょう。また、信心する人がふえてくるでしょう、こういう意味です。

「設ひこれより後に信ずる男女ありとも各各にはかへ思ふべからず」

これから、たくさん信心する人がいるかもしれないけれども、池上兄弟のほうが、薫陶もたくさん受け、信心も古いのですから、ずっと、あなた方のほうを信頼していますよ、とおおせです。

始(はじめ)は信じてありしかども世間のを怖(おそ)れをそろしさにすつる人人かず数をしらず、其の中に返って本より誘ずる人人よりも強盛にそしる人人又あまたあり、在世にも善星比丘(ぜんしょうびく)等は始は信じてありしかども後にすつるのみならず返って仏をはうじ奉りしゆへに仏も叶い給はず無間地獄にをちにき

これは、このとおりです。はじめは、せっかく信心しても、世間の批判がこわくて捨てる人は数を知らないというのです。いままでの歴史でも、どれだけ退転したことか。批判記事が新聞にでたとか、悪口をいわれたとか、そんなことで退転するぐらい、みっともないことはない。どんなことがあっても退転だけはしてはいけません。

信心するのに世間の目を恐れて、なにが幸せになれますか。では、新聞記事や雑誌記事や世間の人が幸せにしてくれるか。してくれはしません。目先のちょっとしたことに紛動されて、一生の幸福を、いな永遠の幸福を破壊してしまうのは、もっともおろかなことです。

日蓮大聖人の時代においてさえも、御本仏がいらっしゃっても、世間の恐ろしさに捨てる人は、た

くさんいたのです。いわんや、これからがほんとうに大事なのです。

「其の中に返って本より謗ずる人人よりも強盛にそしる人人又あまたあり」

「佐渡御書」をみても、残念ながらそういう事実があったのです。そして日蓮大聖人の時代にあったことは、今もあるのです。一度は日蓮大聖人の弟子となってても、やがて退転して批判する人もある。こういう人は、もとから謗じている人よりも、かえって強く謗ずるというのです。こわいことです。こういうことを、よくみきわめていくべきです。

「在世にも善星比丘等は始は信じてありしかども後にすつるのみならず返って仏をはうじ奉りしゆへに仏も叶い給はず無間地獄にをちにき」

釈尊在世において、善星比丘という比丘は、初め釈尊の弟子として信心したけれども、のちには捨てて、かえって仏を謗じた。釈尊の慈悲をもってもどうしようもなく、ついに無間地獄に堕ちたというのです。

善星比丘というのは、釈尊の太子の時代の三人の子供の一人といわれています。子供であっても、これだけ師敵対するのです。釈尊在世においても、こういうことがあるのだとおおせです。そういう因縁、役目があり、悪役があるのです。

このことは、日蓮大聖人の弟子として、退転してうことはないのです。御本尊に功徳がないから退転しているのではないのだよ、という御文と拝せばいいのです。

皆さん方も、退転して「御本尊に功徳がないから……」などという人に対しては、この御書をみせてあげればいいのです。「釈尊の子供だって釈尊に敵対して地獄に堕ちている」と。なにも恐れることはありません。皆さん方が退転しても同じことです。地獄へ堕ちていくのです。御本尊は絶対なのです。あとは、おのおのの信心です。

> 此の御文は別してひやうへの志殿へまいらせ候、又太夫志殿の女房兵衛志殿の女房によくよく申しきかせ給うべし・きかせ給うべし・南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経。
>
> 文永十二年四月十六日　　日蓮花押

この「兄弟抄」は、池上兄弟にあてられたものですが、別しては、弟の兵衛志宗長にさしあげたお手紙であるとおおせです。兄が勘当されたのをみて、兄よりも信心の弱い弟のほうの動揺を心配されたからでありましょう。

また、兄の太夫志宗仲の夫人、弟の宗長の夫人にも、よくよく読んできかせてあげなさい、ともおおせです。「よくよく」というそのひとことに、この御書の指導どおり、しっかりと実践していってほしいという、大聖人の願いがこめられているように思われます。

（昭和三十七年四月十二日）

「曾谷殿御返事」講義

建治二年
五十五歳御作

（御書全集一〇五五㌻～一〇五六㌻
編年体御書　九二九㌻～九三〇㌻）

この「曾谷殿御返事」は、別名「成仏用心抄」ともいわれております。私たちが成仏するために
は、信心修行において、なにが肝要なのかを指導された重要な御書であります。
曾谷殿というのは、曾谷教信のことで、法名を法蓮といい、下総国（今の千葉県）に住んでいた武士
であります。富木常忍や大田乗明とともに日蓮大聖人のもとで強盛な信者として戦ってきたひとりで
あります。

夫れ法華経第一方便品に云く「諸仏の智慧は甚深無量なり」云云、釈に云く「境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量と云う」と、抑此の経釈の心は仏になる道は豈境智の二

「第一方便品に云く」とは、第一の巻、方便品第二にいわく、という意味です。法華経は八巻に分かれていますから、その第一です。

「諸仏の智慧は甚深無量なり」と説かれている。ひとくちにいうならば「諸仏智慧甚深無量」とは、大御本尊の智慧は甚深無量である、と拝するのであります。

その方便品の経文を、天台大師が釈して、法華文句にいわく「境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量」――と。

「境淵無辺なる故に甚深云云」ということは、時間的に約すならば、永遠であり、空間的に論ずるならば、宇宙の広さそれ自体である、これが御本尊の智慧であり、日蓮大聖人の智慧である、このように天台も釈しているというのです。

そして、大聖人は「仏になる道は豈境智の二法にあらずや」と結論づけられているのです。

南無妙法蓮華経を境とするならば、日蓮大聖人が智になるのです。したがって、法本尊、人本尊、境智の二法の境智冥合の御当体が、三大秘法の御本尊になるわけです。

また、私ども信心する立場からいうならば、大御本尊が境です。私どもの信心が智になるのです。そして、境智冥合して仏になれると、こういう原理になります。

> されば境と云うは万法の体を云い智と云うは自体顕照の姿を云うなり

「万法の体」とは、あらゆる森羅万象の本源、本体のことで、その究極は南無妙法蓮華経です。これを境という。

智とは、妙法による智慧の働きです。その智慧の働きによって、万法の体がそのあるがままの姿で照らしあらわされることが、「自体顕照」になります。すなわち、妙法の智慧の光によって、宇宙の万物が南無妙法蓮華経と照らしあらわされるのです。したがって、智とは、日蓮大聖人と拝してもよろしいわけです。また「万法の体」が本尊、境です。

またこんどは逆に、御本尊の智によって、信心する私どもの生活、生命活動が境になり、自体顕照の姿になるのです。

すなわち、最高の生命力の本源である御本尊に照らされ、おのおのの境遇にあって、おのおのの使命にたって、有意義にすこしのムダもなく、最高度の人生を生ききっていける、そういう生命活動、生活活動を、自体顕照の姿ともいえると思うのです。

本尊とは根本尊敬、功徳聚とも輪円具足とも説かれておりますけれども、根本尊敬の、根本の「本」、そして尊敬の「尊」で、「本尊」といわれます。

その本源の当体を一幅の御本尊と顕された、当体として顕されたのは、日蓮大聖人だけなのです。

それが日蓮大聖人の出世の本懐です。

この大宇宙の現象世界をなすあらゆる森羅万象、あらゆる生死を起こし、滅せしめていく法則、それが妙法であり、それを具体的に、現実に御図顕してくださったのが御本尊です。ですから、あらゆるものの本源、根本の当体、それが本尊なのです。

その御本尊に南無していけば、大宇宙のリズムに合致して生きいきとした生活を送ることができるし、さらに永遠の生命を感得できるわけですから、願いはかなうし、病気が治ったり、商売がよくなったりすることは、その過程として、当然の道理です。

而るに境の淵ほとりなく・ふかき時は智慧の水ながるる事つつがなし、此の境智合しぬれば即身成仏するなり

「境の淵ほとりなく・ふかき時は」、すなわち御本尊はそれ自体、宇宙大の広さと深さがあり、際限がないがゆえに、「智慧の水ながるる事つつがなし」、すなわち智恵の水、御本尊の力、働きというものは、とどこおることはないのです。

私たちの生命に約していえば、私たちの生命もまた、本来、宇宙大の妙法の当体であるという境であり、御本尊に南無することによってそれを覚知し、仏界の境に合致した智をあらわしたとき、即身

成仏するのです。ゆえに日寛上人は、御本尊を境、題目を唱えることが智、御本尊に唱題する姿を境智冥合であると教えられています。

われわれは、すぐ人生に行き詰まりましたとか、やれ商売に行き詰まってしまったとか、そういうグチをこぼしますけれども、日蓮大聖人の智水は永遠に行き詰まりはありません。

したがって、日蓮大聖人即御本尊を私どもは受持しているのですから、境智冥合して等しくなるのですから、ほんとうは行き詰まってしようがないという人は、まだ信心が弱いと、自身を反省してください。「御本尊には行き詰まりがない」とここにおしたためなのですから。

また、よく「こんなに信心しても功徳が少ない」「すこしも変わらない」という人がおりますけれども、それはウソです。それは御本尊と境智冥合していない証拠です。

また、御本尊を受持しきって信心に励んでいけば、人生を満喫し、永遠の生命、幸福を感得することも、この御文を拝して事実です。絶対の確信をもって、大聖人はいいきられています。どうか皆さん方も、なにがあっても御本尊を根本として、信心強盛にがんばっていきましょう。

法華以前の経は境智・各別にして而も権教方便なるが故に成仏せず、今法華経にして境智一如なる間・開示悟入の四仏知見をさとりて成仏するなり、此の内証に声聞・辟支仏更に及ばざる

ところを次下に一切声聞辟支仏所不能知と説かるるなり

爾前経は境智冥合ではなく、境智各別である。空・仮・中の三諦を説ききってない権教方便の教えである。したがって、成仏しない、幸福になることはできない、と断じていらっしゃるのです。

今、法華経においては、別しては三大秘法の御本尊のみが「境智一如」である。

そもそも方便品に説かれているように、仏の出世の目的は、「開示悟入の四仏知見」にある。すなわち衆生をして仏知見を開かしめんと欲し、または仏知見を示し、仏知見を悟らしめ、仏知見の道に入らしむ——これが仏の目的である。

開とは信心の異名です。信心をもって南無妙法蓮華経と唱えることが、仏知見をわが生命に開くことになる（開仏知見）。そうしたとき、仏は、その衆生の生命が妙法の当体であることを示し（示仏知見）、現実の自分の世界を常寂光土と悟り、みずからも即身成仏できると確信するのです（悟仏知見）。そのときこそ、仏界に照らされ、いかなる縁にも紛動されない人生になる（入仏知見）ことができるのです。

したがって、私たちが御本尊に題目を唱える信心があってはじめて四仏知見を開示悟入し、成仏することができるのです。

「声聞・辟支仏」とは、声聞、縁覚の二乗でありますす。「内証」とは南無妙法蓮華経です。

方便品に「諸仏の智慧は甚深無量なり」とあり、その次下に「一切声聞辟支仏の知ること能わざる所なり」とあるのは、いっさいの声聞、縁覚は、仏の内証である妙法蓮華経のこの大仏法を、とうて

い知ることができないというのです。

ですから、いまもって学者や評論家など、指導階層といわれる人々が、日蓮大聖人の三大秘法の仏法、一念三千の理法を知るわけがないのも当然です。知らないのに批判していること自体、たいへん残念であるといわざるをえません。

この妙法蓮華経といい、また一念三千といい、境智冥合といい、ぜんぶ同じことなのであります。境智冥合しないところに不幸があるのです。

資本家も政治家も、労働者も、全人類が等しく願う幸福と平和は、日蓮大聖人の仏法と境智冥合するならば、すみやかに仏国土の確立ができると、このように私は確信するしだいであります。

此の境智の二法は何物ぞ但南無妙法蓮華経の五字なり、此の五字を地涌の大士を召し出して結要付属せしめ給う是を本化付属の法門とは云うなり

この「境智の二法」とは、いままでの講義でもおわかりのように、結局は境も智もともに、南無妙法蓮華経のことであるというのです。

この妙法蓮華経の五字を「地涌の大士」――これは地涌の菩薩の上首である上行菩薩です――を召しいだして「結要付属」をした。これを「本化付属の法門」というのである。

すなわち、迹化の付嘱は総付嘱といわれ、法華経嘱累品で行われ、これは三摩の付嘱ともいわれております。それに対して本化の付嘱は、これは別付嘱といわれ、神力品です。これは皆さん方もよくおわかりであると思います。「如来一切の所有の法」「如来一切の秘要の蔵」「如来一切の自在の神力」「如来一切の甚深の事」――この四句の要法をもって、上行菩薩に付嘱をしたのです。これは三大秘法の付嘱を意味しております。

然るに上行菩薩等・末法の始の五百年に出生して此の境智の二法たる五字を弘めさせ給うべしと見えたり経文赫赫たり明明たり誰か是を論ぜん、日蓮は其の人にも非ず又御使にもあらざれども先序分にあらあら弘め候なり、既に上行菩薩・釈迦如来より妙法の智水を受けて末代悪世の枯槁の衆生に流れかよはし給う是れ智慧の義なり、釈尊より上行菩薩へ譲り与へ給う然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む

「上行菩薩等」とは、上行、それから無辺行、浄行、安立行の四菩薩をさす意味で、上行等とおおせになったわけであろうと思いますが、別しては上首の上行菩薩です。

上行菩薩が「末法の始の五百年」に出現して「此の境智の二法たる五字を弘めさせ給うべし」と。この境智の二法たる五字とは「南無妙法蓮華経」と拝します。

法華経薬王品には「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して断絶せしむることなけん」と、また勧発品にも「如来の滅後に於いて、閻浮提の内に広く流布せしめて、断絶せざらしめん」とあります。このように五濁悪世の末法において、上行菩薩が南無妙法蓮華経を流布することは、経文に赫々とでている、だれが疑う必要があろうかというのです。

「日蓮は其の人にも非ず」――日蓮大聖人は、その妙法蓮華経を弘める人ではないのだが、これは御謙遜のお立場でこのようにいわれています。

「御使にもあらざれども先序分にあらあら弘め候なり」、また「然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む」ということは、内証では日蓮大聖人が上行菩薩であり、さらには御本仏であるということを確信していらっしゃることになります。

いまだかつてだれびともなしえなかったことを、大聖人がなされたことは、厳然たる事実です。御自身の実践の姿をもって実証されているのです。

上行菩薩が釈迦如来より妙法蓮華経を相伝されて、末代悪世の枯れた衆生に、不幸の衆生に、この妙法蓮華経を流す、弘めてあげる、これが「智慧の義」というのである、というのです。これはあくまでも外用の立場で論じているわけです。

日蓮大聖人は、御内証は「久遠元初の自受用報身如来再誕日蓮」です。「久遠元初自受用報身如来」釈尊から「妙法の智水」をうけたとなっています。釈尊といえども南無妙法蓮華経におもちなのです。釈尊が、大聖人はもともと御自身が「妙法の智水」を垂迹上行」です。その再誕の日蓮です。ゆえに、

よって仏になったのです。

今、私たちもまた、大聖人の遺された偉大な御本尊を持つことによって、わが生命にゆたかな知恵がわき、うるおいに満ちた幸せな人生を送ることができるのです。

又是には総別の二義あり総別の二義少しも相そむけば成仏思もよらず輪廻生死のもといたらん

「総別の二義」です。簡単にいえば、総とは全体的、一般的な意義であり、別とはそのなかに含まれる特別、肝要の意義です。

総別の二義を少しでもたがえるならば、成仏できない。ここは大事なところです。

総じては、本化地涌の菩薩に仏法をゆずった、しかし別しては、上行おひとり、すなわち日蓮大聖人にゆずられたと、こう読まないとまちがいを起こすのです。

すべてこうなるわけです。たとえていえば、総じては一切衆生は仏なり、別しては日蓮大聖人おひとりです。総別の二義をわきまえないと「日蓮大聖人は一切衆生は仏なりとおっしゃっている。だから自分は仏である。信仰など必要ない」と、こういうふうになってしまうのです。

私たちの信心に約していえば、総じては、あくまでぜんぶ御本尊の子供である。だが、別しては、折伏行に励み、広宣流布に進んだ人が、まことの弟子である。また総じては、御本尊を持った者に

は、みな功徳がある。別しては、日蓮大聖人のおおせどおりに信心しきったものだけに功徳がある、成仏できる。こういうことになるでしょう。

その総別の二義をたがえるということは、つまり日蓮大聖人、即御本尊が成仏の根源であることを知らないからであり、それで成仏することができないのです。仏法といえば、総じていえば、「一切法皆これ仏法なり」で、ぜんぶ仏法ではある。しかし別しては、日蓮正宗以外に仏法は断じてない。こうなります。

例せば大通仏の第十六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は全く弥陀・薬師に遇て成仏せず譬え」ば大海の水を家内へ汲くみ来らんには家内の者皆縁をふるべきなり、然れども汲み来るところの大海の一滴を閣きて又他方の大海の水を求めん事は大僻案なり大愚癡なり

三千塵点劫における大通智勝仏の十六番目の王子、これが過去世の釈尊であります。そのときこの釈迦如来に下種をされたのが、今日の声聞です。今日というのはインドの釈尊の在世です。それらの声聞は、阿弥陀如来や薬師如来にあっても成仏することはできない。釈迦如来に下種された人は、あくまでインド応誕の釈尊にあって、はじめて成仏するものであるというのです。

あくまでも釈尊に下種をされた衆生は、釈尊によって仏になるのであるということです。他の仏、

菩薩にあっても、絶対に成仏することはできない。大御本尊にお目にかかった私どもは、当然、大御本尊を受持しきって仏になるのです。ほかの鬼子母神や、立正佼成会や霊友会に行っても、仏になれようはずがないというのです。

また、この末法の衆生というのは、久遠元初の自受用報身如来に成仏の本種をただちに下種されなければ成仏はできません。

日本の国にある世界最高の大仏法こそ、その下種益の仏法である。この日本の大仏法によって、日本の人々も、全世界の人々も利益し、救うことができるのです。

いまの指導者に、この御文を目をあけて読みなさいといいたいのです。そして日本の国に七百年のあいだ、世界最高の仏法があることに気がつかないで、認識もせずして、そういう指導者が表にたって日本の国を指導しているから、いくらたっても日本の国はよくならないのです。

一日もはやく、皆さん方が成長して、世界的な指導者になっていただかなければ、世界の平和は絶対にないと、こういう確信で進んでください。

法華経の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて余へ心をうつさば必ず輪廻生死のわざはいなるべし

「根源の師」とは、日蓮大聖人です。また人法一箇の御本尊です。日蓮大聖人は、一往、念仏や禅宗や真言宗等を打ち破ろうとなされて、当時の人々の心を、釈尊へ釈尊へ、法華経へ法華経へと、もどしていらっしゃるのです。

一度、釈尊へ、法華経へともどってみれば、それがぜんぶ末法の予言書であることがわかるではないか。上行菩薩の出現のときではないか。上行菩薩の出現といえば、日蓮大聖人しかいないではないか。こういう論理で説かれているわけです。

現在、釈尊の予言どおり、そして大聖人の御指導どおり、根源の師を忘れず信心修行に励んでいるのは、われわれしかないのです。

「輪廻生死のわざはい」とは、永久に不幸になるということです。御本尊を忘れ、正しい仏法を忘れ、日蓮大聖人を忘れるならば、個人も国も、かならず永久に不幸になるのです。

但し師なりとも誤ある者をば捨つべし又捨てざる義も有るべし世間・仏法の道理によるべきなり

師であっても、師匠であっても、誤りのある師匠を捨てるのは当然です。日蓮大聖人は正しい師匠です。

しかし、師匠に細かいところで誤りがあっても、捨てない場合もあります。

この点については、「世間・仏法の道理によるべきなり」、世間、仏法の道理によって判断していきなさいというのです。

世間でも悪い師匠は捨てるべきである。よい師匠はもたなくてはいけない。仏法も同じである。まちがった時代不相応の、機根不相応の法を説いている師匠は捨てなさい。その時代の仏さまの仏法、そしてまた、それを説く師匠を求めなさい、たもちなさいというのです。

世間の例をみた場合には、音楽の勉強をしようと志したときには、音楽の師匠につくべきであります。法律の先生についてもなにもなりません。

成仏する道も同じです。末法の御本仏である日蓮大聖人を師匠にしないで、邪宗教の僧を師匠にしたりしていくことはまちがいであると、こういう意味なのです。

末世の僧等は仏法の道理をば・しらずして我慢に著し師をいやしみ檀那をへつらふなり、但正直にして少欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ

末法の日蓮正宗以外の僧は、仏法の道理を知らないというのです。折伏してみておどろくように、いまの邪宗教の僧に、仏法の道理がわかるはずがないのです。日蓮大聖人は、他宗の僧たちを、仏法

の道理を知らないにもかかわらず増上慢であると、七百年前に断言していらっしゃいます。

「我慢に著して師をいやしみ」――そうした僧たちは、我をたのみ、おごるあまり、師を軽んじているのです。したがって、釈尊のいうことをきかない、また天台大師のいうことも、伝教大師のいうこともきかない、さらに末法の御本仏である日蓮大聖人のいうことをもきかないのです。

それであって、「檀那をへつらふ」、信徒のきげんをとるのです。

「但正直にして少欲知足」――これが真実の僧である。日蓮正宗の御僧侶方であります。日蓮正宗の御僧侶だけは、仏法の道理を知っていらっしゃるのです。日蓮正宗の御僧侶は少欲知足であります。

そしてまた、日蓮大聖人のおおせのとおりの真実の僧になるのです。

文句の一に云く「既に未だ真を発さざれば第一義天に慙じ諸の聖人に愧ず即是れ有羞の僧なり」云云

観慧若し発するは即真実の僧なり」云云

文句にいわく「既に未だ真を発さざれば」――すでに真実の仏法を求めなければ、正しい仏法を求め、正しい信心をしなければ、「第一義天に慙じ」――ひとくちにいえば、成仏できないということです。「第一義天」というのは、仏菩薩の所持する中道の妙義をいうのです。

「諸の聖人に愧ず」――仏さまに愧ず、三世十方の仏にも笑われるというのです。

そのことを真実の仏法を求めるバネにしていくことができるものは、「有羞の僧」である。求めきらなければたいへんだという心がけがあるから、恥を知っている僧であるというのです。日蓮正宗を除いては、いまの宗教界は、恥を知らない僧ばかりです。感情、偏見、我執、名聞名利、打算の僧ばかりです。有羞の僧ではないのです。

日蓮大聖人の時代においては、他宗の僧でも、日蓮大聖人と佐渡の国で法論して、日蓮大聖人に負けると、その場で数珠を切って弟子になっています。そういうことは、多々あったわけです。

いま、いくら折伏をしようが、議論をしようが、道理正しい仏法に歯がたたなくなっても、それでも感情だけ、我執だけであって「自分がまちがっていた。これからは正しい仏法を求めよう」という、こういう僧は絶対におりません。また、そういう人々も少ないわけです。

「観慧若し発するは即真実の僧なり」――正しい仏法を求め、正しい仏法を信ずる人は、真実の僧である。「観慧」とは、正しい仏法を信心することをいいます。

涅槃経に云く「若し善比丘あって法を壊る者を見て置いて呵責し駈遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり、若し能く駈遣し呵責し挙処せんは是れ我が弟子真の声聞なり」云云、此の文の中に見壊法者の見と置不呵責の置とを能く能く心腑に染む可きなり

これは涅槃経の文です。釈尊もこのように戒めているわけです。また、日蓮大聖人も御遺命されています。折伏をする以外にない。折伏をせよ、というおおせなのです。これ以外に人々を幸せにする道もないし、宗教革命もないし、個人の成仏もありえないと、こういうのです。

「呵責し駈遣し挙処せずんば」

「呵責」とは相手の非を呵り責めること、「駈遣」とは対治すること、「挙処」とは罪をあげて糾明し、処断することで、ぜんぶ折伏になります。

正法誹謗の者をみていながら折伏しなければ、その人は「仏法の中の怨なり」と。

あまり折伏などしないほうが人にはきらわれないし、人格者みたいに思われてかっこうがつくようだけれども、その人は仏法のなかの怨である、と厳しく断言されています。そういう人は成仏できるわけがありません。

その反対に「若し能く駈遣し呵責し挙処」する者は「是れ我が弟子真の声聞なり」――と。

涅槃経等においては声聞が対告衆でありましたから、真の弟子です。ぜんぶ等しく、日蓮大聖人のおおせどおりに、成仏できないわけは絶対にない、と私は確信します。

私どもは日夜、折伏行に励んでいるのですから、真の弟子です。ぜんぶ等しく、日蓮大聖人のおおせどおりに、成仏できないわけは絶対にない、と私は確信します。

「見壊法者の見」――法をやぶる者を見ての、この「見」、それから「置不呵責」――置いて呵責せずの「置」、この字をばよくよく心腑にそめなさい。絶対に謗法をみたならば、そのままおいておかないという、その自覚をもって信心修行をしなさい、とこうおおせなのです。

> 法華経の敵を見ながら置いてせめずんば師檀ともに無間地獄は疑いなかるべし、南岳大師の云く「諸の悪人と倶に地獄に堕ちん」云云

大御本尊を誹謗し、日蓮大聖人の仏法を批判する者をみて、そのまま放置しておくならば、師も檀那もともに地獄に堕ちるというのです。

天台大師の師匠である南岳大師も「諸の悪人と倶に地獄に堕ちん」と述べています。

私たちはただ、日蓮大聖人にほめていただければいいのだし、また、多くの同志がみんな知ってくれは、三世十方の仏菩薩も賛嘆してくれることでもあるのだし、ているのですから、人々がすこしぐらい悪口をいおうとも、新聞などですこしぐらい批判されようとも、勇ましく、忍耐強く、しかも楽しく、日本国中の人々を、ひとりもれなく折伏しきるとの決意をもって戦いましょう。日本が終わったら、それでいいというわけではありません。全世界もあるのです。

御本尊は宇宙大です。地球の一つぐらいはちっぽけなものです。地球をのんでいくような大きい境涯をもってがんばってまいりましょう。

誹法を責めずして成仏を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるが如くなるべしはかなし・はかなし、何に法華経を信じ給うとも誹法あらば必ず地獄にをつべし、うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如し、毒気深入・失本心故は是なり

「誹法を責めずして」云云。

折伏をしないで仏になるということは、これは火のなかに水を求めるようなものである。折伏しなければ、絶対に成仏できないというのです。

創価学会は折伏の団体です。創価学会から「折伏」の二字をとったならば、もうなにもないのです。世間では折伏が強すぎるとか、こわいとか、なにやかやいいますけれども、釈尊も折伏せよ、日蓮大聖人も折伏をせよ、とおおせなのです。折伏すれば絶対に成仏できるのです。

「何に法華経を信じ給うとも誹法あらば必ず地獄にをつべし」

御本尊を持って、強盛に信じているようであっても、誹法がわずかでもあるならば、地獄に堕ちるという御文です。

たとえば、大量のうるしがあって、そのなかに蟹の足をわずかでも入れてしまうと、うるしの効力がなくなってしまう。それと同じ道理だというのです。また、うるしにかぶれた場合には、蟹をつけるとかぶれがなおるといわれております。

「毒気深入・失本心故は是なり」――これは寿量品の御文です。「毒気深く入って、本心を失えるが故に」と読みます。誹法の害毒が体内に深く入って本心を失ってしまうために、正法（御本尊）を信じようとしないことをさします。

ここで大事なことは「十四誹法」という誹法があるということです。その十四の誹法のなかでも、御本尊を持って、まじめに信心していくならば、初めから十の誹法はまぬかれます。不信誹法とか、不解の誹法とか、それは皆さん方もごぞんじであろうと思います。

しかし、最後の四つの誹法には、とくに気をつけなければなりません。この誹法があるかないかで、功徳がでるか、また罰を受けるか、生活がうまくいかないとかが決まってしまうのです。

この四つの誹法は、まず「軽善誹法」――御本尊を持っている人を憎むということです。御本尊を持っている人をバカにすることです。それから「憎善誹法」――御本尊を持っている人を憎みながら題目をあげてごらんなさい、絶対に罰を受けます。

それから「嫉善誹法」――怨嫉です。御本尊を持っている人をもうだめです、地獄です。

それから「恨善誹法」――恨むことです。これはもうだめです、地獄です。

以上、四誹法は、いちばんこわいことですから、この四つだけはおこさないようにしましょう。

誹法をおかしている人は、なんとなく生命力がない。なんとなくいやな顔をしています。なんとなくさえない。それから、なんとなく生活も暗いのです。これが事実の姿です。

そういうような気持ちになりかかったならば、それを乗り越えて題目をあげるのです。これを乗り

越えて折伏をし、それを乗り越えて御書を読み、それを乗り越えて先輩に指導を求めていくことが大切なのです。どんどん消していけるのです。

ですから、強い強い信心にたてば、そういうことは、しぜんに消えているのです。

経に云く「在在諸の仏土に常に師と倶に生ぜん」又云く「若し法師に親近せば速かに菩薩の道を得ん是の師に随順して学せば恒沙の仏を見たてまつることを得ん」

法華経化城喩品にいわく「在在諸の仏土に常に師と倶に生ぜん」――と。

師とは、御本尊です。永遠に大御本尊とともに生きていくことができる。大御本尊のおわしますところに、生ずることができるとのおおせであります。

「又云く」――これは法師品です。

「若し法師に親近せば」とは日蓮大聖人のことです。日蓮大聖人即御本尊ですから、御本尊に題目を唱えていくならば「菩薩の道を得ん」、正しい菩薩の修行をすることができるというのです。

「是の師」とは御本尊です。日蓮大聖人です。御本尊に随順して信・行・学に励むならば、「恒沙の仏を見たてまつる」ということは、成仏のことです。成仏することができるというのです。

釈に云く「本此の仏に従って初めて道心を発し亦此の仏に従って不退地に住す」又云く「初め此の仏菩薩に従って結縁し還此の仏菩薩に於て成就す」云云、返す返すも本従たがへずして成仏せしめ給うべし

「本此の仏に従って初めて道心を発し亦此の仏に従って不退地に住す」

この釈は、天台大師の法華玄義の文です。「此の仏に従って」――仏とは日蓮大聖人です。また御本尊です。御本尊によって「初めて道心を発し」、また、御本尊によって「不退地に住す」――すなわち成仏する。絶対の幸福をえられるということです。

御本尊を離れて、途中どんなところへ行っても、幸福にはなれない。もっといい方法はないものかといって退転した人が、さんざん苦労したあげくに、やっぱり信心するしかないと、また御本尊にもどってくる姿があるでしょう。そのことをいうのです。ですから、初めから終わりまで御本尊を受持しきっていくならば、かならず成仏の境界をうることができるのです。

又云く「初め此の仏菩薩に従って結縁し還此の仏菩薩に於て成就す」――と。

これは、天台大師の法華文句の文です。ぜんぶ大事な信心のあり方をいっているのです。釈尊も天台も、このように示されているではないか、幸せになる道は、道理はこうなのだよ、と繰り返しくりかえし、おおせになっていらっしゃるのです。

釈尊の仏法の場合には、釈尊に結縁して、釈尊によって仏になるのです。また天台大師の場合には、天台大師によって仏になるのです。途中どこへいっても仏になりようはないのです。ほかをいくら探しても、それはまちがいなのです。いまの日本の国は、宗教界が闇のようなものですから、実際問題、一般の人々は、どこへどう求めていっていいのかわからないのです。

ゆえに「返す返すも本従たがへずして成仏せしめ給うべし」と念をおしていらっしゃるのです。成仏のカギは「本従」をたがえないこと、つまり末法の一切衆生の成仏のための「本従の師」こそ、大聖人であると知った私どもが、どうしても日蓮大聖人のことを、御本尊のことを教える以外に道がないのです。私たちの使命は大きいのです。その如来の使いをしているのですから、三世十方の仏菩薩、諸天善神が守らないわけはありません。

> 釈尊は一切衆生の本従の師にて而も主親の徳を備へ給う

この「釈尊」は、一往は、ここではインド応誕の釈尊のことをさしますけれども、釈尊といっても六種類あるのです。蔵教の釈尊、通教の釈尊、別教の釈尊、法華経迹門の釈尊、本門文上の釈尊、本門文底の釈尊です。末法今時においては、再往は「文底の釈尊」すなわち日蓮大聖人と拝すべきです。

この文底の釈尊は、私たち一切衆生の「本従の師」であり、「主親の徳」をそなえた御本仏である、

こうおおせです。主、師、親の三徳を明かしていらっしゃるわけです。

日蓮大聖人が、私どもの師匠です。永遠についていってまちがいのない師匠です。この三世にわたる根本の師匠にお会いできたゆえに、私どもはいちばん幸せなのです。

末法の衆生は、貪、瞋、癡、慢、疑という煩悩におおわれている。貪欲で、そしてすぐにおこり、おろかである。そのうえ慢心が強い。それであって疑い深いのです。

そうした人々を、そして社会を救済できるのは、絶対に日蓮大聖人の仏法しかないのです。

此法門を日蓮申す故に忠言耳に逆う道理なるが故に流罪せられ命にも及びしなり、然どもいまだこりず候法華経は種の如く仏はうへての如く衆生は田の如くなり、若し此等の義をたがへさせ給はば日蓮も後生は助け申すまじく候、恐恐謹言。

建治二年丙子八月三日

日蓮花押

曾谷殿

「此法門を……及びしなり」、これはこのままでいいでしょう。

「然どもいまだこりず候」――日蓮大聖人は小難数を知らず、大難四度であっても「こりず候」とおおせです。これは建治二年のお手紙でありますから、佐渡の国から身延へおはいりになっていらっし

るのです。でも「こりず候」です。

日蓮正宗創価学会も草創期より迫害の歴史でありました。皆さん方も批判をされきってきた闘争の歴史であると思います。だが、個人個人にしても、学会としても、どこまでもこの御文を拝して「いまだこりず候」と、この精神でいきましょう。

わずかこの一文でありますけれども、日蓮大聖人が「こりず候」とおおせになった御金言のとおり、生涯、弟子である私どもも、どんなつらいことがあっても、強い団結をして、それでにっこり笑って、「いまだこりず候」と、信心第一でまっすぐに進んでいきたいものです。

きょうはこれだけ覚えればいいのです。これが「成仏用心抄」の要です。

「法華経は種の如く」――妙法蓮華経は、成仏の種です。絶対に幸福になれる種です。「仏はうえての如く」、もったいない話ですね。「衆生は田の如くなり」――衆生は田です。

すなわち、末法の御本仏日蓮大聖人は、妙法の種をうえられます。この種を芽生えさせ、育て、実らせていくのは衆生です。せっかく正しい種をうえてもらいながら、育てる方法をまちがえたり、育てる努力を怠ったりして、腐らせてしまったならば実りません。成仏はできないということです。

今、私どもが如来の使いとして、一生懸命、この一切衆生に教えて、うえているわけです。これは折伏です。

成仏ができる原理は、謗法を責めること、折伏です。そして、謗法、十四謗法のうち、とくに最後

の四つの誘法に気をつけなさい。さきほど申し上げましたとおりです。

「若し此等の義をたがへさせ給はば日蓮も後生は助けまじく候」

この日蓮大聖人おおせの義に従順しなければ、違えるならば、あとは日蓮は助けてあげないよ、そのとき後悔しても知りませんよ、とのおおせであります。

私どもは、日蓮大聖人のおおせどおりのことを実践し、指導しているのでありますから、かならず成仏し、幸福になることは、これはまちがいないのです。

どうか、強い信心の人もいるでしょうし、また後輩のなかには、弱い信心の人もいるかもしれませんけれども、この日蓮大聖人のお教えを根本として、全世界に向かって「私ほどの幸福者はいない」といいきれる一人ひとりになっていただきたいことを切願するしだいであります。

（昭和三十七年八月九日）

日々の教学

（ここに掲げる講義は、昭和五十二年七月から十月にかけて「聖教新聞」に掲載されたものです）

「報恩抄」

仏法の要諦は〝一人立つ〟精神

（御書全集三二八㌻十七行目～三二九㌻六行目
編年体御書　九二六㌻七行目～同㌻十四行目）

此の事いまだ・ひろまらず一閻浮提の内に仏滅後・二千二百二十五年が間一人も唱えず日蓮一人・南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経等と声もをしまず唱うるなり

われわれの三世にわたる根本の師匠は、日蓮大聖人であります。釈尊滅後二千余年のあいだ、どんなに唱えたくとも、だれ一人、口にすることのできなかった南無妙法蓮華経の題目を、日蓮大聖人は、押し寄せるであろう迫害、中傷の嵐を覚悟のうえで、命を賭して説いてくださった。われわれは、この深恩を夢にも忘れることがあってはならないと思うのであります。

朝晩の勤行唱題は、われわれにとってごく普通のことのように生活のリズムとなっておりますが、

じつはこのことが、どれほど甚深の意義を秘めていることか――。二千年余の長きにわたって、人々が知ると知らざるとにかかわらず、生命の奥底で求めに求めてきた十点こそ、南無妙法蓮華経だったのであります。

生死の問題のように人間の幸、不幸を決める決定的な分岐点に立ったとき、この世の地位、財産、名誉等は、なんら役に立ちません。御書に「今日本国の高僧等も南無日蓮聖人ととなえんとすとも南無計りにてやあらんずらんふびんふびん」(御書全集二八七㌻)といわれているように、業苦の淵を垣間みた生命は、ひたすら南無妙法蓮華経を求めぬくのであります。

しかも御本尊に縁することのなかった生命は、求めて得られず、なにに「南無」してよいのか、すなわち、なにをよりどころにしてよいのかわからず、苦悩の海で、あてどのない航海を続けていかざるをえません。

ゆえに、大聖人は「彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華経と唱うる癩人とはなるべし」(御書全集二六〇㌻)とおおせなのであります。「癩人」とは、この世の不幸の象徴でありましょう。「天台の座主」つまり世の中でいかに位人臣を極めようとも、南無妙法蓮華経と唱えることのできる大福運に比べればいかほどのこともない。したがって自分が、どんな恵まれない境涯にあろうとも、今、現実に題目を唱えることができるということは、確たる仏法の正道なのであります。

その現在の一瞬に、苦楽一如、善悪一如の大生命力を湧現させるためにこそ、大聖人は御本尊をしたためられたのであります。報恩感謝、これにすぎるものはありません。このことを、朝晩の唱題の

さい、深くかみしめることのできる日々でありたい。

つぎに「日蓮一人」ということについてふれておきたい。

これは「諸法実相抄」に「日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが」うんぬんとあるのと同様、本宗、学会永遠の指針である〝一人立つ精神〟〝一人が原点〟に通ずると拝せましょう。

尽未来際をうるおす清流が、大聖人御一人に源を発するように、いまや大河のごとく水かさを増しつつある私たちの運動も、もとはといえば、老齢の身を極寒の獄中に殉ぜられた初代会長牧口常三郎先生、その遺志を継いで国破れた山河に一人立たれた二代会長戸田城聖先生の戦いに発しているのであります。

広くこれを論ずれば、戦野がいかに多角化、重層化しようとも、その運動がどれだけ進展し価値を生んだかをはかる尺度は、それをとおして皆さん一人ひとりがどれだけ境涯を開き、人間革命の実証を示すことができたかにつきるのであります。その一点をぬきにした運動というものは、どんなにはなばなしかろうと、広宣流布の名に値しない空転であるといっても過言ではない。

「声」とは生命感応の響き

さらに重要なことは「声もをしまず唱うるなり」との個所であります。「声仏事を為す」とおおせられているように、声というものはまことに不思議な力をもっている。

あの人の声を聞くとほんとうに気持ちがいい、さわやかだという人もあれば、声を聞いただけで、うんざりするような気分にさせられる場合もある。目は心の窓であるように、声こそわが生命の明暗をあやまたずに映しだすスクリーンであります。

ともかく、声には宮殿堂の奥深くより発する、力強い響きがなくてはならない。能破、擬破という言葉がありますが、たとえば友の誤りを、ときに厳しく指摘してあげなければならない場合もある。そのさい、自分の生命に友を思う一念が脈打っていれば、指導は梵音声にも似た力強い慈愛の響きとなって、友の生命に巣くう障魔を打ち破っていくにちがいない。これ能破であります。逆に、いらいらしたり、感情に走ったりした生命状態であれば、同じ言葉を発したとしても、相手の心に入るものではありません。擬破であり、残るものは感情的な対立やしこりだけであります。

竜口の法難のさいの大聖人のお振る舞いは、声の力用をあますところなく示したものと拝せます。権勢におごる平左衛門尉は、郎党数百人をひきつれて、松葉ケ谷の草庵へ大聖人を捕捉にやってくるのですが、これに対し大聖人は一歩も退くことなく、彼らを大音声で叱咤される。

――「日蓮・大高声を放ちて申すあらをもしろや平左衛門尉が・ものにくるうを見よ、とのばら但今日本国の柱をたをすと・よばはりしかば……」（御書全集九一二㌻）と。

おびただしい刀や弓をまえにして大聖人が臆するとは思いのほか、このようなすさまじい気迫にふれ、郎党どもの周章狼狽したようすが「種種御振舞御書」には、手にとるように描かれています。

もとより「大音声」「大高声」といっても、たんに声が大きいということだけではない。その人の

内なる生命の明暗が、外なる言語音声、挙措動作となって発現してくるさいの〝感応の響き〟が「大音声」「大高声」であるといってよい。極端にいえば、そこに生命の〝感応の響き〟さえあれば「大をとおして、同じ効果を発揮する場合さえあるかもしれない。要はどれだけ〝一人〟の生命の宝塔を開き、仏事を成就していけるかであります。

したがって、ごく小人数の親しい語らいであっても、たとえ声なき言葉であっても、その振る舞いだからこそわれわれは、声を惜しんではならないのであります。限られた生涯を、尊い使命に生きるならば、この偉大な仏法を力のかぎり語り継いでいくことこそ、われらの本懐であります。

二十一世紀へ妙法の根を深く広く

例せば風に随って波の大小あり薪によって火の高下あり池に随って蓮の大小あり雨の大小は竜による根ふかければ枝しげし源遠ければ流ながしと・いうこれなり

日蓮大聖人が一人立って妙法を唱えられたことが、いっさいの根源力となって、広宣流布をしていく原理を具体的な例をあげて、説いてくださっているわけであります。すなわち、風と波、薪と火、

池と蓮、竜と雨、根と枝、源と流れといった関係のうえから、わかりやすく教えておられます。

「根ふかければ枝しげし源遠ければ流ながし」

なにごとも「根源」さえ磐石（ばんじゃく）でありさえすれば、いっさいは栄えていくということであります。

「根源」という言葉を分解すれば「根」と「源」になります。万事に根さえしっかりと地中の奥深く張っていれば、大樹に育っていくということであります。空をおおうような大木には、それ相応の根の張り方があります。

川の流れについても、その水源がどこに位置するかで、大河になるか小川に終わるかが決まってしまうのは当然です。たとえばナイル川ですが、その地中海にそそぐ河口から、はるか六千六百キロもさかのぼったルワンダに水源を見いだすことができます。

さらに「根ふかければ枝しげし」「源遠ければ流ながし」の両御文を、大聖人は同じ意味で使っておられますが、そこには若干のニュアンスの相違があるようです。「根ふかければ……」がヨコへの広がりを方向性としているのに対し、「源遠ければ……」はタテの流れの永遠性を意味しているといってよい。

この二つの原理は、現代のわれわれにとっても、じつに重要な機軸（きじく）を示されていると拝せます。

第一に、あらゆる分野、あらゆる次元にわたって、地中深くそして広く、妙法の根を張っていかなければならないということであります。これなくして、大聖人の仏法を、人類の共有財産にしていくことはできない。皆さんはどうか、そのための根っこになっていただきたい。

第二に、妙法の流れを永遠たらしむるためには、崇高なる伝統と、そこにたたえられた満々たる草創の息吹を、つねに胸中に通わせていかなくてはならない。組織であれ、国であれ、伝統のないところほどもろいものはありません。時の流れのままにいつしか生命力を枯渇させ、老残の姿をさらしだしてしまうものであります。われわれは、史上数多くみられるそのような事例の轍を踏むようなことがあってはならない。それには、信・行・学の根本軌道を、厳しく継承していくことを第一義とすべきであります。

千里の道も一歩より始まる

周の代の七百年は文王の礼孝による秦の世ほどもなし始皇の左道によるなり

中国の古代国家・周の世が七百年も続き、秦の時代が、始祖の没後ほどなく滅亡の運命をたどったのはなぜか。それは周の文王、秦の始皇帝という、それぞれの建国の祖の振る舞いによることが明らかであるとおおせなのであります。

「十八史略」によれば、秦の始皇帝は、文化を破壊した専制暴君の典型であった。戦国時代、強大な軍事力をもち「虎狼の国」として恐れられていた秦は、他の六か国を占領し、天下統一を成し遂げ

る。秦王は、覇者にふさわしい名称を欲し、中国太古の名君といわれた三皇五帝を超えるものとして、三皇の「皇」と五帝の「帝」を合わせて「皇帝」と称した。しかもそれだけでは足りず、その上に「始」をつけ「始皇帝」とし、天下、人臣の始祖たることを僭称したというのであります。新秩序に従おうとしなかった多くの学者を弾圧し、その著書を焼いた〝焚書坑儒〟事件などは、よく知られております。

これに対し周の時代が長く続いたのは、創業の文王の業績によるところが多いといわれております。文王については、名参謀・太公望との〝釣り〟にまつわる逸話などで有名ですが、その治世の実をたたえる話として、つぎのようなエピソードが伝えられている。――周の国に近い二つの国で、あるとき、土地争いが起こった。なかなか決着がつかず、周へ行って裁定を仰ごうとした。ところが一歩、周の領内に入ると農民があぜを譲りあい、年長者を大切にしているのに接し、二人はすっかり恥ずかしくなり、労せずして和解が成りたったというのであります。

もとより「十八史略」は、一つの史観にのっとって書かれたものであり、今日の目から見れば多くの異論もあるはずであります。その問題はさておき、大聖人は当時流布していた故事を例にとり、草創期の伝統というものが、いかに大きな力を発揮するかを述べられているのであります。

ともあれ、昔も今も、またわが国においても、他国においても、さらに大小を問わず、いかなる団体においても「源遠」をいかにして「長流」にしていくかが、最大の課題であることはまちがいな

この一点において失敗するならば、いかに一時的に華やかであっても、それは一炊の夢のごとく、はたまた、うたかたのごとく儚いものとなってしまうものであります。

仏法の歴史においても、釈尊は十大弟子をつくって法を久住せしめようとした。また、付法蔵二十四人の人々が、つぎつぎと仏法の松明を伝持しながら、時代の昂然たる灯としてきたのであります。さらに、天台大師もまた、その仏法を、なんとか後世へ伝えていくことを念願し、章安、妙楽、そして日本の伝教等は、その精神の後継の人でありました。

日蓮大聖人もまた、末法万年尽未来際にまで流布すべき大法として、大御本尊を建立されたのであります。弟子たちに与えられた数多くのお手紙の行間からは、その未来久住、民衆救済の熱誠があふれでております。かならずやその文字が、後世の人々を触発し、人間仏法の規範、鏡となっていくであろうとの大確信の心情が、心に食い入ってくるのであります。

万代にわたる御本仏の慈悲

日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし、日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり、無間地獄の道をふさぎぬ

有名な御文です。私はこの文に接するたびに、日蓮大聖人の民衆にそそがれる大慈大悲を感じ、胸が熱くなってくる。この崇高な叫びを、世の指導者はなんと聞くか、と叫ばずにはおられません。

まず、この御文は、主師親の三徳をあらわされた文であります。「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」とは親の徳、「日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり」とは師の徳、「無間地獄の道をふさぎぬ」とは主の徳、と拝される。すなわち、日蓮大聖人が主・師・親の三徳具備の仏であると宣言された御文であります。

第一に、日蓮大聖人は「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」と述べられている。「日蓮が慈悲曠大ならば」が人、「南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」が法をあらわすことはいうまでもありません。

日蓮大聖人は、学問や観念で人々を救われたのではない。慈悲という本源的な生命のうえから発する力をもって、人々の救済に向かわれたのであります。

されば「開目抄」には「日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は・をそれをも・いだきぬべし」（御書全集二〇二㌻）と説かれたのであります。

慈悲なきところに難はない。民衆を本源より救いきろうとする慈悲の力のまえには、これを妨げる三障四魔が紛然として競い起こるのが、仏法の原理であります。日蓮大聖人は「仏法は勝負なり」の道理によって、たびかさなる難を忍ばれ、大慈悲のやむにやまれぬ発露のままに、実践行に挺身され

たのであります。

「南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」と、南無妙法蓮華経の法力が、慈悲という大聖人の人格に発する力によって尽未来際にまで流れ通うということであります。しょせん、この文は広宣流布の淵源が、日蓮大聖人の慈悲の振る舞いから始まったことを意味しているといってよい。

慈悲とは、仏法を根本にした崇高な人間の営為のなかに、にじみでてくる人間の光なのであります。法、法といっても、しょせんは、仏法を信ずる人間の営みのなかに流れていくことはまちがいない。

第二に「日本国の一切衆生の盲目」の「盲目」とは、これは肉眼をいうのではない。どんなによい肉眼をもっていても、生命の本源に暗く、人生に暗く、未来の光を感じない人はここでいう盲目なのであります。

日蓮大聖人の仏法は、たとえていえば暗闇をさまよう船を導く灯台であります。また、荒海を航行する船の羅針盤であります。方向性を失った生活、人を切り開く叡智の光の光源こそ、南無妙法蓮華経であることを、強く訴えておきたい。

また、ここには師弟の問題が論じられている。師弟こそ人間の生き方の究極であり、生命の盲目を開く師なき人は、人間として向上を失っていくのであります。

第三に「無間地獄の道をふさぎぬ」の「無間地獄」とは、人間の苦悩の極限をさすのであり、人間が人間らしさを失い、品位も尊厳も、芥のごとく踏みにじられていく塗炭の苦しみをいうのでありま

す。その最たるものは戦争でありましょう。

ゆえに、無間地獄の道をふさぐということは、あらゆる苦悩の根源である、生命奥底の魔性を冥伏させることによって、三毒熾盛の根を断つことを意味している。そこに、人間がもっとも人間らしく生きることのできる平和、文化建設の方途が示されることは必然であります。

天台、伝教に超える功徳

「此の功徳は伝教・天台にも超へ竜樹・迦葉にもすぐれたり、極楽百年の修行は穢土の一日の功徳に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか

「此の功徳は伝教・天台にも超へ竜樹・迦葉にもすぐれたり」

日蓮大聖人の、主・師・親の三徳を具備なされた三大秘法の仏法を流布しゆく功徳は、伝教、天台にも超過し、竜樹、迦葉にも勝れているとおおせであります。

迦葉、竜樹、天台、伝教がいまだ弘めなかった「大法」を弘通する者は、これらの人々の受けなかった「大功徳」を受けられるとおおせなのであります。まさに「法妙なるが故に人貴し」の原理であります。それは「人貴きが故に所尊し」となっていくことも必然である。

ここは、あくまでも日蓮大聖人の仏法、および御自身の功徳について述べられた御文です。そのことを前提としたうえで、私たち信徒の立場に約して拝するならば、われわれにとってまことにありがたいおおせであります。あの釈尊十大弟子の筆頭たる摩訶迦葉、かの〝大乗八宗の祖〟とされる竜樹を凌駕し、中国において小釈迦といわれた大聖哲・天台大師を超え、かつまた、日本の平安期の精神文化の基礎を築いた伝教大師に勝る、とのおおせであります。

ここに、迦葉、竜樹を代表としてインドの先哲、天台大師を代表として日本の大宗教家をあげておられる。三国を網羅しているということは、当時の世界観に照らして全世界に通ずる意味をもっているのであります。すなわち、大御本尊を受持し、日蓮大聖人の仏法を信ずる人は、全世界の先哲や碩学よりもなお尊貴であることを訴えておられるのであります。

末法の大法・南無妙法蓮華経こそ宇宙本源のリズムの根源力であり、この妙法を唱えられる福運を、われわれは改めて肝に銘ずべきでありましょう。

またこれこそ、日蓮大聖人の仏法の骨髄の御教示であると拝することができる。なぜなら、天台、伝教等々これらの先哲は、かつて人々の崇拝の的であり、雲閣月卿をみるがごとき高貴な存在であった。それに対し、われらは無名の庶民である。しかし、それらの人々よりも、なお偉大な人間としての実践行動ができることを示されているからであります。

「極楽百年の修行は穢土の一日の功徳に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか」――と。「極楽百年の修行」とは、苦難のない、恵まれた環境での修行であるともいえる。これに対し「穢土」

とは、苦難重畳のなかでの人間革命の日々であります。安楽イスのなかにあるような生き方に、どうしてわが生命の電撃的な変革が可能となるでありましょうか。

汗と労苦のなかにのみ、人間の真実の価値は生ずるのであり、日蓮大聖人の仏法は、この現実との鋭い対決のなかに、その偉大なる昇華があることを説き示されたのであります。

「正像二千年の弘通……」について、これはまず第一に、日蓮大聖人の仏法が、釈尊の仏法よりいかに偉大であるかを、時に約して説法されたものであります。

時にかなった実践行動を

是れひとへに日蓮が智のかしこきには・あらず時のしからしむる耳

仏法流布における「時」の重要性を、鋭く明言された一節です。

当時、末法といえば、正像二千年が終わり、その延長として、暗いイメージをともなっていました。それに対し、日蓮大聖人は、末法という時代が、いかに光輝につつまれた時であるかを確信せられています。

さらに私は、この一句に万感を込めて、広宣流布の時を感ぜられている大聖人の御心境が胸に迫っ

てくるのであります。夕日のごとく地に落ちていく既成の釈尊の仏法――それに対し、旭日のごとく昇りゆく胸中の灼熱のエネルギーをもった大仏法、その対照はあまりにも鮮やかであったにちがいありません。

この一節から、大聖人は、一人の人間の偉大な智力よりも、時にかなった実践行動を展開する有智の民衆の力こそが偉大であることを教えられていると、私は拝するのであります。

つぎの文に「春は花さき秋は菓なる夏は・あたたかに冬は・つめたし時のしからしむるに有らずや」とお述べのように、仏法三千年の弘通を貫く主軸は「時」であったことを、天地自然の道理をあげて説かれています。

「撰時抄」の冒頭の有名な一句は「夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし」（御書全集二五六ページ）との御文であります。

「必ず先づ」とある。〝教、機、時、国、教法流布の先後〟という〝宗教の五綱〟の中核をなすものは「時」であり、ここにすべてが包摂されるといってよい。たとえば、機といっても民衆の鼓動はたえず時代精神を反映したものであり、時のなかにすべて含まれるのです。

だが「時のしからしむる耳」とのおおせを、ただ漫然と時を過ごしていれば、いつかは自然と広布の時がくるというように、受動的に固着化してとらえるのは、明らかに誤りであります。それは、身近な例でいえば、電気ガマのスイッチも入れず、時がくればご飯が炊けるであろうと、はかなく夢想しているようなものと変わりはない。ゆえにこの御文は、御本仏日蓮大聖人につらなり、地涌の門下

としての能動の誓いを込めて受け取らなければならない御金言と受けとめたいのであります。

時代を動かすものは、主義にあらず人間である――といった先人がいます。われわれもまた、一人の人間革命が日本の運命、世の宿命をも変えていくことを確信している。

日寛上人の撰時抄文段には「時を知るを以ての故に大法師と名づくと云云。文意に云く、時尅相応の道を知るを以ての故に大法師と名づくと云云。大法師とは能く法を説いて衆生を利する故なり」とあります。

時を知り、時尅相応の道を選びつつ、衆生を利する大法師の出現があって、初めて広宣流布への確実な歩みが開始されることを忘れてはならない。末法の初め、時代と民衆が無明の深き眠りについていたころ、御本仏日蓮大聖人は末法弘通の大法を建立された。その法性の慧火は七百年余の歳月を経て、いま仏法の旭日となり、地平を昇りはじめています。

総じて、時を知る――とは、人々が何を欲しているか、人情の機微を知ることも、人心の帰趨を知ることも含まれる。いかなる激浪をも乗り越え、機雷を回避しつつ、現実の舞台のなかでカジを取り、眼光鋭く本源を見ぬいて適切に処置をとる人でなければなりません。

ゆえにそれは、民衆救済という大責任に立ったときに、とりうる行動といえますし、そのときにこそ初めて、民衆の有智の団結の輪はつくられゆくのであります。

かつて、戸田先生は、広布を担いゆく丈夫に「いまはいかなる時かを凝視して」と呼びかけております。

いま皆さんの敢闘によって、学会は、いよいよ時を得て、民衆の文化と平和へ貢献しゆく道を、着実に歩んでおります。どうか今後とも、広宣流布のために、立派な指導者に育たれるようお願い申し上げます。

「法門申さるべき様の事」

脈打つ閻浮第一の大確信

（御書全集一二六八㌻三行目～同㌻十三行目）
（編年体御書三二九㌻三行目～同㌻十三行目）

この御書は、比叡遊学のため京都に上った三位房日行に与えられたとされるお手紙です。ある公家の持仏堂において説法したことが、〝面目〟をほどこしたと日蓮大聖人に報告したことに対し、厳しく叱責されたところです。

もとより僧の身である三位房に対する日蓮大聖人の御指南は広く僧俗一般に通ずる重要なものであると拝しますので、あえて感ずるままを述べさせていただきます。

この御文を拝して、日蓮大聖人の、仏法に対する御確信、また大仏法を奉ずる者の内証の深さ、高さ、かつまた大聖人の仏法がいかに気宇壮大な哲理であるかを、改めて痛感するのであります。

又御持仏堂にて法門申したりしが面目なんどかかれて候事・かへすがへす不思議にをぼへ候、
そのゆへは僧となりぬ其の上一閻浮提にありがたき法門なるべし

公家に召されて仏法を講じたのがたいへんな名誉であるとの三位房の文面に接して、大聖人はひじょうに残念がっていらっしゃいます。

三位房については、資料もほとんど残っていないため、不明な点が多く、この御抄の対告衆と「聖人御難事」等にでてくる人物とが同一人物かどうかについても異説がありますが、いちおう、ここでは同一人物として話をすすめます。

彼は京都遊学を許され、また桑ケ谷問答に活躍するなど学才に秀で、問答に巧みな、それだけ実力もあり、門下で重きをなしていた人物であった。ところが、一面、名聞名利の心が強く、臆病で、求道心が弱く、虚栄の心に支配されやすい人間であった。

「聖人御難事」には「をくびゃう物をぼへず・よくふかく・うたがい多き者」（御書全集一一九一㌻）と、その根底を見ぬかれ、どんなに仏法を教えても「ぬれるうるしに水をかけそらをきりたるやうに候ぞ」（同㌻）とあります。

法門への理解がいかに深く弁舌さわやかであろうとも、名聞の念厚く臆病で慢心が強ければ、成仏の道をふみはずしてしまう。この重大な一点を、三位房の例は後世の私どもに教えています。

大聖人はさらに、あなたは僧となったうえ、一闡浮提でもっとも偉大な法門を受持している立場ではないか、と諭されている。

ここで注目すべきは「一闡浮提にありがたき法門」との御文です。大聖人の仏法は、全世界随一、偉大な哲理と実践の宗教であることの大確信が躍如としております。

三位房は、おそらく公家のまえで説法して称賛されたことを、大聖人に報告してほめてもらいたかったにちがいない。しかし、案に相違して、大聖人から厳しい叱責をうけたのであった。三位房のなかにある名聞の心を、大聖人は感じられていたと十分考えられます。

大聖人はいつも、あらゆる弟子の傾向性を知り、なんとかほんものの人物に仕上げたいという一念に徹せられていた。ゆえに、その三位房の一言を逃すことはしなかった。面目をほどこしたという一言のなかに、三位房の根底を、御本仏は見てとられたにちがいありません。大聖人は、具体的事実から三位房の全体に流れる根性を打ち破られようとなさったのでありましょう。

こうした大聖人のお振る舞いのなかに、事に即して仏法が、事の仏法であるといわれるゆえんを展開していく姿がうかがえるのであります。大聖人の仏法が、ここにある。身近な行動、生活、振る舞い……そこに人間を見、仏法を展開していく大聖人の正道の生き方を、われらはけっして見逃してはならないのであります。

なお僧とありますが、この御文の教示は、広く折伏弘教に励む仏法指導者を意味されていると拝すべきことは、御文の趣旨からいって当然であります。

大聖人の仏法は人類を救う永遠の宗教

> 設い等覚の菩薩なりとも・なにとかをもうべき、まして梵天・帝釈等は我等が親父・釈迦如来の御所領をあづかりて正法の僧をやしなうべき者につけられて候、毘沙門等は四天下の主此等が門まほり・又四州の王等は毘沙門天が所従なるべし、其の上日本秋津嶋は四州の輪王の所従にも及ばず・但嶋の長なるべし

この段は、日蓮大聖人の仏法が世界人類を救うべき、永遠の宗教であることを明かされたところであります。

すでに、私どもが拝する大御本尊を「一閻浮提総与の大御本尊」と申し上げるように、御本仏日蓮大聖人の大慈悲と南無妙法蓮華経の法力は、全世界の民を、未来永劫にわたってうるおしていくのであります。

たかだか、一国の民族を救済して事終わるような偏狭な仏法ではない。まして、一国の国教化を策して、権威や権力に安住するような宗教ではない。かつて、日蓮大聖人を国粋主義者に祭りあげたり、大聖人の仏法を鎮護国家の宗教ととらえようとする一部の人々があったが、それらの動きはむし

ろ、大聖人の仏法を狭く矮小化したものにすぎなかったのであります。

たとえば、日本に軍国主義が勃興しつつあったころ、ある他宗派からだした講義録では、この段の文中「但嶋の長なるべし、長なんどにつかへん者どもに」の部分と「上なんどかく上」の部分が抜けている。おそらく、当局から削除を要請されたのであろう。

削除された部分が、いかに当時の日本の国家主義的見地から、つごう悪い言葉であったかは明らかであります。この削除の事実自体、大聖人の仏法を狭く矮小化した好例であるとともに、逆に、大聖人の仏法の世界性を象徴しているといえるでありましょう。

それにつけても、鮮やかに思い出されるのは、初代会長牧口先生の激烈な戦いであります。牧口先生は軍国権力の狂乱の嵐のなかで、敢然と日蓮大聖人の仏法の正義を貫かれ、正義に殉じられたのであります。

この初代会長の壮烈無比な死身弘法の精神こそ、わが創価学会の永遠の魂であり、その精神を万代にまで継承していく責務が、私たちにはあるとつねづね思っております。

ましてや、いまだに国教化や国立戒壇などと唱える者もあるが、まさしくさきの大聖人仏法の矮小化の亜流にすぎないのであります。

この段の御文を率直に拝読したならば、日蓮大聖人の御境界の宇宙大の広さと崇高さに感嘆しない者がありましょうか。

京都の公家の持仏堂で説法したことを名誉にも誇りとも思っている三位房の偏狭さと、権威へのへ

つらいを、日蓮大聖人は、宇宙大のスケールから、じゅんじゅんとその非を説かれているのであります。

三位房がもった仏法は「一閻浮提にありがたき法門」である。すなわち全世界随一の仏法であると述べられ、この妙法をたもつ者の位がいかに尊貴であるかを教示されていくのであります。

「設い等覚の菩薩なりとも・なにとかをもうべき」――一閻浮提の仏法を受持した者は、仏の境界と等しき等覚の大菩薩といえども問題にならないほど高い位である、とのおおせであります。なぜなら、妙法は、三世十方の諸仏を成道させた根源の法だからであります。

つぎに「まして梵天・帝釈等は我等が親父・釈迦如来の御所領をあづかりて正法の僧をやしなうべき者につけられて候……毘沙門天が所従なるべし」とは、きわめて重要な意義をはらんだ御文であります。

まず「我等が親父・釈迦如来」とは、一往は、文上の釈尊でありますが、再往は、久遠元初の自受用報身如来をさすことはいうまでもありません。

一往の辺からいえば、梵天、帝釈や毘沙門等の四天王の諸天善神は、釈迦如来から、正法を弘める僧を供養するために、その所領を預かっているのだとおおせであります。ここに重大な意義がある。すなわち、妙法を受持し、弘通する人間を供養するためにこそ、梵天、帝釈、四天王の諸天が存在しているとのおおせであります。

そこには、人間を超越する神もなければ、人間から隔絶した絶対者もいない。まさに、人間仏法の

宣言と拝してよいでありましょう。一国の王、権力者、貴族などは、この梵天、帝釈の眷属の眷属の、そのまた眷属にすぎないということであります。

再往の辺でいえば、全世界、地球全体が、本来、妙法の脈打つ寂光土であり、久遠元初の仏の常住の浄土であるということです。

「仏界は是れ尊極の衆生なり」（三重秘伝抄）とあるように、衆生の生命に真実の尊き輝きを発揮すること自体が、即仏なのであります。したがって、仏の世界とは、現代的にいえば、生命を至上とする世界ということであります。

そこにおいて、梵天、帝釈、四天王等は、すべて宇宙、自然、社会の秩序を守る働きにほかならない。すなわち、これらの善神は、妙法の脈打つ常住の寂光土を守護する働きなのであります。

それゆえ、これら善神が「正法の僧をやしなう」とは、宇宙のさまざまな働きが、妙法を受持し弘通する人の生命を守るように働くということであります。

しかも、その働きを起こさせるのは、法をたもつ一人ひとりの生命力であります。ゆえに、どこまでも人間が主役であることはいうまでもない。

ここに、私は、日蓮大聖人の仏法において、真実の人間自立の哲理が説かれているのをみるのであります。

また「其の上日本秋津嶋は四州の輪王の所従にも及ばず・但嶋の長なるべし」とは、つねに一閻浮提、全世界の民衆救済という広大な立場にたたれた日蓮大聖人が、どのように日本国の権力者をみら

れていたかを明らかにされた御文です。なんと雄大な視点でしょうか。私どもは、この大聖人の御境界を寸時も忘れずに、いつも大きく、ダイナミックに朗らかに、人生を闊歩していきたいものであります。

真の面目は御本仏の称賛

> 長なんどにつかへん者どもに召されたり上なんどかく上・面目なんど申すは・旁せんずるところ日蓮をいやしみてかけるか

三位房が「上」に召されて「面目」をほどこしたと手紙に書いてきた。日蓮大聖人は、公家等の社会的身分をもった人間をありがたがり、そのまえで仏法を講ずることを名誉と思っている三位房の姿勢を、厳しく叱られているのであります。

それは、一言でいえば、仏法を根本とすることを忘れ、社会的栄誉を根本としてしまっているからであります。御本仏大聖人の弟子であり、妙法をたもっていることこそ、最高の栄誉であります。

「当体義抄」に「正・像二千年の国王・大臣よりも末法の非人は尊貴なり」（御書全集五一二㌻）とお示しのとおりであります。

その精神に立てば、法を説く相手の身分や地位などは問題ではない。一庶民に法を説くのも、高貴の人に法を説くのも、まったく同じであるというのが、日蓮大聖人の平等大慧の仏法であります。それを公家に説いたからといって「面目」をほどこしたと誇っているのは、まさに、日蓮大聖人の仏法の本意をゆがめるものであります。

いったい、われわれ仏法者にとって、真実の「面目」とはなにか――。私は、恩師の「青年訓」の末尾が思いだされてならない。「……愚人にほむらるるは、智者の恥辱なり。大聖にほむらるるは、一生の名誉なり。心して御本尊の馬前に、屍をさらさんことを」と。

表現は若干激しいですが、われらの生き方の「面目」を、ものの見事にいいきられている。まさに三位房は「愚人にほむらるる」をもって「面目」をほどこしたなどと取り違え、名聞名利の道に踏み込んでしまっているのであります。

日興上人が二十六箇条の「遺誡置文」に「学問未練にして名聞名利の大衆は予が末流に叶う可からざる事」としたためられているのも、こうした大聖人門下の違背の実例を目のあたりにされ、肺腑をえぐる思いで書かれたものでありましょう。

われら仏法者の「面目」とは「大聖にほむらるる」こと以外にありません。その意味でも、日蓮大聖人の門下であることをなによりの誇りとして、生涯を生ききっていただきたい。

思い起こされるのは、草創期の水滸会における恩師の指導であります。小説「人間革命」にも記しておいたことですが、一青年幹部の「故郷に錦を飾るとは」の質問に対して、恩師はつぎのように指

導された。「君たちは、社会的に成功し名士といわれるようになることが、錦を飾ることだと思ってはいないか。一流企業の社長になるとか、大学教授になるとか、大臣になるとか、一応は世間にとって錦かもしれない。しかし、そんな錦は、いつどうなるものかわからない」と――。そして学会の幹部となって、広宣流布に挺身していく姿こそ「最高にして永遠の錦」であることを、万感込めて訴えておられました。

なにも恩師は、世間の名声それ自体を悪いといっているのではない。社会の信用をかちえ、それが名声へとつながっていくことは、大切でさえあります。しかし、それが最高の目的であるとはき違えてしまうと、いつしか世間の風に侵され、名聞名利のとりことなって、ついに三位房の轍を踏む愚をおかしてしまうでありましょう。

御書にいわく「願くは『現世安穏・後生善処』の妙法を持つのみこそ只今生の名聞・後世の弄引なるべけれ」（御書全集四六七㌻）と。

すなわち、栄枯盛衰を常の法則とする人生において、生々世々にわが生命をかざり、福運の花を咲かせていくものは妙法以外にない、とのおおせなのであります。もし「名聞」というならば、この生命の勲章こそ、なにものをもってしても代えることのできない、真実の「名聞」なのであります。

またいわく「智者・学匠の身と為りても地獄に墜ちて何の詮か有るべき」（御書全集一三六七㌻）と。

いかに高き地位につき、名声をほしいままにしようと、生命自体が地獄の状態にあって、なんのための人生でありましょうか。どうか皆さん方は、一生において、なにが根本であり、なにが枝葉末節

の問題であるかを、鋭く見ぬいていっていただきたいのであります。

虚飾におぼれず、初心を忘るな

総じて日蓮が弟子は京にのぼりぬれば始はわすれぬやうにて後には天魔つきて物にくるうせう（狂）（少輔）
房がごとし、わ御房もそれていにくまれかほるな（其）（体）（蒙）

当時、京都と鎌倉は、西国と東国を代表する中心地で、政治的にはそれぞれ公武二大勢力の拠点であった。もっとも承久（じょうきゅう）の乱（承久三年＝一二二一年）以後は、武士が朝廷に代わって実質的な支配階級を形成しつつあり、時代の流れは鎌倉のほうにありました。ちなみに、日蓮大聖人の御聖誕はこの承久の乱の翌年です。

しかし、当時なお文化的には先進地域は西国であり、東国は後進の地域であった。朝廷の権威が失墜（しっつい）したとはいえ、西国には貴族社会を背景に伝統を誇る文化があり、武家たちが京都の貴族文化へいだくあこがれは、相当のものだったようです。それは京都への劣等感といってもよく、自分たちの生活をいやしみ、教養のなさを恥じ、ただひたすら憧憬（しょうけい）をもって京都をながめていたようです。

三位房の〝京へのぼる〟という行為には、こういう時代背景があったのです。当時の、今でいえば

インテリに属する知識階級の精神の屈折した傾向を、日蓮大聖人は厳しく見ぬき、指導されているのです。

ちなみに「関東御成敗式目」（貞永式目）は、武家社会の初の成文法として画期的な意義をもつものですが、その制定のとき、北条泰時が「式目」といっしょに京都に送った手紙に、興味深い一節があります。

「……京辺には定めて物も知らぬ夷どもの書集めたる文とて笑はるる方も候はんずらん、憚り覚え候へ共……」

これは、京都のあたりでは、（貞永式目が）なにも知らない教養のない東国人（東夷）どもが書き集めた文章であると笑う人々もおられるであろう、それで気恥ずかしさも感じるのですが、という意味であります。時の権力者・泰時でさえ、京風へのこのような一種の遠慮をいだいていたのですから、一般の人々の考え方も想像がつくというものです。

京都の宮廷生活を経験した女性の目には、百貨輻輳の商業、港湾都市にもなった政都鎌倉も「袋の中に物を入れたるやうに住ひたる、あな物侘し」と映ったようです。

このような雰囲気をもつ京都に行くと、ともすると、それだけでなにか、さも自分の教養が深まったかのような錯覚に陥りやすいことを、大聖人は指摘されているわけであります。なんとなく華やかな虚栄と虚飾の渦巻く王朝文化に、軽薄に酔いしれる人間の浅はかさを心配されているわけです。

その京風に流されてしまった典型として少輔房の例をあげておられる。少輔房については、どうい

う人物か不明の点も多いのですが、やはり三位房と同じく、大聖人門下で上京し、軟風におかされ、一説によれば、伊豆の法難のころから退転し、ついに仏法違背の徒となり、やがて横死（おうし）した人物のようです。

「天のにくまれかほるな」と、厳しくもあたたかく弟子の行く末を思ってお述べです。「天のにくまれ」とは、まさしくなにをやってもうまくいかない、悲運の人生となることです。仏法の軌道からはずれた生き方、それは、自分自身の生命を破壊することにもなるのです。わが人生の運行はリズムを失い、胸中の天座の星は光を失い、暗雲のなかに遠征をよぎなくされるのであります。

庶民とともに

のぼり（登）ていくばく（幾何）もなきに実名をかうる（替）でう（条）物くるわし、定めてことば（語）つき音なんども京なめ（みやこ）（訛）りになりたるらん、ねずみがかわほり（蝠）（蝙）になりたるやうに・鳥にもあらずねずみ（鼠）にもあらず・田舎（いな）（か）法師にもあらず京（みやこ）法師にもにず・せう房がやうになりぬとをぼゆ

「ネズミがコウモリになったように、ネズミとも、鳥ともつかずに」とは、まことに厳しい叱責（しっせき）のお言葉です。三位房の心には京へのぼり、京で生活するうちに、東国の田舎者だと笑われたくないとい

う一心が動いていたのでしょう。大聖人は、三位房のその報告のうらにあるこうした傾向性を鋭く見破られた。公家に説法して称賛をあび、得意気になって夢心地になり、表面ばかり変えることに腐心し、みずからを失っていく三位房を、大聖人は心からあわれみ、大慈悲をもって叱られているのです。

三位房が京にのぼって実名を隠岐の法皇の名である尊成と変えたのも、田舎出身を恥じ、それを隠す意図からだったのでしょう。その一瞬の心理の奥底をみてとられ、ズバリその心中にくさびを打たれているのです。

日蓮大聖人がこの御書を御述作の文永六年は、その前年に蒙古の牒状が到来し、国中が騒然とするなかで、鎌倉に弘教の足跡を力強くしるした年です。いわゆる十一通御書をもって公場対決を迫られるなど、いちだんと激しく立正安国の正義を訴えられていたときです。それだけに三位房の軟弱さを、よけい心配されたのでありましょう。

時代の動向も知らず、ただ一身に京都の貴族の称賛を求めて得意然としている三位房に、大聖人は、今はいかなる時か、今こそわが門下なら民衆救済のために立って戦え、との思いを込めておられると拝したい。

三位房、あなたは一閻浮提第一の法門をもっているではないか、苦悩の人々を救いゆく究極の使命を失うな、真実の門下ならば、今こそ誇りと襟度をもって立ちなさい——という大聖人の激しくもあたたかい烈々たる思いが、私には響いてきてならないのです。流行や華美に走り、仏法の革命的精神を喪失したならば、仏法者としてのみずからを放棄したにも等しいのです。

ネズミがコウモリになったように、ネズミとも鳥ともつかず、あっちへ泳ぎ、こっちへつき……といった確信のない不安定の人生ほど、醜いものはない。よかれあしかれ、ともかく、信念の道を生きぬき、だれがなんといおうと、状況がどう変わろうと、われらはわれらの道を歩もうという確固たる姿勢が、最終的にその人の人生をかざるのです。

さて日蓮大聖人御自身は、伝道の場を鎌倉に定め、時代精神を呼吸しながら、民衆の真っただ中で弘教を進められました。南都北嶺の仏教には一顧だにもしなかった。なぜか――。大聖人の胸中には、つねに苦悩する民衆の姿があったのでしょう。だからこそ大聖人は、民衆仏法の巨大な一石を、当時の日本の社会的中心地・鎌倉の地に投じられたのです。

このことは、ほぼ同時代の法然が地方の豪族、栄西は神官、親鸞、道元が貴族の出身であったのに対し、大聖人が平凡な庶民の出であったことと無関係ではありません。

御自身で「民の家より出でて頭をそり……」（御書全集一四〇七㌻）といわれ、「日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出たり」（御書全集九五八㌻）と宣言されているように、大聖人は末法の仏法の樹立と流布に、まさしく東国の辺地から立ち、時代精神の沸騰する鎌倉でこそ、力強い弘教を展開されたのでありました。

それはまさしく「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり」（御書全集七六六㌻）との仏法の究極をひっさげつつ、自身の悟達の境地と確信そのままに、現実に苦悩する民衆救済のために戦われた偉大な法師のお姿だったのであります。まことに気骨あふれた、末法の大法流布という大感情と大確信に立った

崇高なるお姿がそこにある。まさしく庶民とともに歩む偉大なる世界をもつつむ御本仏のお姿ではないでしょうか。

民衆救済を忘れ、権威化し、あるいは貴族化した宗教は、やがて衰滅せざるをえないことは、歴史が鋭く証言しております。日蓮大聖人の仏法は、どこまでも民衆の苦悩を解決するため、民衆のなかに生きていく仏法です。ゆえに、今日においても、もしいたずらに権威の座に安住して、いつしか庶民を睥睨（へいげい）するようなことがあったならば、三位房ならずとも、いつのまにか〝現代の三位房〟とならざるをえないと恐れますし、大聖人のお叱りを受ける結果となるでありましょう。

〝地域主義〟の原理を明かす

言をば但（ただ）いなかことばにてあるべし・なかなか・あしきやうにて有るなり、尊成（そんじょう）とかけるは隠岐（おき）の法皇の御実名かかたがた不思議なるべし

田舎者と笑われたくない、もともとの京の人間のように思われたい。そのために使う言葉も〝京言葉〟になったであろう三位房に対し、大聖人は「言をば但いなかことばにてあるべし」と厳しく指摘されているわけであります。それは、東国の日蓮大聖人の弟子であると誇りをもっていけということ

とともに、虚栄の心を排し、どこまでも自分らしく、主体性をもって発言せよ、との御教示なのであります。

ここに、一個の人間の言葉遣いからも、鋭くその生命の傾向性を見ぬき、かつ細心の配慮をめぐらせながら、仏道修行の根本姿勢を明示されている大聖人の、慈愛あふれるお姿を改めて痛感せざるをえない。

しかし、日蓮大聖人は、三位房の言葉遣いを指摘されてはいるものの、それはけっして、当時の京の言語を否定されているのではない。絢爛にして華麗な都の貴族社会に心を奪われたであろう精神の退廃を、戒めておられるのであります。ともかく、われわれの広宣流布の運動とは、三位房のごとく、けっして虚栄を追うような世界ではない。どこまでも、この現実の大地に深く根を張り、現実の荒波と鋭く対決しながら進んでいく生々しい宿命転換の戦いこそが、広宣流布であることを、強く申し上げておきたい。

さて、三位房に対する日蓮大聖人の御指南をとおして、もう一点、重要な原理を学ぶことができる。それは〝いなか言葉〟という土俗性、すなわち庶民感情が息吹く地域をいかに大切にされ、また、その生活実感がただよう庶民の心をどれほどか慈しまれたかという、あくまでも地域主義に根ざした大聖人の仏法の大精神であります。

私はこの意味からも、今日、私どもの進めている地域主義を根本とした信仰活動の正しさを、ともどもに確認しておきたいのであります。

日蓮大聖人の御書を読むたびに、私はいつも庶民の哀歓の情に迫り、心のヒダまで知悉されている日蓮大聖人の、深き人間性に驚きを覚えるのであります。一人の老婦人が子供を亡くしたことに対するお手紙のなかに込められているものは、みずからが子供を亡くしたかのような気持ちが縷々と語られている。まさに大聖人は〝人間のなかに〟〝生命のなかに〟徹底して生きられたのであった。民衆をこよなく愛され、人間が可能なかぎりの生きる力を発揮することに真実の喜びを見いだされていたのであります。

あるときは、乱世に生きる武士の人生観に対し、生と死の問題を鋭くとらえられ、人情味豊かに語りかける姿も、まざまざとまぶたに描かれてくる。またあるときは、四条金吾や南条時光に対して、あまりにも凡夫そのままの、人情の機微にふれられたかずかずの激励をされている。

「いなかことばにてあるべし」との一言のなかにも、この現実の大地に生き、自然と人間のなかに呼吸するきわめて土着的なものを愛された御本仏の心情というものが、鮮やかにうかがえるのであります。

この土俗性のなかに普遍の妙法を輝かせたところに、大聖人の仏法の優れて偉大な特質があることを、けっして見落としてはならない。抽象的、観念的な言葉を弄することは容易である。しかして、現に生きる一人ひとりの人間の存在のなかに、宇宙をもつつむであろう妙法の力を説いていかれた大聖人のお振る舞いは、まさしく宗教革命のなんたるかを示すに十分でありましょう。

真の地域主義とは、ひとくちにいえば、普遍性と土俗性の融合のいき方であるといってよい。土俗

性――すなわち庶民の生活実感に密着した習慣や風俗等を触発しつつ、そのなかに、人類、世界と通ずる普遍性の響きを通わせていく。そこに、人間が真に人間らしく生きていくための価値は昇華されていくのであり、われわれの志向する地域主義もその一点に結実するのであります。

御書にいわく「虚空の遠きと・まつげの近きと人みなみる事なきなり」（御書全集一五四六㌻）と。「虚空の遠き」とは哲理の普遍性であり「まつげの近き」とは足元であり、まさしくわれらが生を営んでいる地域そのものの土俗性と拝せましょう。私は、卑近な譬喩を用いて述べられたこの御金言に、われわれの運動のめざす地域主義の方軌が、見事に要約されていることに驚きを禁じえません。

ともかく、大聖人門下のなかでも重きをなしていた三位房でさえ、権威、権勢にあこがれ、仏法の本義から外れていったということは、いかに大聖人の仏法を正しく実践することがむずかしいかを、端的に示しているといえよう。真実の人間のあり方を示されたのが大聖人の仏法であります。

わが創価学会の行動は、大聖人の仏法を〝人間のための仏法〟として位置づけた。それは日蓮大聖人の御精神にかなっていることは疑いない。

そして今日、末法流布の大河の時代を到来せしめた評価は、なによりも世界を舞台にして活躍する地涌の勇者の姿が証明しているでありましょう。私どもは、この厳粛なる事実におおいなる誇りをもちたいのであります。

「撰時抄」

わが振る舞いこそ信心の結晶

（御書全集 二八八㌻三行目～同㌻七行目
編年体御書七五一㌻三行目～同㌻七行目）

経に云く「所謂諸法如是相」と申すは何事ぞ十如是の始の相如是が第一の大事にて候へば仏は世にいでさせ給う

「撰時抄」とは「時を撰ぶ御抄」という意味です。末法という時を凝視し、いかなる法を弘めるべきかを検討され、三大秘法の妙法こそ、末法の人々を救済する法であることを宣言された重書であります。

「時」ということについては、すでに「報恩抄」の講義のさい述べましたが、今回学ぶ個所は「余に三度のかうみょう名あり」（御書全集二八七㌻）と、大聖人の三度にわたる予言がことごとく的中し、真

実の時を知るのは仏であることを、確信をこめて断言されている段の後半にあたります。

方便品の十如実相の文が「如是相」より始まることから「相」ということの重要性を説かれているところであります。「相」とは、一言にしていえば「如是相とは我が身の色形に顕れたる相を云う」（御書全集四一〇㌻）と示されているように、事実のうえに顕現された姿、振る舞いをいうのであります。

それでは、なぜ「十如是の始の相如是が第一の大事」であるかといえば、その点を論ずることが、天台の理の一念三千の法門と、日蓮大聖人の事の仏法との、根本的な相違を浮き彫りにするからであります。

天台大師は、どちらかというと心性を重んじ、己心を観じて十法界を明察する観念観法の修行を軸に、法理を展開しました。それに対し日蓮大聖人は、徹底して事実のうえの振る舞いを重視されたのであります。

「百六箇抄」においても「涌出品より已後・我等は色法の成仏なり」（御書全集八六二㌻）との文にみられるように、大聖人はしばしば、生命の色法の側面を、本門、随縁真如の姿としてとらえておられます。心法の側面は、まだ迹門、不変真如の理門にとどまっているわけであります。

思うに、日蓮大聖人の仏法を実践するにあたって、なにが要諦となってくるのでありましょうか。

それは、悟りとか決意、慈愛といったものが、心の領域にのみふみとどまっていてはならないということであります。心中に凝縮された一念は、即地涌の実践の場へと展転し、わが身に、わが生活、

わが人生に、いかなる事の振る舞いとなってあらわって大事中の大事なのであります。

しかも大聖人はこのことを「相如是が第一の大事にて候へば仏は世にいでさせ給う」とおおせられている。すなわち、現実に仏が出現され、人間としての事実のうえに仏法を会得し、顕現していく方途を明かされたという歴史的事実こそ重要なのであります。

たしかに大聖人は、久遠元初の自受用報身如来であられる。しかしわれわれが、その偉大な存在をまぎれもない事実として覚知することができたのは、七百年前に大聖人が御出現になったからこそであります。

仏法は、キリスト教の〝神〟のように、遠き夢のかなたにあるのでもなければ、山中深くひっそりと説かれるものでもありません。現実に生きる人間のなかにのみ息づくのであり、さまざまな生活の葛藤のなかに豁然と開けゆく生命蘇生の泉なのであります。ゆえに大聖人は、民衆が雲集し、苦楽、愛憎の織りなす現実の真っただ中に飛び込んでいかれたのであります。

「日蓮末法に出でずば仏は大妄語の人・多宝・十方の諸仏は大虚妄の証明なり」（御書全集一一九〇㌻）とのおおせがあります。

大聖人は御本仏でありますから、本来は、釈尊をはじめとする仏菩薩、あるいは人師、論師の証明など必要としないのであります。にもかかわらず、みずからの御出生を「日蓮末法に出でずば……」と、歴史の流れのなかに意義づけておられる。私は、この御金言のなかに、歴史性と現実性とをとく

に重視する事の仏法の骨髄を、垣間見る思いがしてならないのであります。まさしく「相如是が第一の大事」であります。

この「相如是」について、若干敷衍して、われわれの日常生活に即して申し上げれば、ここでいう「相」とはたんなる姿や形とは異なり、人間本然の生命のありようが、具体的な形として現れたものと拝せましょう。虚栄、虚飾によってつくられた姿ではなく、わが奥底の一念の発露であります。

その意味で顔色や目の輝き、言葉遣いから一挙手一投足にいたるまで、いっさいの振る舞いは、われわれの信心の姿そのものであります。一念の奥底に歓喜の脈打っている人ならば、顔色も生きいきと輝き、日々の言々句々や振る舞いのなかに、なんともいえぬ薫風の漂うような雰囲気がかもしだされているものであります。逆に、いくら表面の威儀をかざり、口でうまいことをいおうとも、顔色が悪く言葉に張りもなく、感情に流されているといった状態であったならば、なんの説得力ももちえないにちがいない。

とくに、人間の顔ほど正直なものはありません。私は以前、老境のトルストイの顔に刻まれた、人生のさまざまな風雪をくぐりぬけた重厚さについてふれたことがありますが、「聖教新聞」に連載された「信心20年の貫録」をながめながら、同様の感を深くいたしました。そこには、さまざまな年輩者の顔が見事な光彩を放っておりました。ともに懐かしい戦いの思い出を刻んできた方々であります。顔に刻まれた一本一本の〝笑顔皺〟は、病苦や生活難に果敢に挑戦しつつ戦ってきた信心の年輪を、

ほうふつとさせてあまりあるものであります。私は旧懐の情にひたりながらも、真金の人は、月々、年々に輝いていくものだな、との思いを深くせざるをえません。

古賢も「人いずくんぞかくさんや」と述べているように、信心していようといまいと、人々の目というものはじつに鋭い。われわれの何気なしの動作や片言隻句までも、敏感に感じとっているものであります。その意味からも、地域や近隣、職場でのふれあいにおいて信心の光を発する、金の輝きをもった存在となっていただきたい。

われわれが「教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」（御書全集一一七四㌻）との御聖訓をとおして学んだように、その事実の姿こそ、信心の凝結なのであります。

まして時流は「実証」の時代であります。われわれの姿、行動はあくまで常識第一、良識第一に徹し、人々から「さすがだ」と賛嘆されるものとなっていかなくてはならない。大聖人は、折伏のさいの言葉遣いにいたるまで、じつに細かな配慮をすべきことを教えられております。

たとえば御書には「……和らかに又強く両眼を細めに見・顔貌に色を調へて閑に言上すべし」（御書全集一二八〇㌻）と述べられています。すなわち、感情に走ったり激したりすることなく、つねに顔面に笑みをたたえるほどの余裕をもって対話する。そして、静かななかにも、道理としていうべきことは堂々といいきっていくという姿勢であってください。

その文の次下に「公場にして理運の法門申し候へばとて雑言・強言・自讃気なる体・人目に見すべからず浅猴しき事なるべし」（御書全集一二八三㌻）とおおせのように〝売り言葉に買い言葉〟的な雑

言、強言のたぐいや、独善的な言動は、厳に慎まなければなりません。そうでなければ、法を宣揚(せんよう)しているつもりで、かえって法を下げてしまうからであります。

仏法は道理ですから、世間の常識、良識を大切にしつつ「相如是が第一の大事にて候へば……」の文をそれぞれの立場で読みきり、「実証」の時代を、着実に歩んでいっていただきたい。

大法興隆の時を察知された大聖人

智人は起をしる蛇みづから蛇をしるとはこれなり

これは、日蓮大聖人が一閻浮提(えんぶだい)第一の聖人、すなわち末法の御本仏であることを述べられた文であります。

「智人は起をしる蛇みづから蛇をしる」とは、妙楽大師の法華文句記巻九の文を、日蓮大聖人の随自意の御境界によって、自在に転用されたものであります。

妙楽の文は「智人は智をしる」となっているが、日蓮大聖人は、あえて「智人は起をしる」とされている。ここに、日蓮大聖人が、智人すなわち仏というものを、いかにとらえられていたかが明らかでありましょう。

智人とはたんに智を知るだけであってはならない。むしろ、あふれるがごとき智慧をもって、宇宙や自然の出来事、社会、人心の動向を察知し、悩める民衆を本源から救いきる慈悲と責任感に貫かれた人こそが、真の智人なのである。

「智人は起をしる」の「起」とは、天変地夭をはじめ、いっさいの現象の起こる原因や根本、ということであります。したがってこの御文は、日蓮大聖人こそ、三世に通達した仏眼をもって、世の中に起こるもろもろの現象の根本原因を知る真の智人であり、末法の御本仏であることを明かされた文となるのであります。

日蓮大聖人は、正嘉の大地震、文永の大彗星等の現象を三大秘法の仏法興隆の瑞相ととらえられ、相つぐ災難の到来によって動揺する暗黒の社会に対し、不惜身命の実践で妙法の光明を掲げつづけられたのであります。

ともかく、仏法のことは、仏にしかわからないのであります。仏の智のみが、仏法の正邪、いかなる仏法が時と機根にかなうかを知ることができるのである。

「蛇みづから蛇をしる」とは、蛇は、みずからの本能や習性により、自分の通る道を知っているということです。人間にはまったくわからないが、蛇自身が知っている道があるのです。これはなにも蛇に限ったことではありません。

「日女御前御返事」にも「闇の中に影あり人此をみず虚空に鳥の飛跡あり人此をみず・大海に魚の道あり人これをみず月の中に四天下の人物一もかけず人此をみず、而りといへども天眼は此をみる」

（御書全集一二五〇㌻）とあります。

鳥が虚空を飛ぶのも、魚が海の中を泳ぐのも、それぞれに自分の道を知り、そこを通っているのであるが、人間には見えないとのおおせであります。

同様に、仏法には仏法の法則があり、因果律がある。凡夫には見えないけれども、仏、智人のみが、それを知ることができるのであります。正嘉の大地震、文永の大彗星等の打ちつづく災難も、凡夫にはまったくその因果関係がわからなかった。だが、御本仏日蓮大聖人には、はっきりと、大法が興隆する時を知らせる鐘であることがみえておられたのであります。

万代広布を凝視した大宣言

衆流あつまりて大海となる微塵つもりて須弥山となれり、日蓮が法華経を信じ始めしは日本国には一滴・一微塵のごとし、法華経を二人・三人・十人・百千万億人・唱え伝うるほどならば妙覚の須弥山ともなり大涅槃の大海ともなるべし

広宣流布の原理を示された御文です。とともに、この一節には、日蓮大聖人の広宣流布への烈々たる御確信が込められていると拝したい。

多くの流れがあつまって大海となる。わずかの塵が集積して須弥山となる——とは、洋々たる大海も、峨々たる大山も、その淵源をたずねれば、一滴、一微塵から成っていることを述べられたものです。

渓流は峻嶮な沢を下り、深き谷間を駆け、いくつもの支流を合して大河となり、やがて滔々と大海へそそぎ込む。はじめは一滴（ひとしずく）から始まっているのです。と同じように、広宣流布の流れも一滴から始まり、やがて大海となっていくと、天地自然の様相を例に、断言されているのです。

須弥山とは、古代インドの世界観、宇宙観で、その中心にあるとされる山です。この世界観は、天空に伸びるヒマラヤの山々をのぞむインド亜大陸の地理的位置づけと無関係ではないでしょうし、事実、いまも人はヒマラヤを白き神々の座と感じ、聖なるものとして畏敬の念をもっています。仏法上においても、この須弥山は、仏の無上の正覚の象徴として、しばしば登場します。

たとえば「須弥山に近づく衆色は皆金色なり、法華経の名号を持つ人は一生乃至過去遠劫の黒業の漆変じて白業の大善となる、いわうや無始の善根皆変じて金色となり候なり」（御書全集一四〇五㌻）と御書の一節にあります。

ここでは広宣流布という巨大な偉業の建設を須弥山にたとえ、一微塵、一微塵が集まって、固く結合してこそ、広布の山並みはできあがっていくのだといわれているのです。

大聖人御在世当時、大聖人とその門下の存在は、日本において一滴、一微塵のごとくだったでありましょう。その大聖人の仏法が、今では約一千万人の友が喜々として担う広範な民衆の大宗教運動へ

と伸長し、生きいきと現実の庶民生活へ脈動している
のです。

まさしく、この「撰時抄」の一節にあふれる御本仏の大確信が、七百有余年の今日を確かに予測していたといってよい。元初の夜明けに立って、日蓮大聖人は、南無妙法蓮華経と呼号あそばされた。それは宇宙をもつつむ末法の御本仏としての第一声であられた。その一帝は、けっしてたんなる一帝ではない。大海をもはらんでいる。その一微塵は、たんなる一微塵ではない。大山をもつつんだ峻厳(しゅんげん)な因果の理法をはらんでいる。同じく私たちにおいても、一個の人間の変革は、その一人ひとりにとどまるものではない。全人類をもつつむであろう最小ケールの大きさを説いた法理があるでありましょうか。その瞬間である。これほどまでに一個の人間のスわれらの人間革命の戦いは、やがて大海にいたるであろう道程であり、かつは大山を築くもっとも確実なる一歩一歩なのであります。

大聖人は「開目抄」のなかで、こうも述べておられる。

「一帝をなめて大海の潮(しお)をしり一華を見て春を推せよ」（御書全集二二二ページ）と。

また「当世・日本国に第一に富める者は日蓮なるべし、大海の主となれば諸の河神・皆したがう須弥山の王に諸の山神したがはざるべしや」（御書全集二二三ページ）と。

これらの御文に込められた御本仏の末法広宣流布の大確信にふれ、いまさらながら、わが身の福運を感ずるのであります。

〝一人をつかむは万人に通ず〟の方軌

つぎに「二人・三人・十人・百千万億人・唱え伝うるほどならば」とあることに注目したい。

いかなる運動も歴史を概観するならば〝一人〟から始まっている。私どもの運動においてもまたしかりである。仏法はどこまでも〝一人〟〝一人〟の人間に焦点をあて、そこにいっさいの可能性を見いだしていく原理なのであります。

その〝一人〟の人間を最大に尊び、いかなる階層の人であれ、生命の絶対的尊厳の立場から、どこまでも平等に、徹底して守りぬいていく――これがわが人間革命運動の骨格をなすものであります。

そうした〝一人〟が〝二人〟となり〝三人〟となって、やがて百千万億人となる。この百千万億はたんなる数字というより、無限に、行き詰まりなく、ということです。

創価学会の歴史のうえにおいていうならば、草創期の渓流は、障魔の砂を下し、強敵の岩をはみ、いまや悠々と未来へ流れゆく大河を現出したことにあたるわけであります。大河は両岸に肥沃な大地を提供しつつ、社会貢献の実りをもたらしている。まさに「河が深ければその水は滑らかに流れる」（シェークスピア）実相ともいえるでありましょう。

わが創価学会は、無名の庶民が立ち上がって築いた尊い団体であります。権力によるものでもなければ、利害や好悪の感情によるのでもない。ただ、ひたぶるに汗と労苦によって築き上げた世界なの

であります。過去の悲惨な運命の曲から、色彩鮮やかな希望のメロディーへと変転していった一庶民の生活詩が、やがて万人の生活詩へとつづられていったのであります。

かつての釈尊の仏法を俯瞰するとき、それはいわば上からの改革であった。しかし、日蓮大聖人の仏法は「旃陀羅が家より出たり」（御書全集九五八㌻）とお示しのごとく、庶民の、下からの仏法流布の流れであり、この大聖人の御金言を事実のうえで証明したのが、日蓮正宗創価学会なのであります。

一人の覚醒に始まり、一人が一人の宝塔を開き、そのまた一人が次の一人の宝塔を開いていく――この地道にして着実なる〝下〟からの盛り上がりこそ、われわれがめざす真実の広宣流布の実像なのであります。したがって、かつての田中智学等の主張した国教的ないき方は〝上〟からの統制でことを運ぼうとしている点からも、大聖人の仏法と、根本的に反しているのであります。

ともかく、全国の会員の努力と熱誠によって、広宣流布の様相もようやく安定と向上の新たな段階に入りました。御本仏の御遺命どおりの仏法の世界に名を連ねる私どもは、こんどはみずからが一帝となり、一微塵となって、人間であることの共通の基盤に立ち、それぞれが信頼の核となり、新たな生命の自覚を呼び起こす運動を堅実に進めていくべきでありましょう。

そうしたみずからの新たな生命の自覚が、つぎの自覚ある一人を生み、それが二人、三人、十人と続いて、御聖訓のままに大涅槃の大海となり、妙覚の大山へと連なっていくのであります。

この世でもっとも偉大なものはなにか。それは太陽のいつも変わらぬ同じ運行が示すごとく、もっとも地道な作業を忍耐強く繰り返しゆく軌道のなかにあるといってよい。一人の人間の心を深く知

り、理解と信頼を得ていく作業は、たしかに忍耐と困難がつきまとう地道な労作業といわねばならない。しかし、だれが見ていようと、見ていなかろうと、黙々と一人ひとりの心と心を通わせ、そこに誠意と信頼を交流させゆく行為は、万人の心をつかむことに通ずるのであります。

恩師は叫ばれた。

「青年よ、一人立て！　二人は必ず立たん、三人はまた続くであろう」と。

いずれの時代にも方軌は同じであります。すべては〝一人〟からはじまり、それは新しい一人の胸中の輝きとなり、一人の光は万人の胸中の輝きへと広がっていくのであります。「星火燎原（りょうげん）」という中国の言葉がありますが、一点の火が燎原の火となって燃え広がっていくとの意です。私どもの広布の時代は、まさに「妙法の星火燎原」といってよいでありましょう。

広布にかける生涯に人間革命

仏になる道は此れよりほかに又もとむる事なかれ

結論していうならば、広宣流布の道に進む以外に成仏はありえないということです。人を救うということは、自分自身の宿命転換に通ずるということであります。人の生命に妙法を湧現させていく戦

いをしていくことが、自分自身の生命の扉を開いていくわけであります。これは、あたかも地球が自転と公転を同時にしながら、己の厳しき軌道を運行している姿にも似ております。公転は広宣流布、成仏すなわち自己の人間革命は自転とも考えられます。

「此れよりほかに又もとむる事なかれ」――この一句に注目したい。この大聖人の強い鋭いおおせをどう受けとめて実践していくかということであります。一人だけの信仰などということはありえません。わが生涯を広布にかける――それ自体が偉大なる人間革命になっているのであります。

創価学会は、日蓮正宗を外護し、社会にあっては広宣流布をしていく団体であります。ゆえに、この創価学会を守護することが即、総本山を守護することに通ずるのであります。また広宣流布につながる。ゆえに、御宗門と学会が過去、現在、未来と永遠に一体となって進みゆくところに、幾層倍の広布への原動力が生まれることはいうまでもありません。

もったいなくも日達上人は、私どもに対し「わが国に創価学会があるかぎり、日本国は安泰であり、世界もかならず平和をたもつことができると断言できるのであります」とおおせくださっております。

広宣流布というものは、仏の所為であります。ゆえに、広宣流布を推進することは、如来の所遣として、如来の事を行ずることになる。この尊い使命を、僧俗一体となって進めていくところに、かならず広宣流布は実現していくことを確信していただきたいのであります。

「開目抄」

輝かそう生命の富を

（御書全集　二二三㌻二行目～同㌻四行目
編年体御書四五二㌻九行目～同㌻十二行目）

当世・日本国に第一に富める者は日蓮なるべし命は法華経にたてまつり名をば後代に留べし、
大海の主となれば諸の河神・皆したがう須弥山の王に諸の山神したがはざるべしや、法華経の
六難九易を弁うれば一切経よまざるにしたがうべし

「日本国に第一に富める者は日蓮なるべし」

私はこの言葉が、配流の地・佐渡において述べられたことに、深い感動を覚えるのであります。寒さと飢え、そして虎視眈々と命をねらう念仏者の群れのなかにあった孤独の世界。凡夫の目からみれば、まさに地獄そのものと映るでありましょう。しかし、大聖人の生命には日本一、世界一、いな宇

宙一の〝富〟が輝いていたのであります。

これは、強気や独善の言葉ではない。心奥より自身の立場を喜ばれている崇高なる御境界の一言であられる。苦難の極底にあって、このような偉大な輝きを示した人が他にあったでありましょうか。

天平期より江戸期にいたるまで、流罪の地・佐渡に身を送られた人は、数しれずありました。しかしそのなかにあって、かくも崇高な御境界に比すべき、真実の歓喜の声を発した人が、あったでありましょうか。みな、憂愁と悲嘆と絶望の日々を送るばかりでありました。

この一事をもって、日蓮大聖人の御内証の深さを思うべきであります。仏法上、なにが最高の財宝か――それは心の財、すなわち生命の内より発する豊かさこそ、第一の宝であります。その心の財を根本として生きぬいていく信心の極致を、大聖人のお姿から学ぶべきであります。

ある世界的に有名な歌手の死が最近報ぜられました。〝有名〟の二字を極め、いかに人々の渇仰の的となって一時の華美の世界をつくりあげようとも、生命の奥底だけはどうしようもなかった。彼自身、まさしく孤独地獄そのものであったとみざるをえないのであります。

また私は、この御文をとおして、戸田先生の懐かしい思い出がよみがえってまいります。先生が公会堂で御書の講義をされたさい「あなた方が功徳を得たといっても、私からみれば、まだまだ小さい。小指の先のようなものです。私の得た功徳は、この公会堂いっぱいほども大きいのです」と何度もいわれておりました。

結局、生命の豊かさ、深さ、大きさ、それが人間としての真実の財宝なのであります。われわれが

御本尊を持った以上、わが功徳、福運は、世界一偉大であるとの確信に立って進んでいきたい。いかなる苦境、苦難に遭遇しても、その胸中の太陽の輝きさえあれば、かならずや人生を未来へと開いていけることはまちがいないと確信するのであります。

「命は法華経にたてまつり名をば後代に留べし」

人間だれしも、かならずなんらかのものに、日々命を使っているものであります。ある人は家庭や子供に、ある人は会社に、またある人は趣味に等々。一人の人間であっても、時々刻々、さまざまな対象に命を費やしております。その意味では人生とは、日々、命を使っていく過程の総体でもあります。

しかし、その命を帰していることが、ほんとうにその人の大満足の人生となるかならないか、すなわち、人生の総決算において、大きな悔いが残るか、あるいは真実の生きがいを感ずるかという、重大なテーマが残っております。多くの人々は、命を使うべき対象が、有為転変の無常の世界であることに気づいていない。ゆえに、その人生にもまた、不安と動揺と、陰鬱の深淵が広がっているのであります。

それに対し、根本の常住の世界に棹さして生きる人の命には、満足と不動の強さがあり、そこから発するいっさいの振る舞いは、作々発々のはつらつたる姿を現じていくのであります。まことに法華経に命をたてまつるほど、強靱な人生はないのであります。

「名をば後代に留べし」とは、法華経ゆえの、真実の人間としての名を、永遠にとどめるということ

であります。

たとえば、大聖人御在世中の四条金吾の名は、歴史書のなかにも一行、一言も載っていない。しかし、七百年後の今では、日本中、世界の人々の口にさえ、広布の誉れとして響き渡っております。大聖人より「法華宗の四条金吾・四条金吾と鎌倉中の上下万人乃至日本国の一切衆生の口にうたはれ給へ」（御書全集一一一八㌻）といわれた御金言どおりの名を、後代にとどめたのでありました。

私はいつも確信している。それは広宣流布のために、わが人生をかけて実践する人は、三世十方の諸仏の知るところであり、その名を宇宙に輝かせているのであります。ゆえに、その名は後代に、ますことの人生の勝利者としてとどめられるのであります。

さらに、この「名をば後代に留」とは、その人の永遠の福運を意味しております。三世諸仏に、その名が称賛されるということは、即、生命自体に揺るぎなき大福運の軌道をつくることを意味していく。ゆえに、その福運の名の記前は生々世々に続いていくことを、確信されたいのであります。

実践こそ仏法の生命

「大海の主となれば諸の河神・皆したがう須弥山の王に諸の山神したがはざるべしや、法華経の六難九易を弁うれば一切経よまざるにしたがうべし」

「六難九易」は、法華経見宝塔品第十一に説かれています。法華経を仏滅後に受持することが、いか

に至難であるかを明かしたものです。

この宝塔品には三箇の鳳詔といって、滅後の弘法のなかに、この六難九易の原理が説かれていることは、仏滅後末法の妙法広布に生きる勇者に、なみなみならぬ決意を要請するためであります。

須弥山を接って他方の無数の仏土に擲げ置いたり、乾いた草を背負って劫火のなかに入っていっても焼けないことなど、およそ普通では不可能、あるいは不可能に近い難事の例を、九つあげている。そして、これを法華経実践の六例に比べれば、なお易しいことだと経典が述べていることは、すでにご承知のことと思います。

法華経流布には大難があることを示した、この「六難九易」を引かれて、大聖人は、もしもこの六難九易を実践する人がいるとすれば、その人こそ仏法の王者である、たとえ一切経を読み実践しなくても、それら経教の原理が一つの例外もなく、この法華経の行者のものになるとおおせであります。

これは、大聖人こそがいっさいの仏の根源の御本仏であるがゆえに、いっさいの仏菩薩が随従し、いっさいの功徳が雲集しているとの御断言なのであります。大聖人こそ宇宙第一の本源の仏であられることが、ここにも明確であります。

「法華経の六難九易を弁うれば一切経よまざるにしたがうべし」――この一節は「実践」ということの偉大さと、難をうけることの重大さをお示しであります。

実践は、いうまでもなく宗教の生命であります。あらゆる宗教をはじめ、いっさいの思想、哲学の

究極の使命は、一人の人間を救うかどうか、事実として何人の人々を救ったかどうかにある。どれほど高邁な説を掲げようとも、博学を誇ろうとも、六難九易という現実のなかで実践しぬく事実には、はるかに及ばないし、その実践があって初めて、成仏への大道が開けるのであります。

〝一人〟に光あてる妙法

ともかく宝塔品のなかにおいて、六難九易の原理が示されていることは、一個の人間の生命の扉を開き、そこに抜本的蘇生の光源を送りゆくことが、いかに困難であり、いかに偉大な法理であるかを説かれたものといえる。九易とは物理的困難を象徴したものと拝せる。また六難とは、生命の世界に分け入っていくことの戦いの至難さを述べられたものであり、胸中を制覇しゆくことが、いかに困難であるかを示した原理なのであります。

ゆえに、日蓮大聖人は、この六難九易を引かれながら「今度・強盛の菩提心を・をこして退転せじと願しぬ」（御書全集二〇〇㌻）とも述べられていることを、深く銘記していただきたいのであります。

この六難九易の原理を、たんなる譬え話や主観的な心情、決意といった次元で受け取っていてはならない。真実の仏法運動であるならば、かならずそうした困難をともなうという客観的事実を、未来永久の戒めとしておおせなのであります。

私は以前、六難九易の原理的客観関係についてふれたことがありますが、われわれの運動は一人の

人間を徹底して大切にし〝悩める一人〟〝嘆きの一人〟をどう救っていくかが眼目であります。こうした人間観は、すべての人々を数のなかへ組み込み、権力による支配、統制下におこうとする人間観とは逆であり、方向を異にするのであります。ゆえに、権力というものは、そうした運動には、つねに過敏なまでの警戒心を働かせており、そこに、相対抗する緊張関係が生ずることは、必然であります。

さて過去の宗教の歴史をふり返ってみてもわかるとおり、そのほとんどの宗教というものは、支配階層に直結し、あるいは権力のなかに組み込まれ、その下僕の存在となるような忌まわしい道をたどってきた。しかし今、ここに説かれる宝塔品においては、一人の人間の無限の可能性をいかに引き出し、輝かせていくかの原理を明かしている。この一個の人間の内面世界を徹底して照射し、そこに自在の生命的境涯を会得せしめていこうとする方途からしても、仏法がいかに革命的な原理であるかおわかりでありましょう。宝塔品のなかで六難九易が取り上げられた真の意味も、この一点にあるわけであります。

かつて、オーストリアに初めて鉄道が敷かれたさい、人々の反応はつぎのようであったそうです。

「……ウィーンの新聞は恐怖と不吉な予言でわきたった。鉄道王ロスチャイルドは十八世紀的に平和な国に二十世紀の悪魔をおしつけたと非難された。人間の呼吸組織は一時間十五哩以上の速度にたえられないから、肺は虚脱状態になり、循環器はこわれる。旅行者の鼻、目、口、耳から血が迸りでるにちがいない。六十哩以上の長さのトンネルは、客車のすべての乗客を窒息させ、汽車は他の出口か

ら運転者のいない霊柩車（れいきゅうしゃ）となっててくるだろう」と。

今からみれば笑い話のようなことが、本気で論議されていた。このように、一般世間の目というものは、未知のものに対して、本能的な不安感をもっているのであります。また、権力の習性は、こうした一般の心情、心理を巧妙に利用しつつ、支配の網を広げてくるのが常であります。ゆえに、民衆の賢明さを開発することが仏法運動の成否を決するといってよい。

ともあれ、われわれの未聞の運動が、対抗する力の存在なしに進むわけがありません。釈に「驚耳（わくに）」と説かれているとおりであります。だからこそ、世間の常識や良識を内から輝かせていく労作業が必要とされるわけですが、それと同時に、私たちの仏法運動にはかならず難があることを、永遠に心にとどめていきたい。

皆さんは、内には、この六難九易の原理を確信し、いかなる諸縁にも幻惑されることなく、ものごとの奥底を見極めつつ、外にあっては春風のごとく、地域の柱の存在として活躍されますようお願いいたします。

「日女御前御返事」

尊き同志を信頼しあおう

（御書全集一二四七㌻九行目～同㌻十一行目）
（編年体御書一一〇四㌻一行目～同㌻三行目）

法華経をば経のごとく持（たも）つ人人も・法華経の行者を或は貪瞋癡（とんじんち）により或は世間の事により或は・しなじな品品のふるまひ振舞によって憎む人あり、此は法華経を信ずれども信ずる功徳なしかへりて罰をかほるなり

この御文の意味するところは、別しては当然、日蓮大聖人のお立場を述べられております。しかし総じては、末法の慈折広布に邁進（まいしん）する日蓮大聖人門下にあてはまる御文と自覚して拝せるのであります。

法華経とは、末法の法華経、すなわち御本尊であります。「法華経をば経のごとく持（たも）つ人人も」と

は、御本尊を受持している人々のすべてに共通いたします。たとえ、そういう「法華経をば経のごとく持つ人人も」、それはかたちのうえのみで、実際は、もし「法華経の行者」――別しては、御本仏日蓮大聖人お一人であられる。また総じては、日蓮大聖人の門下、すなわち正法をたもって広宣流布に向かって、日夜、真剣に活動している人――を憎んだり、謗って罰を受けてしまうという御金言なのであります。

それでは、どういうかたちをとって誹謗中傷が行われるか、それを大聖人は、一つは謗る人の「貪瞋癡」によって、二つには「世間の事」に事寄せて、三つには仏法実践者の「しなじなのふるまひ」をとおしてである、とおおせなのであります。

「貪瞋癡」によって憎むというのは、その人の貪り、瞋り、癡か――すなわち、その人の心の魔性の発露ともいえるであろう煩悩が原因で、法華経の行者を憎んでしまうことであります。

この貪り、瞋り、癡かというものほど、やっかいなものはない。人間のもつ悲しむべき性でありま す。しかし、怨嫉、怨念、憎しみというものに振り回されるか、信心という仏界から自分の生命を律していけるか、ここに絶えざる人間革命の戦いがあることを知ってください。

当然、荒凡夫の未熟さのゆえに、さまざまなことがあるかもしれない。私たちの側でそうさせない努力も、当然必要であります。しかし、故意に尊き〝仏子〟を傷つけていくことは、じつは、みずからの生命をも傷つけていく醜い行為であり、みずからを奈落の底に追いやっていくことは疑いない。

また「世間の事」によって憎むというのは、仏法の厳然たる教義によらず、世間的なことに事寄せ

て批判したり、憎しみをいだく場合であります。たとえば、地位とか、立場とか、財産とか、いわゆる世間的な姿のうえから批判することであります。地位や権威をカサにきて驕りたかぶり、法華経の行者を誹謗することも含まれてくるわけであります。

さらに「しなじなのふるまひ」によって憎むというのは、その人の振る舞いや言動、すなわち、表面に現れた姿、形で批判する場合であります。

いままでも難というものは、かならず世間のこと、生活的な事象に事寄せて起きてきました。大聖人の時代もそうでした。いまた同じであるということがいえます。

これらは、いずれも、人間がもっとも陥りやすい通弊でもあります。それだけに、みずからの仏道修行の鏡としていくべき重要な戒めとも拝すべきなのであります。

とともに、世間的なことに事寄せたり、表面の振る舞いや言動によって人々は見ていくのでありますから、自身の社会における姿や地域における行動も〝さすが〟といわれる人になっていくことが大切です。しかし、それでもなおかつ経文、御書に照らし、かならず非難中傷は内外ともにあると考えなくてはならない。

ともかく日蓮大聖人は、結果的に法華経の行者を憎むということは、いかに法華経を経のごとくたもっているかにみえても、そのような姿には信心の功徳はない、かえって罰を受けてしまうのであると、と断言されているのであります。

日蓮大聖人の偉大な仏法をみずからも行じ、この末法に弘通している人を誹謗すれば、かならずこ

うなるとの厳しき御聖訓なのであります。

同志というものは、互いに信頼し、尊敬しあわなければならない。自他彼此の心で、互いに反目したり、怨嫉したり、憎しみあったりすれば、もはや仏法の命脈は、そこには息づいていないことになります。むしろ、生命の魔性に汚染された世界をつくりあげてしまうのであります。

ともあれ、亀裂化し、断絶化した社会にあって、ひたすら御本尊を受持、唱題まいらせて、互いに「信」で結びあった教団は、この世で比類なきものと信じます。

「佐渡御書」に「悪人は如来の正法を破りがたし仏弟子等・必ず仏法を破るべし師子身中の虫の師子を食む等云云、大果報の人をば他の敵やぶりがたし親しみより破るべし」（御書全集九五七㌻）の御金言の鉄則を銘記していきたい。ゆえに内部から破壊していこうとする行為は、最大の仏敵となる所業なのであります。

とくに、これからの時代は、日本的にも、世界的にも、内部充実の時代となるであろうと思われます。世間にも「艱難にあいて、はじめて親友を知る」とのことわざもあります。いわんや〝異体同心〟が、仏法の真髄であります。ゆえに、真実に、広宣流布に苦難を共有しながら活動していくなかに、なにものにもかえがたい強靱な絆は築かれるにちがいありません。

一人ひとりが己の信心を確立しつつ、仲良くスクラムを組んで、地涌の菩薩の眷属として誉れの道を、ともどもに進んでまいろうではありませんか。

「種種御振舞御書」

一切を包む御本仏の大慈悲

（御書全集　九一七㌻五行目～同㌻六行目）
（編年体御書九五四㌻五行目～同㌻六行目）

釈迦如来（にょらい）の御ためには提婆達多（だいばだった）こそ第一の善知識なれ、今の世間を見るに人をよくなす（成）ものは
かたうど（方人）よりも強敵（ごうてき）が人をば・よくなしけるなり

私は、この御金言を拝するたびに、御本仏の宏遠（こうえん）無辺なる大境界に、驚嘆の念を新たにいたします。善知識とは有徳の友人であり、人を仏道へと導き入れる人を意味しております。

さきに「相模守殿（さがみのこうどの）こそ善知識よ平左衛門こそ提婆達多よ」（御書全集九一六㌻）とおおせのように、釈尊にとっての提婆達多と同様、大聖人は、みずからを迫害し、酷寒（こっかん）の佐渡へと流罪せしめた張本人である北条時宗や平左衛門尉を、御自身の善知識であるとおおせなのであります。

ふつうならば、天に怨嗟の声を放ち、悲涙をもって地をぬらし、あるいは悲嘆と諦めの暗い日々を送っているのが当然でありましょう。しかし、大聖人は、その次下に「平左衛門尉・守殿ましまさずんば争か法華経の行者とはなるべきと悦ぶ」（御書全集九一七㌻）とまでいわれているのであります。

その御境界たるや、まさしく山をも抜き、海をも容るる大慈悲と拝する以外にありません。私にはこの御文を拝するたびに、紅涙滴る思いがいたすのであります。

私たちはこの一節をとおし、難に遭遇したときの、仏法者たる者の姿勢の極底を学びとっていきたいと思います。

もちろん、大聖人の御一生にとうていおよぶものではありませんが、凡夫である私たちの人生においても、よいときもあれば悪いときもあるのが当然であります。むしろ、今日のような濁世、激動の時代にあっては、順境のときのほうが少ないかもしれません。また、広布遠征の途上にあっても、今後とも、さまざまな障魔が競い起こってくることは、御金言に照らして必定であります。

そのさい、われら大聖人門下は、大きくいっさいをつつみこみながら苦難を避けずに、むしろ反省すべきことは潔く反省をしながら、人間革命の絶好のチャンスととらえていくべきであると申し上げたい。

私は、佐渡において大聖人が「喜悦はかりなし」（御書全集一三六〇㌻）と、宇宙大の大きさでわが生命の躍動を感ぜられた御心境が胸につきささってきます。

一般世間でも「艱難汝を玉にす」といわれております。まして信心の世界において、困難を乗り越

えずして、一流の人間、真金の人に成長できるわけがありません。

「鉄は炎打ては剣となる賢聖は罵詈して試みるなるべし」（御書全集九五八㌻）ともおおせであります。

安逸のなかには本格派の人材は、けっして育たない。私はこのことを、とくに未来性豊かな青年部諸君に、強く要望しておきたい。

苦難もまた人間革命の因

学会の歴史にあっても、過去に、難をまえにして敗残の姿をさらしていった残念な人々を、何人か知っております。私は、それらの実例をみて、つねづね痛感していることですが、それらの人々は、外から襲ってくる難に敗れたというよりも、むしろ己心との戦いにおいて挫折したといったほうが、真実に近いように思えてならないのであります。大聖人御在世当時においても同様であったでありましょう。その弱い自分に打ち勝つことが、信仰の第一義なのであります。

いまは亡きある有名な小説家が「波騒は世の常である。波にまかせて、泳ぎ上手に、雑魚は躍る。けれど、誰か知ろう、百尺下の水の心を。水のふかさを」といった言葉があります。

まことに波騒は世の常であります。そこにたくみに生きる小さい心の人間もいます。しかし、人間のほんとうの偉大さ、尊さはなにか。みずからの信ずる目的のために波騒をつつみつつ、なおかつ悠然と師子王の歩みをなす人こそ、もっとも尊い人であります。

われらの人生は、波浪に翻弄されてゆくような、はかないものではならない。また、波間を巧妙に泳いでいくような、世故にたけた名聞の道であってはならない。しょせん、どう過ごそうとも、一生は一生であります。

ゆえに私たちは、このかけがえのない一生を「浅きを去って深きに就くは丈夫の心なり」（御書全集五〇九ページ）の御金言のままに、決定の日々でわが人生の歴史書を綴っていきたいものであります。

たしかに、釈尊にとっては提婆達多が、日蓮大聖人にあっては平左衛門尉が、第一の善知識でありました。しかし重要なことは、難に直面したとき、それを善知識とするか、悪知識とするかは、わが一念にあるということであります。御本仏の心を推察するのは恐れ多いことですが、平左衛門尉を善知識とおおせられたのは、いつに御本仏日蓮大聖人の比類なき御境界、大慈悲であられました。

総じて私どもにおいても、一念のいかんで悪知識も逆境も、ことごとく自身の成長の発条としていくことができるのであります。また、罪障消滅につながっていくのであります。苦難があるたびに、真実の信仰の核は、いやましてその力を凝縮させながら、新しい時代を切り開いていくにちがいありません。

その意味からも「今の世間を見るに人をよくなすものは……」うんぬんのおおせも、まことに道理であると拝することができます。味方同士のなれあいの平穏にひたっていては、人間であれ組織であれ、堕落するばかりであります。苦難につぐ苦難の峻険を踏破しぬいてこそ、嵐に揺るがぬ大樹のごとき境涯が開かれゆくのであります。

「難来(またき)るを以て安楽と意得(こころうべ)可きなり」（御書全集七五〇㌻）とおおせのように、苦難こそ真実の平安であり、波乱万丈のなかに底光りを増していくものこそ、真金の人生であるといってよい。

長途の旅を苦難と戦い、耐えぬいてきた人の顔には、つややかな輝きがあります。ひとまわりもふたまわりも境涯を開き、その目や表情は、不屈の光沢を放ち、私たちの内側に力強いなにものかを生じさせてくれるものです。

どうか、皆さん方の一生もかくあれかしと祈りつつ、講義を終わらせていただきます。

「祈禱抄」

祈りは願業成就の原動力

（御書全集一三四七㌻十五行目～同㌻十七行目）
（編年体御書五一五㌻十五行目～同㌻十七行目）

されば法華経の行者の祈る祈は響の音に応ずるがごとし・影の体にそえるがごとし、水に月のうつるがごとし・方諸の水をまねくがごとし・磁石の鉄をすうがごとし・琥珀の塵をとるがごとし、あきらかなる鏡の物の色をうかぶるがごとし

法華経の行者の祈りは、かならず叶うことを断言された御文です。

引かれた譬えが、いずれも自然の道理、事実の姿であることに、日蓮大聖人の強い御確信をみる思いがします。音には響きが応ずるように、法華経の行者の祈りのあるところ、体に影が従うように、法華経の行者の祈りのあるところ、そこに結果がでないわけはない。祈りに応じて、自己の生命の色心にわたる回転が起こり、また依報

もそれに呼応して動くとのおおせであります。

ここで「法華経の行者の祈る祈」と述べられていることに注意をはらわなければなりません。法華経の行者すなわち実践者とは、別しては末法御本仏日蓮大聖人、総じては日蓮大聖人の教えのままに信心修行に励み、広宣流布に邁進する私どものことになるのはいうまでもありません。法華経の祈りは叶う。しかし、爾前権教の人の祈りは、根本的に叶わない。

「諫暁八幡抄」には、つぎのように述べられています。

「此の理を弁へざる一切の人師末学等設い一切経を読誦し十二分経を胸に浮べたる様なりとも生死を離る事かたし又現在に一分のしるしある様なりとも天地の知る程の祈とは成る可からず」（御書全集五七七㌻）

また「撰時抄」には「此の災の根源を知らぬ人人がいのりをなさば国まさに亡びん事疑いなきか」（御書全集二八四㌻）と述べられています。

つまり、魔の通力等によって一分のしるしがあったとしても、天地の知るほどの祈りとはならないし、さらには、より深い苦しみの世界へ入っていってしまうということであります。すなわち、大宇宙にも響く己心の大回転とはならない。

それに対して、法華経の行者の祈りは、天地に響きわたって、祈ったとおりの方向へと入っていくことができるのです。

祈りとは、けっして観念ではない。科学万能のものの見方にとらわれた現代人の目からすれば、目

に見えない生命の世界は観念の産物にすぎないと考えるかもしれません。しかし、もし物質的な観点だけでものごとをとらえていったならば、人と人との関係、人とものとの関係の大部分は、偶然の混沌のなかに埋没してしまうでしょう。

仏法の透徹した英知は、その混沌の奥に生命の法を見いだし、事象を内より支え、動かしていく力をとらえているのであります。

「命已に一念にすぎざれば仏は一念随喜の功徳と説き給へり」（御書全集四六六ページ）とおおせのように、瞬間瞬間に如々として来って内より自身を支え、本源的な方向性を与えていくものこそが、もっとも問題とされなければならないわけであります。祈りとは、この本源的な世界における唯一の対決のあり方といってよいでありましょう。

したがって、祈りとは、正しい実践、粘り強い行動を貫くための源泉であります。祈りのない行動ほどもろいものはない。それは、あるときは順調で、意気盛んに見えるかもしれません。しかし、ひとたび逆境に直面するや、枯れ木のように、もろくも挫折してしまうでありましょう。なぜなら、そこには、わが胸中を制覇するという一点が欠けているがゆえに、現実社会の浮き沈みのなかで、木の葉のように翻弄されてしまうからであります。

人生の坂は、一直線に向上の道をたどるようなものでは、けっしてありません。成功もあれば失敗もある。勝つときもあれば負けるときもあります。そうした、さまざまな曲線を描きつつ、一歩一歩、成長の足跡を刻んでいくものであります。その過程にあって、勝って傲らず、負けてなお挫けぬ、強

観な発条として働くのが、祈りなのであります。

ゆえに、宗教的な祈りのある人ほど強いものはない。ましてわれわれの祈りは、人生への諦観を助長するような弱さの発露でもなければ、ある種の宗教的ドグマをもって独り善しとする、狂信的な祈りでもありません。外にあって人間を支配する神仏の加護を祈るのではなく、わが強盛なる祈りに込めた一念が、信力、行力となってあらわれ、それと相呼応して仏力、法力が作動するのであります。主体はあくまで人間であります。

祈りとは、ある意味で人間の心に変化をもたらすものであります。目に見えないが深いその一人の心の変化は、けっして一人にとどまるものではありません。また一つの地域の変革は、けっしてその地域のみにとどまってはいない。一波が万波をよぶように、かならず他の地域に変革の波動をおよぼしていくのであります。

そうした展転の原点となる最初の一撃は、一人の人間の心のなかにおける変革であると、私は申し上げたいのであります。

仏法は道理である、といわれることの深意もここにあるといってよいでしょう。譬えのなかの「音」「体」「すめる水」等は祈りの姿であり、「響」「影」「水にうつる月」等は、祈りの叶っていく自然な様相をあらわしていると拝することもできます。それらの譬えが自然の理法であるように、法華経の行者の祈りは、生命の世界の必然の法として、道理として、かならず叶っていくのであります。

こうした祈りは、傲慢や慢心とは、およそ縁遠いものでありましょう。端座唱題の凛然たる姿に

は、浅薄な自己の智慧、わずかな経験への執着を乗り越えて、仏の智慧によって見いだされた生命の法、自然、宇宙の根源のリズムに冥合しようとの、謙虚な姿勢が脈打っているものであります。卑屈にもならず、いっさいの活動を一念へと凝縮し、生命の充電を受けつつ、無限の飛躍を期している。それは人間生命の、もっとも健康にして充溢した姿なのであります。

ともかくも、私どもは、生活の、人生のすべての問題を御本尊に祈りきって、取り組んでいこうではありませんか。

この、すべてを祈り、かちとってきた戦いこそが、個人の人間革命をもたらし、今日の大河の日蓮正宗そして創価学会を築いてきた原動力なのであります。

ゆえに、祈ることが大事であり、そこからいっさいが出発することを忘れてはならないと申し上げたい。事のうえにおいて、祈りを失って、わが生命を回転させなければ、どのようなうまい話をし、高尚な理論を展開しても、それはすべて理であり、夢であり、幻となってしまう。信心といい、学会精神といい、すべて現実を、強く、深く祈ることから始まるといってよいのであります。

仏法の祈りは、たんに祈っていればいいというものではない。満々たる生命力をはらんだ矢が射られていくごとく、行動、実践をはらんでいるのであります。したがって、行動なき祈りは観念であり、祈りなき行動は空転なのであります。

ゆえに、偉大なる祈りは、偉大なる責任感から起こると申し上げたい。仕事に対し、生活に対し、人生に対して無責任な姿勢、どうでもいいという姿勢からは、けっして祈りは起こってきません。

自己のかかわるいっさいに責任をもち、真剣に取り組んでいる人こそ祈りをもつものであります。世の中が厳しいだけに、生活の一つひとつに強い祈りをもって取り組んでいただきたいことをかさねて申し上げ、私の講義とさせていただきます。

「御義口伝」

人間生命の諸悪に敢然と挑戦

（御書全集　七一〇㌻十八行目～七一一㌻二行目
編年体御書一五五六㌻十八行目～一五五七㌻二行目）

今日蓮等の類いは阿闍世王なり其の故は南無妙法蓮華経の剣を取って貪愛・無明の父母を害し
て教主釈尊の如く仏身を感得するなり

この一節から、私どもは、信心の、そして人生の根本目的である成仏をめざす究極の姿勢を知ることができます。とくに強く銘記したいことは、法戦のないところには、成仏は断じてありえないとの、日蓮大聖人の明確な御教示なのであります。

すなわち「貪愛・無明」という生命の魔性から自身の内外に競い起こるさまざまな障魔に、敢然と立ち向かい、戦いぬいてこそ「教主釈尊の如く仏身を感得」できる、成仏できる、との御本仏のおお

せを胸に刻みたいのであります。

さて、まずこの一節において、日蓮大聖人は、提婆達多を師として父の殺害、破仏法という悪逆のかぎりをつくした阿闍世王をさして「今日蓮等の類いには阿闍世王なり」とおおせられています。ここには甚深の意味があります。

歴史上の阿闍世王は、釈尊在世から滅後にかけての中インド・マカダ国の王で、のちに名医・耆婆の諫めもあって改心、仏法久住のために余生をささげたことはよく知られております。しかし、ここで展開されているところの阿闍世王とは、歴史上の一人物というより、万人に通ずる阿闍世王としての生命の活動をさしております。

阿闍世王とは梵語の音写で、未生怨と訳されております。すなわち「生まれる以前にすでに怨みをもつ」という意味ですが、この〝怨む〟という生命の一断面は、だれもがもっております。

ソクラテスの言葉に「最も深き欲望より、しばしば最も恐ろしき憎悪は起こる」とあります。われわれの立場でこの言葉を読めば、欲望とは貪愛、無明であり、憎悪とは未生怨そのものでありましょう。この、恐ろしいまでに深く人間を蝕む生命の傾向性に、仏法哲理の光を鋭く照射し、どう克服し、人間革命し、成仏をめざすべきかを明かされたのが、この一節であります。

この上の文には「日本国の一切衆生は阿闍世王なり」（御書全集七一〇㌻）とあります。

この御文は、七百年の歳月を越えて、そのまま病めする現代社会の根本原因を照らしだす明鏡とも拝することができます。殺人、暴力等の横行している現代の世相の荒廃をみるとき、人々の生命の奥に

潜む〝怨〟という魔性の根の深さを思わざるをえません。私どもも、もしこの大仏法を知らず、真実の和合僧に縁することができなかったならば、かならずやこの〝怨〟の生命に支配され、社会の揺れ動くままに、無明の淵をさまよっていたでありましょう。

私どもが日々、汗を流しつづけている折伏弘教は、この濁世の根本原因を撃ち、そこに歓喜踊躍の深い傾向性の流れをつくっていく尊い作業なのであります。ゆえに、さまざまな非難中傷の嵐が吹き荒れることは、当然の帰結なのであります。

ところで大聖人は、ここで「日蓮等の類いは阿闍世王なり」と、まったく正反対の阿闍世王を示されているのであります。これまさしく妙法によって蘇生した真実の阿闍世王なのであります。

なぜならば、そのとき南無妙法蓮華経の光明に照らしだされた未生怨の生命は、貪愛、無明を冥伏させる力となって、発揮されるからであります。すなわち、この内なる生命悪を断破する阿闍世王の生命は、不正を憎み、生存の権利を脅かすものと対決しつつ、民衆を厳護する果敢な闘志として昇華されるのであります。

「南無妙法蓮華経の剣を取って貪愛・無明の父母を害して教主釈尊の如く仏身を感得するなり」と説かれているように、貪愛、無明という人間生命に巣くう根源悪を、南無妙法蓮華経という至高の生命をもって打ち破っていく――それこそ妙法の阿闍世王の姿勢であり、成仏への方途なのであります。

ここで、「殺す」あるいは「害する」――総じて殺害ということについて、ひとこと申し上げてお

きたい。

仏法とは、いかなる意味でも人を殺すものではなく、本源的に人を救い、生かすものであります。その点が、西洋中世に猛威をふるった〝魔女狩り〟等とは、根本的に異なるところであります。

「釈迦の以前仏教は其の罪を斬ると雖も能忍の以後経説は則ち其の施を止む」（御書全集三〇六ページ）とおおせのように、とくに大乗仏教にあっては「殺す」ということは、厳しく戒められているのであります。

ではいったい、なにを殺すのか。御本尊への絶対の信という利剣をもって、わが生命に巣くう貪愛、無明の心を殺すのであります。真実の宗教は、史上、幾多繰り返された血なまぐさい宗教戦争に民衆をかりたてたりするものであってはならない。また、人々を自殺に追い込む哀音の宗教であってもならない。人々に、生きて生きて生きぬく力をわきたたせずにはおかないものであります。

大聖人の仏法は、縁するすべての人々の生命を、貪愛、無明の闇から、元初の太陽の赫々たる陽光に浴せしめるのであります。妙法が、いっさいを生かし、蘇らせていく「蘇生の義」とされるゆえんもここにあることを、知っていただきたいのであります。

さらに「教主釈尊の如く仏身を感得するなり」とは、信心に徹することによって、教主釈尊、すなわち久遠元初の自受用身即日蓮大聖人の御命を、総じては、そのままわが身に湧現できるとのおおせなのであります。「教主釈尊の如く」とは、教主釈尊のようにと、一往、拝することができます。

しかし、「如は不異に名く」（御書全集七八二ページ）との御金言にみられるように、「如く」とは「異な

らない」「等しく」と、より深く拝していくことが可能でありましょう。

じつに凡愚下賤の私どもであっても、唱題に励み、弘教に励むことによって、御本仏と等しい境界にまで達することもできうるとの、甚深の御文と拝することができるのであります。まことにまことに、もったいないかぎりであります。

金剛不壊、清浄にして無垢なる久遠名字の如来の生命が、まぎれもなく現在一瞬のわが生命に豁然と蘇ってくる——私は、感涙おさえがたしの思いを、いやまして深くするのであります。

その大哲理を奉じた私どもであります。どうか、いちだんと勇猛精進の努力を奮い起こして、日々、苦難の社会との戦いを勝ちぬいていってくださるようお願いし、講義を終わらせていただきます。

索　引

題　名	(御書のページ)	(本書のページ)	年月日	掲載紙誌・会合
「諸法実相抄」講義	(1358)	3	52.1.1～6	聖教新
「生死一大事血脈抄」講義	(1336)	93	52.4.18～30	〃
「観心本尊抄」講義	(246)	185	53. 1～2	大白蓮
「佐渡御書」講義	(956)	271	41. 4～5	高等部講
「如説修行抄」講義	(501)	333	41. 6～7	〃
「経王殿御返事」講義	(1124)	393	35. 9. 8	姫路市指導
「一生成仏抄」講義	(383)	417	36. 4.23	関西地区部長
「富木殿御返事」講義	(962)	441	37. 4. 5	埼玉地区部長
「兄弟抄」講義	(1087)	459	37. 4.12	婦人部講
「曾谷殿御返事」講義	(1055)	485	37. 8. 9	夏季講習
日々の教学				
「報恩抄」講義	(328)	515	52. 7.12	聖教新
「法門申さるべき様の事」講義	(1268)	532	52. 8. 1	〃
「撰時抄」講義	(288)	551	52. 8.13	〃
「開目抄」講義	(223)	565	52. 9. 1	〃
「日女御前御返事」講義	(1247)	573	52.10.18	〃
「種種御振舞御書」講義	(917)	577	52.10.20	〃
「祈禱抄」講義	(1347)	582	52.10.22	〃
「御義口伝」講義	(710)	588	52.10.24	〃

著者略歴

昭和3年1月2日，東京都に生まれる。
富士短期大学経済学科卒業。
現在，創価学会名誉会長。
主な著書，「人間革命」（第1巻～第10巻），「生命を語る」（第1巻～第3巻），「生活の花束」「詩集 青年の譜」「家庭革命」「婦人抄」「わたくしの随想集」「私の人生観」「若き日の読書」「創造家族」「二十一世紀への対話」上・下（共著）他。

新版 池田会長全集 10

発行日　昭和五十五年五月 三 日
第三刷　昭和五十六年二月十六日
著者　池田大作
発行者　松岡資
印刷所　株式会社 精興社
製本所　牧製本印刷株式会社

発行所　聖教新聞社
〒一六〇　東京都新宿区信濃町十八
電話〇三―三五三―六一一一（大代表）
振替口座　東京五―七九四〇七

*

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
Printed in Japan
©1980

定価 二、〇〇〇円